



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(93)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(93)

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 VIII

(伊集院IC～市来IC)

第1分冊

永
迫
平
遺
跡
(第
一
分
冊)

なが さこ びら い せき
永 迫 平 遺 跡
(日置郡伊集院町)

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

二〇〇五年三月 鹿児島県立埋蔵文化財センター





第1地点 北側 空中写真



第1地点 南側 空中写真



8号住居跡



4号住居跡



3号連穴土坑



3号集石



N 6区
方形土坑 4



縄文時代早期遺構検出状況



塞ノ神式土器完形復元



加栗山式土器(角筒) 出土状況

序 文

この報告書は南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島 IC ～市来 IC 間）の建設に伴って、平成 8 年度から平成 10 年度にかけて実施した日置郡伊集院町に所在する永迫平遺跡発掘調査の記録です。

永迫平遺跡は市街地を見下ろす台地上にあり、発掘調査によって旧石器時代から縄文時代、古墳時代、平安時代それに中世から近世にわたる複合遺跡で、各時代の遺構や遺物が数多く発見されました。特に縄文時代早期前半の竪穴住居跡やそれに伴う集石・連穴土坑・土坑・道跡など数多くの遺構は、全国に先駆けて花開いた南九州の縄文文化における集落の形態を解明するうえで貴重な資料になるものと考えられます。

この調査の成果が地域の歴史研究や埋蔵文化財の啓発普及の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所、伊集院町教育委員会ならびに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

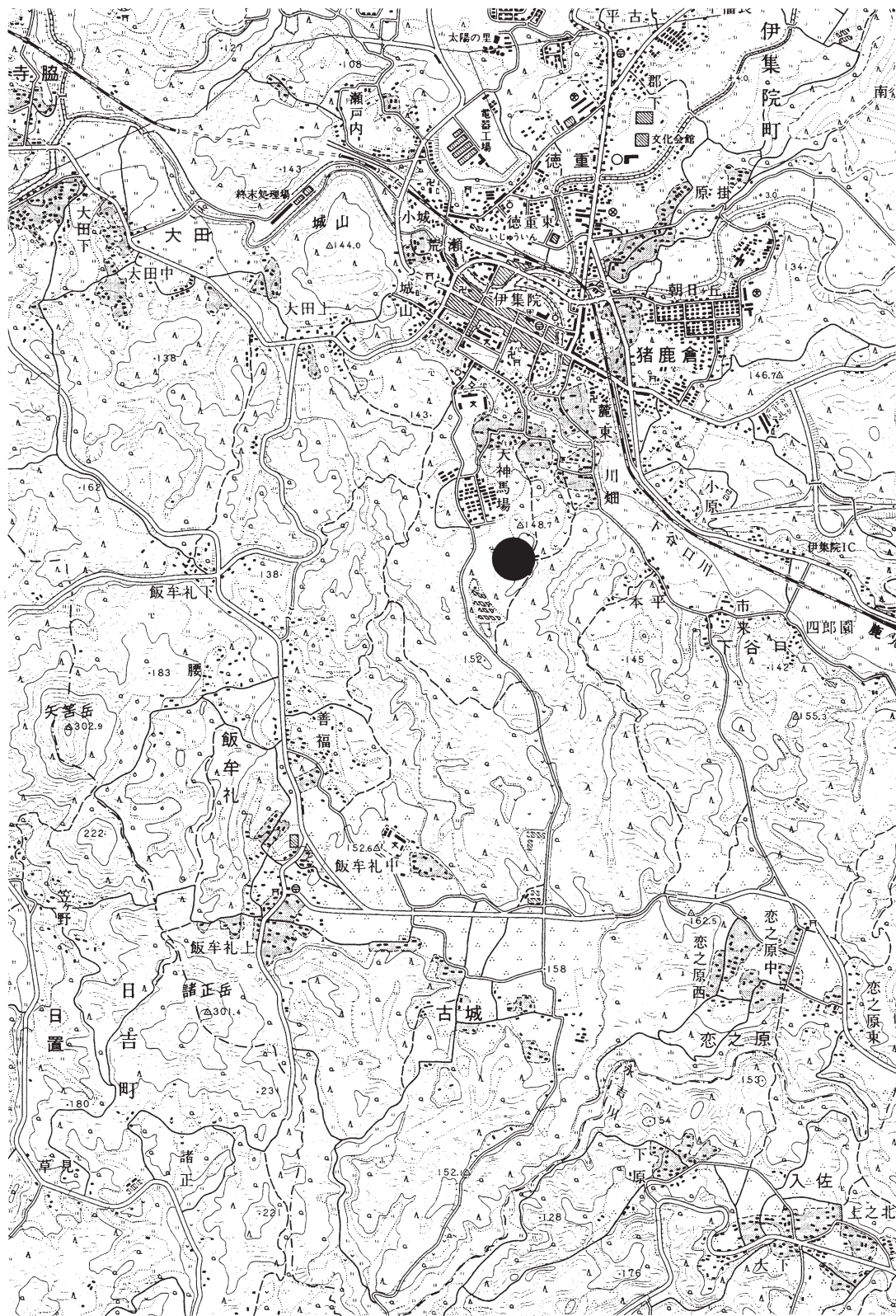
平成17年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 木 原 俊 孝

報告書抄録

ふりがな	ながさこびらいせき							
書名	永迫平遺跡							
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XIII							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	(93)							
編著者名	繁昌 正幸・甲斐 康大							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1							
発行年月日	平成17年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		東経	北緯	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
ながさこびら 永迫平 いせき 遺跡	かごしまけん 鹿児島県 ひおきぐん 日置郡 いじゅういんちやう 伊集院町 しものたにぐち 下谷口 あざしものながさこ 字下永迫	463	30-	130°	31°	確認調査 平成8年10月18日	(約128㎡) 約14,000㎡	南九州西回り 自動車道鹿児島 道路建設
		639	66	23′ 55″	36′ 52″	↵ 平成8年12月13日 本調査 平成8年12月16日 ↵ 平成10年7月3日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
永迫平遺跡	散布地	旧石器時代	ブロック2	台形石器 剥片尖頭器 ナイフ形石器 スクレイパー 剥片 石核 細石刃				
	集落跡	縄文時代早期	住居跡9 土坑403 連穴土坑3 方形土坑95 集石13 道跡3 溝状遺構1	前平式土器 加栗山式土器 吉田式土器 石坂式土器 下剥峯式土器 押型文土器 塞ノ神式土器				
	散布地	縄文時代後期 および晩期	柱穴27 土坑60	石鏃 石皿 磨製石斧 打製石斧 磨石・敲石 削器 礫器 石核 スクレイパー 指宿式土器 黒川式土器 石鏃 石錐 スクレイパー 石核 打製石斧 磨製石斧 礫器 凹石敲石				
	散布地	古墳時代		成川式土器 須恵器				
	散布地	平安時代		土師器 須恵器				
	散布地	中世	土坑2	青磁 備前焼 土師器 陶器				
	散布地	近世 時期不詳	溝状遺構1 道跡19	鉄滓 陶器				



第1図 永迫平遺跡位置図 (1:25万)

例 言

- 1 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院 IC～市来 IC間）建設事業に伴う永迫平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県日置郡伊集院町下谷口字下永迫に所在する。
- 3 発掘調査は建設省鹿児島国道工事事務所（当時。現 国土交通省鹿児島国道事務所）の受託事業として、平成8年度から平成10年度にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査事業は平成8年10月18日から平成10年7月3日にかけて実施し、整理作業及び報告書作成事業は平成15年度と平成16年度に実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は建設省鹿児島国道工事事務所（現 国土交通省鹿児島国道事務所）が提示した工事計画図面に基づく。
- 8 発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は調査担当者が行い、土坑・方形土坑は一部の図面作成を委託した。
- 9 遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測・浄書は整理事業員の協力を得て整理担当者が行った。本報告書に使用した写真図版のうち、遺物撮影については、鶴田静彦・西園勝彦・横手浩二郎・吉岡康弘が行った。
- 10 本書の執筆は繁昌正幸・甲斐康大が行い、編集は繁昌が担当した。年代測定及び科学分析等については委託した。
- 11 本遺跡の出土遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、活用する予定である。なお、本遺跡の遺物注記の略号は“永”である。
- 12 発掘調査にあたっては、河口貞徳氏（鹿児島県考古学会会長）・上村俊雄氏（鹿児島大学助教授・現鹿児島国際大学教授）・林 謙作氏（北海道大学教授 当時）・森脇 広氏（鹿児島大学教授）・小林哲夫氏（鹿児島大学教授）・渡辺 誠氏（名古屋大学教授）に現地指導をいただいた。

凡 例

- 1 住居跡検出ピット図で、平面図と断面図が一致しないものがあるが、平面図は埋土除去時の実測図、断面図は断ち割り後の実測図であるためである。本来は一致するはずであるが、断ち割り時の埋土の状況を最終的な記録として残すために、あえて平面図を修正することはしなかった。
また、現場で判断した埋土の細かな状況を残すために、複数の線が入るものもあるが、それについてもあえて修正は行わなかった。
- 2 遺構図の土坑及び方形土坑でアミの掛かっている部分は、薩摩火山灰のブロックが残存していることを表している。
- 3 集石や連穴土坑、土坑、方形土坑の断面図で、掘り方を明確にするために斜線のスクリーントーンを貼ったが、線の間隔の差異には意味はない。

目 次

卷頭 函 版	
序 文	
報告書抄録	
例 言	
凡 例	
目 次	
第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 遺跡の概要	1
第Ⅱ章 発掘調査の経過	6
第1節 調査の経緯	6
第2節 調査の組織	6
第3節 調査の経過（日誌抄）	8
第Ⅲ章 位置及び環境	14
第1節 地理的環境	14
第2節 歴史的環境	15
第Ⅳ章 発掘調査の成果	18
第1節 調査の方法	18
第2節 遺跡の層序	22
第3節 第1地点の調査	31
第4節 第2地点の調査	295
第5節 遺構計測表及び遺物観察表	323
第Ⅴ章 まとめ（成果と課題）	365
第Ⅵ章 分析・考察	375
第1節 年代測定結果	375
第2節 植物珪酸体分析	377
第3節 種実同定	383
図 版	385
あとがき	477

挿 図 目 次

	ページ		ページ
第 1 図 永迫平遺跡位置図……………	(11)	第 38 図 4号住居跡検出ピット図 (1)…	62
第 2 図 南九州西回り調査遺跡図……………	5	第 39 図 4号住居跡検出ピット図 (2)…	63
第 3 図 周辺遺跡図……………	17	第 40 図 5号住居跡平・断面図……………	64
第 4 図 周辺地形図……………	19	第 41 図 5号住居跡周辺ピット図……………	65
第 5 図 調査範囲図……………	20	第 42 図 5号住居跡周辺ピット断面図…	66
第 6 図 グリッド及びトレンチ位置図…	21	第 43 図 5号住居跡検出ピット図 (1)…	67
第 7 図 基本層柱状図……………	22	第 44 図 5号住居跡検出ピット図 (2)…	68
第 8 図 第 1 地点土層図 (1) ……………	23	第 45 図 6号住居跡平・断面図……………	69
第 9 図 第 1 地点土層図 (2) ……………	24	第 46 図 6号住居跡周辺ピット図……………	70
第 10 図 第 1 地点土層図 (3) ……………	25	第 47 図 6号住居跡周辺ピット断面図…	71
第 11 図 第 1 地点土層図 (4) ……………	26	第 48 図 6号住居跡検出ピット図 (1)…	72
第 12 図 第 1 地点土層図 (5) ……………	27	第 49 図 6号住居跡検出ピット図 (2)…	73
第 13 図 第 1 地点土層図 (6) ……………	28	第 50 図 7号住居跡平・断面図……………	75
第 14 図 調査区域コンター全体図……………	29	第 51 図 7号住居跡周辺ピット図……………	76
第 15 図 調査区域遺構全体図……………	30	第 52 図 7号住居跡周辺ピット断面図…	77
第 16 図 旧石器時代出土遺物……………	31	第 53 図 7号住居跡検出ピット図 (1)…	78
第 17 図 遺物出土状況図 (1) ……………	33	第 54 図 7号住居跡検出ピット図 (2)…	79
第 18 図 コンター図……………	35	第 55 図 8号住居跡平・断面図……………	80
第 19 図 遺構全体図 (1) ……………	37	第 56 図 8号住居跡周辺ピット図……………	81
第 20 図 主要遺構位置図……………	39	第 57 図 8号住居跡周辺ピット断面図…	82
第 21 図 住居跡位置図……………	42	第 58 図 8号住居跡検出ピット図……………	83
第 22 図 1号住居跡平・断面図……………	44	第 59 図 9号住居跡平・断面図……………	85
第 23 図 1号住居跡周辺ピット図……………	45	第 60 図 9号住居跡周辺ピット図……………	86
第 24 図 1号住居跡周辺ピット断面図…	46	第 61 図 9号住居跡周辺ピット断面図…	87
第 25 図 1号住居跡検出ピット図……………	47	第 62 図 9号住居跡検出ピット図……………	88
第 26 図 2号住居跡平・断面図……………	49	第 63 図 住居跡内出土遺物 (1) ……………	90
第 27 図 2号住居跡周辺ピット図……………	50	第 64 図 住居跡内出土遺物 (2) ……………	91
第 28 図 2号住居跡周辺ピット断面図…	51	第 65 図 住居跡内出土遺物 (3) ……………	92
第 29 図 2号住居跡検出ピット図 (1)…	52	第 66 図 集石 (1) ……………	94
第 30 図 2号住居跡検出ピット図 (2)…	53	第 67 図 集石 (2) ……………	95
第 31 図 3号住居跡平・断面図……………	54	第 68 図 集石 (3) ……………	97
第 32 図 3号住居跡周辺ピット図……………	55	第 69 図 集石 (4) ……………	98
第 33 図 3号住居跡周辺ピット断面図…	56	第 70 図 1号連穴土坑……………	100
第 34 図 3号住居跡検出ピット図……………	57	第 71 図 2号連穴土坑……………	101
第 35 図 4号住居跡平・断面図……………	59	第 72 図 3号連穴土坑……………	103
第 36 図 4号住居跡周辺ピット図……………	60	第 73 図 集石・連穴土坑出土遺物……………	104
第 37 図 4号住居跡周辺ピット断面図…	61	第 74 図 土坑 1 I A (1) ……………	106

第75 図	土坑 2	I A (2)	I B I C	107	第114 図	1号道跡	152
第76 図	土坑 3	II aA (1)		108	第115 図	2号道跡	153
第77 図	土坑 4	II aA (2)		109	第116 図	3号道跡	154
第78 図	土坑 5	II aA (3)		110	第117 図	遺物出土状況図 (2)	155
第79 図	土坑 6	II aA (4)		111	第118 図	縄文早期土器出土状況図	157
第80 図	土坑 7	II aB (1)		112	第119 図	I 類土器	158
第81 図	土坑 8	II aB (2)		113	第120 図	II a - 1 類土器 (1)	160
第82 図	土坑 9	II aB (3)		114	第121 図	II a - 1 類土器 (2)	161
第83 図	土坑 10	II aB (4)		115	第122 図	II a - 1 類土器 (3)	162
第84 図	土坑 11	II aB (5)	II aC	116	第123 図	II a - 1 類土器 (4)	163
第85 図	土坑 12	II bA		117	第124 図	II a - 1 類土器 (5)	164
第86 図	土坑 13	II bB		118	第125 図	II a - 1 類土器 (6)	166
第87 図	土坑 14	III		119	第126 図	II a - 1 類土器 (7)	167
第88 図	土坑 15	IV A (1)		120	第127 図	II a - 1 類土器 (8)	168
第89 図	土坑 16	IV A (2)		121	第128 図	II a - 1 類土器 (9)	169
第90 図	土坑 17	IV A (3)		122	第129 図	II a - 1 類土器 (10)	170
第91 図	土坑 18	IV A (4)		123	第130 図	II a - 1 類土器 (11)	171
第92 図	土坑 19	IV B (5)	IV B (1)	124	第131 図	II a - 1 類土器 (12)	172
第93 図	土坑 20	IV B (2)		125	第132 図	II a - 1 類土器 (13)	173
第94 図	土坑 21	IV B (3)		126	第133 図	II a - 1 類土器 (14)	175
第95 図	土坑 22	IV C (1)		127	第134 図	II a - 1 類土器 (15)	176
第96 図	土坑 23	IV C (2)	V	128	第135 図	II a - 1 類土器 (16)	177
第97 図	土坑出土遺物 (石皿)			130	第136 図	II a - 2 類土器 (1)	178
第98 図	方形土坑 1	1 類 (1)		132	第137 図	II a - 2 類土器 (2)	180
第99 図	方形土坑 2	1 類 (2)		133	第138 図	II a - 2 類土器 (3)	181
第100 図	方形土坑 3	1 類 (3)		134	第139 図	II a - 2 類土器 (4)	182
第101 図	方形土坑 4	2 類 (1)		135	第140 図	II a 類土器 (1)	183
第102 図	方形土坑 5	2 類 (2)		137	第141 図	II a 類土器 (2)	184
第103 図	方形土坑 6	2 類 (3)		138	第142 図	II a 類土器 (3)	185
第104 図	方形土坑 7	2 類 (4)		139	第143 図	II a 類土器 (4)	186
第105 図	方形土坑 8	2 類 (5)		140	第144 図	II a 類土器 (5)	187
第106 図	方形土坑 9	2 類 (6)		141	第145 図	II a 類土器 (6)	188
第107 図	方形土坑 10	2 類 (7)		142	第146 図	II a 類土器 (7)	189
第108 図	方形土坑 11	2 類 (8)	3 類 (1)	143	第147 図	II a 類土器 (8)	190
第109 図	方形土坑 12	3 類 (2)		144	第148 図	II a 類土器 (9)	191
第110 図	方形土坑 13	3 類 (3)	4 類 (1)	145	第149 図	II a 類土器 (10)	192
第111 図	方形土坑 14	4 類 (2)	5 類	146	第150 図	II a 類土器 (11)	193
第112 図	方形土坑出土遺物			148	第151 図	II a 類土器 (12)	194
第113 図	道跡全体図 (1)			149	第152 図	II a 類土器 (13)	195

第153 図	Ⅱ a 類土器 (14)	197	第192 図	後期石器 (10)	249
第154 図	Ⅱ b 類土器 (1)	198	第193 図	後期石器 (11)	250
第155 図	Ⅱ b 類土器 (2)	199	第194 図	XV 類土器	251
第156 図	Ⅱ b 類土器 (3)	201	第195 図	XVI 類土器 (1)	252
第157 図	Ⅱ b 類土器 (4)	202	第196 図	XVI 類土器 (2)	254
第158 図	Ⅱ b 類土器 (5)	203	第197 図	晩期石器 (1)	256
第159 図	Ⅱ c 類土器	204	第198 図	晩期石器 (2)	257
第160 図	Ⅲ - 1 類土器 (1)	206	第199 図	晩期石器 (3)	258
第161 図	Ⅲ - 1 類土器 (2)	208	第200 図	遺物出土状況図 (3)	259
第162 図	Ⅲ - 2 類土器	209	第201 図	成川式土器 (1)	262
第163 図	Ⅲ 類土器 (1)	210	第202 図	成川式土器 (2)	263
第164 図	Ⅲ 類土器 (2)	211	第203 図	Ⅱ 層埋土土坑	265
第165 図	Ⅳ 類土器	213	第204 図	土師器 (甕)	266
第166 図	V・VI 類土器	216	第205 図	土師器 (碗・坏・皿)	268
第167 図	VII 類土器	217	第206 図	道跡全体図 (2)	270
第168 図	早期石器 (1)	220	第207 図	道跡 (1)	271
第169 図	早期石器 (2)	221	第208 図	道跡 (2)	272
第170 図	早期石器 (3)	222	第209 図	道跡 (3)	273
第171 図	早期石器 (4)	223	第210 図	道跡断面	274
第172 図	早期石器 (5)	224	第211 図	須恵器・瓦器・土師器	276
第173 図	早期石器 (6)	225	第212 図	青磁	277
第174 図	早期石器 (7) 上巻了	226	第213 図	陶器	278
第175 図	遺構全体図 (2) 下巻始	227	第214 図	染付	279
第176 図	遺物出土状況図 (2)	229	第215 図	横転全体図	282
第177 図	Ⅲ 層埋土ピット群	232	第216 図	第1 地点横転図	283
第178 図	Ⅲ 層埋土土坑群	233	第217 図	横転 (1)	285
第179 図	Ⅲ 層埋土土坑 (1)	234	第218 図	横転 (2)	286
第180 図	Ⅲ 層埋土土坑 (2)	235	第219 図	横転 (3)	287
第181 図	Ⅲ 層埋土土坑 (3)	236	第220 図	横転 (4)	288
第182 図	VII~XIV 類土器	238	第221 図	横転断面図	289
第183 図	後期石器 (1)	240	第222 図	芋穴全体図第1 地点了	293
第184 図	後期石器 (2)	241	第223 図	第2 地点遺構全体図	295
第185 図	後期石器 (3)	242	第224 図	第2 地点コンター図	296
第186 図	後期石器 (4)	243	第225 図	遺物出土状況全体図	297
第187 図	後期石器 (5)	244	第226 図	第2 地点土層図 (1)	298
第188 図	後期石器 (6)	245	第227 図	第2 地点土層図 (2)	299
第189 図	後期石器 (7)	246	第228 図	第2 地点土層図 (3)	300
第190 図	後期石器 (8)	247	第229 図	遺物出土状況図 (1)	301
第191 図	後期石器 (9)	248	第230 図	ブロック検出状況	303

第231 図	遺物散布状況	304	第241 図	XVII類土器 (2)	314
第232 図	旧石器時代石器 (1)	304	第242 図	XVII類土器 (3)	316
第233 図	旧石器時代石器 (2)	305	第243 図	XVIII類・XIX類土器	317
第234 図	旧石器時代石器 (3)	306	第244 図	縄文時代石器 (1)	319
第235 図	集石	307	第245 図	縄文時代石器 (2)	319
第236 図	土坑 (1)	308	第246 図	古墳時代土器	320
第237 図	土坑 (2)	309	第247 図	土師器・陶器・染付	321
第238 図	溝状遺構	310	第248 図	遺跡残存範囲図	374
第239 図	遺物出土状況図 (2)	312	付図 1	第1 地点縄文時代早期遺構全体図	
第240 図	XVII類土器 (1)	313	付図 2	永迫平遺跡遺構と周辺地形図	

表 目 次

ページ		ページ			
第1 表	調査遺跡一覧表	4	第4 表	遺構計測表	324
第2 表	周辺遺跡	16	第5 表	土器観察表	339
第3 表	横転計測表	281	第6 表	石器観察表	363

図 版 目 次

ページ		ページ			
図版 1	道跡	385	図版 21	集石 (3)	405
図版 2	道跡	386	図版 22	1 号連穴土坑 (1)	406
図版 3	遺跡空中写真	387	図版 23	1 号連穴土坑 (2)	407
図版 4	遺跡空中写真	388	図版 24	2 号連穴土坑 (1)	408
図版 5	遺跡遠景	389	図版 25	2 号連穴土坑 (2)	409
図版 6	標準土層	390	図版 26	3 号連穴土坑 (1)	410
図版 7	標準土層	391	図版 27	3 号連穴土坑 (2)	411
図版 8	遺跡近景	392	図版 28	土坑 I 類	412
図版 9	遺跡近景	393	図版 29	土坑 II 類 (1)	413
図版 10	住居跡検出状況	394	図版 30	土坑 II 類 (2)	414
図版 11	住居跡調査状況	395	図版 31	土坑 II 類 (3)	415
図版 12	1 号・2 号住居跡	396	図版 32	土坑 II 類 (4)	416
図版 13	3 号・4 号住居跡	397	図版 33	土坑 I 類・II 類	417
図版 14	5 号・6 号住居跡	398	図版 34	土坑 III 類・IV 類	418
図版 15	7 号・8 号住居跡	399	図版 35	土坑 II・III 類・IV 類	419
図版 16	住居跡調査状況	400	図版 36	土坑 V 類	420
図版 17	住居跡埋土状況	401	図版 37	石皿出土土坑	421
図版 18	住居跡関連遺構	402	図版 38	方形土坑 1 類	422
図版 19	集石 (1)	403	図版 39	方形土坑 2 類	423
図版 20	集石 (2)	404	図版 40	方形土坑 3 類	424

図版 41	方形土坑 4 類	425	図版 67	Ⅱ a - 2 類土器 (1)	451
図版 42	方形土坑 2 類・3 類	426	図版 68	Ⅱ a - 2 類土器 (2)	452
図版 43	複合する方形土坑	427	図版 69	Ⅱ a 類土器 (1)	453
図版 44	方形土坑断ち割り状況	428	図版 70	Ⅱ a 類土器 (2)	454
図版 45	方形土坑埋土状況	429	図版 71	Ⅱ a - 2・Ⅱ b 類土器	455
図版 46	石器出土状況 (1)	430	図版 72	Ⅱ c・Ⅲ類土器	456
図版 47	石器出土状況 (2)	431	図版 73	Ⅲ・Ⅳ類土器	457
図版 48	石器出土状況 (3)	432	図版 74	Ⅴ・Ⅵ類土器	458
図版 49	石器出土状況 (4)	433	図版 75	Ⅶ類土器	459
図版 50	Ⅱ層埋土土坑・溝状遺構	434	図版 76	遺構内出土の土器	460
図版 51	溝状遺構埋土状況	435	図版 77	XⅦ・XⅧ・XⅨ類土器	461
図版 52	溝状遺構・道跡	436	図版 78	旧石器時代の石器	462
図版 53	道跡	437	図版 79	縄文時代の石器 (1)	463
図版 54	第 2 地点空中写真・近景	438	図版 80	縄文時代の石器 (2)	464
図版 55	第 2 地点土層	439	図版 81	縄文時代の石器 (3)	465
図版 56	第 2 地点調査状況	440	図版 82	縄文時代の石器 (4)	466
図版 57	平成 8 年度確認調査・調査風景	441	図版 83	縄文時代の石器 (5)	467
図版 58	第 2 地点検出旧石器時代ブロック	442	図版 84	縄文時代の石器 (6)	468
図版 59	第 2 地点検出ブロック	443	図版 85	縄文時代の石器 (7)	469
図版 60	第 2 地点検出土坑	444	図版 86	Ⅶ～Ⅹ・ⅩⅢ・ⅩⅣ～ⅩⅥ類土器	470
図版 61	第 2 地点遺物出土状況	445	図版 87	古墳時代・古代の土器	471
図版 62	Ⅰ・Ⅱ a - 1 類土器 (1)	446	図版 88	土師器	472
図版 63	Ⅱ a - 1 類土器 (2)	447	図版 89	須恵器・陶器	473
図版 64	Ⅱ a - 1 類土器 (3)	448	図版 90	青磁・染付	474
図版 65	Ⅱ a - 1 類土器 (4)	449	図版 91	接合資料 (1)	475
図版 66	Ⅱ a - 1 類土器 (5)	450	図版 92	接合資料 (2)	476

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成 13 年 1 月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成 8 年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成 3 年 6 月に伊集院 IC と市来 IC 間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、27 か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成 8 年度から平成 12 年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。

第 2 節 遺跡の概要

- 1 一ノ谷……伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高 90～95m の丘陵端部に位置し、調査面積は 1,250 m² である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。
- 2 永迫平……伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる（本報告書）直前の標高約 150m 程の小台地上に立地している。調査面積は 14,000 m² で旧石器時代ナイフ形石器文化の 2 か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前平式期には 9 軒の住居跡を始め、3 基の連穴土坑と 9 基の集石、多数の土坑を検出。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫 A……伊集院町下谷口字下永迫の標高 85～110m のやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は 2,600 m² で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代～中世では土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原……伊集院町下谷口の標高約 90～100m の山間の谷間、傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は 6,000 m² である。縄文時代早期の集石 4 基や後期の石匙、石鏃、古代の土坑、焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。
- 5 上山路山……伊集院町大田字上山路山の標高約 130m のシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり、平坦面から続く緩やかな斜面と、谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は 6,000 m² である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早期・後期）、弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは、縄文時代早期で遺構は、

道跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

- 6 大田城跡…伊集院町大田字下城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は4,000㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。
- 7 堂平窯跡…東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で、窯、作業場、物原が発見された。窯は長さ約30m、幅1.2m、傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・摺鉢・動物形土製品）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。
- 8 池之頭……東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。
- 9 雪山……東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で、炉跡・物原？・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・搦鉢・瓶・碗）、染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。
- 10 猿引……東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曾畑式土器・黒曜石片が出土した。
- 11 犬ヶ原……東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主になるのは平安時代で、掘立柱建物跡（4間×4間・総柱）が製鉄に関する遺物（鞆羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。
- 12 向椿城跡…東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は14,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などが発見され、中世山城の遺構が検出された。
- 13 堂園平……東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高約50mの平坦地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石4基・吉

田式・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

- 14 今里……………東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し、縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器、古墳時代の成川式土器が発見された。
- 15 市ノ原……………市来町大里字ムシナから東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50mの台地西側に所在する。調査面積は62,000㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり、旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化、縄文時代（早期～晩期）、弥生時代の住居跡・壺棺、古墳時代の住居跡、古代～中世、近世の街道跡など多時期に渡り、多種多様な遺構・遺物が発見された。
- 16 上ノ原……………市来町大里の東シナ海を望む標高40mの台地上に立地し、三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石3基、土坑が検出され、塞ノ神式、轟式土器と石斧・石鎌・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴式住居跡1基と土坑・成川式土器が、古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

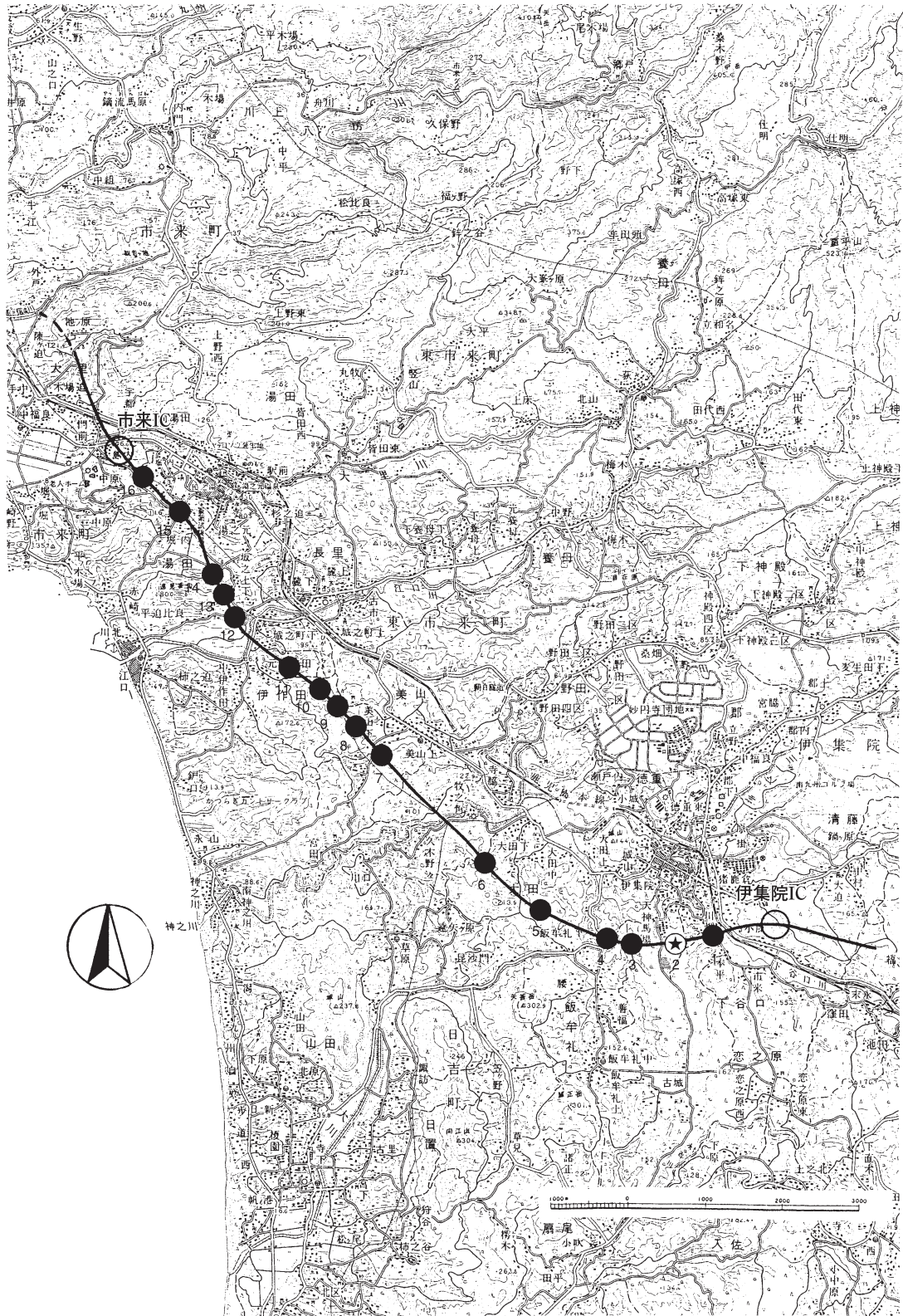
既刊の報告書

- | | |
|---------------|---------------------------------|
| 「一ノ谷遺跡」 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（31）2001,3 |
| 「池之頭遺跡」 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（32）2002,3 |
| 「今里遺跡」 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（33）2003,9 |
| 「市ノ原遺跡（第1地点）」 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）2003,3 |
| 「犬ヶ原遺跡」 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（50）2003,3 |
| 「上ノ原遺跡」 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（62）2003,3 |
| 「下永迫 A 遺跡」 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（72）2004,3 |
| 「柳原遺跡」 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（94）2005,3 |
| 「大田城跡」 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（95）2005,3 |

第1表南九州西回り自動車道鹿児島通道路(伊集院C～市来C)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在	他	調査期間	調査面積	調査員	時代	備考
①	下ノ谷	伊集院町下谷口		確認 H8.10 全面 H8.10～11	1,250㎡	三垣・桑波田	中世 近世	掘立柱建物跡・土坑 陶器類 卑理文センター報告書31 2001刊行
②	永通平 本報告書	伊集院町下谷口		確認 H8.10～12 全面 H8.12～H10.7	14,000㎡	三垣・桑波田 繁田・藤崎・三垣・中原 桑波田・川口・大窪	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早・後・晩) 古代～近世	縄文・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃 竪穴住居跡・土師器・須恵器 土師器・青磁 土坑・集石・土師器・須恵器 青磁・白磁 卑理文センター報告書72 2004刊行
③	下永通A	伊集院町下谷口		確認 H9.10 全面 H10.5～7	2,600㎡	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	中世	土坑・集石・土師器・須恵器 青磁・白磁 卑理文センター報告書73 2004刊行
④	柳原	伊集院町下谷口		確認 H9.11 全面 H10.7～10	6,000㎡	池畑・三垣・元田 繁田・中原・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・焼土・土師器・須恵器・鉄製品 ビード・溝状遺構 卑理文センター報告書74 2004刊行
5	上山路山	伊集院町大田		確認 H9.2 全面 H9.5～H10.3	6,000㎡	伊集院町大田	旧石器 縄文(早・後) 弥生～古墳	剥片・断片 土師器・集石・岩板式・前平式・吉田式 成川式
⑥	大田城跡	伊集院町大田		確認 H8.12～H9.1 全面 H9.12～H10.3	4,000㎡	三垣・桑波田	旧石器	三稜尖頭器
7	雲平菜跡	東市来町美山		確認 H10.2 全面 H10.8～12	3,500㎡	池畑 森田・繁田・宮田洋一・ 森田・元田・川口・大窪	縄文(早)	集石・土坑・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・築造具
⑧	池之頭	東市来町美山		確認 H9.8 全面 H10.8～11 H12.7～8	7,500㎡	湯之瀬・橋口 宮田洋一・三垣 宮田洋一・三垣	旧石器(細石刃) 縄文(早・後・晩)	細石刃・細石刃 集石・前平式・吉田式・石版式 成川式土器
⑨	雪山	東市来町美山		確認 H12.6 全面 H12.6～8	2,700㎡	宮田洋一・三垣	縄文(早) 近世～近代	集石・前平式 陶器類・築造具
⑩	猿引	東市来町長里		確認 H12.5 全面 H12.5～6	800㎡	宮田洋一・三垣	旧石器 縄文(前)	卑理文センター報告書53 2003刊行 陶器類・土師器・土師器・土師器・土師器・土師器 縄文・ナイフ・台形石器・三稜尖頭器・剥片 骨角式
⑪	犬ノ原	東市来町伊作田		確認 H9.2・H10.6 全面 H11.12～H12.2	2,000㎡	池畑・三垣 牛ノ瀬・橋口・大窪	旧石器・縄文(晩) 古代	卑理文センター報告書53 2003刊行 細石刃・細石刃・黒山式 掘立柱建物跡・線状跡・土師器・須恵器・滑石 卑理文センター報告書50 2003刊行 本報告書
12	尚椿城跡	東市来町伊作田		確認 H8.11～12 全面 H9.4～H10.3 H10.7～8	14,000㎡	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文(草創・早・後) 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ 石版・隆帯文・前平式・市来式 空輪・帯曲輪・曲輪・縄切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・石版・土坑・青磁・ 備前焼
13	雲圃平	東市来町伊作田		確認 H8.11～12 全面 H10.5～11	2,000㎡	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早・前・後) 古代	尖頭器・ナイフ・台形石器・破石 磯部・細石刃・細石刃 集石・吉田式・匭ノ神式・轟式 土坑・土師器・須恵器
⑭	今里	東市来町伊作田		確認 H8.11 全面 H9.4～11	14,000㎡	池畑・西園 湯之瀬・橋口	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早・前・後・晩) 古墳	磯部・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃・細石刃・フランク・調整剥片 集石・前平式・漆漕式・出水式・黒川式・石版 成川式
15	市ノ原	東市来町湯田 市来町大里		確認 H8.10～12 全面 H8.12～H11.7	62,000㎡	繁田・西園・宮田茂 池畑・繁田・西園・寺師・前野・ 森田・宮田洋一・八木澤・中原・ 藤野・三垣・元田・西村・寺原・ 宮田茂・松村・松崎	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早～晩) 弥生 古墳 中世 近世	磯部・ナイフ・台形石器・尖頭器 細石刃・細石刃 集石・土師器・石版 竪穴住居跡・青磁 竪穴住居跡・土坑・成川式 竪穴住居跡・土坑・溝状遺構・土師器・須恵器 街道跡・掘立柱建物跡・線状跡 卑理文センター報告書49 2003刊行
⑯	上ノ原	市来町大里		確認 H8.11 全面 H10.7～9	2,000㎡	繁田・宮田茂 上之園・栗林	縄文(早) 古墳 古代～中世	集石・土坑・匭ノ神式 竪穴住居跡・土坑・成川式・貝殻土坑 土師器・須恵器・青磁 卑理文センター報告書62 2003刊行

○報告書刊行済



第2図 南九州西回り調査遺跡図

(星印：永迫平遺跡)

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査の経緯

平成8年10月18日から12月13日まで確認調査を行った。調査開始時の遺跡の状況は、伐り出した後の杉などが雑然と放置してあったり、そこに雑木や竹が生い茂っており、簡単に進入できる状況ではなかった。加えて、広大な台地のほぼ中央部には未買収の土地もあったため、まずはそれらの伐採と重機による台地縁辺への移動を行った後、何か所かの広場を設けてそれらの焼却を一部行った。その後、トレンチの設定を3m×5m規模で16か所行い、順次掘り下げを行った。その結果、一部を除いてほとんどのトレンチから遺物や遺構が出土、検出されたため、調査対象の範囲の全てが遺跡であることが判明し、確認調査を終了することになった。

確認調査の結果を受けて、引き続いて本調査を開始した。本調査は、遺物の出土密度の高い台地部分の南側から開始することにした。区域としては、P～W、7～12区の約4,000㎡である。調査は、平成8年12月16日から行い、平成10年度の平成10年7月3日までの足かけ3年に亘って実施した。調査の順序としては、台地部分（第1地点）の南側、それに引き続いて北側、そして最終年度に尾根部分（第2地点）の調査を行い、全ての調査を終了した。

その後、平成15年度から整理作業を県立埋蔵文化財センターで開始し、翌平成16年度には整理・報告書作成作業を同様にを行い、平成17年3月に報告書を刊行して永迫平遺跡の調査の全てを終えることになった。

第2節 調査の組織

確認調査及び本調査（平成8年度）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所
調査主体者	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 吉 元 正 幸
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長 尾 崎 進 主任文化財主事兼
	” 調 査 課 長 戸 崎 勝 洋
	” 調 査 課 長 補 佐 新 東 晃 一 主任文化財主事兼
	” 第三調査係長 池 畑 耕 一
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財研究員 三 垣 恵 一 ” 桑波田 武 志
調査事務担当者	” 主 査 成 尾 雅 明 ” ” 前屋敷 裕 徳 ” 主 事 追 立 ひとみ

本調査（平成 9 年度）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所			
調査主体者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉 元 正 幸
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター		次長兼総務課長	尾 崎 進
			主任文化財主事兼	
	”		調 査 課 長	戸 崎 勝 洋
	”		調査課長補佐	新 東 晃 一
	”		主任文化財主事兼	
	”		第三調査係長	池 畑 耕 一
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター		文化財主事	繁 昌 正 幸
	”		”	藤 崎 光 洋
調査事務担当者	”		主 査	前屋敷 裕 徳
	”		”	政 倉 孝 徳
	”		主 事	追 立 ひとみ

本調査（平成 10 年度）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所			
調査主体者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉 永 和 人
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター		次長兼総務課長	尾 崎 進
			主任文化財主事兼	
	”		調 査 課 長	戸 崎 勝 洋
	”		調査課長補佐	新 東 晃 一
	”		主任文化財主事兼	
	”		第三調査係長	池 畑 耕 一
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター		文化財主事	繁 昌 正 幸
	”		文化財研究員	中 原 一 成
	”		文化財調査員	川 口 雅 之
	”		文化財調査員	大 窪 祥 晃
調査事務担当者	”		主 査	前屋敷 裕 徳
	”		”	政 倉 孝 徳
	”		”	溜 池 佳 子

整理作業（平成 15 年度）

事業主体者	鹿児島県教育委員会			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	木 原 俊 孝	
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田 中 文 雄	
	”	総 務 係 長	平 野 浩 二	
	”	調 査 課 長	新 東 晃 一	
	”	課 長 補 佐	立 神 次 郎	
	”	主任文化財主事兼		
		第三調査係長	牛ノ濱 修	
調査担当者	”	文化財主事	繁 昌 正 幸	
	”	”	抜 水 茂 樹	
	”	文化財調査員	平 美 典	
調査事務担当者	”	主 査	脇 田 清 幸	

整理・報告書作成（平成 16 年度）

調査主体者	鹿児島県教育委員会			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	木 原 俊 孝	
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	賞 雅 彰	
	”	総 務 係 長	平 野 浩 二	
	”	調 査 課 長	新 東 晃 一	
	”	調査課長補佐	立 神 次 郎	
	”	主任文化財主事兼		
		第三調査係長	牛ノ濱 修	
調査担当者	”	主任文化財主事	繁 昌 正 幸	
	”	文化財調査員	甲 斐 康 大	
調査事務担当者	”	主 査	脇 田 清 幸	

報告書作成検討委員会	平成 16 年 12 月 27 日	所長ほか 8 名
報告書作成指導委員会	平成 16 年 12 月 20 日	調査課長ほか 3 名
企画担当者	宮田栄二，前迫亮一	

第 3 節 調査の経過（日誌抄）

発掘調査は平成 8 年 10 月から，平成 10 年 7 月にかけて実施した。以下，日誌抄により発掘調査の経過を略述する。

平成 8 年度

10 月

確認調査開始。調査方法の計画作成。プレハブ・駐車場その他の発掘環境等整備。グリッドの

設定・杭打ち。第4トレンチ内Ⅲ・Ⅳ層の遺物・土坑検出及びその実測。第2・3トレンチ内土層断面図・遺物実測。

11月

第5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15トレンチ配置場所を実測。第10トレンチ内のⅠ～Ⅴ層遺物検出及び実測。第12トレンチ内のⅢ～Ⅴ層遺物検出及び実測。焼土域を検出。第13トレンチ内のⅣ～Ⅴ層遺物検出及び実測。第11トレンチ内のⅢ～Ⅴ層遺物検出及び実測。第14トレンチ内のⅣ～Ⅴ下層遺物検出及び実測。

12月

第10トレンチ内のⅣ～Ⅶa層遺物検出及び実測。第15トレンチⅣ層で硬化面検出。第16トレンチⅢ層で硬化面検出。遺跡の範囲や性格等を把握した上で、13日で確認調査終了、16日より全面調査に入る。U-10～12区Ⅳ層まで掘り下げ。T～V-9・10区Ⅴ層の遺物検出及び実測。

1月

S・T-10・11区Ⅴ層の遺物検出及び実測。S・T-7～9区Ⅴ層の遺物検出及び実測。U・V-10・11区Ⅴ層の遺物検出及び実測。S・T-8～10区Ⅴ層の遺物検出及び実測。S・T-11・12区Ⅳ層の遺物検出及び実測。U-7区からV-8区にかけてのⅣ層上面で道跡検出。P・Q-11・12区Ⅳ層の遺物検出及び実測。R-11区で集石検出。V-8区Ⅳ層・R-9区Ⅴ層上面・U-7区Ⅳ層・P-9区Ⅴ層で硬化面検出。

2月

U・V・W-7～11区Ⅴ層の遺物検出及び実測。P・Q-9～12区Ⅴ層の遺物検出及び実測。U-10・11区Ⅴ層の遺物検出及び実測。Q・R-11・12区Ⅴ層の遺物検出及び実測。P-11区Ⅲ層で性格不明の遺構検出。R-9区Ⅴ層上面で集石検出。T～V-7～10区Ⅴ層の遺物検出及び実測。T～W-7～11区Ⅴ層遺構検出。

3月

P～W-7～12区Ⅴ層上面コンター図を1/100で作成。U・V-9・11区集石の実測。P～T-7～12区、U～W-10～12区のⅤ層上面遺構検出、ピット・土坑掘り下げ。P～W-7～12区の遺物・遺構検出。U～W-7～9区のⅥ層上面まで掘り下げ完了、遺構検出。プレハブ内のリース備品引き渡し、発掘調査終了。

平成9年度

4月

発掘調査開始。調査方法の計画作成。プレハブ・駐車場その他の発掘環境等整備。S・T-7～12、U・V-7～9区のⅢ～Ⅴ層掘り下げ及び遺物検出。V・W-7～12区の微地形を1/100でコンター図作成。調査区内に竹・木の根が多かったため除去し、焼却する。雨が多く、土砂崩れの復旧作業。

5月

S・V-10～12区R-7～9区の平板実測。P・W-7～12区のⅤ層掘り下げ、土坑・集石・

住居跡を確認。道路が再び崩壊し、復旧作業を行う。S～W－7～12区のV層掘り下げ、VI層検出。遺物・集石実測。作業員不足のため、追加募集説明会実施。VI層上面検出及びコンター図作成。建設省で今後について協議。

6月

P・W－7～12区のV層掘り下げ、土坑・住居跡実測及び写真撮影。S・W－7～12区の土坑・住居跡の実測及び遺物取り上げ。住居跡内遺物、レベル計測。風倒木の可能性のあるものも確認。土層断面実測。集石の完掘。台風対策。伊集院小学校郷土クラブ、発掘体験を行う。追加作業員7名決定。上り道の崖が4箇所崩壊し、復旧。台風対策。

7月

P・Q－7～12区のV層掘り下げ及び遺物検出。P・W－7～12区の住居跡周辺ピットを平板実測及び半裁。報道関係者、一般見学者、町関係者が多数来訪。N－7区北方に方形のプラン検出。M～O－7～9区のⅢ～V層掘り下げ、古道検出。P・R－7～12区のV層掘り下げ及びVI層上面検出。横転等線引き。台風対策。M・N－2・3区の表土剥ぎ取り。

8月

M～O－1～4区のIV層で硬化面及び焼土域検出。台風対策。P・S－7～12区のⅢ～IV層掘り下げ及び土坑・集石検出。M～O－7～9区で遺構・古道検出。台風対策。P～S－7～12区の土坑半裁及び新土坑検出。Ⅲ層へのⅡ層埋土の住居跡、掘り下げ開始。乾燥が激しいため、散水用水貯め設置し、散水を行う。トランシットにより、10m毎にグリッドの杭打ち。

9月

N～Q－5・6区で古道・遺物検出。S－11区で連穴土坑検出及び土壌サンプル採取。河口貞徳県考古学会長・上村俊雄鹿児島大学助教授現地指導。N～O－2～4区をVI層上面より掘り下げ。台風対策及び後始末。M～O－7～9区の6層上面清掃及び遺構検出。古道レベル計測。8号住居跡・方形土坑断面実測。N－8区の古道（部分）標本採取。

10月

航空写真撮影 M～O－1～4区の土坑掘り下げ、断ち割り及び実測。P・Q－5・6区のⅢ～V層掘り下げ及び住居跡・柱穴埋土確認。林 謙作北海道大学教授現地指導。M～O－7～9区・Q－12区の土坑・方形土坑・連穴土坑・集石実測。土層断面の実測1～9号住居跡・柱穴断ち割り。集石実測。上り道の工事に着手。U～V－7～9区の古道平板実測。

11月

P・Q－5・7区の溝・古道の実測。P－10～12区の住居跡・柱穴の埋土確認及び南北断面実測。表示板や整地など環境整備作業。M～Q－5・6区のV層掘り下げ及びVI層上面検出。トレンチ内Ⅶb～Ⅸ層掘り下げ、断面実測。R・S－10区、トレンチ南側断面実測。方形土坑、土壌サンプル採取。

12月

N－6区の区境ベルト下より集石出土。U・V－7～10区のトレンチ内Ⅶ層除去、Ⅷa層掘り下げ。伊集院町教育委員会の視察。小林哲夫鹿児島大学教授の現地指導。渡辺 誠名古屋大学教授の現地指導。Q－6区Ⅲ層で焼土域検出及び実測。集石・住居跡の実測及び方形土坑の掘

り下げ。各住居跡の全体遺構図作成。テントの防風・防寒対策。住居跡・柱穴掘り下げ，番号をつけて1/5で実測開始。

1月

森脇 広鹿児島大学教授の現地指導。P-7区の大型土坑・集石実測及び掘り込みと周辺の土坑実測。各区VI層まで掘り下げる。O-6区の土坑サンプル採取，磨石など実測後取り上げ。方形土坑の土壌サンプル採取。路面凍結のため，通勤困難な地域があった。R-6区のⅢ層以下掘り下げ，遺物検出。P～S-7～9区のⅦa層上面にⅤ層埋土の土坑検出。

2月

県文化財課長の視察。運搬道路設置のため，ダンプカーでシラス搬入。S～W-1～6区の土坑・方形土坑掘り下げ。集石検出。S～W-4～6区のⅥ層上面で遺構検出。Q-2区のⅡ層から焼土と土師器の甕が出土。S-1区の土層断面中に焼土が見られる。N～R-4区のⅤ層掘り下げ及び遺構検出。M～O-1～4区とN～R-5～6区の土坑・方形土坑・連穴土坑掘り下げ。

3月

N～S-4区とW-7・8区を掘り下げて，Ⅵ層上面で揃える。航空写真撮影。P・R-1～3区の土坑・方形土坑実測。雨による決壊場所等を補修，土嚢袋を積み上げる。M～W-1～6区のトレンチ内をⅨ層まで掘り下げ。西側断面・土坑・方形土坑実測。遺物・発掘用具等搬出・遺跡内整備。プレハブ内のリース備品引き渡し，発掘調査終了。

平成 10 年度

5月

発掘調査開始。調査方法の計画作成。プレハブ・駐車場その他の発掘環境等整備。グリッドの設定と杭打ち。Ⅲ層掘り下げ，Ⅳ層検出。西側よりⅢ～Ⅳ層掘り下げ。熊蜂飛来，注意させる。B-5～7区・C-5・6区のⅢ・Ⅳ層遺物出土状況を実測及び取り上げ。東地区の方形土坑・連穴土坑の断面実測。トレンチのⅦa層以下掘り下げ。トレンチ内の南壁・西壁土層断面実測。

6月

D～I-6区のⅦa～Ⅸ層掘り下げ。トレンチのⅦa層以下掘り下げ。F～I-6～8区で道跡検出，実測。D・E-5～8区のⅧ層掘り下げ，遺物検出。R～I-6～8区Ⅵ層上面清掃，土坑・溝検出。F・G-6・7区で溝状遺構検出。大雨で道路に流れた土砂の除去。G・H-8・9区とG-7区Ⅲ層掘り下げ，調査区域図作成。K-8区の西側・南北トレンチⅨ層上面まで掘り下げ。

7月

I・J-7～9区の遺構掘り下げ，実測及びトレンチ内土層断面実測。F～H-7～9区のⅧ層以下掘り下げ，コンター実測。遺跡内整備。プレハブ内のリース備品引き渡し，発掘調査終了。

平成 15 年度

4月

整理作業を開始する。作業員へ遺跡や遺構・遺物等について説明を行う。その後、早速土器の実測。土器の観察表作成。遺物台帳点検。

5月

土器実測。土器の観察表作成。遺物のドット落とし及び標高計算。礫・軽石等の水洗後、注記。石器の重量計測及び入力。土層の鉛筆トレース。

6月

土器実測。一部に土器の接合・復元。出土遺物の標高計算。表のパソコンへの入力。石器の観察表作成・入力。土層の鉛筆トレース及びトレース。

7月

土器実測。実測を委託する石器の一覧表作成・入力。出土遺物の標高計算。遺物のドット落とし。土坑の鉛筆トレース。土器拓本。

8月

土器実測及び拓本。一部土器の接合・復元。土器の観察表作成。土器の文様部分の実測に取り掛かる。

9月

土器実測及び文様部分の実測。軽石入力。集石及び土層横転のトレース。実測した土器の一覧表をパソコンに入力する。

10月

実測済み土器の一覧表入力。土器実測及び点検、修正。拓本。集石のトレース。実測済み土器をパンケースに並べて確認する。

11月

土器拓本、実測。土器の観察表確認と修正。表のパソコン入力。拓本が中心となるが、実測未了の物もあり、並行しながら作業を行う。

12月

土器拓本、実測。実測図確認。修正済みの土器のトレースを開始する。土器の観察表作成及びパソコンへの入力。

1月 確認して修正の必要な分の土器の拓本及び実測。拓本を整理して用紙に貼り、コピーを取る。土器の観察表作成及び入力。

2月

修正分の土器の実測・拓本。補充遺物の注記、実測、拓本。土器・青磁・染付・土師器のトレース。

3月

土器の分類。観察表作成。実測・拓本のチェック。地形図等のトレースに取り掛かる。本年度分の作業が終了となるため、収蔵庫への一応の収納を行い、区切りとする。

平成 16 年度

4月

本年度の作業開始。前年度に実測した分の遺物等を点検し、整理して並べ直しを行う。土器(特

に底部)の実測開始。地形図等のトレースも再開する。

5月

底部を主とする土器の実測。地形図・土層横転・横転位置図等トレース。土器の底部は円筒と角筒で割合に明確に分かれ、それぞれに表現を注意して実測を行うように指示する。

6月

展示館に預けてあった完形の土器2点の実測・拓本に取り掛かる。そのほか、縄文早期の土器を中心に拓本を取る。住居跡内のピット計測。周辺地形等トレース。補充遺物の実測・拓本。

7月

拓本の用紙への貼り込みとコピー。土器のトレースを開始する。石器のうち、礫器及び剥片石器を選別し、実測を行うこととする。ニシオグラフを使ってもうまく表現できない。

8月

礫器・剥片石器実測。土器のトレースの済んだものに、コピーした拓本を貼る作業に取り掛かる。コンター、土坑などの遺構等のトレース。土層断面図に表土を計算して記入する作業。

9月

石器実測。土坑等の遺構トレース。土器の仮レイアウトを行い、それに合わせてパンケースに遺物と実測図を揃え、仮レイアウト毎の観察表原案の作成を行う。

10月

遺物の仮レイアウトと、遺物・実測図のパンケースへ揃える作業を行うとともに、遺構の仮レイアウトを行う。報告書の体裁に仮レイアウトしたものをコピーして並べる。

11月

遺構の仮レイアウトを行い、カバー掛けし、枠取りをして必要事項を記載する。遺物も本レイアウトをし、同様な作業を行う。遺物写真撮影。原稿執筆。

12月

原稿執筆。現場での写真及び遺物写真のレイアウト。報告書に掲載する遺物を中心にドット図の作成を行う。印刷用の仕様書を作成する。

1月

起案し、入札。落札業者と打ち合わせを行い、校正から納品までの工程について確認する。遺物の分別を行い、主に一般遺物の整理、収納を行う。報告書掲載の遺物で展示可能なものについて石膏入れなどの作業を行うものの選別を行う。

2月

展示用遺物の復元・彩色。現場及びセンターでの遺構・遺物の実測図等を整理し、収納の準備に取り掛かる。報告書の校正作業。

3月

校正及び色校正。検査後、収納。遺構・遺物の実測図をまとめて分類を行い、種類毎に収納する。報告書掲載遺物の整理、収納を行う。収蔵庫の2階の報告書刊行済み収納スペースに整理収納する。これをもって、永迫平遺跡の整理、報告書刊行作業はすべて終了した。

第Ⅲ章 遺跡の位置及び環境

第1節 地理的環境

永迫平遺跡は、鹿児島県日置郡伊集院町下谷口字下永迫に所在する。遺跡の所在する伊集院町は、薩摩半島のほぼ中央部に位置し、東は鹿児島市及び松元町、西は東市来町及び日吉町、南西は日吉町、南東は松元町、北は郡山町と接しており、日置郡の中央部を占めている。

伊集院町は、北に標高523.1mの重平山があるほか、南西には矢筈岳(301.4m)と諸正岳(302.9m)という形態的に特徴的な2つの山があり、市街地からはそれほど良くは望めないものの、台地上がれば際だった対比を見せる眺望の山として位置している。それらの山に囲まれた町域は、若干の丘陵と標高160m前後のシラス台地によって覆われているが、それらの台地は神ノ川及びその支流によって開析され、標高約60mの狭い谷底平野がいたるところに見られる。

町役場のある市街地周辺は、その中でも最も広い平野部に位置していると言える。この地域には、JR鹿児島本線の伊集院駅や南九州西回り自動車道の伊集院インターチェンジなどの交通上要となる路線や施設が見られるほか、県や郡、町などの主要行政機関も集中しており、商店街も発達している。この市街地から若干離れた地域には、国道3号線がほぼ東西に走っているほか、先端のIC産業を主とする工場も点在している。市街地を通して南薩摩にいたる国道も延びており、交通・産業上も要の地として発展している。

永迫平遺跡は、市街地から見て南側の台地上にあり、その延長上には飯牟礼の広大なシラス台地が展開する。標高は150m程度あり、調査開始の時点ではほぼ平坦であったが、実際的には北側の市街地に向けて緩やかに傾斜している状況が確認できた。周囲は比高差約20m以上の断崖となっており、殊に南東部の狭くなったか所では顕著である。そのため、下谷口の川畑集落と飯牟礼の古城集落とを結ぶ古道は通称「一ノ谷」と呼ばれる難所であり、峠には旅人の安全を祈るために建てられたと思われる「経の塚」が見られ、碑面には『南無阿弥陀仏』と刻まれている。

調査時点での永迫平遺跡は、北側は杉林、南側及び尾根へいたる西側は雑木林となっていた。ほぼ平坦ではあったものの、東及び西方向に部分的に若干下っている様子が見られたほか、尾根の付け根辺りにもつい最近まで使われていたと地元の方が言っていた道の痕跡が南北方向に見られていた。尾根部分には、北西部にも北側へ下りる道の痕跡が残っていた。

調査範囲の北側は、ほぼ平坦に北に向かって延びており、約150m程で北側に急激に落ちている。東西の幅は約100mあるが、端部では北側と同様に急傾斜で落ちる。それに対して、南側は幅約15mから20m程度の狭い野首状となるものの、それ以降は徐々に広がりながら広大な飯牟礼の台地へと繋がっており、3方向とは対照的だと言える。ただ、南東部は先ほど述べた「一ノ谷」となっていることから3方向と似たような地形と言えなくはない。そうではあっても、南西部だけは緩やかな傾斜をもって飯牟礼の台地上がっており、他の方向とは確実に異なっている。飯牟礼の台地から見ると、緩傾斜で尾根状を呈しながら永迫平の比較的規模の大きな張り出した台地へと繋がっていると言えよう。

第2節 歴史的環境

永迫平遺跡の所在する伊集院町における考古学の調査の歴史は比較的新しく、近年の開発事業に伴った発掘調査によって確認されたものがほとんどであり、それまでに遺跡として衆人に知られていた周知の遺跡は、その大部分が一字治城を代表とする中世の城跡及びそれ以降の石碑や墓石など、極めて限られたものだけだったと言えよう。

近年の開発に伴う発掘調査の成果はめざましく、古墳時代から縄文時代、さらに時代を遡って旧石器時代の遺構・遺物も数多く検出・出土する遺跡も確認されるまでになって来ている。

現在までに確認されている伊集院町で最も古い時期の遺跡としては、ナイフ形石器や三稜尖頭器など旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物が出土した竹之山の瀬戸頭 A～C 遺跡や大田の大田城跡などが知られている。この時期の遺物は、下谷口の永迫平遺跡（本遺跡）からも出土しており、伊集院町の北東、南、西という広範囲に位置するシラス台地上に最初の人類が到来していたことがわかっている。隣接する松元町の仁田尾遺跡や前山遺跡、鹿児島市の横井竹之山遺跡、東市来町の市ノ原遺跡などでも同時代の遺跡が確認されていることから、この時期、薩摩半島の中央部のシラス台地上に広範囲に、鹿児島の黎明期の遺跡が所在していたことになる。これに続く細石器文化期には、瀬戸頭 A・B 遺跡や竹之山 B 遺跡、松ヶ迫遺跡（竹之山）、永迫平遺跡などで同時期の石器が出土しているほか、竹之山 B 遺跡では落とし穴も検出されている。周辺部では、松元町仁田尾遺跡から仁田尾中 A・B 遺跡にいたる広い範囲で遺物が分布する西日本最大級の遺跡が所在する。

縄文時代草創期には、瀬戸頭遺跡や隣接する鹿児島市竹之山遺跡や松元町仁田尾遺跡などで、土器や石器などが出土している。早期では、大田の上山路山遺跡で谷と台地とを繋ぐ道跡が 2 本確認されたほか、上山路山遺跡と恋之原の稲荷原遺跡では赤色顔料の塗彩された土器も出土し、精神文化の表象として考えられている。永迫平遺跡からもこの時期の遺構・遺物が見つかっており、本報告書に記載した通り、当該時期の集落の様相がわかる遺跡と位置付けられる。周辺の遺跡としては、鹿児島市に加栗山遺跡、松元町に前原遺跡という永迫平遺跡とほぼ同時期に位置付けられる集落遺跡があり、本遺跡とは色々な点で比較・研究される遺跡と言えよう。早期後半からは遺跡の数は極端に少なくなり、辛うじて前期に柳原遺跡（下谷口）、後期に上山路山遺跡などから土器の出土が知られる程度となる。この傾向は弥生時代及び古墳時代も続く。周辺では東市来町の市ノ原遺跡や楯城跡などでその時期の遺跡が確認されているが、総じて言えばこの時期の遺跡は本地域周辺では旧石器時代から縄文時代早期前半ほど多くはない。

古代には伊集院町は薩摩国日置郡に属していたと考えられる。町名の伊集院は、律令期に租税を収納する倉院を郡衙とは別に設置したことに因んで名付けられており、この地が当時から交通の便利な地域と認識されていたことがわかる。ただ、地名で見ると、「郡」地名が大字として本町の中央部に位置していることから、日置郡の郡衙が所在していたのではないかとの考えもある。この時期の遺跡としては、柳原遺跡で土坑や土師器・須恵器が見つかるほか、郡の山ノ脇遺跡や梅落遺跡、西原遺跡などで、様々な遺構や遺物が確認されている。

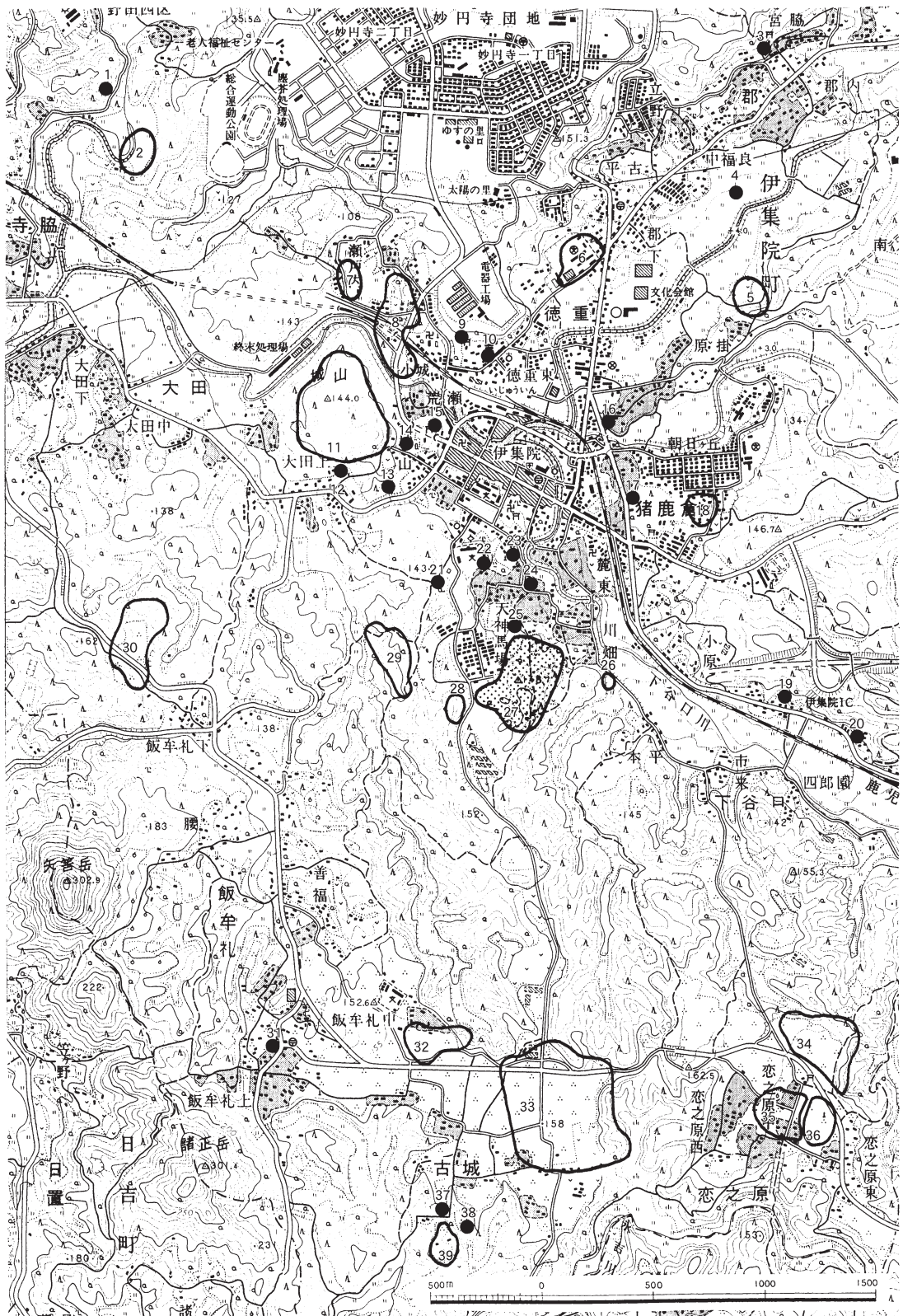
中世には、この地は 12 世紀初頭～後半の大隅正八幡領と大前氏から紀姓伊集院氏（12 世紀後半～14 世紀半ば）を経て近世の島津氏にいたるまで色々な氏族がそれぞれに土地を所有し、また、それに対する所有を巡って幾たびかの抗争を繰り広げていたと考えられる。この時期に作成された

「建久図田帳」には町内の地名が多く記載されている。

14世紀から15世紀にかけての南北朝時代には、南朝方についた地頭職伊集院島津氏が、守護職島津氏と対立しながら支配を強化していったとされる。15世紀半ばに伊集院島津氏が滅ぶと、以後は守護職島津氏が支配することになった。16世紀には戦国時代の幕開けとなって、覇権の争奪が繰り返される。この中世の動乱期に各地に設けられた施設として山城がある。鹿児島県内には、他県と比べても多くの山城が所在すると言われている。その一つとして一字治城跡がある。この城は、後に島津貴久の居城となり、フランシスコ・ザビエルと会見した地として知られている。そのほか、内城跡、大内山城跡、神殿城跡なども所在する。

近世には、現在の市街地を中心に寺社が築かれ、石碑や墓地なども多く残されていった。

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	円福寺墓地群	伊集院町寺脇甫ノ内	小丘陵	中世	伊集院忠邦夫婦の墓	
2	寺脇	伊集院町寺脇 楠牟礼	台地	縄文・弥生	貝殻条痕文・弥生土器	
3	九玉神社	伊集院町郡	平地	中・近世	五輪塔	
4	後宮田	伊集院町麦生田字後宮田	台地	奈良・平安	土師器	昭和63年分布調査
5	黒木田	伊集院町黒木田	台地	奈良・平安	土師器	平成元年発掘調査
6	郡	伊集院町郡	沖積地	縄文～古代	石器・壺型土器・坏	
7	大内山城	伊集院町小城	山地	中世		別称小城
8	小城跡	伊集院町徳重字小城	台地	中世		
9	妙円寺墓地	伊集院町徳重字小城	山地	中・近世	五輪塔・宝塔	
10	石谷高久の墓	伊集院町徳重字小城	平地	中世		町指定昭和40年10月
11	一字治城跡	伊集院町大田	丘陵	鎌倉初期		伊集院郡司紀時清
12	大知城跡	伊集院町大田上	台地	中・近世	五輪塔・無縫塔	
13	雪窓院跡	伊集院町城山	山腹	中・近世	五輪塔・無縫塔	
14	本田兄弟の墓	伊集院町荒瀬	平地	近世		町指定昭和46年7月
15	円通寺跡	伊集院町城山	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
16	荘厳寺墓地	伊集院町猪鹿倉	平地	中・近世	五輪塔・地蔵	
17	薬師堂跡	伊集院町猪鹿倉	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
18	猪鹿倉	伊集院町猪鹿倉	平地		磨製石斧	昭和58年5月発掘調査
19	破鞋墓地	伊集院町向江	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
20	梅岳寺墓地	伊集院町四郎園	台地	中・近世	五輪塔・宝塔	
21	未隠寺跡	伊集院町天神馬場	山腹	中・近世	無縫塔	
22	竜泉寺跡	伊集院町天神馬場	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
23	有馬新七の墓	伊集院町天神馬場	平地	近世		町指定昭和40年10月
24	下谷口	伊集院町下谷口	平地	中・近世	五輪塔	
25	長寺庵跡	伊集院町天神馬場	平地	中・近世	五輪塔外	
26	一ノ谷	伊集院町下谷口	丘陵	中・近世	掘立柱建物跡・陶磁器	平成8年発掘調査
27	永迫平	伊集院町下谷口	台地	縄文早期	住居跡・石器・土器	本報告
28	下永迫A	伊集院町下谷口	谷地	古代～中世	土師器	平成10年発掘調査
29	柳原	伊集院町下谷口	傾斜地	古代～近代	土坑・溝跡・土師器・須恵器	平成10年発掘調査
30	上山路山	伊集院町大田	台地	縄文早期	道跡	平成9年発掘調査
31	熊野神社境内	伊集院町飯牟礼	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
32	中島堀	伊集院町飯牟礼	台地		土器・土師器	
33	七反畠	伊集院町古城	台地	古墳		平成10年分布調査
34	上稲荷原	伊集院町恋之原	台地	古墳・古代		平成7年分布調査
35	稲荷原	伊集院町恋之原	台地	縄文早期	石器・土器	平成8年発掘調査
36	恋之原	伊集院町恋之原	台地		壺型土器	
37	大山神社境内	伊集院町古城	台地	中・近世	五輪塔	
38	松尾城の麓	伊集院町古城	台地	中・近世	五輪塔・相輪	
39	内城跡	伊集院町古城	山地	弘安年間		別称平城



第3図 周辺遺跡図

第IV章 発掘調査の成果

第1節 発掘調査の方法

① 確認調査

平成8年10月から永迫平遺跡の確認調査を開始したが、調査着手時は雑木など伐採後の荒地となっていたのを始め、一部は未買収地となっていたために杉の木立が若干残っていた。調査は、雑木及び灌木の除去から開始し、それらがある程度除去された段階で重機を入れ、株の抜き取りを含む表土の剥ぎ取りを行った。未買収地がほぼ中央部に残っていたために、雑木や株、表土などの仮置き場を調査範囲の縁辺にせざるを得ず、したがって最初から主軸を決めてのグリッド設定はできなかった。そのため、地形の状況を考えてそれに沿ったトレンチを設定して掘り下げを行った。トレンチは台地部分の第1地点に、中央部の未買収部分を避けて11か所設定し、尾根部分の第2地点に5か所設定した。トレンチは表土を除去したか所に2m×5mを基本として設け、Ⅱ層から下位を層序に従って掘り下げていった。各層の掘り下げが終了した時点で清掃を行い、遺構の有無を確認した。層の掘り下げはX層を目途に行い、遺物・遺構の有無を確認していった。最後に断面の清掃を行い、写真の撮影と実測を行い、埋め戻して調査を終了した。

② 本調査

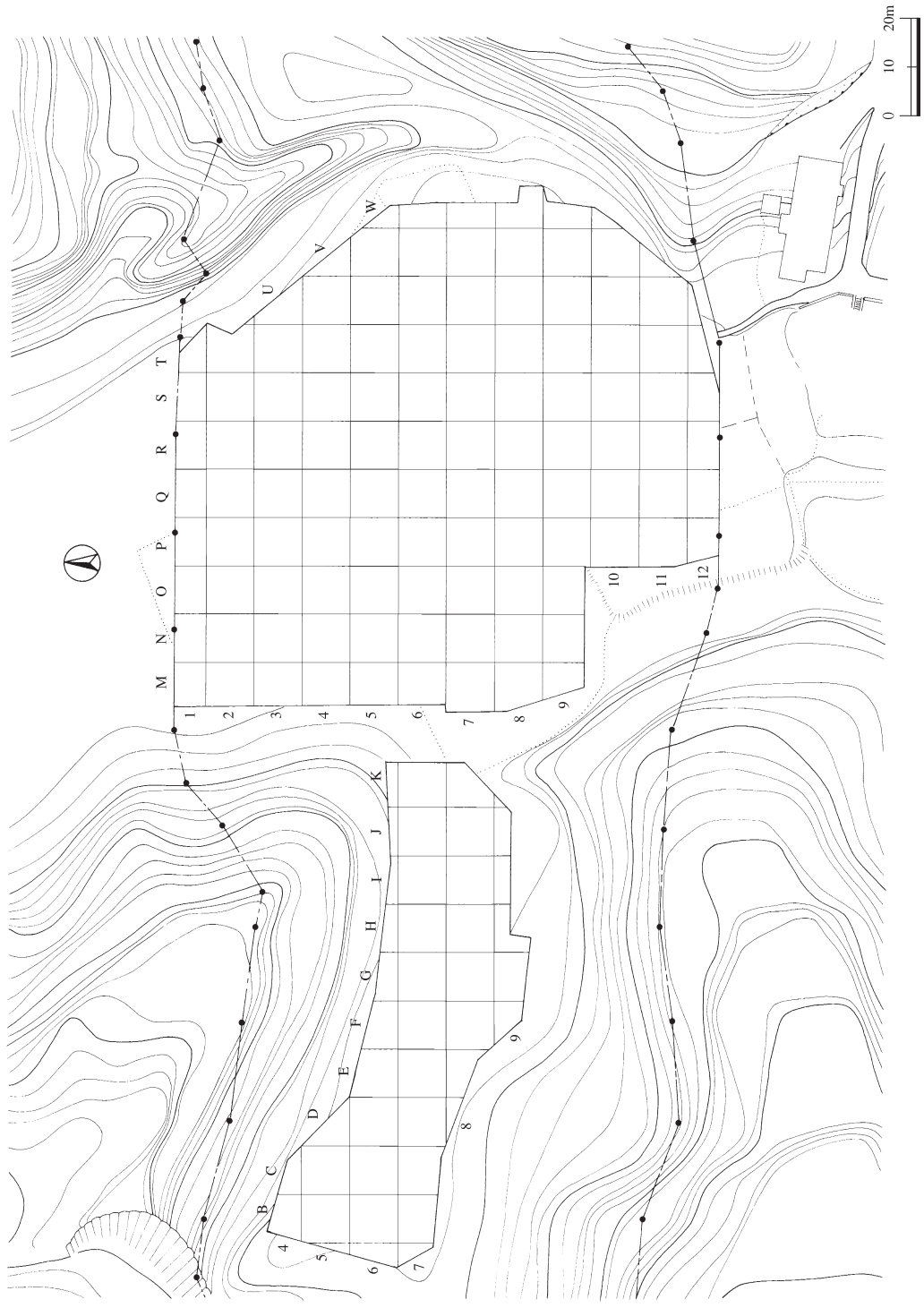
確認調査が終了した段階で、第1地点の本調査を開始した。その時点でグリッドの設定を行った。グリッドは自動車道の建設予定路線の中心線のSTA510とSTA520とを結ぶ線を基準として北及び南に向けて10m毎の区画を設定し、北から1, 2,・・・として12までを付け、東西はSTA510を西の端としてそこから10m毎の区画を設定し、西から東へA, B,・・・としてXまでを付け、B-6区などと呼称することとした。平成8年度は、第1地点のP～W-7～12区の4,000㎡の調査を行った。調査対象範囲の表土剥ぎ取りを行った後、Ⅱ層から順次掘り下げた。Ⅱ層の掘り下げ終了後、Ⅲ層上面で清掃して遺構の検出を試みた結果、近世と考えられる道跡が確認された。写真撮影、実測の後、Ⅲ層から順に掘り下げと清掃、遺構の検出を行っていった。それにより、Ⅴ層中にⅥ層以下に及ぶ遺構が確認されたため、精密な検討を行い、住居跡を始めとする縄文時代早期の遺構ということが判明したため、全面を検出して遺構の全容を検出することが必要と考えられ、翌年度にかけて調査を継続することを決定した。

翌平成9年度に、前年度の調査範囲を引き継いで第1地点の南半分の調査から開始し、縄文時代早期の遺構群を検出した。この段階で北半分も同様に剥いで調査対象地域全体を同時期の遺構の全体として検出したかったのであるが、調査の早急な遂行を求められ、下層の調査も急かされたため南半分を先行して調査を早期に終了させ、その後に北側の全面調査に掛かることにせざるを得なかった。南半分を終了させた後、北半分の下層までの調査を終え、第1地点の調査を終了した。

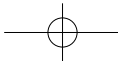
平成10年度は尾根部の第2地点の調査を行った。表土を全面的に剥ぎ取った後、Ⅱ層からの掘り下げと各層掘り下げ終了後の清掃、遺構検出を繰り返し、最終的にX層のシラス層までの調査を行った。Ⅵ層以降は先行トレンチによって下層確認を行い、遺物の散布が見られた区域は広範囲に掘り下げを行った。土層断面の写真撮影、実測を行い、永迫平遺跡の調査を完全に終了した。



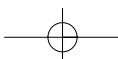
第4図 周边地形图



第5図 調査範囲図



第 1 地 点



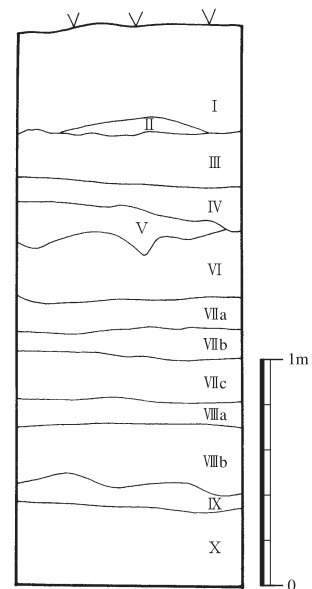


第6図 グリッド及びトレンチ位置図

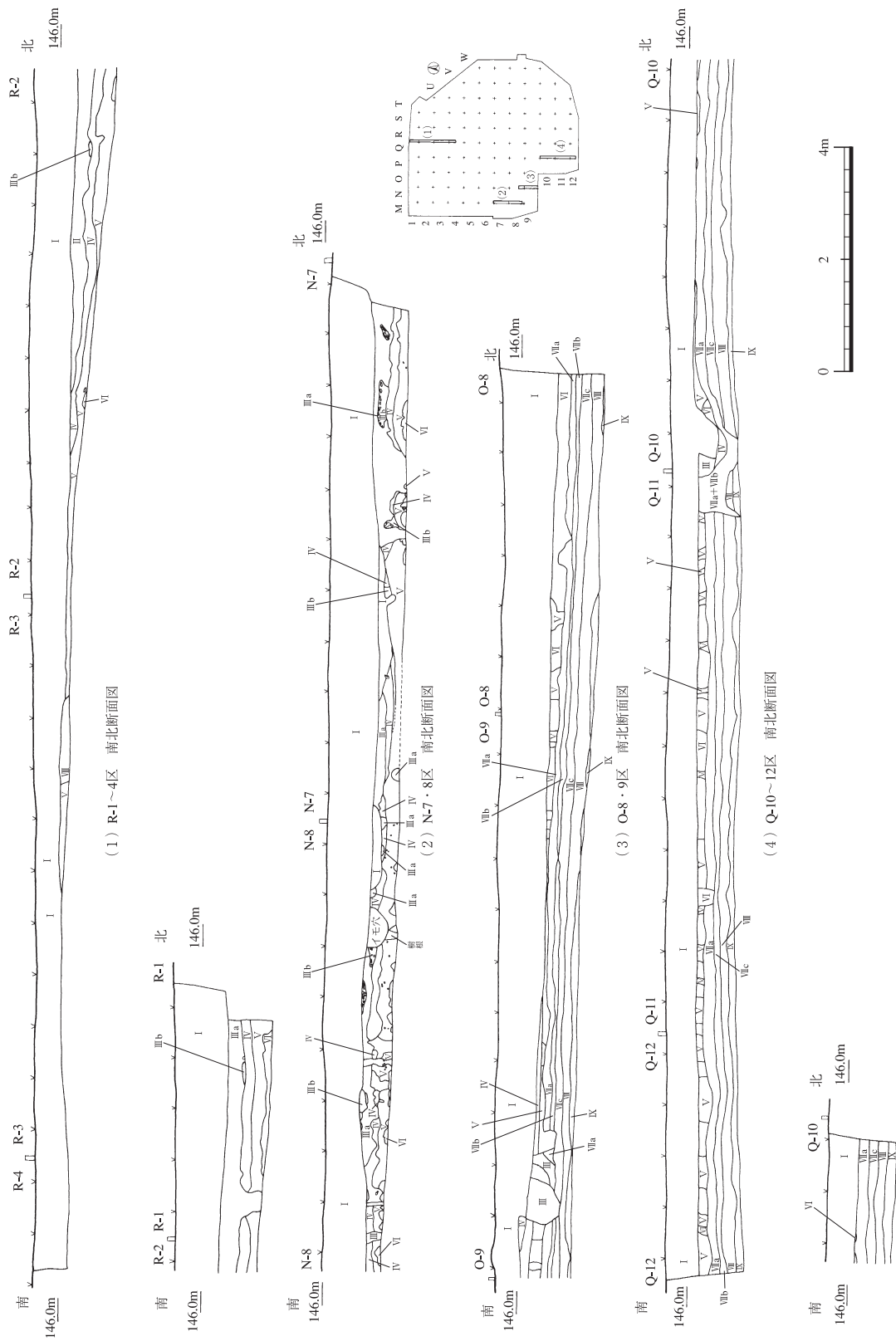
第2節 遺跡の層序

調査対象地は台地であることから、縁辺部では流水作用などによって流出したり、また、中央部付近などでも耕作などによって削平を受けたりして、層が欠落している箇所も見られるが、本遺跡の基本的な層序はおおよそ以下の通りである。

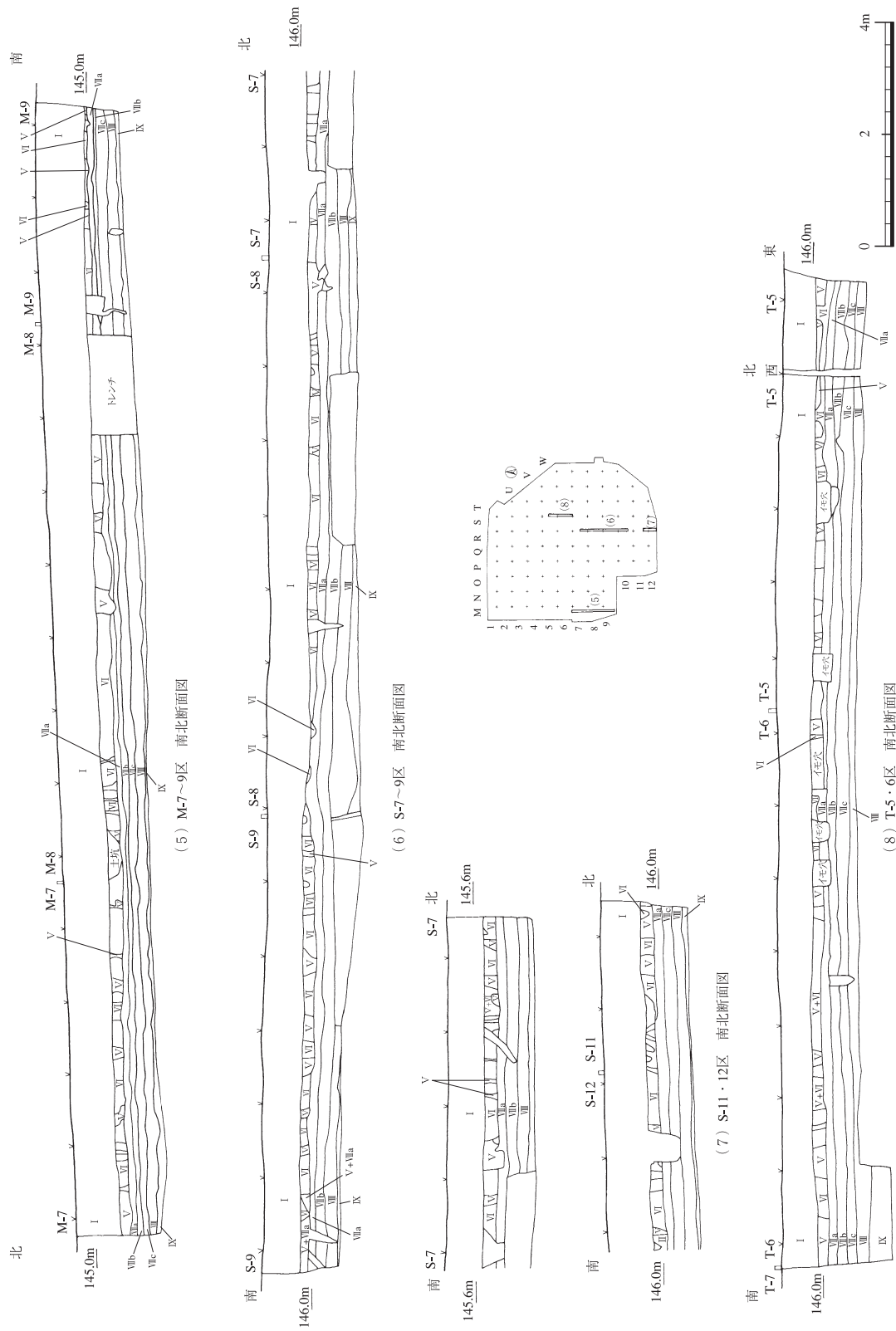
- I 層 表土，耕作土。黒褐色土。
層中に中世・近世の遺物が混じる。
- II 層 黒色土。層としては欠失しているところも多く見られる。
古代から中世にかけての遺物包含層。本来、近世の遺物も包含していると考えられる。
- III 層 火山灰。約 6,400 年前の鬼界カルデラ噴出起源のアカホヤ層である。
- III a 層 黄色火山灰。アカホヤの 2 次堆積層及びその風化土。
古墳時代及び縄文時代後期・晩期の遺物包含層。
- III b 層 黄色パミス。アカホヤの 1 次堆積層。粒子の大きさにより細分は可能であるが、遺物を包含する層ではないことと、局部的にブロック状となり、欠失するところも多いため細分はしなかった。
- IV 層 濁黄色土。
縄文時代早期中葉～後葉の遺物包含層。
- V 層 黒色土。
縄文時代早期前葉の遺物包含層。
遺構の検出面が、この層の下位にあると思われる。
- VI 層 黄色パミス。約 11,000 年前の桜島噴出起源の薩摩火山灰層である。III b 層のアカホヤの 1 次堆積層と同様な理由で細分は行わなかった。
- VII a 層 暗褐色強粘質土。いわゆるチョコ層。
旧石器時代細石器文化期の遺物包含層。
- VII b 層 明褐色粘質土。いわゆるミルクチョコ層。
- VII c 層 濁褐色粘質土。
- VIII a 層 明黄褐色土。
- VIII b 層 暗黄褐色土。約 24,000 年前の始良カルデラ起源の始良・丹沢火山灰層（AT 火山灰層）の 2 次堆積層。
旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層。
- IX 層 黄褐色土。AT 火山灰層の 2 次堆積層。
旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層。
- X 層 黄色パミス。AT 火山灰層の 1 次堆積層。
いわゆるシラス。



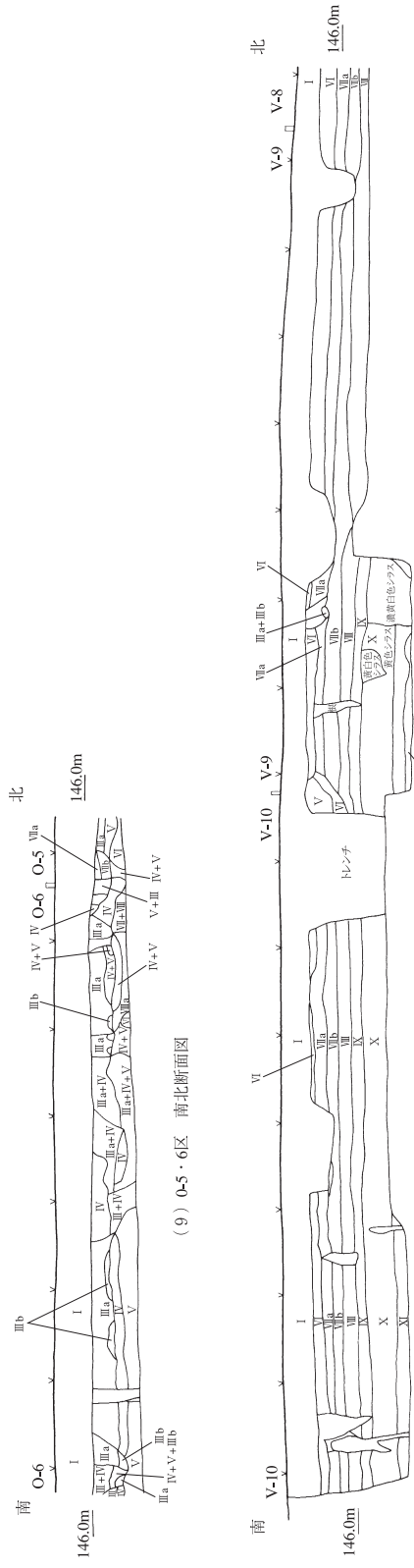
第7図 基本土層柱状図



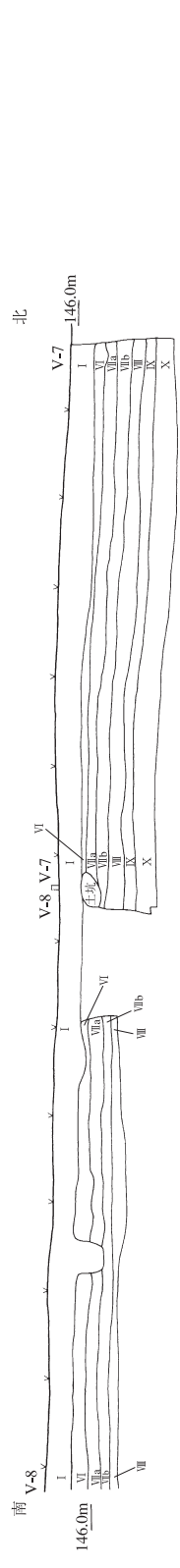
第8图 第1地点土层图(1)



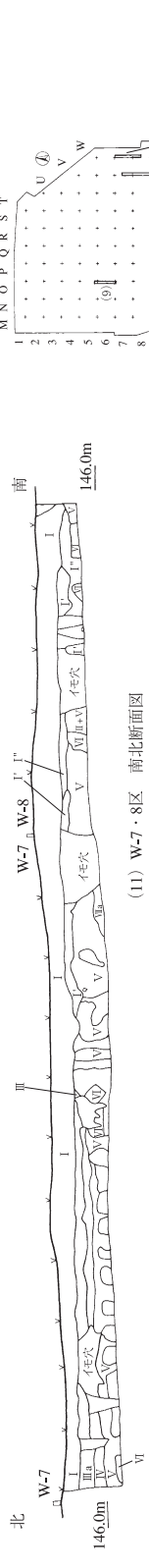
第9図 第1地点土層図(2)



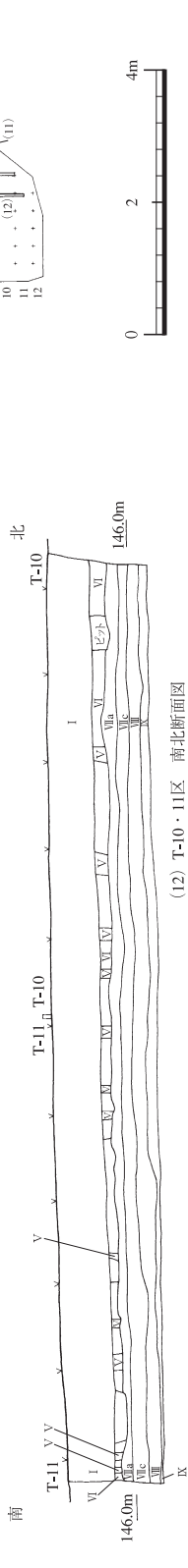
(9) 0-5-6区 南北断面図



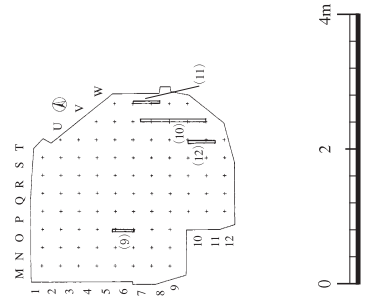
(10) V-7~10区 南北断面図



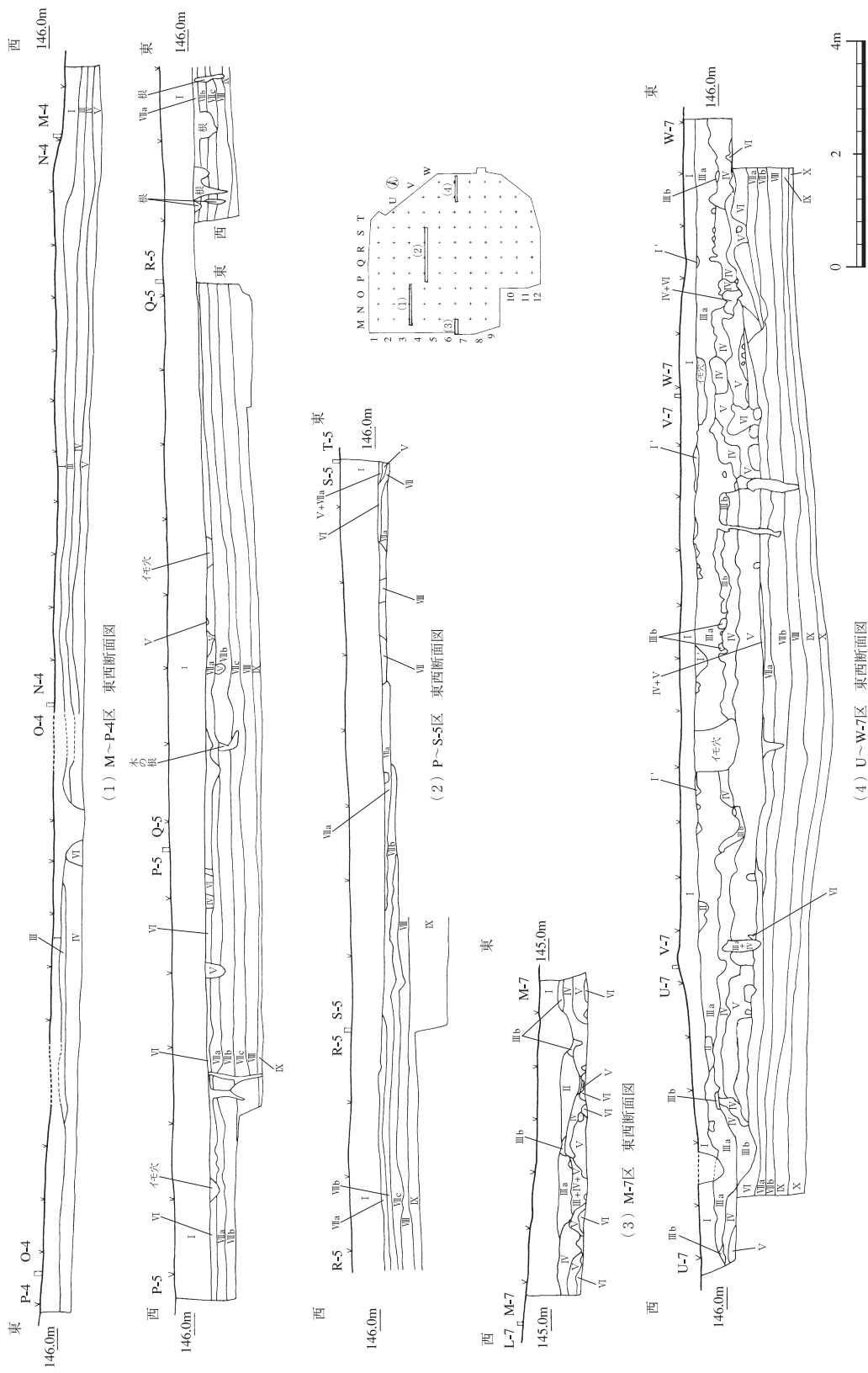
(11) W-7・8区 南北断面図



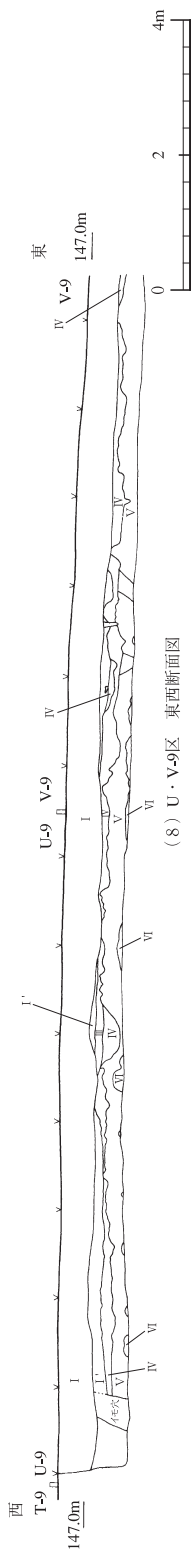
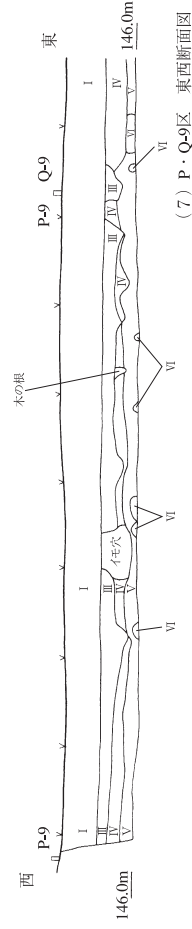
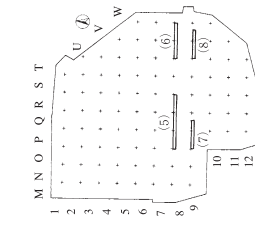
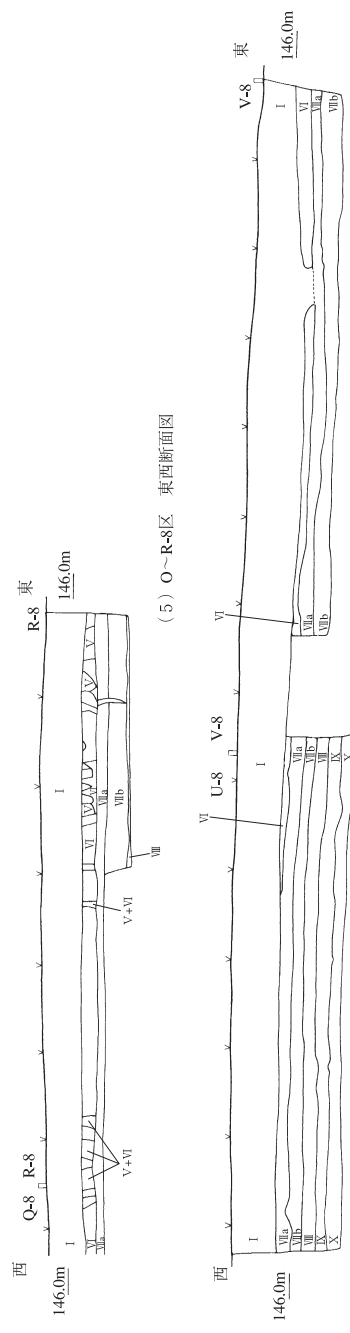
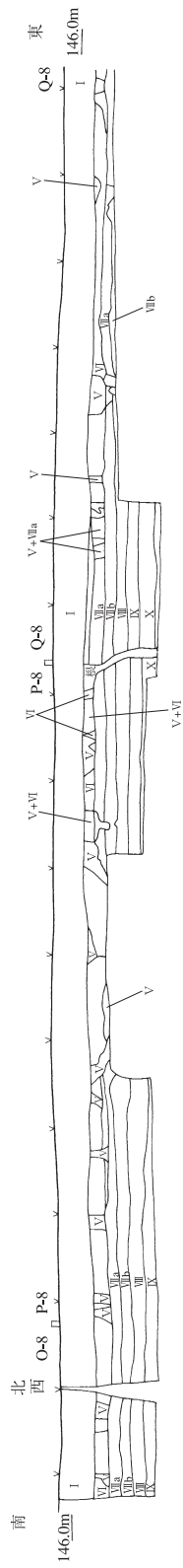
(12) T-10・11区 南北断面図



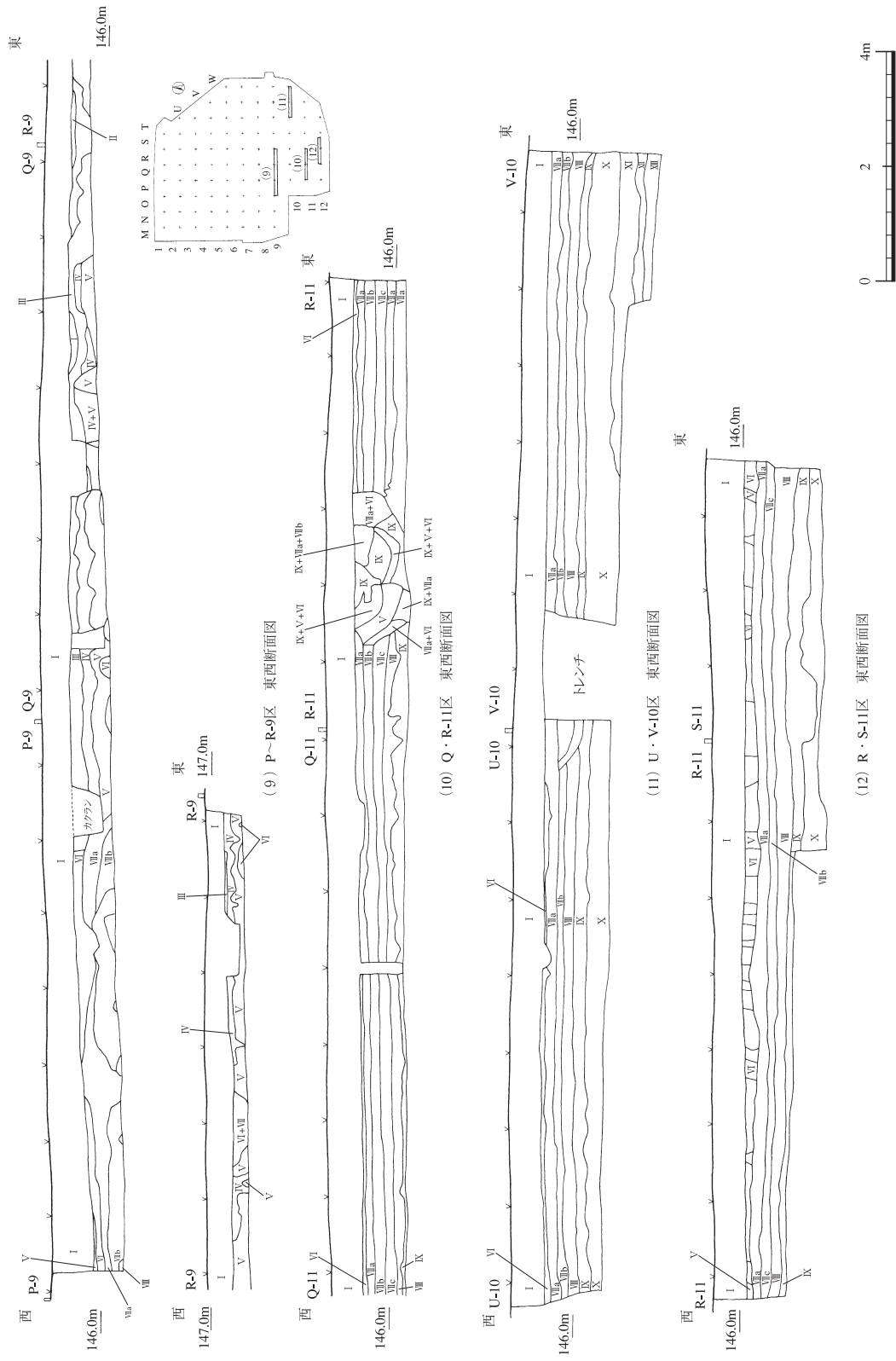
第10図 第1地点土層図 (3)



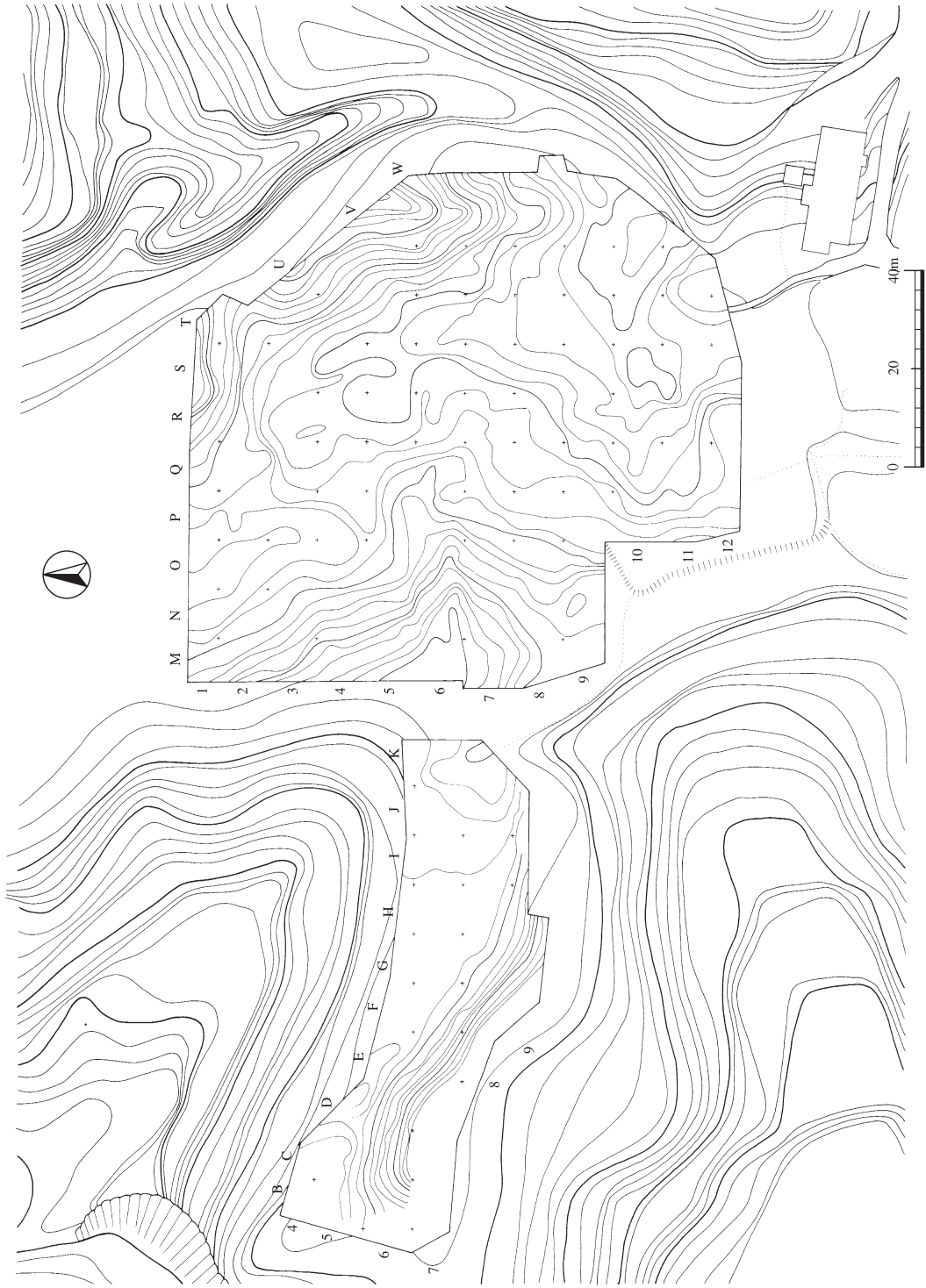
第11图 第1地点土层图(4)



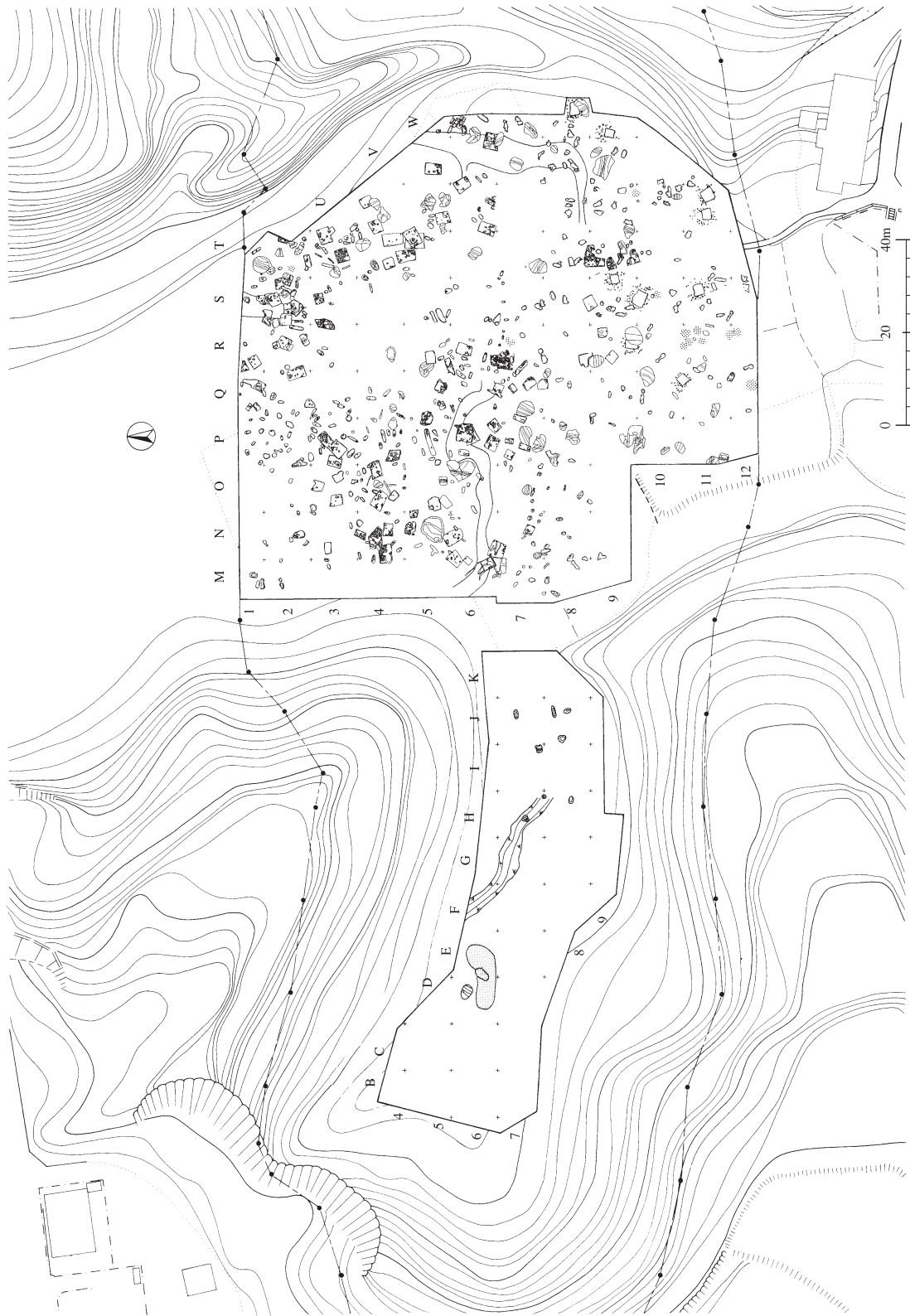
第12図 第1地点土層図 (5)



第13図 第1地点土層図 (6)



第14図 調査区域コンター全体図



第15図 調査区域遺構全体図

第3節 第1地点の調査

第1地点は台地部分のほぼ中央部から南部にかけての地域にあたる。北側の端から同程度の幅をもって中央部にいたるが、その後は南東部に向けてやや狭くなっていく。それから南西に向けて痩せ尾根状の地形が続き、そのあとは広大な飯牟礼の台地へと繋がっていく。また、幅の広い北側の端からの部分は、中央部付近で西に延びる尾根へと繋がっており、この尾根状の帯が第2地点と呼称した調査地域である。

第1地点は、調査に入る前の状況では、全体がほぼ平らであったことから、掘り下げを行っても同様な状況であろうと思われたが、実際に調査を進めていくと割合に高低差のある、起伏に富んだ地形が本来の地形であることがわかってきた。(第14図・第18図)

具体的な地形をVI層上面で行ったコンター計測によって見てみると、概要は次のようなものである。

第1地点の調査範囲の中で、南東の端を最高所として北西に向けて周囲より高い部分が延びており、ここを分水嶺として北東及び南西方向に下がっている。このことは、表土を除去した段階で、平板を用いて実測した芋穴（甘藷を貯蔵するために地面に楕円形または円形に掘られた穴）の分布図（第222図）を見ても、主としてこの部分に沿って芋穴が分布している状況がわかる。それと同時に、北東及び南西側の周囲に比べて標高の低い部分には高い部分ほどの数は見られない。これは、つまりこの分水嶺に当たる部分が当初から高かったため、削平を受けた可能性を示していると考えられる。また、遺物の分布状況を表したドット図（第17図）を見ても、この分水嶺付近の標高の高い部分にはほとんど遺物の分布が確認されていないことも、それを裏付けているように思われるのである。

そうしたとき、本来の地形は、台地のほぼ中央部を南東から北側にかけて脊梁部が延び、北東及び南西側に向かってはある程度の傾斜をもって下がっていた。中央部は東側で北方向に（等高線の入り方から推定すれば、調査範囲外の未調査部分では、その後さらに東に向かって）急傾斜で下がっている。また、南側でも西方向に向かって急傾斜で下がっている状況が看取される。

本文中で述べるように、縄文時代早期とした遺構の全体図（第19図）を見ても、この分水嶺に当たる標高の高い部分には、地層の横転と若干の土坑以外には際だった遺構も見られないことから、削平を受けた可能性はあると考えられる。ただ、P・Q-3・4区からT・U-7・8区にかけての脊梁部の中でも中央部に当たるところには、硬化した連続する面が見られていたことから、脊梁部を通る道跡であった可能性があり、そうであれば住居跡を中心とする集落が所在していた段階で使われていた道（跡）であったことが考えられることになり、削平はそれ以前に行われていたことになる。いずれにしても、どの時代（時期）かにはこの部分は削られた、裏を返せば本来はいくらか高かったということは言えそうである。

縄文時代早期以後のある時期、遺物の出土状況図（第177図及び第200図）から考えると、おそらく中世か近世以降に畑などの農耕生産地として使用された段階で削平や造成を受けた結果として、発掘調査開始時のような平らに見える地形となったものと考えられる。

第3節 第1地点の調査

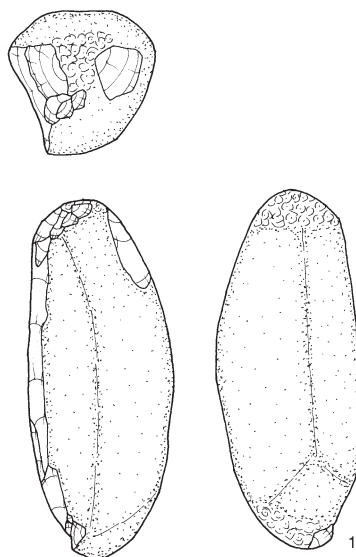
1 旧石器時代ナイフ形石器文化期 (第16図上)

IX層の暗黄褐色土を掘り下げた段階で、T-10区のX層から砂岩製で長軸の両端を敲打した石器が出土した。

この層は、AT火山灰層の2次堆積層であることから、旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物と考えられる。

長さ8.0cm、幅3.2cm、厚さは3.2cmで、長軸の両端は敲打されており、それによるものか、2側面には剥離が見られる。軟質の砂岩製で、色調は淡黄色を呈している。

これ以外には、際だった遺物は出土していない。また、遺構等も検出されていない。



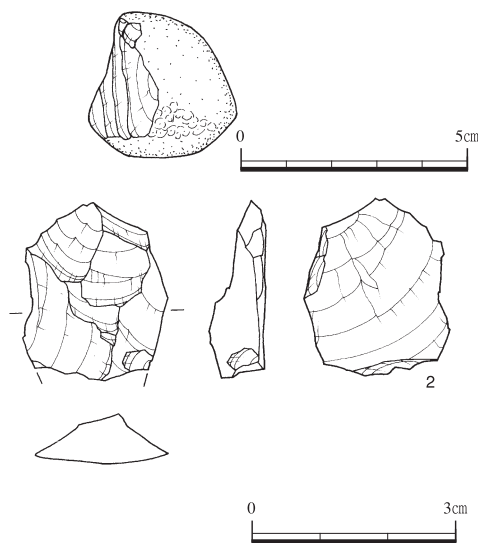
2 旧石器時代細石器文化期 (第16図下)

平成8年度の確認調査で15トレンチの掘り下げ中に、VII層の濁褐色粘質土から黒曜石製の石器が出土した。

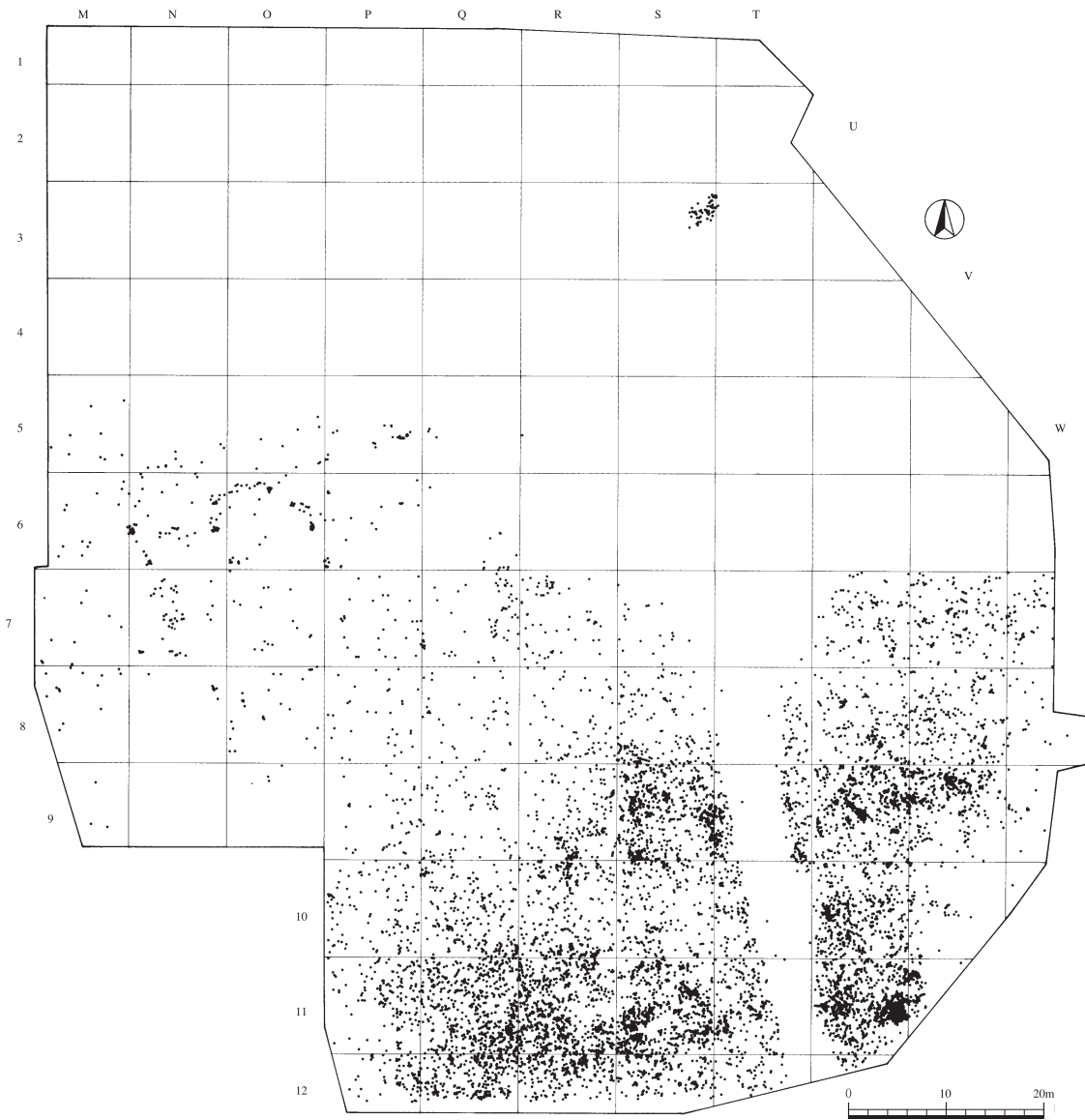
この層は、いわゆるチョコ層の下位にあることから、旧石器時代細石器文化期の遺物と考えられる。

石材は黒曜石である。気泡は割合に少なく、全体的に漆黒であることから、上牛鼻産のものと考えられる。黒曜石の塊から剥ぎ取った剥片と見られる。

これ以外には際だった遺物は出土していないが、同様な剥片やチップがある程度出ている。

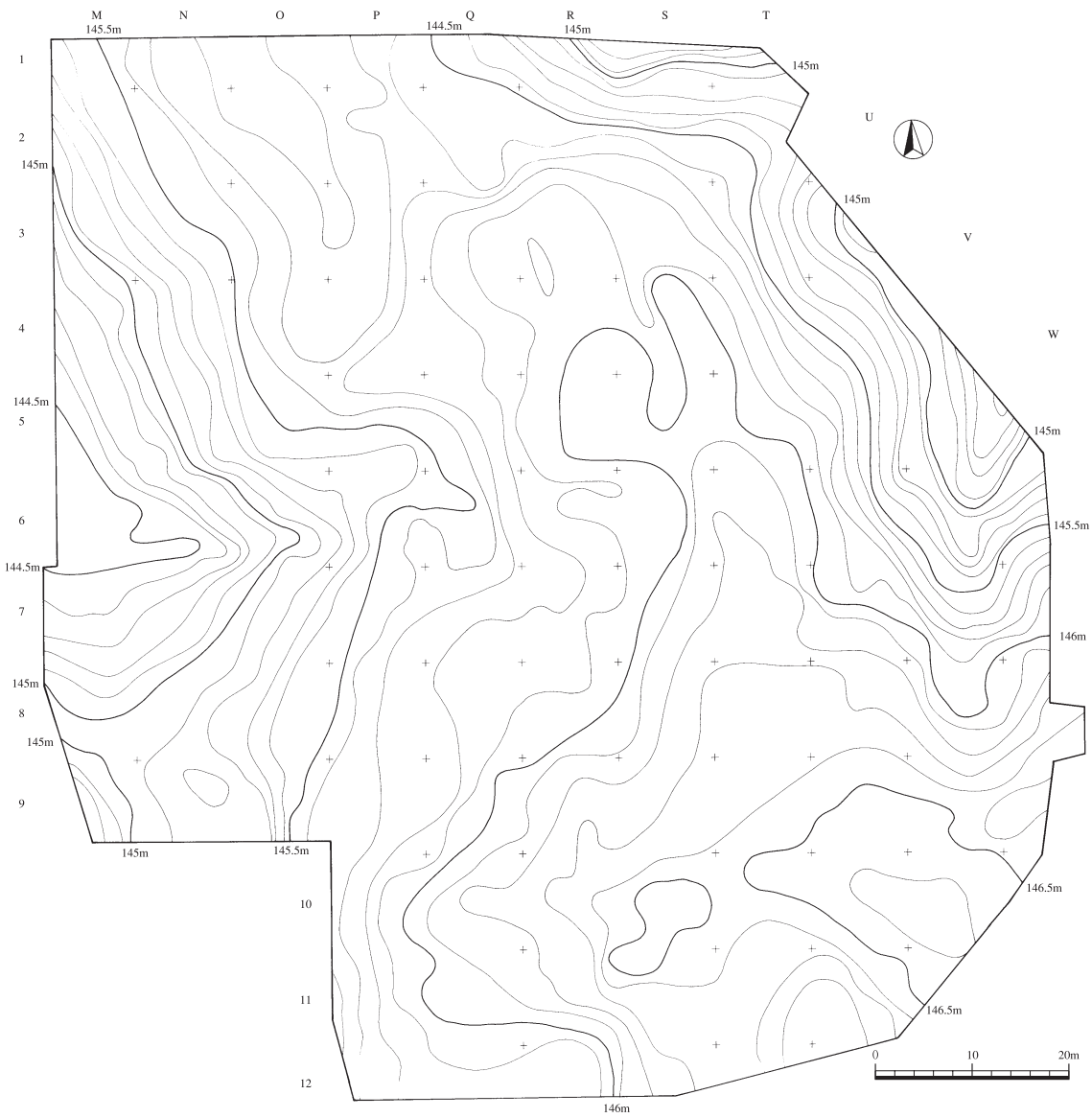


第16図 旧石器時代出土遺物



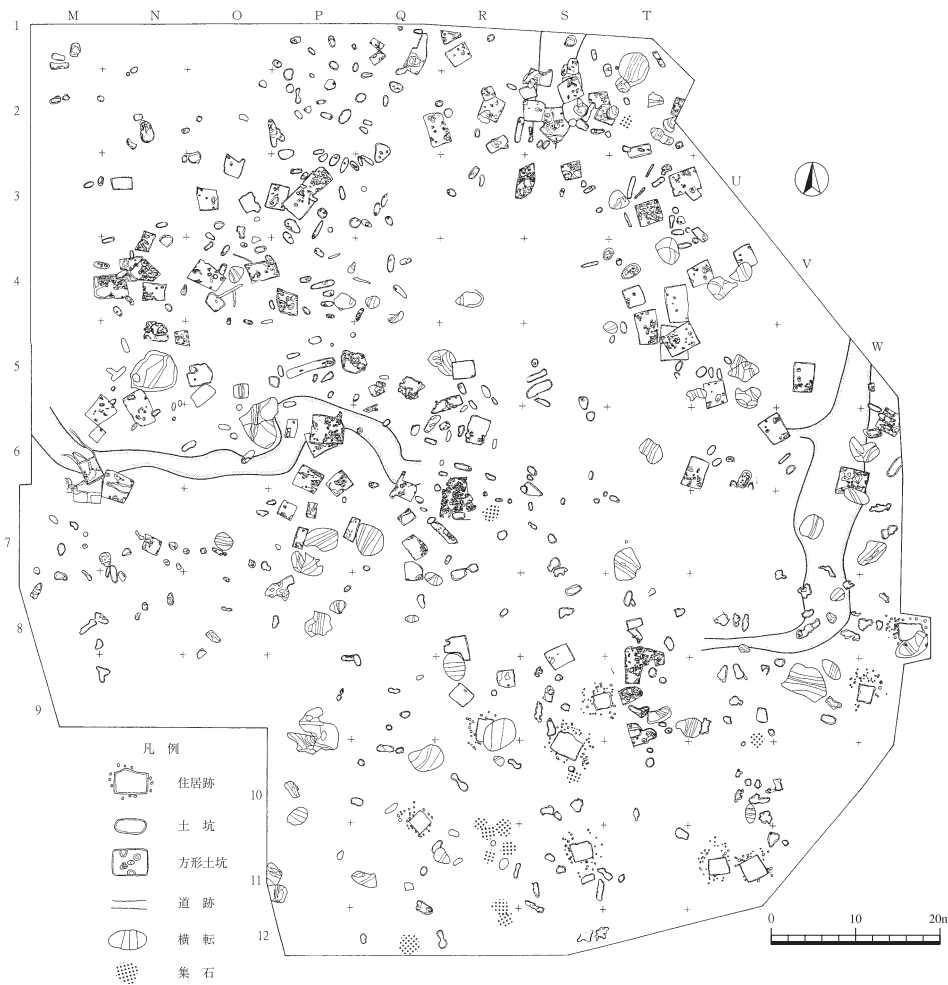
第17図 遺物出土状況図（1）





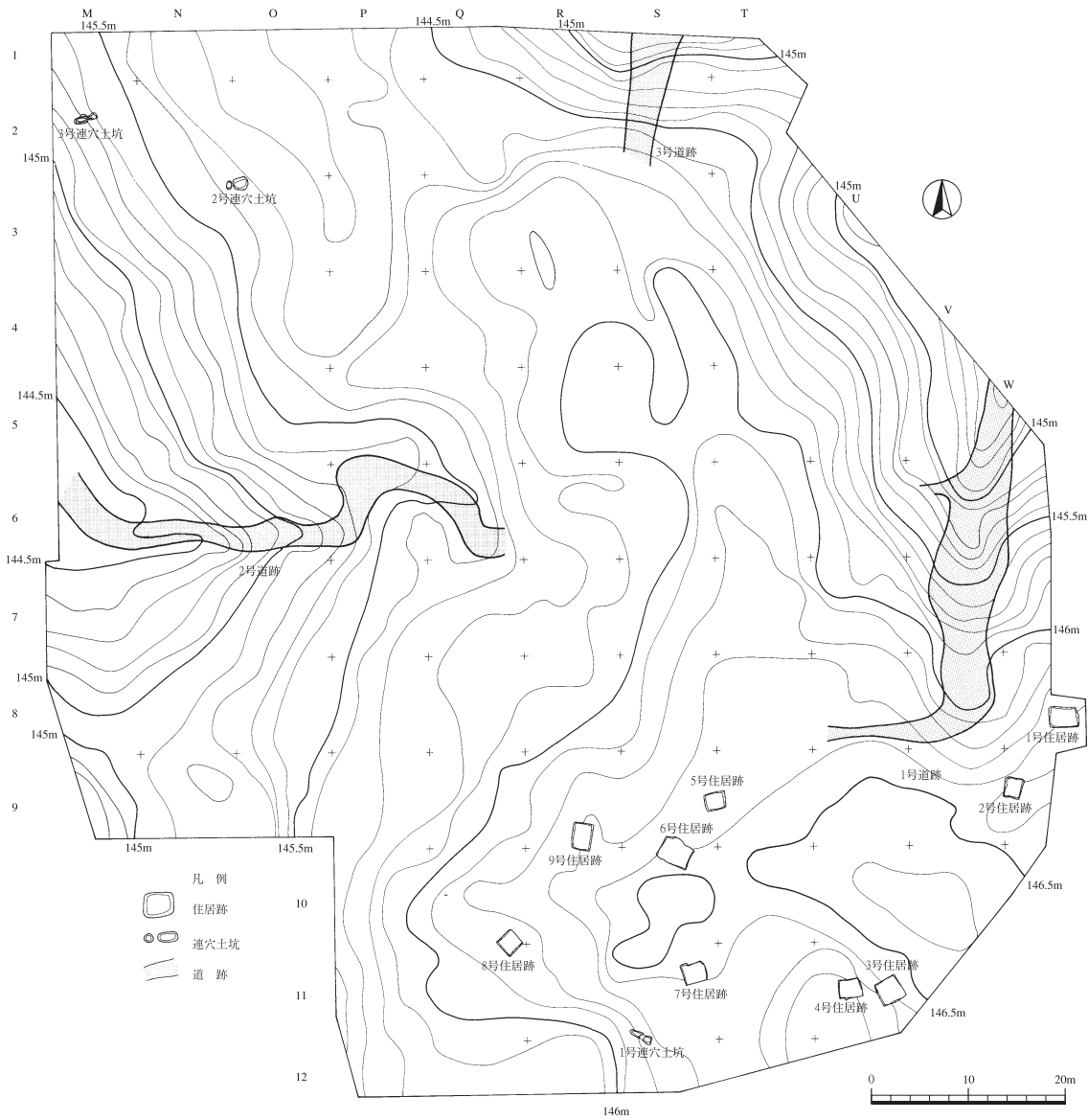
第18図 コンター図





第19図 遺構全体図





第20図 主要遺構位置図



4 縄文時代早期

IV層の濁黄褐色土層の除去後に黒色土のV層面を検出し、掘り下げたところ土器などが出土し、縄文時代早期の遺物包含層であることが判明した。その中で、大きな破片の遺物が集中する場所があったため、注意深く掘り下げを行った結果、方形を基調とする竪穴状の遺構を検出した。調査を進めていくうちに、同様な遺構が他にも確認され、V層の遺物包含層の下位に検出されたことと、遺構内の遺物から縄文時代早期の竪穴住居跡であることが判明した。ただ、掘り方の上面は同じV層中にあるため明確に確認できず、それより下位のVI層のいわゆる薩摩火山灰層面まで下げて初めて明確なプランが検出できた。

遺物包含層を除去した後、同様にしてVI層面まで下げて遺構を確認した結果、土坑及び連穴土坑、それに土坑の中でも竪穴住居跡に類似するような、方形を基調とする大型の土坑が検出され、その形状から方形土坑と仮に呼称して調査を行った。また、包含層中から礫がまとまって出土したことから、慎重に掘り下げを行い、集石も検出した。さらに、地形が傾斜を開始する辺りからより低位の方に向かって延びる、硬化した面が確認され、道跡である可能性のあることが判明した。

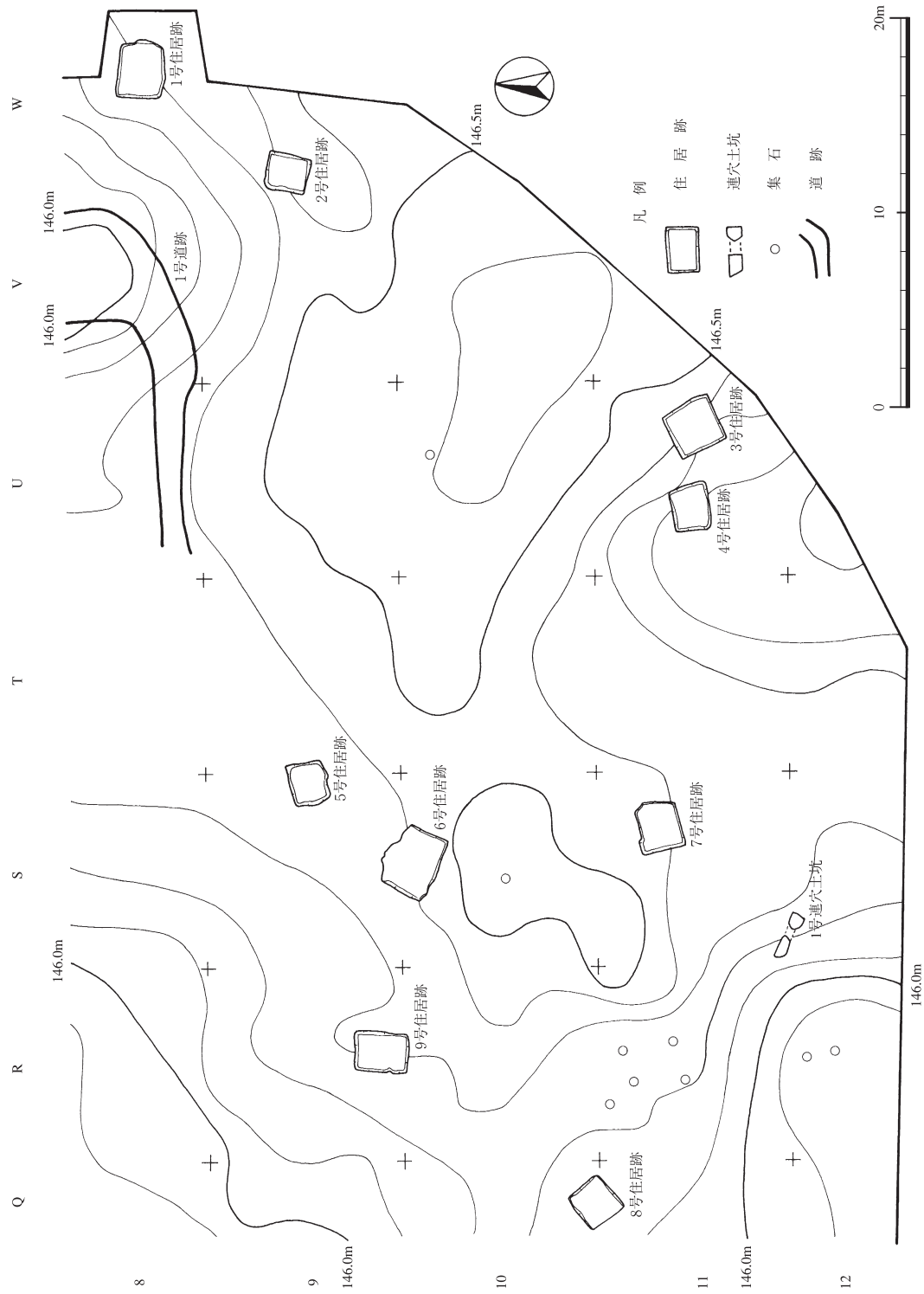
以下、遺構と遺物についてその概略を述べてみたい。

(1) 遺 構

①竪穴住居跡

第1地点の南東部に、9基がある程度のまとまりを持って確認された。東側から、ほぼ確認された順に1号、2号として9号までを付けた。先に述べたように、平成8年度に確認調査から全面調査（現在の本調査）に切り替えた際、U-11区でV層の縄文時代早期の包含層を掘り下げて行く中で、磨石や割合に大きな土器の破片が集中する一画があったため、注意深く掘り下げを行ってVI層の薩摩火山灰層の面まで達した際に、1次堆積の火山灰が見られない方形を基調とするプランが見えてきた。この時点で当該年度の調査が終了したためトップシートで覆いをし、翌9年度に改めて中央部に十字のベルトを残して周囲の掘り下げを行い、埋土がV層の単一の土であり、コーナーが割合にしっかりした方形の住居跡と考えられた（3号住居跡）。さらに、それに隣接するように同様な規模で同様な掘り込みが見られたため調査した結果、住居跡と考えられるという結論にいたった。調査が周囲に広がるにつれて同様な遺構は数を増し、最終的に9基を数えるにいたった。内部の調査では柱穴は検出されず、周辺から多数のピットを検出するという遺構の在り方から、ほぼ同じ時期の遺構と考えられた。規模としては、若干の差異はあったものの、方形を基調として周囲に柱穴を持ち、埋土中から出土する土器が同一であったからである。

その形状や規模、出土遺物などから、当時最古最大級の集落跡と確認された、国分市の上野原遺跡とほぼ同じ時代、縄文時代早期前半の住居跡の可能性が大きいことがわかったものの、国の指定史跡となったばかりの上野原遺跡と同様な遺跡の現出は必ずしも歓迎されてはいなかったことから、その時期の住居跡であるとの確定には慎重の上にも慎重さを要したため、縄文時代の住居跡及び当該期の集落の専門家を指導者として招請し、指導を受けた結果、縄文早期の住居跡などから構成される集落跡と見て間違いない、とのお墨付きをもらったため、それ以降は明確に住居跡として調査や書類への記載を行っていった。



第21図 住居跡位置図

1号住居跡（第22図～第25図・第64図）

1号住居跡はW-8区で検出された。規模は、東西326cm、南北254cmで、軸はほぼ東西方向であり、深さは5～17cmである。住居跡本来の深さから考えると非常に浅い印象を受けるが、周辺にあるピットの深さが浅いもので15cmしかないのに対して、深いものでは29cmのものがあることから一概にはいえないものの、掘り方の上面は幾分上にあると考える方が自然のように思われる。内部にはピットはない。

ところで、住居跡のプランの南東側には土層の横転が見られる。住居跡内の埋土を取り除く際に、それと同じ土が見られたためそのまま掘り進めたが、周囲を見回したところ横転に気付いた。住居のプランとして見てみると、北及び西側の掘り方のラインはほぼ直線的であるのに対して、横転の影響を受けていると見られる南側のラインは不自然な曲線を描いている。また、この横転の周辺にはピットがほとんど見られないことから、南東部については横転が本来の住居のプランを破壊している可能性が高いと考えられる。横転内部に見られる1基のピットが円形と言うよりも若干方形を呈していることも、そのことを示唆している可能性もある。

しかし、一方で、最初にこの住居跡のプランを検出した段階では、横転のあることがわからないままに、掘り方のラインを引くことができたことをどのように解釈すればよいのだろうか。そのように考えると、横転の時期は住居(跡)の形成の後と考えることもできるのではないか。そうした時、南側のピットは一部に見落としのあった可能性も考えられることになる。さもなくば、横転した土層の層序の見間違いの可能性も出てくる。いずれにせよ、現時点で最終的な判断を下すことはできない。

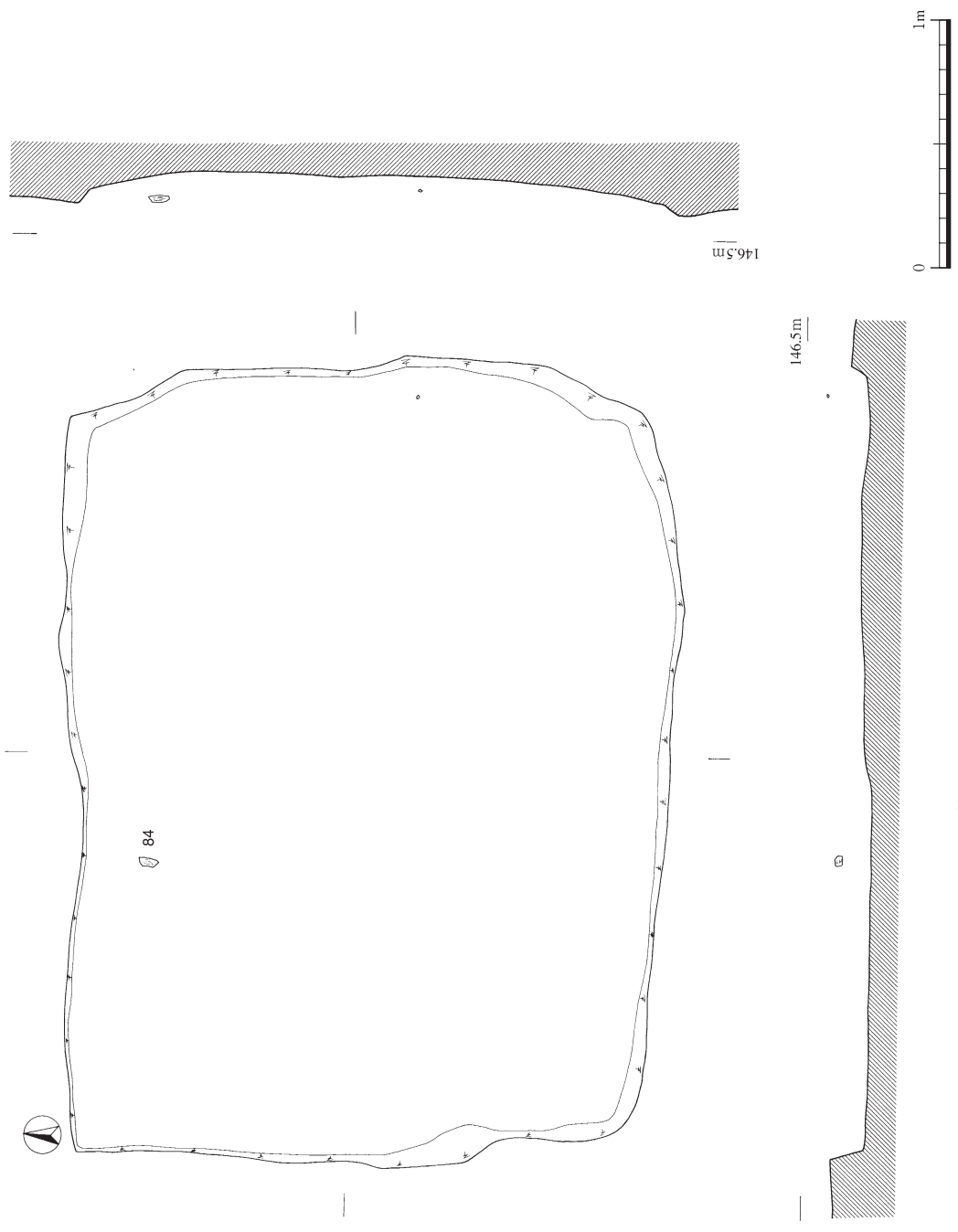
住居跡周辺のピットは一見ばらけて見えるが、西側に数多くのピットが見られるほかは、残りの3方向のピットは基本的にはほぼ単独に存在しているように思われる。つまり、住居跡の掘り方のラインに沿って1列に取り巻いているように見えるということなのである。また、西側の多数のピットは北西部に張り出すように集中して見られる。ところで、住居跡の北西の端にはL字状となる溝状の掘り込みが見られる。ピットはこの遺構の周囲に多く見られるのである。このL字状の溝状の遺構の性格はどのようなものが考えられるだろうか。北西方向にあることから、冬季の北西の季節風を防ぐ目的と考えると、風除けまたは出入り口の可能性が考えられるのではないだろうか。

また、北側にも西端が直線となる掘り込みがあるが、性格は不明である。

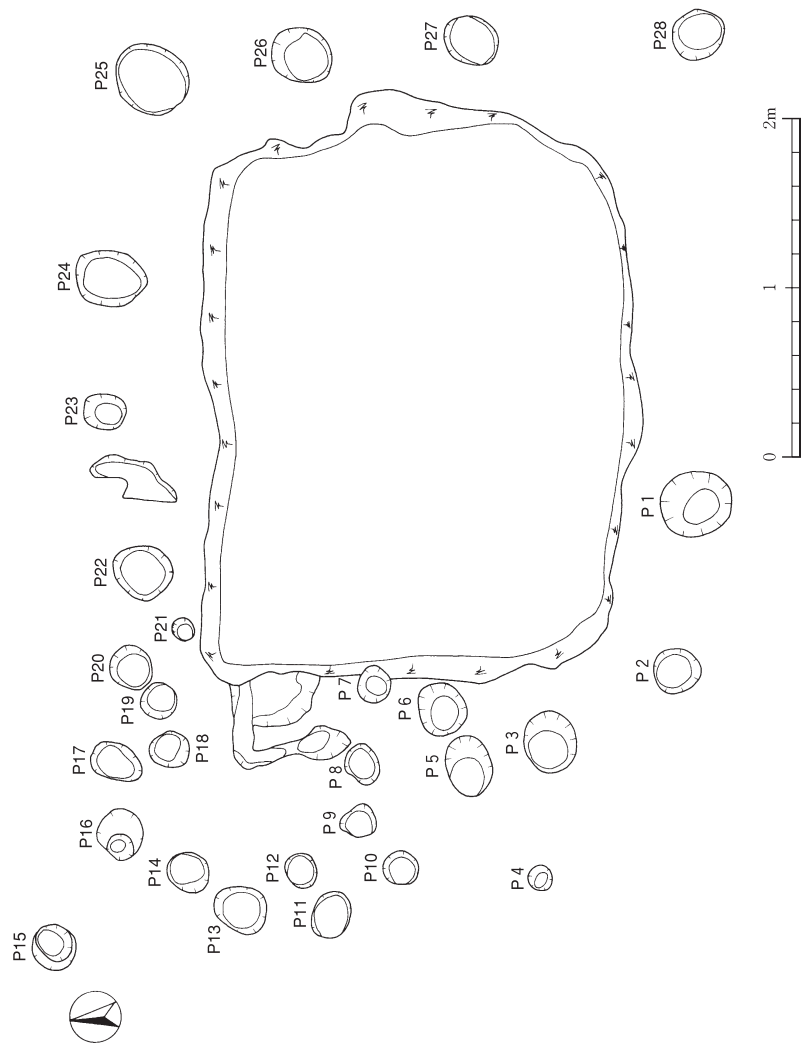
周辺には総数29個のピットが散在する。断ち割りの方向にもよるが、柱筋は垂直または内向きとなっており、残存の深さが20cm程度であることから、住居跡そのものと同様に掘り方の上面はさらに上部にあったと考えられ、これらのピットは建て替えや主柱の補助として立てられたものと思われる。それは、住居跡以外の場所には、近辺にピットは1基として見られないことから考えられることである。

掘り方を基準として住居の形を復元すると、西側を除く3方向では掘り方に沿った柱が直線的に並び、北西はL字形の掘り込みに戸板を立てかけて風除けとし、周囲の略円形に取り囲む柱によって出入り口とするような方形の竪穴住居が復元できるかも知れない。

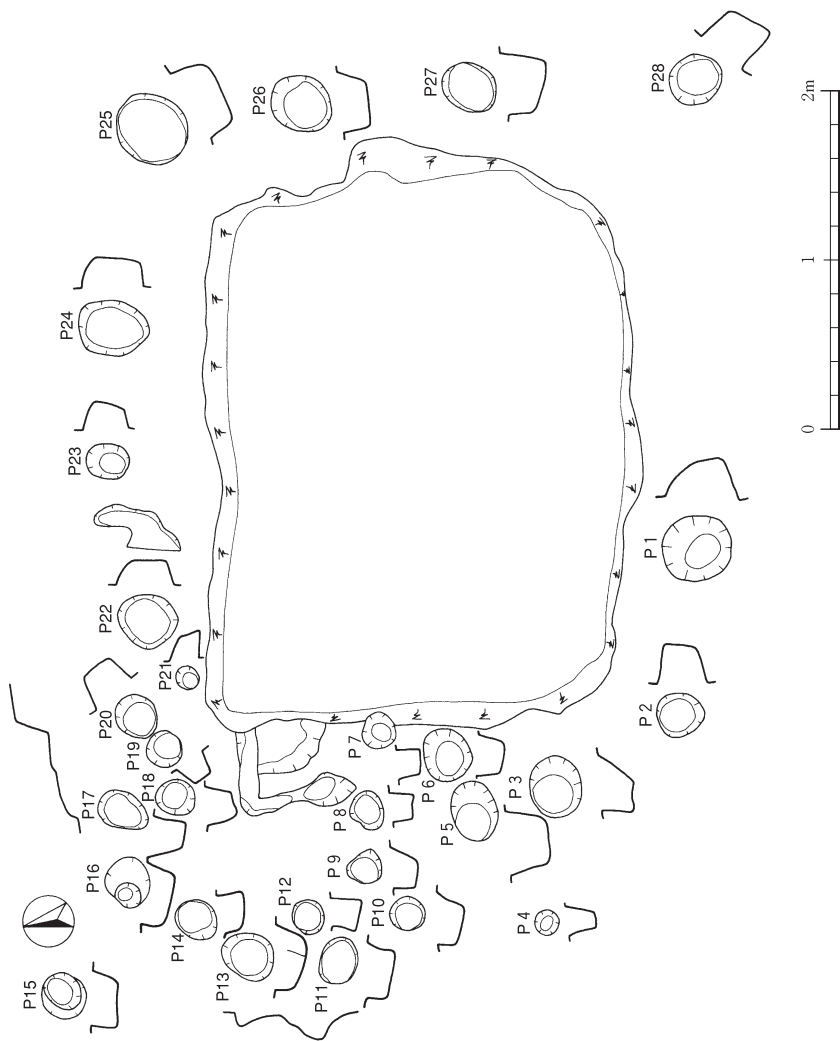
1号住居跡内からの主要な出土遺物としては軽石製品がある。扁平で、円形に復元される可能性が大きいことから、土器製作時に使用される円盤かとも考えられる(84)。



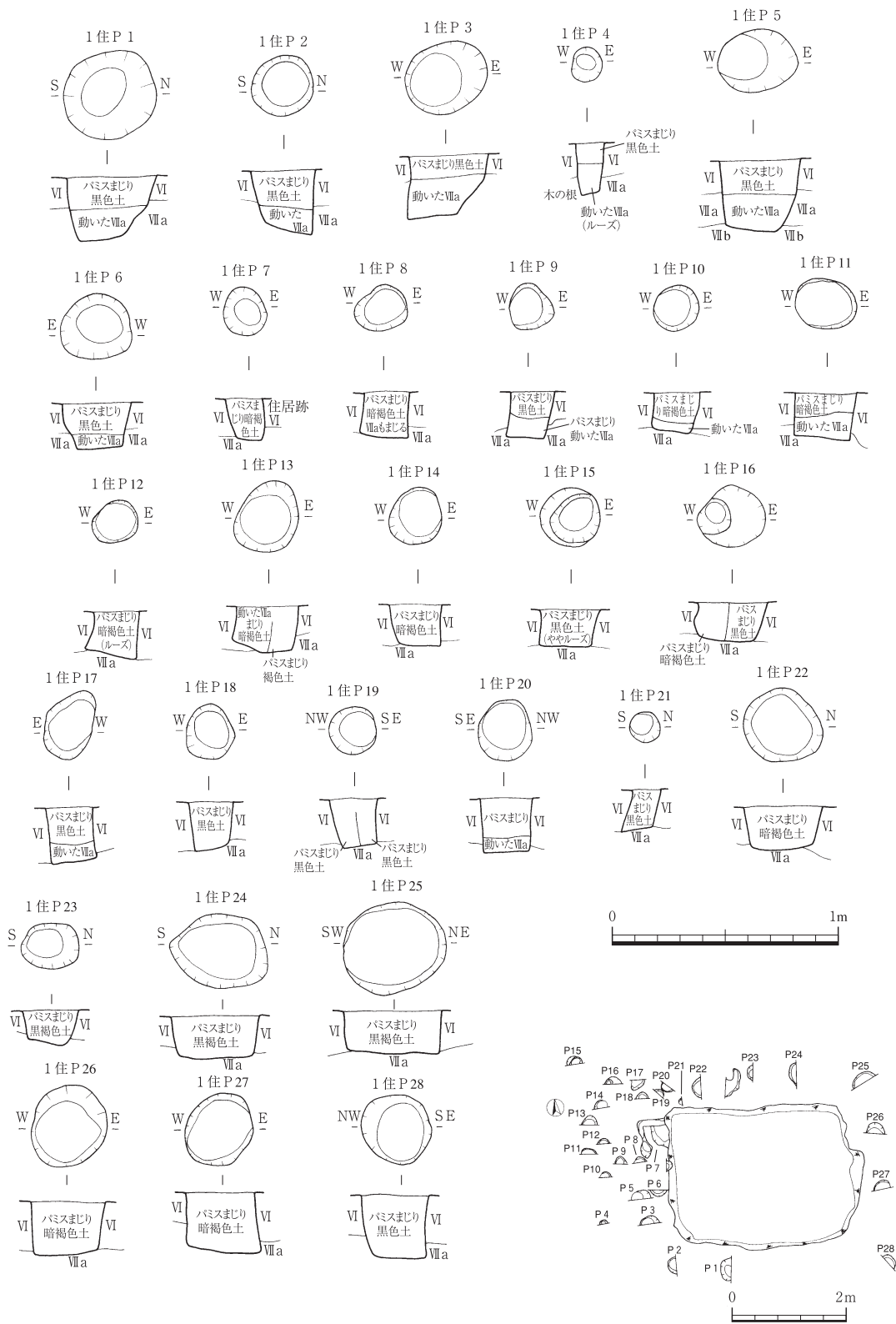
第22图 1号居迹平·断面图



第23図 1号住居跡周辺ピット図



第24図 1号住居跡周辺ピット断面図



第25図 1号住居跡検出ピット図

2号住居跡（第26図～第30図）

2号住居跡はW-9区で検出された。規模は、東西208cm、南北224cmで、本遺跡中、最も規模の小さなものである。若干東方向に振れた南北方向を主軸としており、深さは20～28cmである。住居跡内からは小さな土器片が出土した。遺構は楕円形の芋穴（甘藷の貯蔵穴）数本によって切られているために残存状態は良好とはいえない。四隅は辛うじて残っていたものの、周辺のピットは削られている可能性が高い。

住居跡の掘り方はほぼ直線的であるが、四隅の形状はそれぞれに異なっている印象を受ける。ただし、芋穴によって切られているか所もあるために、形が若干変わっているものもあると考えられる。

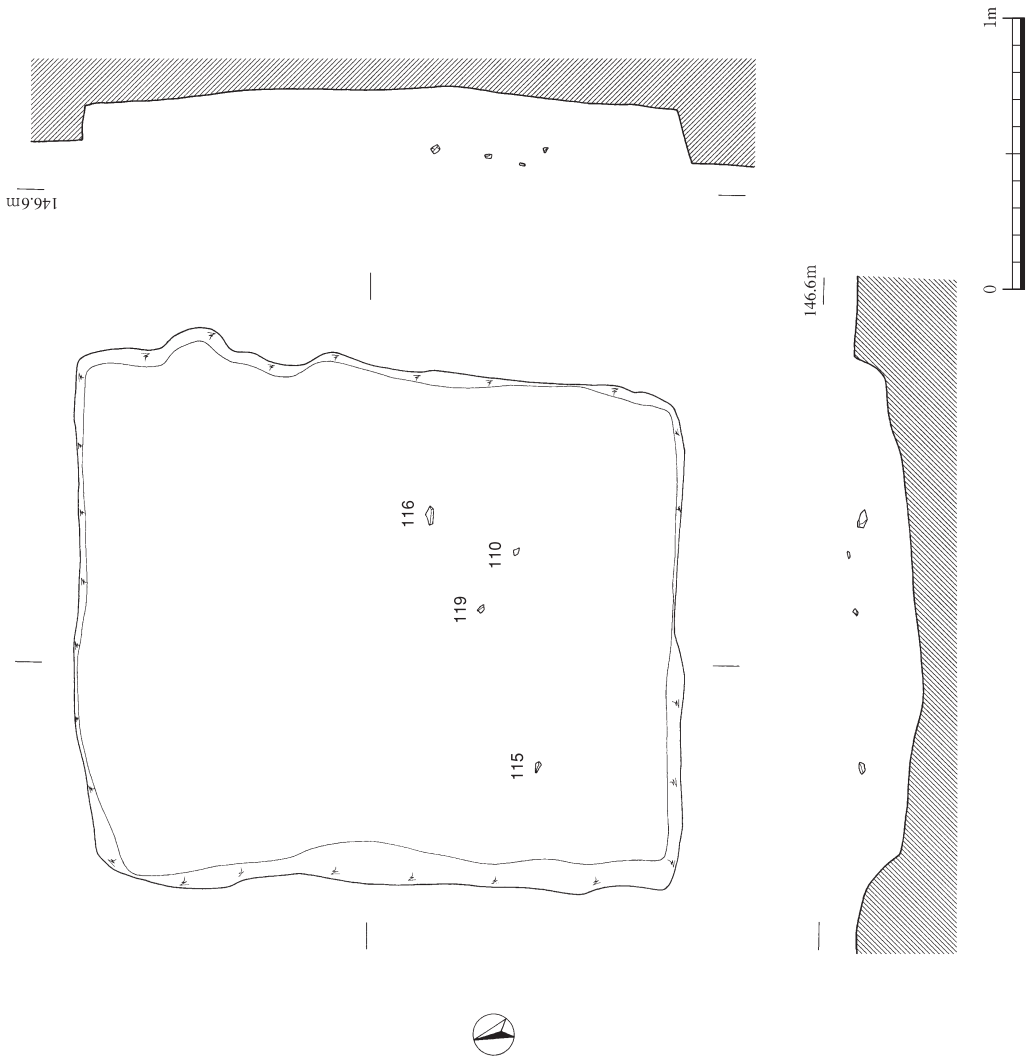
住居跡内には炉と考えられる土坑やピットは見られない。また、床も踏みしめられている形跡も見られなかった。

ピットは総計37個を確認した。北側に多く確認され、それ以外では少数が散在するのみである。しかし、それは、先述したように、芋穴によってその多くが削平を受けている可能性があることによるのかも知れない。芋穴の完掘後に、ピットの有無を確認するよう試みたが、検出できなかった。それは、本来、周囲にピットがなかったというよりも、本来あったピットが芋穴によって削平を受けたために、完全に消滅したことが考えられるのである。

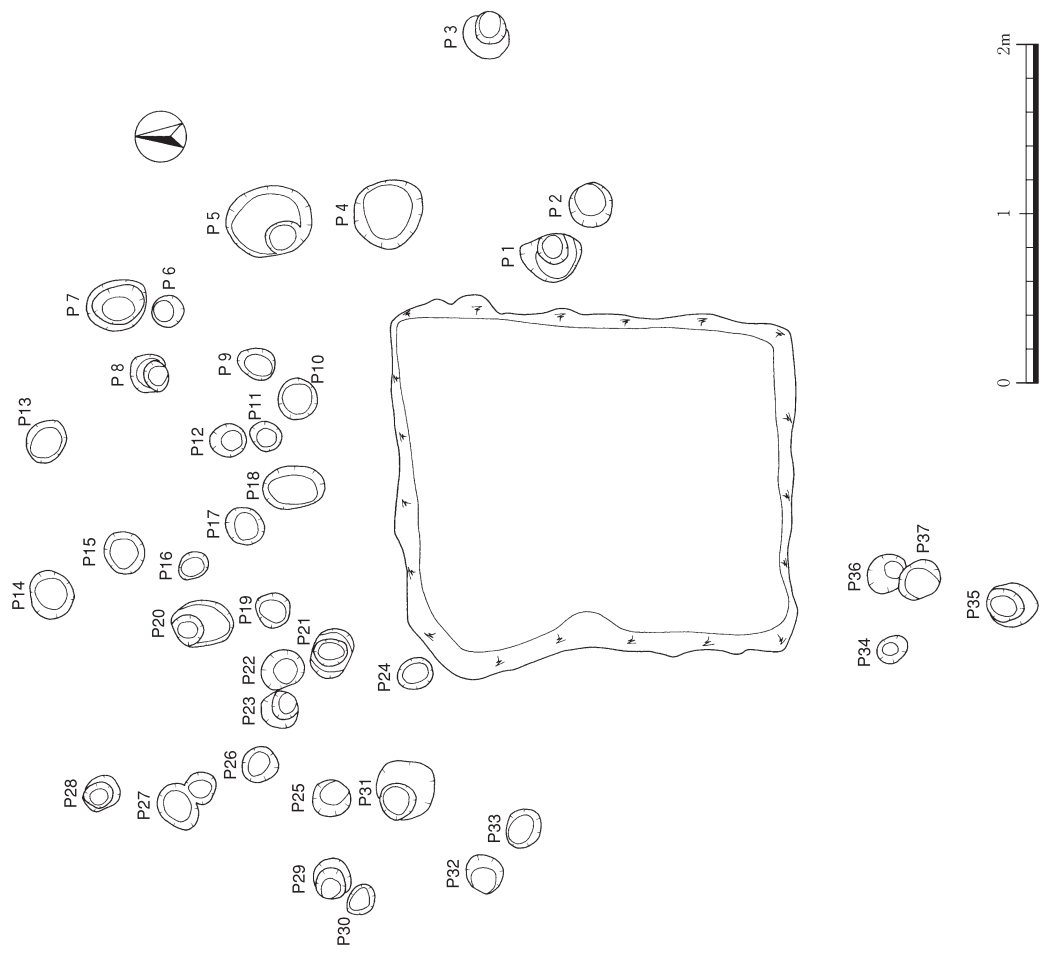
1号住居跡と同様に、削平を受けている可能性が考えられるものの、柱痕跡の残るものもあることから、建て替えや支柱の補助として立てられた可能性が大きいと考えられる。

住居跡の形状及び周辺のピットの分布状況から住居の復元を試みると、北側の異常に多いピットが気には掛かるが、住居の掘り方を取り囲むように柱が円形に展開する状況である。そうすると、これは国分市の上野原遺跡に復元されているような、“ドングリ”形をした円形の住居となるのではないかと考えられる。

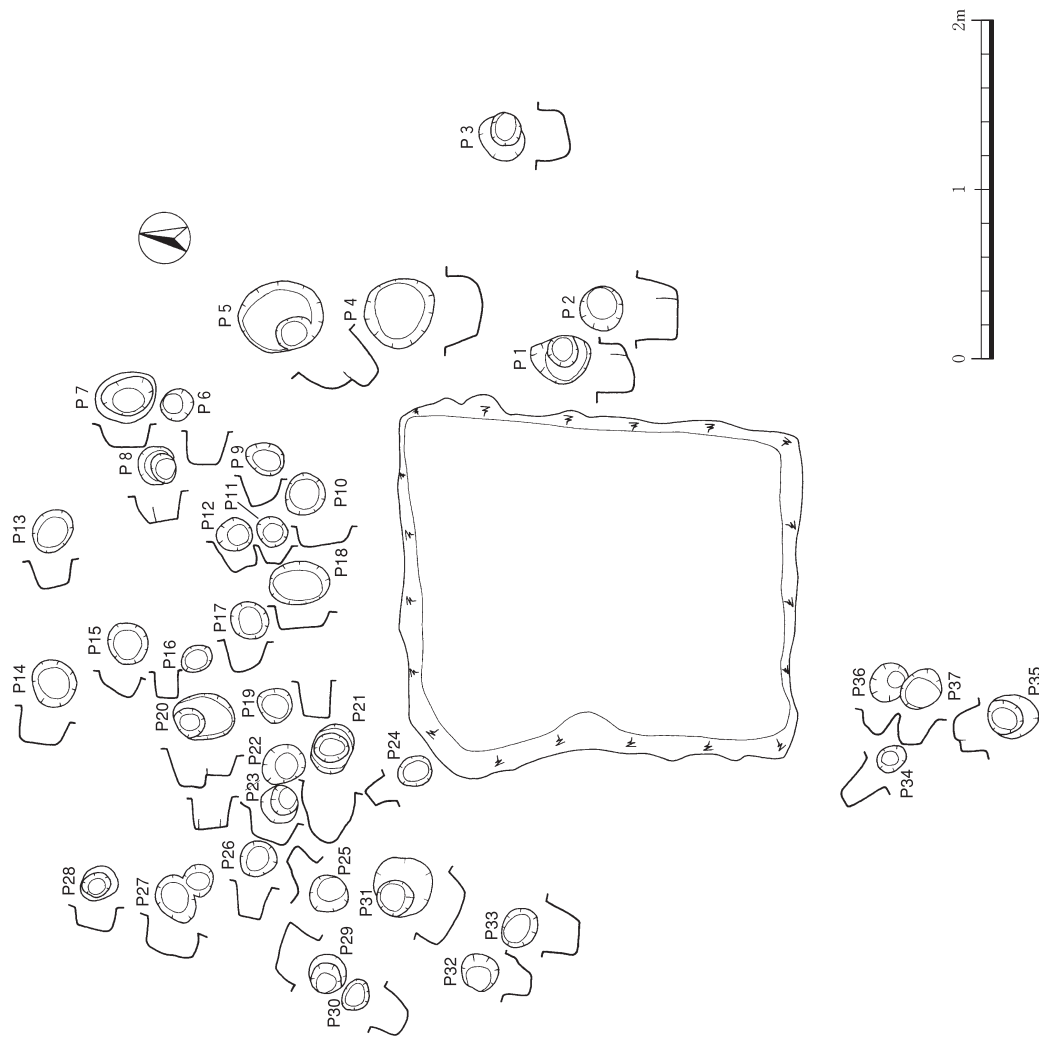
ほかの住居跡との位置関係を見てみると、最も近い1号住居跡とは約6m程度しか離れていないことから、住居の同時性として2軒が同時期に存在していたことを表している可能性も考えられる。その次に近い3号住居跡とは約22m程間隔が空く。



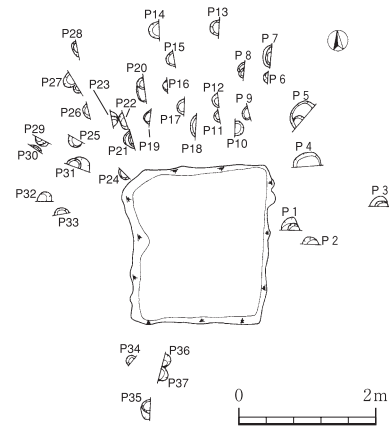
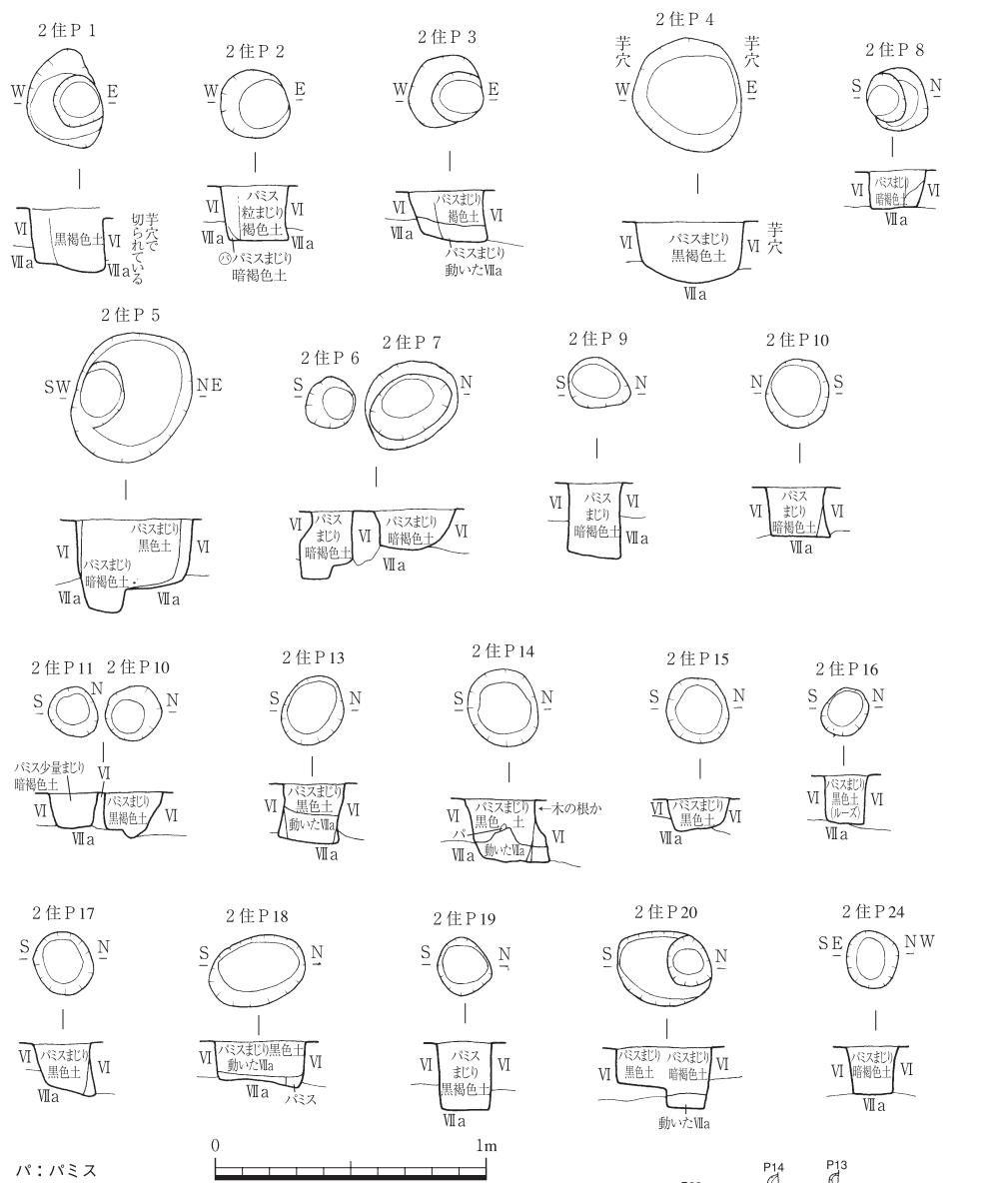
第26图 2号住居跡平・断面図



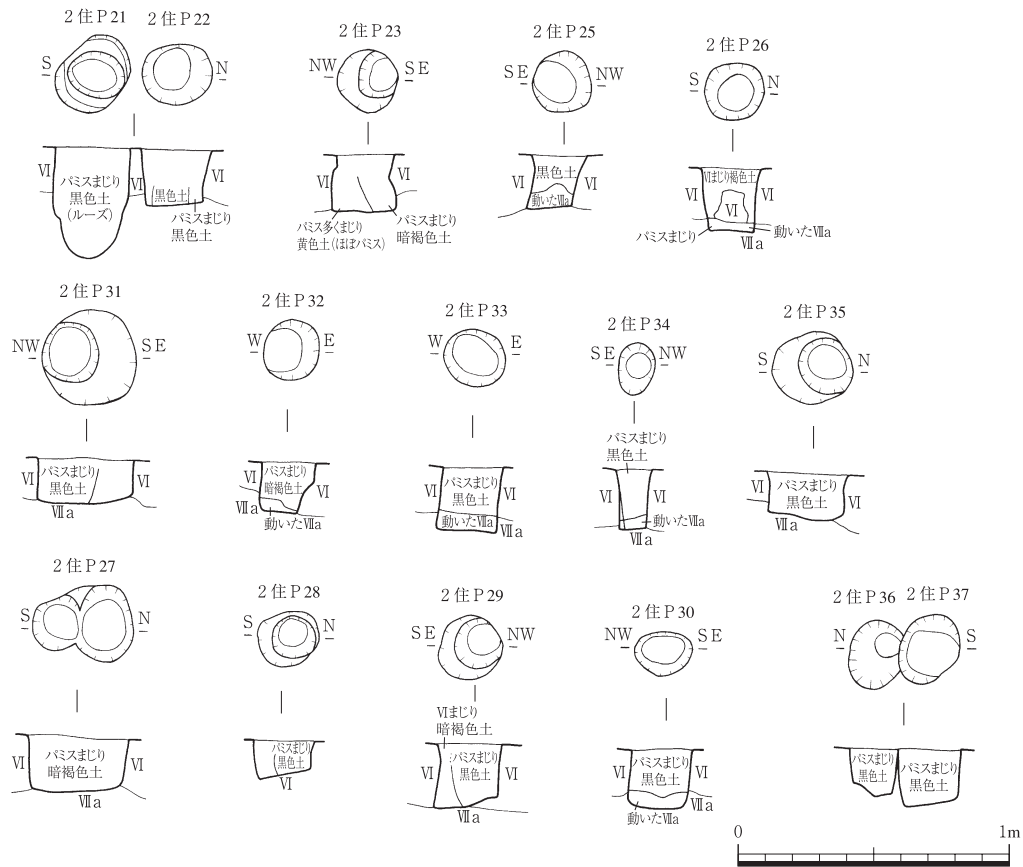
第27図 2号住居跡周辺ピット図



第28図 2号住居跡周辺ピット断面図



第29図 2号住居跡検出ピット図(1)



第30図 2号住居跡検出ピット図(2)

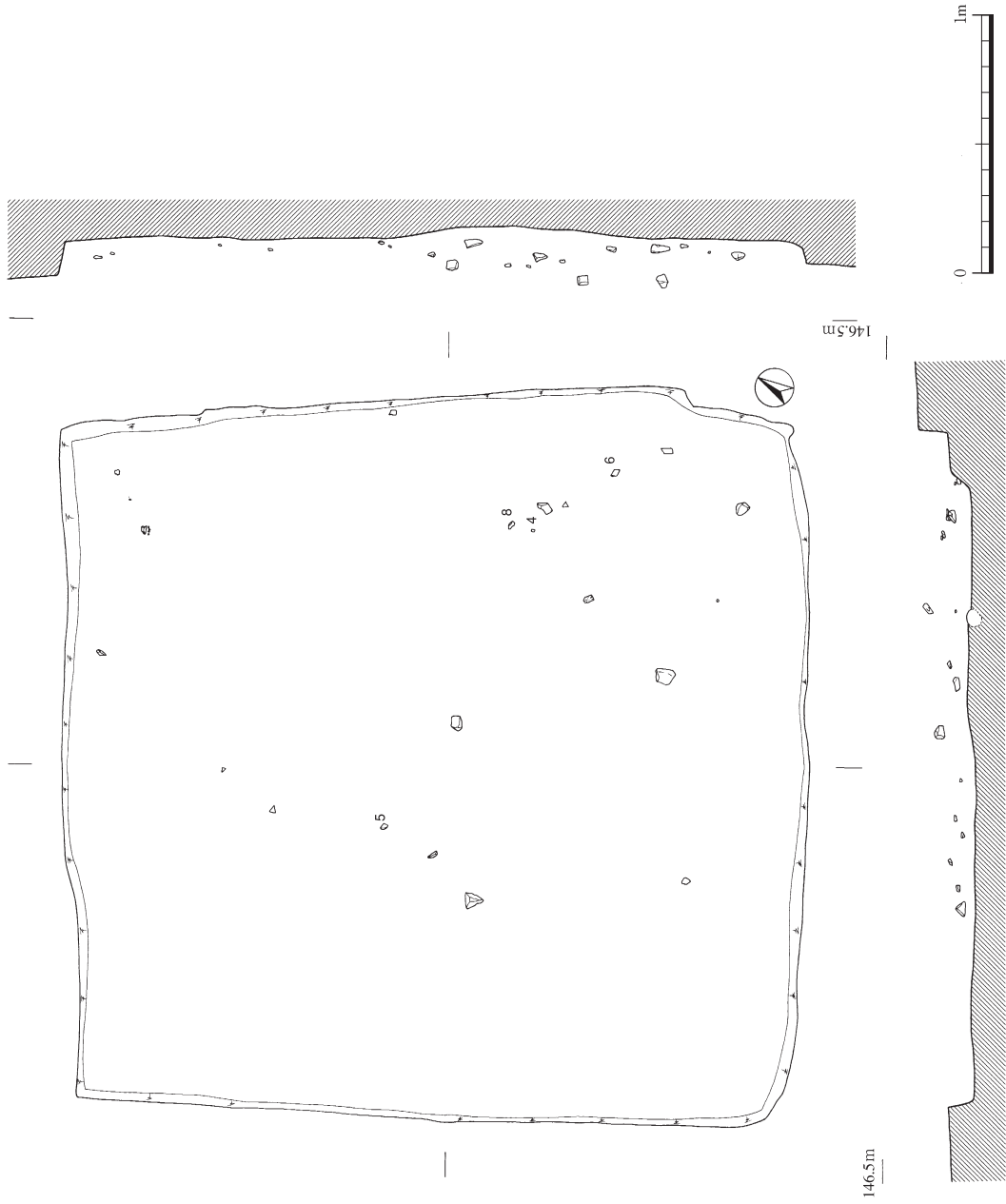
3号住居跡 (第31図～第34図)

3号住居跡はV-11区で検出された。規模は東西291cm、南北288cmのほぼ正方形であるが、北辺がやや短い。深さは13～25cmである。主軸は若干西に振れてはいるものの、ほぼ南北方向である。

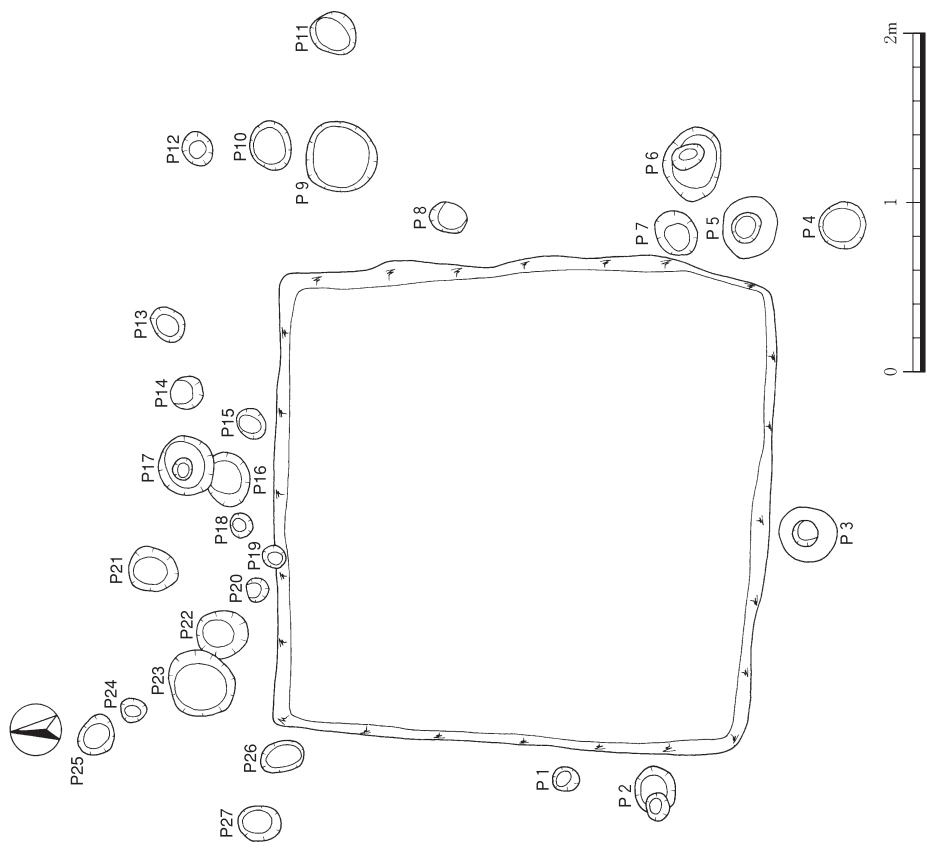
周辺のピットは27個確認された。北側に多く、東側にもある程度みられるが、西及び南は極めて少数である。ピットの並び方は、一般的に住居跡の掘り方に沿ってほぼ直線的に並んでいるように見えることから、方形の竪穴住居に復元できる可能性が考えられる。柱痕跡を持つものが本遺跡のほかの住居跡に比べて多いことから、そのほとんどは柱穴と見て良いと考える。北東部が若干開き気味になっていることから、ここを出入り口と考えることができるかも知れない。

住居跡内からは、土器片多数の他、磨石や礫も出土している。

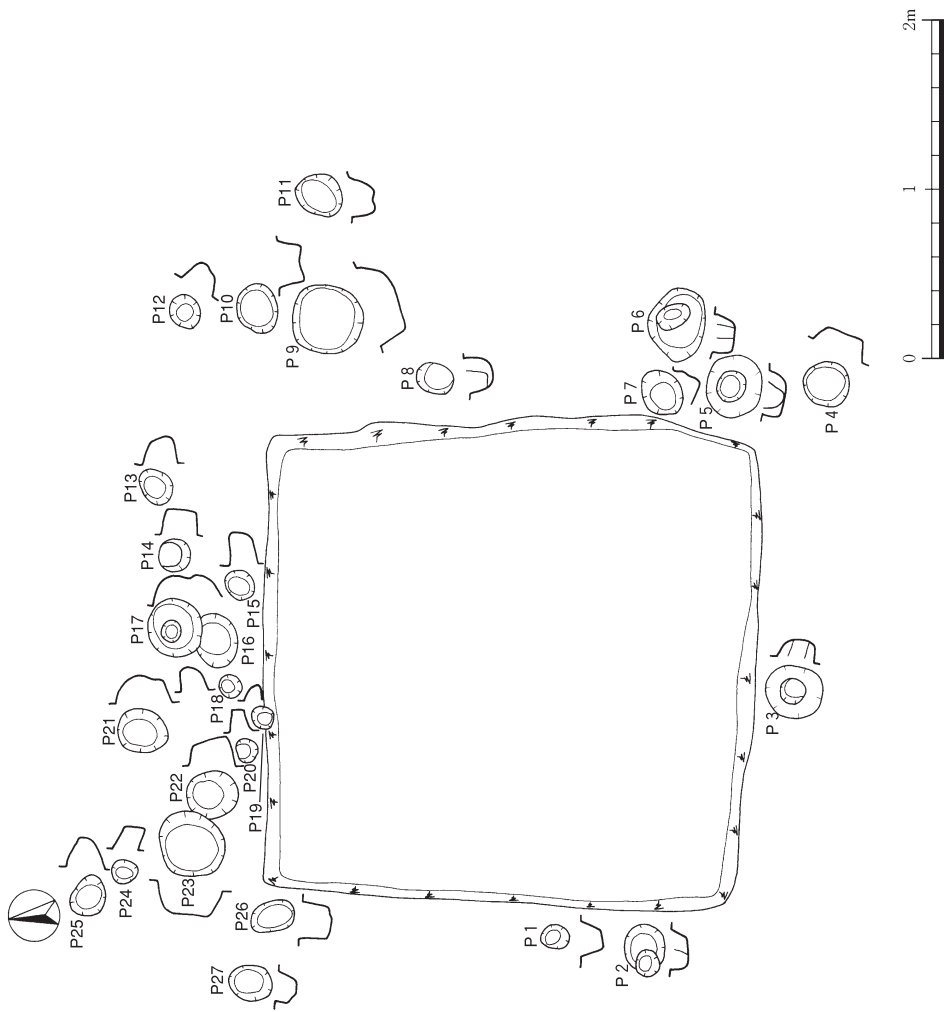
ほかの住居跡との位置関係であるが、最も近い4号住居跡とは1.5m程しか離れていない。屋根の葺き下ろしを考慮した場合、重なりを生じる可能性が極めて大きいことから、同時併存は難しいのではないかと考えられる。ただし、屋根のある程度の重複は起こりうることにすれば、1号・2号住居跡と同様に、同時併存の可能性も否定はできない。



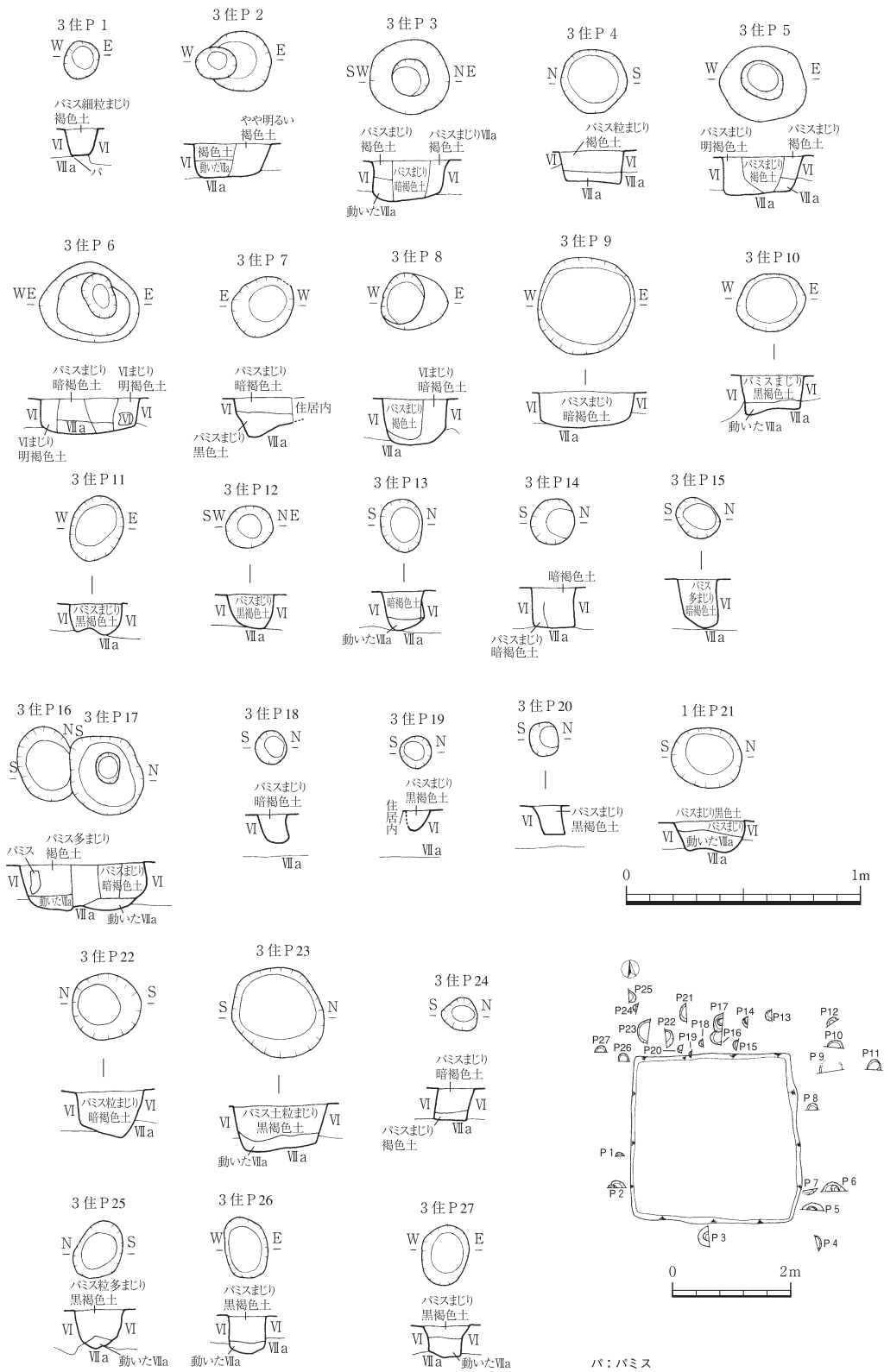
第31图 3号住居跡平・断面図



第32図 3号住居跡周辺ピット図



第33図 3号住居跡周辺ピット断面図



第34図 3号住居跡検出ピット図

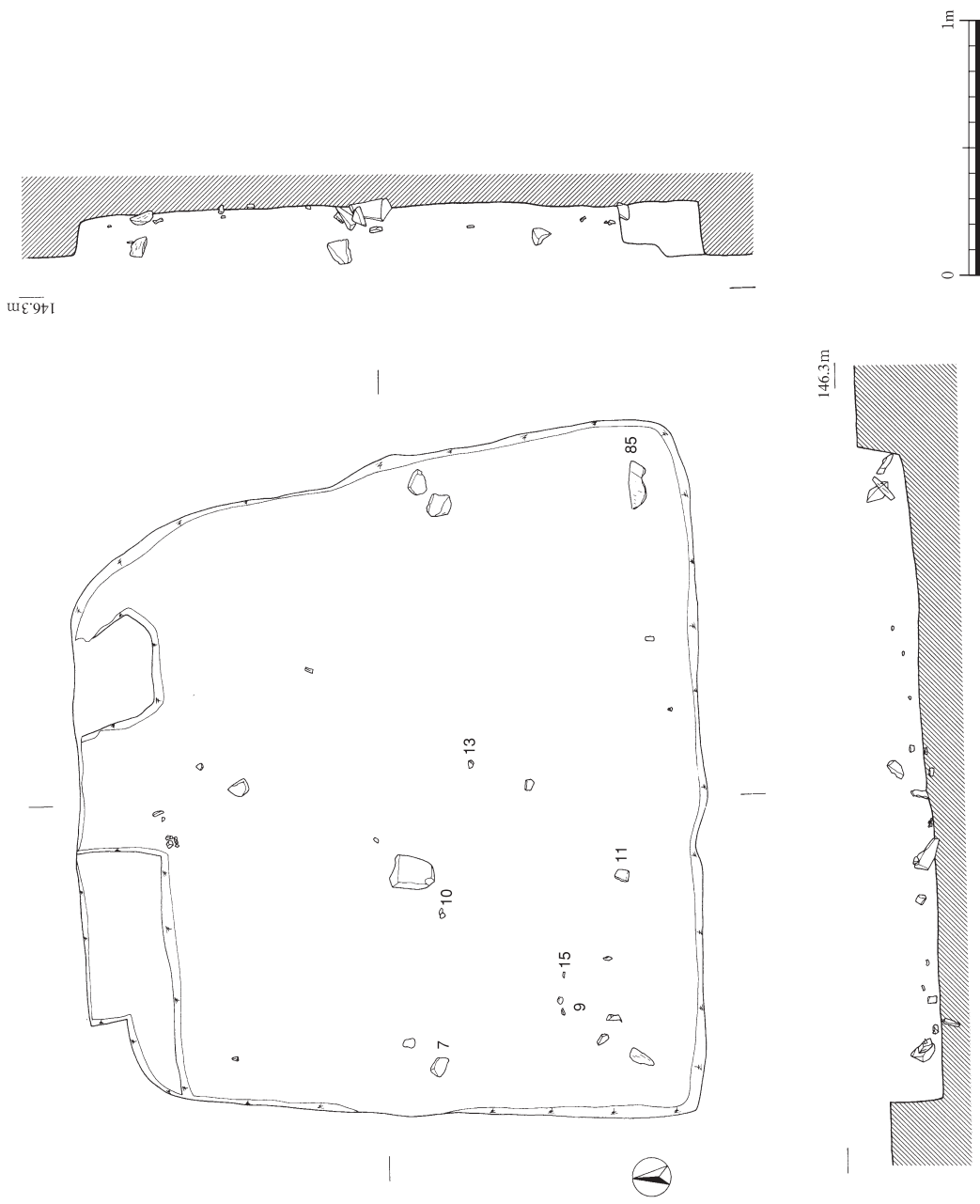
4号住居跡（第35図～第39図・第64図）

4号住居跡は3号住居跡の西側に接するような近隣地に、V-11区で検出された。規模は東西274cm、南北247cmで、3号と同様に北辺が短く、台形状を呈している。また、北側には北辺に接するように土坑が見られるが、本住居跡に伴う遺構と考えることは難しいようである。周辺のピットは38個を確認した。周辺のすべてに多く見られると言えるが、とりわけ北側には異常なほど多いように感じられる。柱痕跡の残るものが住居跡の近辺に割合に多いことから、これらが主柱となる可能性が大きいと言える。北側が張り出し気味となっていることから、出入り口をこの場所に考えることも可能かも知れない。しかし、一方で、南東部にピットがほとんど見られないことから、ここを出入り口と見る考え方もとれるかも知れない。

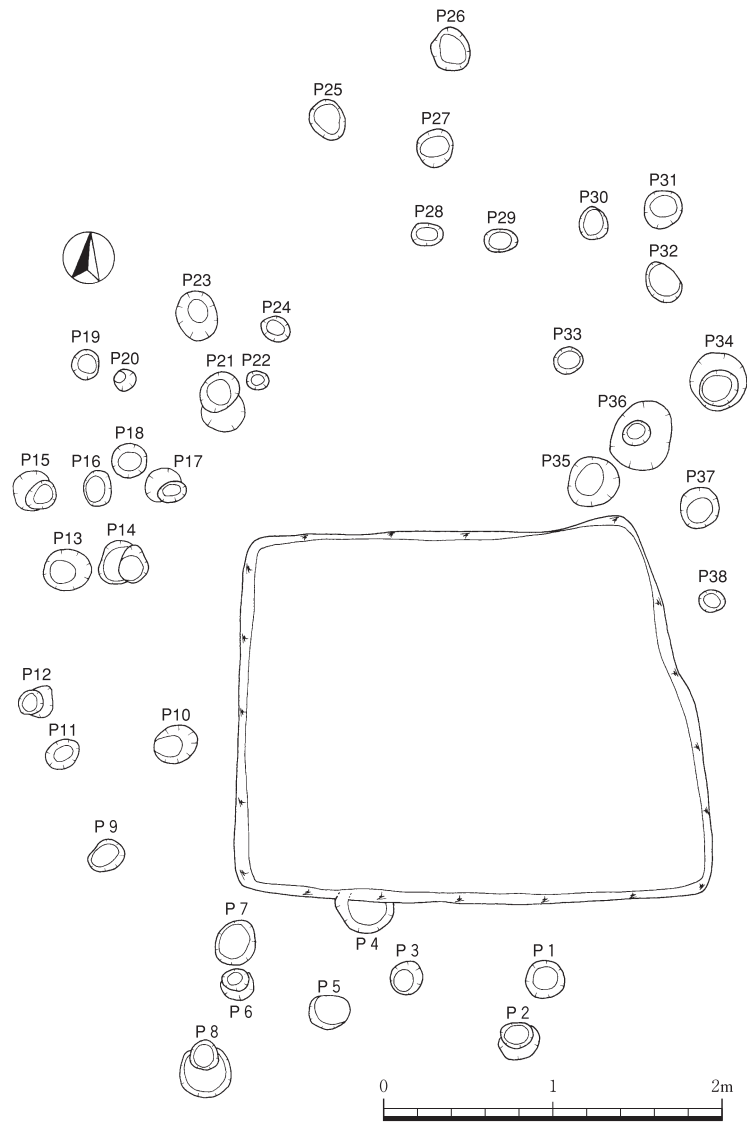
想定できる住居の形態は、掘り方が台形を呈していることと、柱の並びが台形の掘り方を取り囲むように置かれていると考えられることから、円形の住居が考えられるかも知れない。

住居跡内からは、土器片や礫などが多く出土した。特に、1号住居跡からの出土品と同様な軽石製の円盤（85）が出土していることが注目すべき点であると考えられる。本住居跡出土のものは1号住居跡出土のものよりも形が整っており、ほぼ半円形をしている。折損しているようであることから考えると、本来は完全な円形をした同じ厚さの円盤状を呈していたと思われる。これらのことを総合的に考えたとき、土器製作用の台の可能性が最も考えやすいと思われるのである。

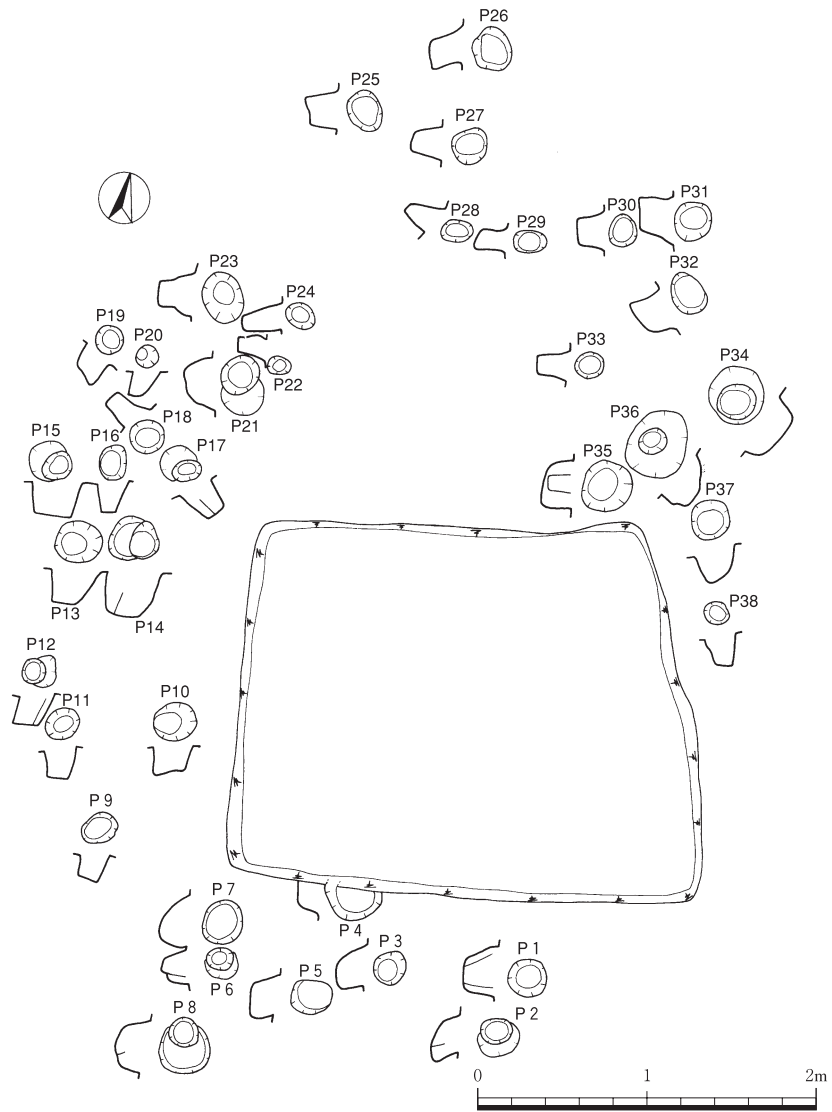
ほかの住居跡との位置関係を見てみると、3号住居跡とは1.5mの間隔しかなく、屋根の葺き下ろしを考えると屋根が重なる可能性が極めて大きい。同時併存という点で考慮すべきことであると考えられる。その次に近い7号住居跡とは約13m離れている。



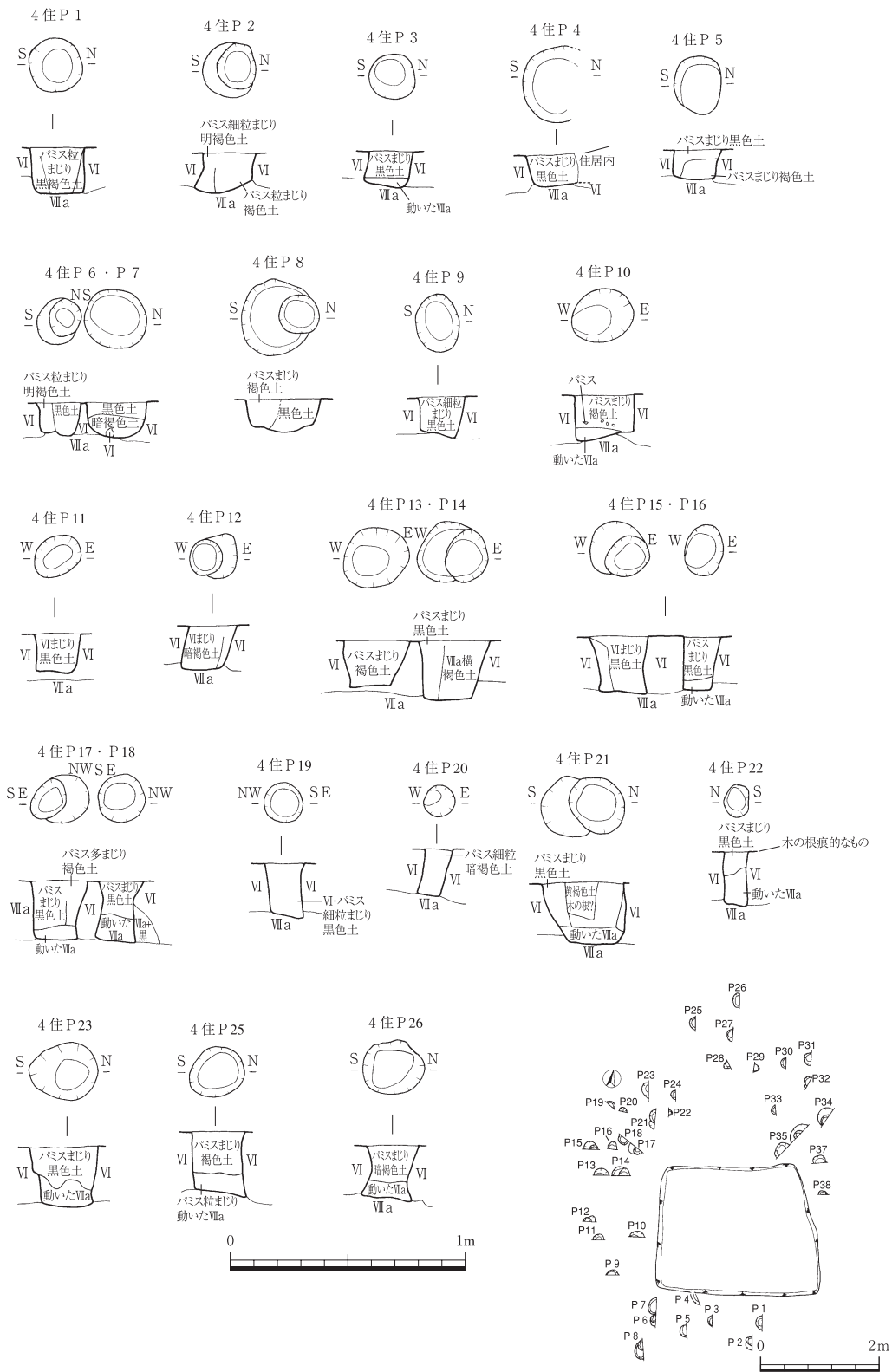
第35图 4号住居跡平・断面図



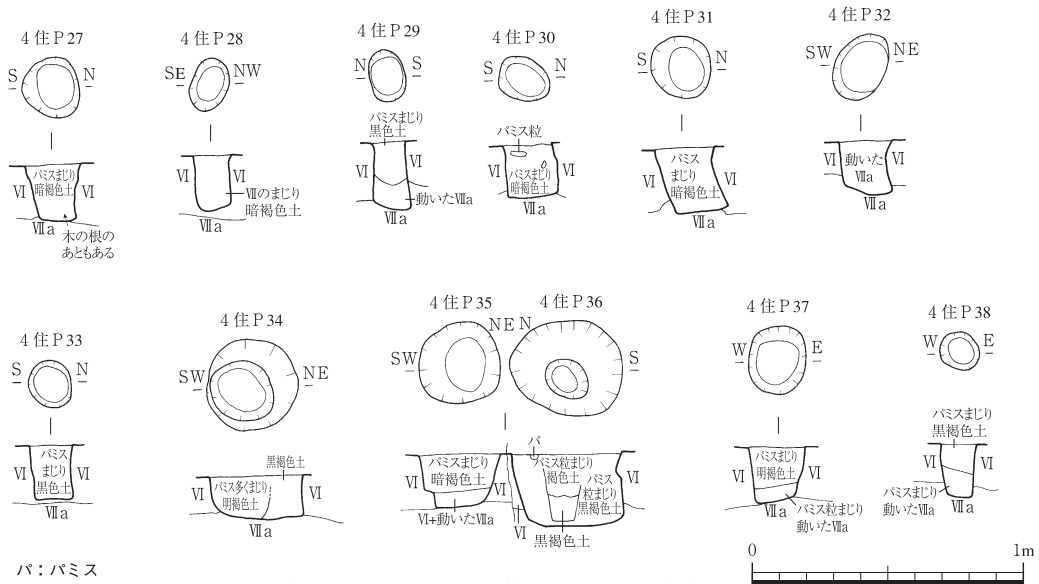
第36図 4号住居跡周辺ピット



第37図 4号住居跡周辺ピット断面図



第38図 4号住居跡検出ピット図(1)



第39図 4号住居跡検出ピット図(2)

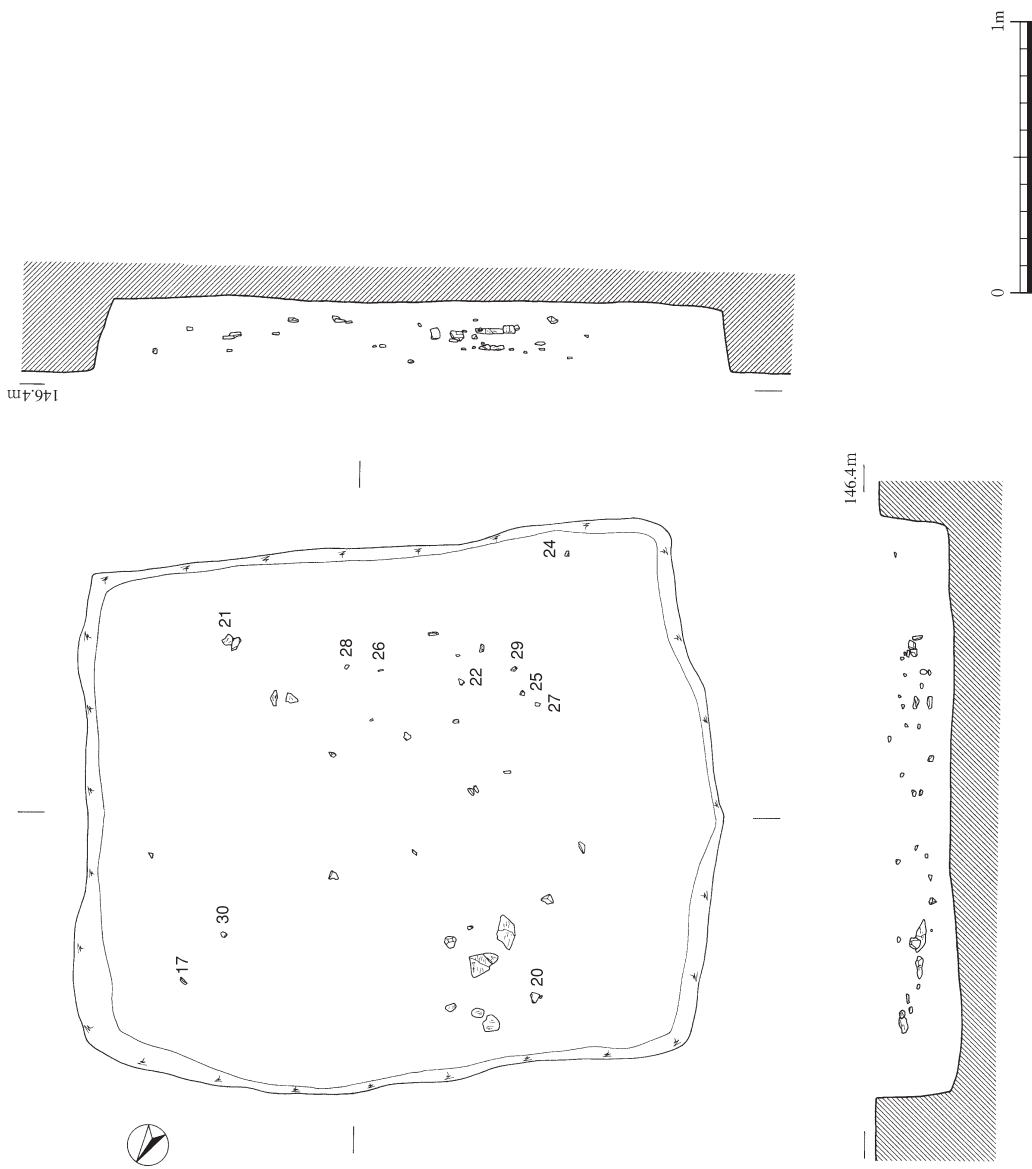
5号住居跡(第40図～第44図)

5号住居跡はT・U-9区で検出された。規模は東西213cm, 南北240cmであり, 本遺跡で検出された住居跡の中で2番目に小さい。方位的には西に振れた南北方向を軸としており, 深さは25～32cmである。

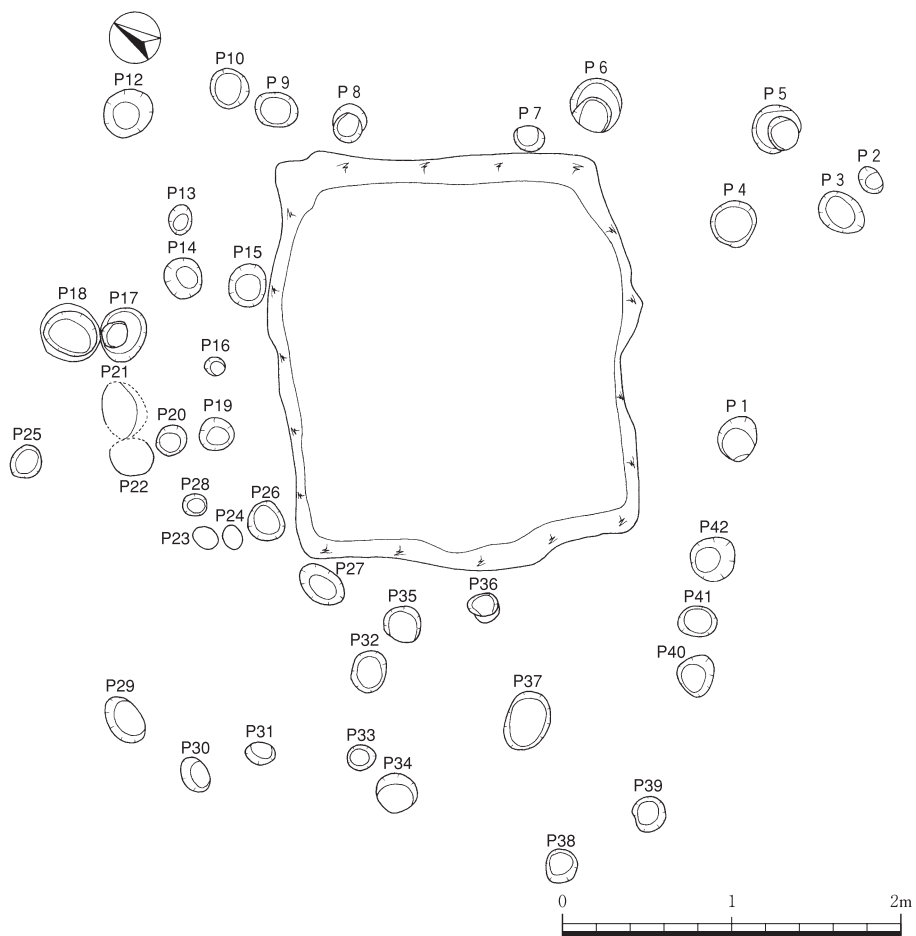
周辺のピットは42個を確認しており, 住居跡の北側及び西側に極めて多く, 東及び南には少ないと言える。ピットは掘り方の周囲にある程度接するように入り巻いている状況が見られることから, 上野原遺跡の復元住居と同様な円形の小規模のものに復元可能かと考えられる。住居跡の掘り方近辺を中心に柱痕跡が残るものが見られる。

住居跡内の出土遺物が本遺跡の中で最も多く, 土器片の他, 軽石製の円盤と考えられる破片が大量に出土しており, 注目される。しかし, いずれも水分を多く含んでおり, 乾燥すると繊維状に小さく分離したため, 元の形状に復することはできなかった。ただ, 1号・4号住居跡出土のものと同様な軽石製の円盤が何個体分にはなると考えられ, 最終的に本遺跡出土の軽石製円盤の出土点数の最も多い住居跡ということが言えそうである。

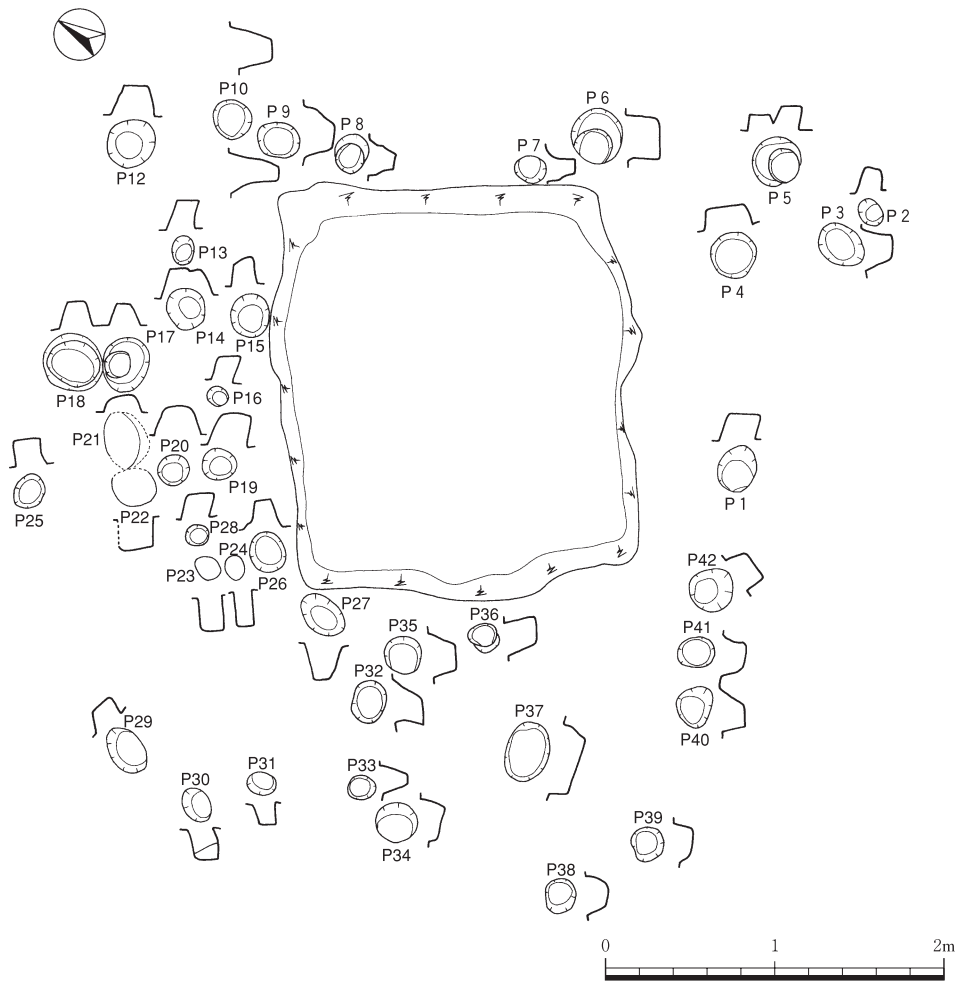
ほかの住居跡との位置関係を見てみると, 最も近い6号住居跡との間隔は約3.5mである。規模の大小はあるものの, 同時併存であってもおかしくはないほどの間隔と言って良いのではなかろうか。



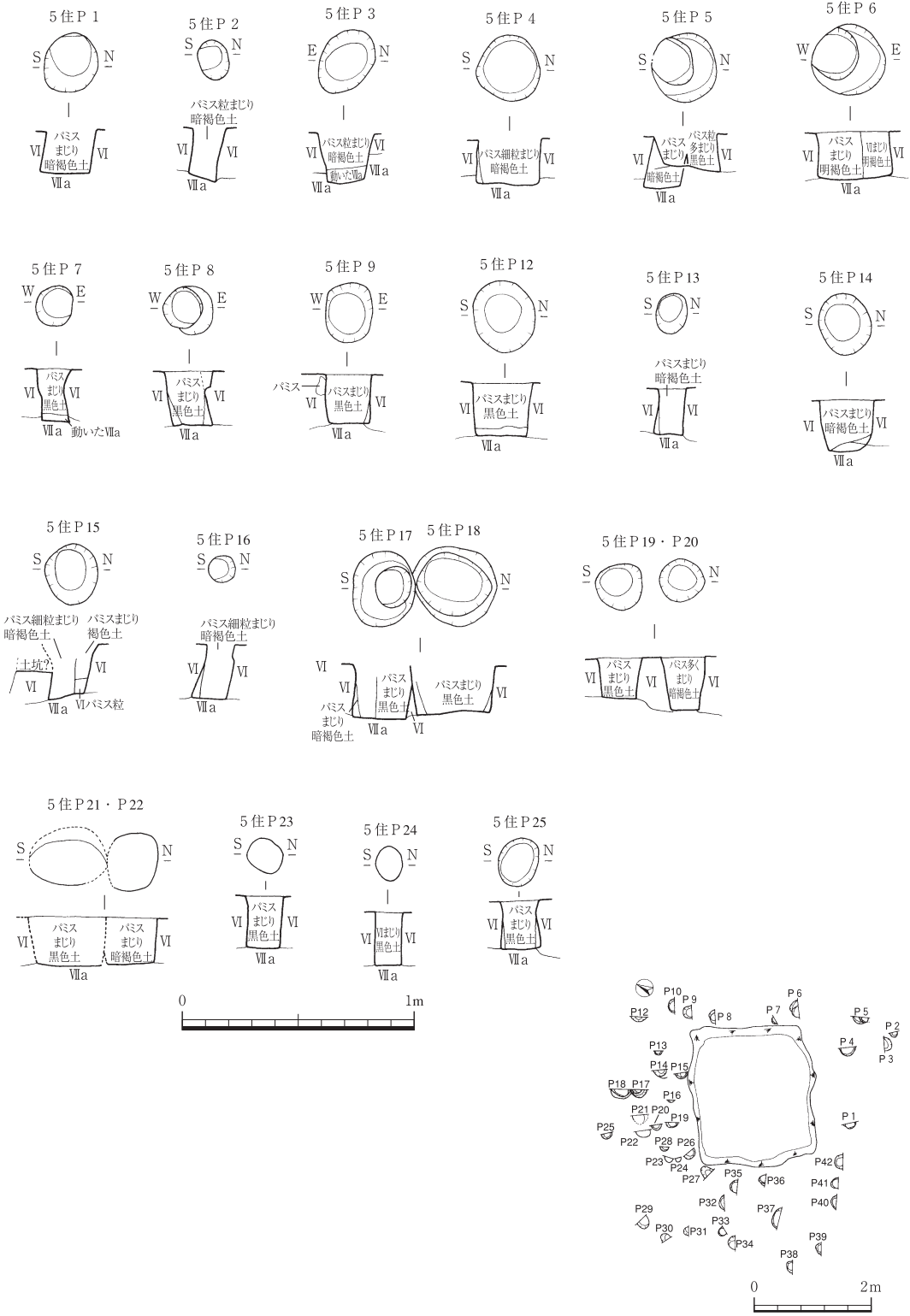
第40图 5号住居跡平・断面図



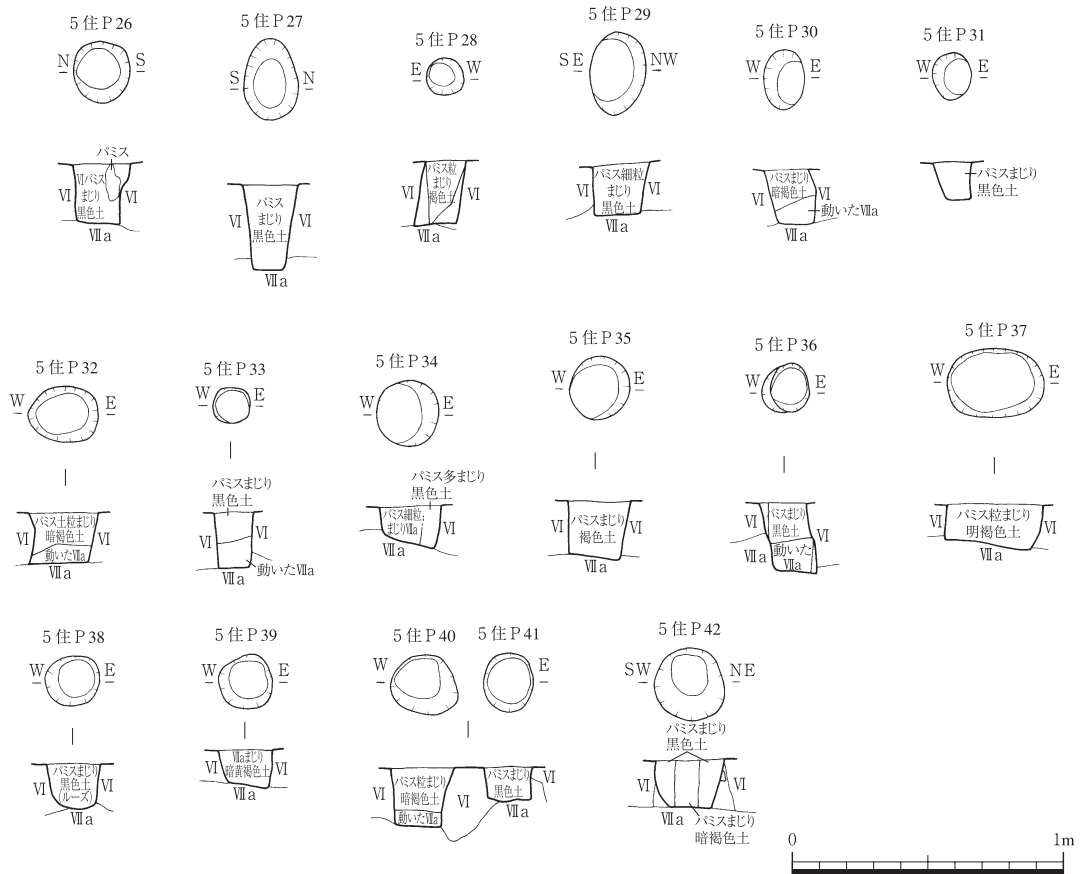
第41図 5号住居跡周辺ピット図



第42図 5号住居跡周辺ピット断面図



第43図 5号住居跡検出ピット図(1)



第44図 5号住居跡検出ピット図(2)

6号住居跡(第45図～第49図)

6号住居跡はS-9・10区で検出された。規模は東西345cm、南北323cmで、本遺跡中最大の規模である。東に大きく振れた南北方向を軸としている。深さは20～24cmである。掘り方の形状は若干ひずんだ四角形をしており、北東側の辺のほぼ中央部は幾分外側に楕円形気味に張り出しているが、その部分が内部と比較して、深いか浅いなど特徴的な形態をしているわけではない。

周辺のピットは43個を確認した。北東及び南東側に多く、それ以外には少ないといえる。柱痕跡は規模の割に少ないものの、住居跡の近辺に集中する傾向が見られる。また、南東部の端に、L字状の遺構が見られ、1号住居跡のものとも類似していることから、出入口の可能性が大きいと考えられる。冬季の風除けとは考えられないことは、南東部に位置することによる。

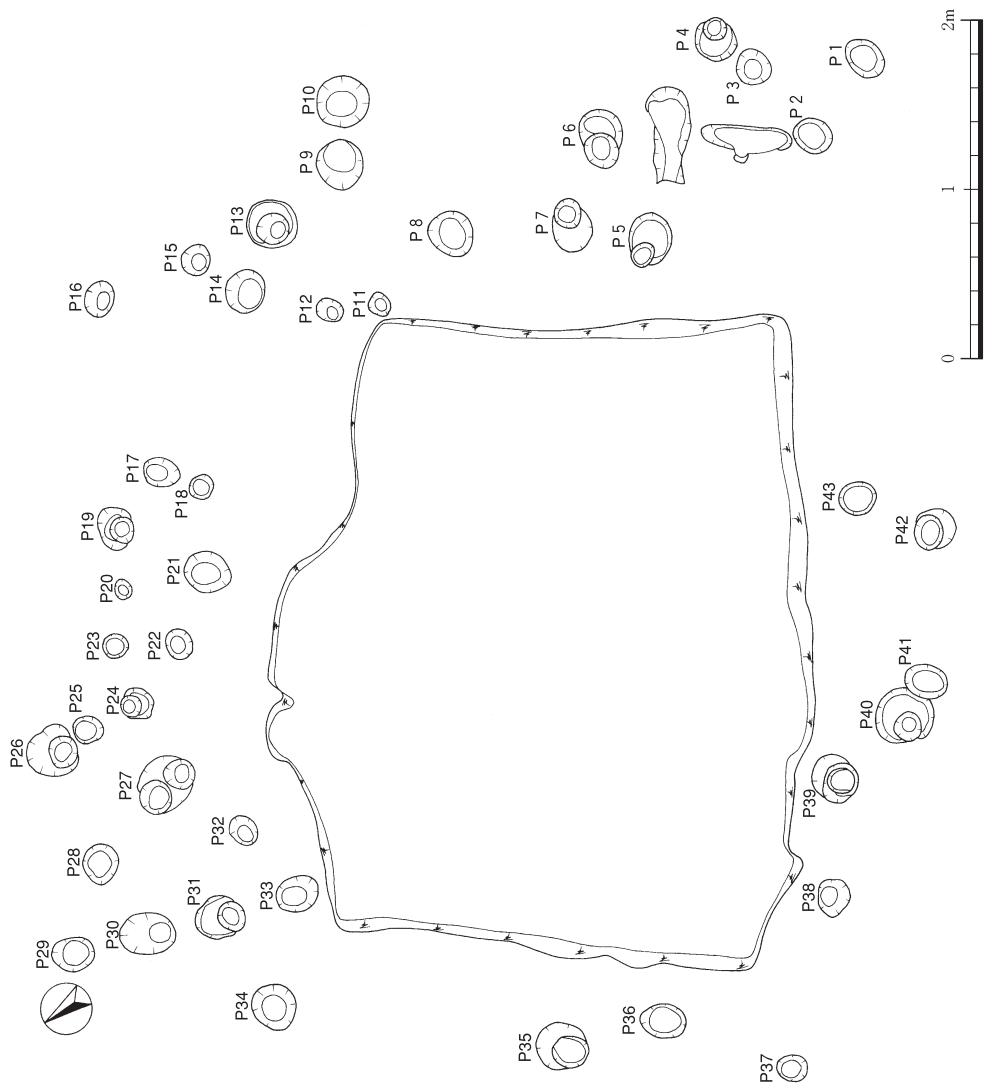
掘り方が基本的に四角形で、各辺に沿って柱が立てられているように考えられることと南東部に出入口が想定されることから、方形の竪穴住居跡として復元できるのではないかと考えられる。

住居跡内の遺物の出土も5号住居跡と同様に多い。

ほかの住居跡との位置関係を見てみると、最も近い5号住居跡との距離が約3.5m、それに次ぐ9号住居跡との距離は約6m程度である。7号住居跡とは約11mの距離である。



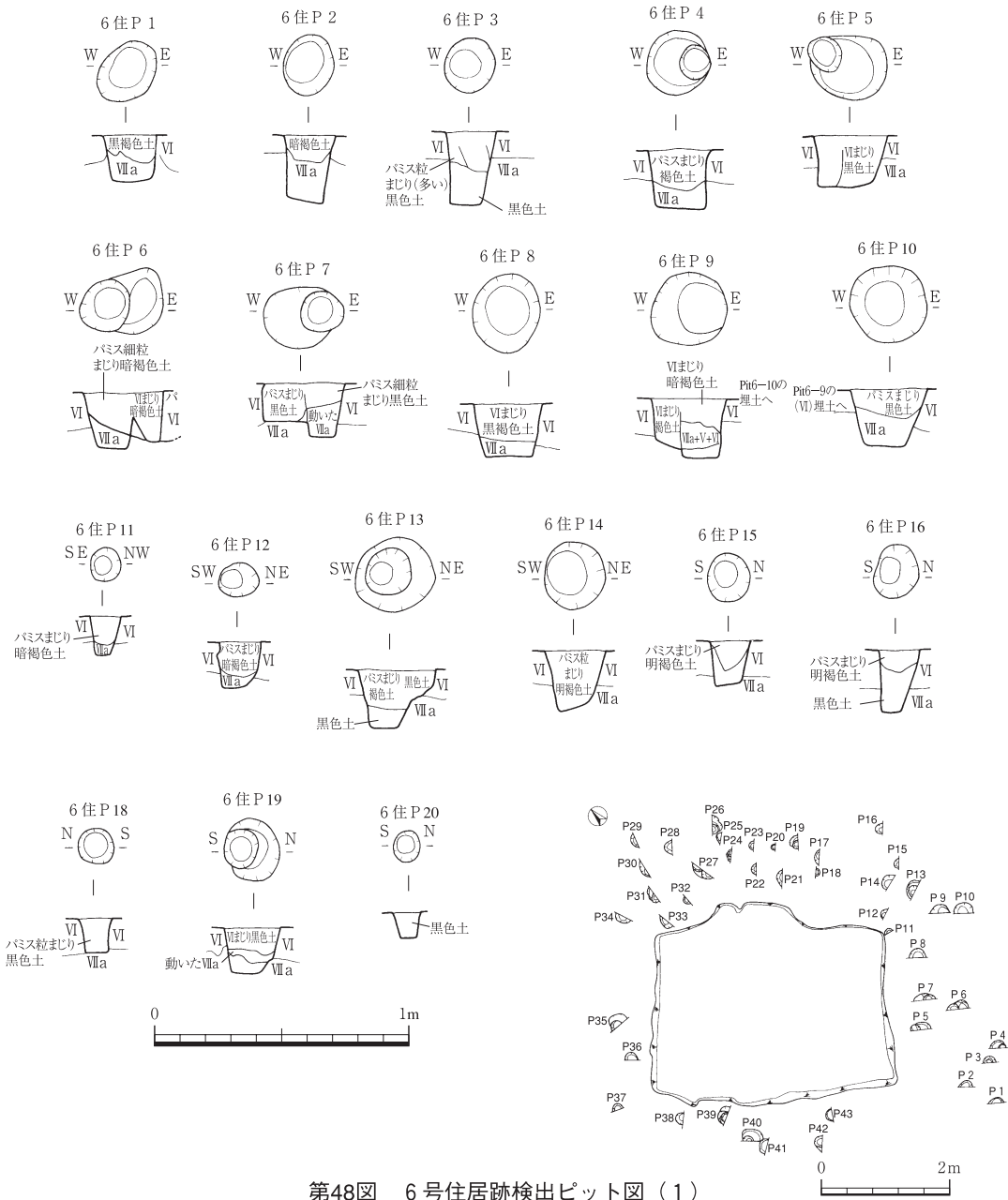
第45图 6号住居跡平・断面图



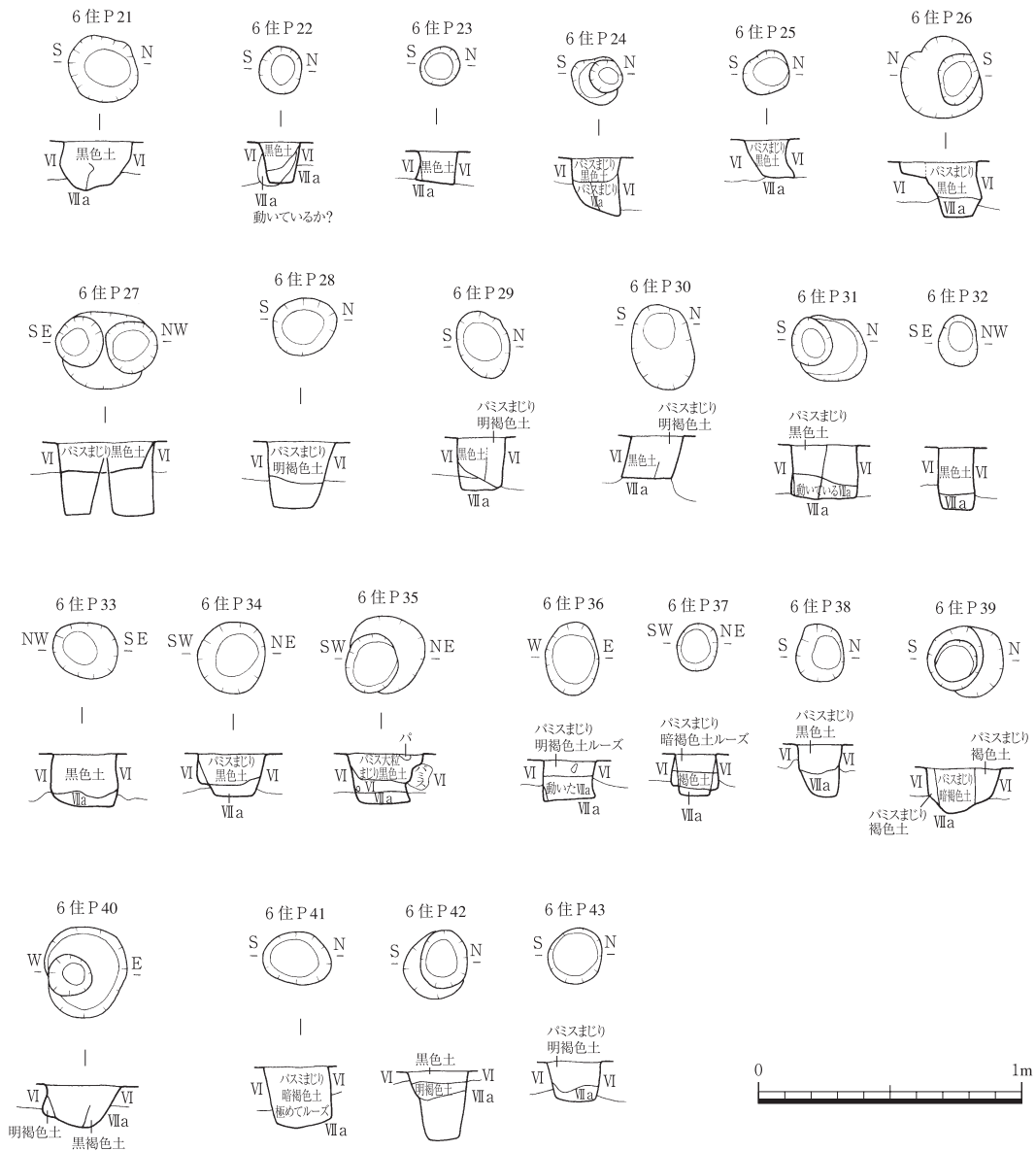
第46図 6号住居跡周辺ピット図



第47図 6号住居跡周辺ピット断面図



第48図 6号住居跡検出ピット図(1)



第49図 6号住居跡検出ピット図(2)

7号住居跡（第50図～第54図）

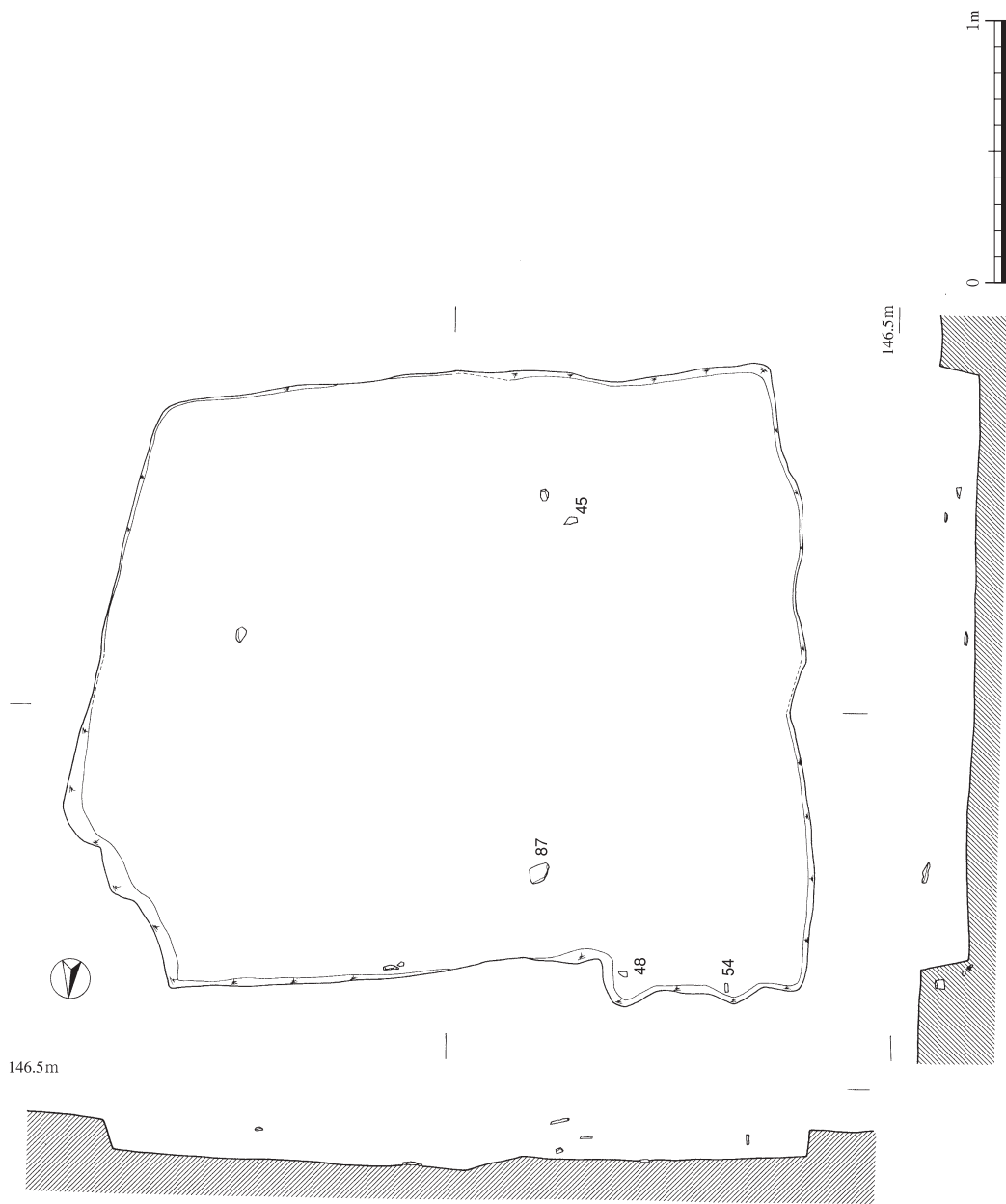
7号住居跡はS-11区で検出された。規模は東西289cm、南北245cmであり、深さは11～21cmと浅い。若干西に振れた南北方向を軸とする。掘り方の形状は基本的には四角形と言えるが、東側のほぼ中央部に若干弧状の、また、北側には西端に小さな方形の、それぞれ張り出しを持っている。しかし、双方とも床面の高さに違いはない。

ピットは総計で32個検出した。全体的にほぼ均等に分布しているが、とりわけ北西及び南東に多く集まる傾向があると言えそうである。柱痕跡のあるピットは住居跡近辺に多いと言える。

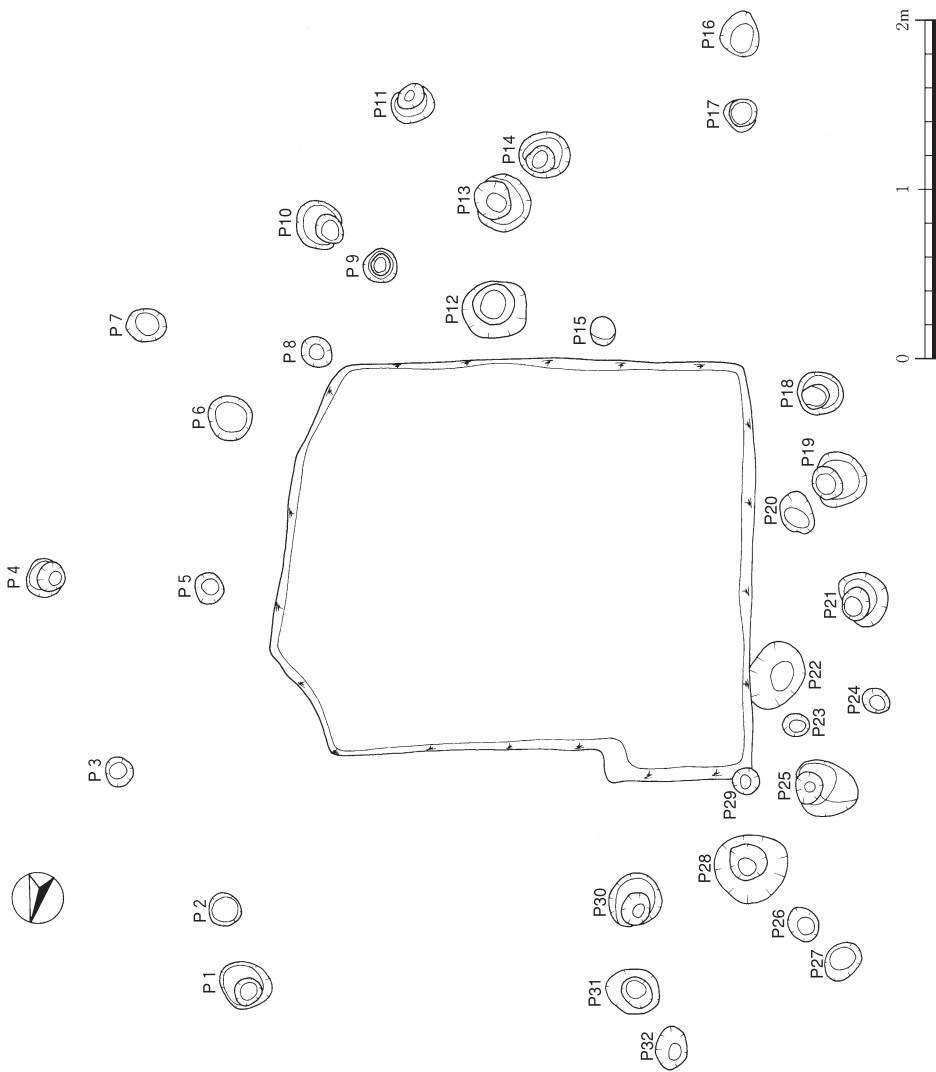
掘り方が四角形を基本形とすると考えられるのに対して、ピットは住居の掘り方からはある程度離れた位置に住居を取り囲むように見られることから、円形の住居として復元できる可能性がある。その場合、出入り口はピットの間隔が空くことから、北側に推定できるのではないかと考えられる。

住居跡内の出土遺物は土器片が数点と少ない。

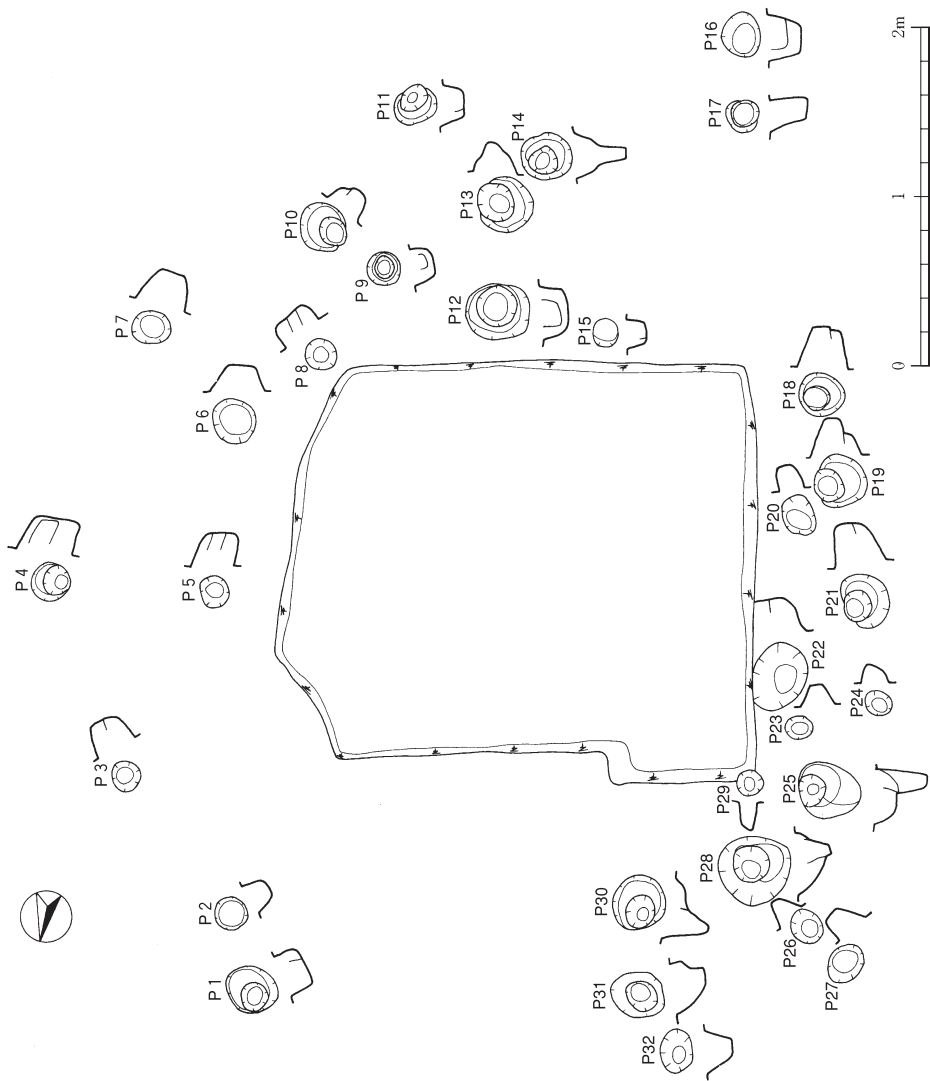
ほかの住居跡との位置関係を調べてみると、最も近い6号住居跡が約11m、その次が4号住居跡の約13m、次いで9号住居跡の約16m、8号住居跡の約17mなどとなり、程良い間隔をもって位置していると言えよう。さらに、これら4基の住居で囲まれるように、集石が集中している一画が存在し、また、1号連穴土坑とは約7m程度しか離れていないことから、調理を中心に考えると最も良い場所に位置していると言えなくもない。



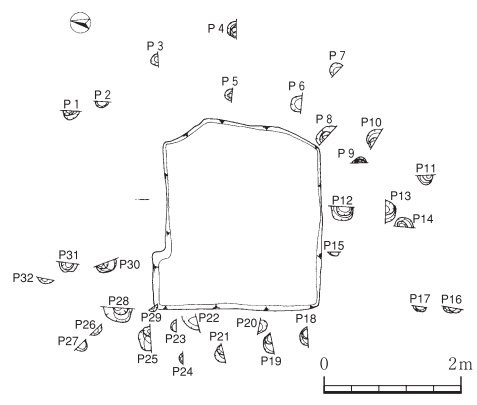
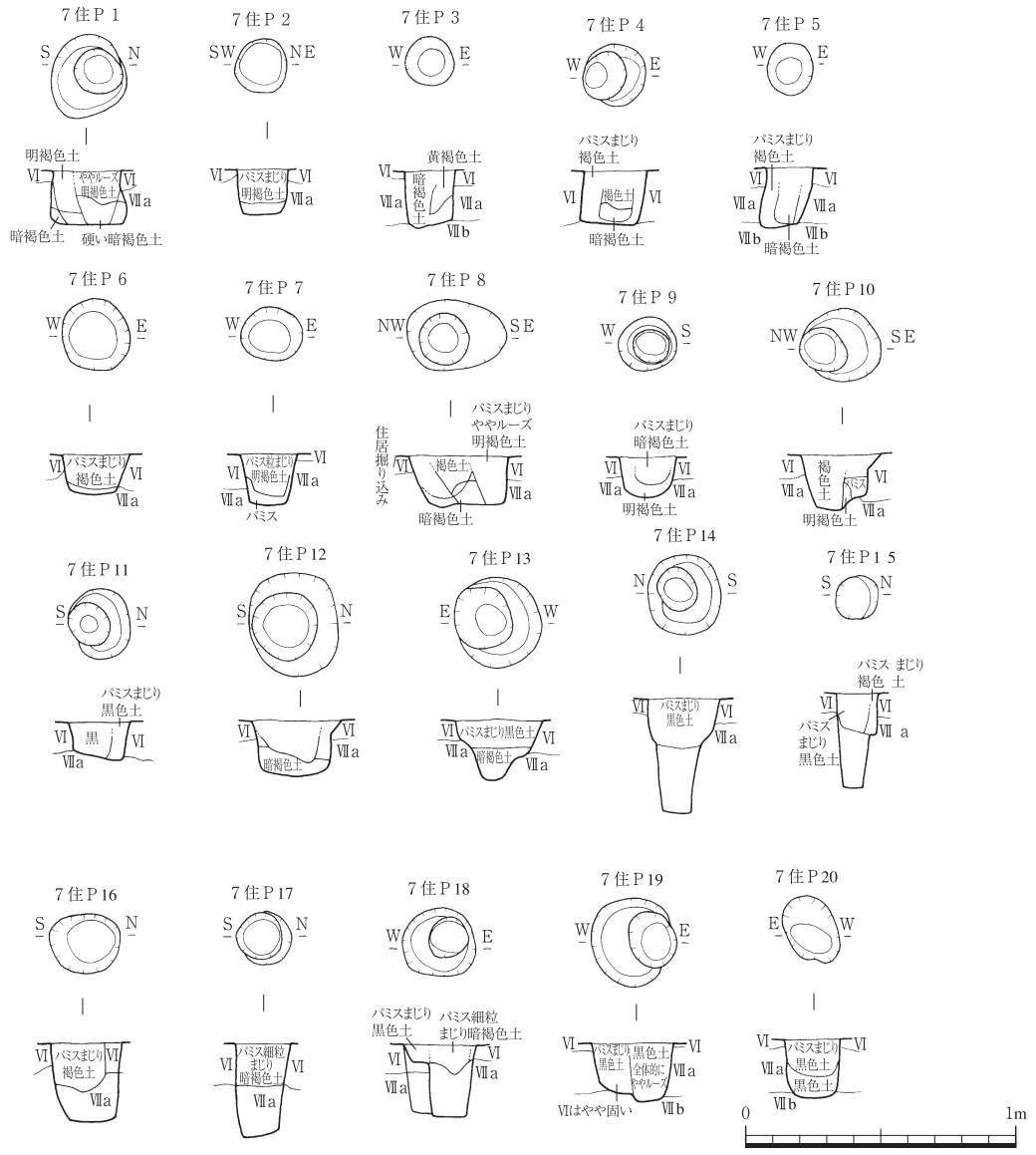
第50图 7号住居跡平・断面図



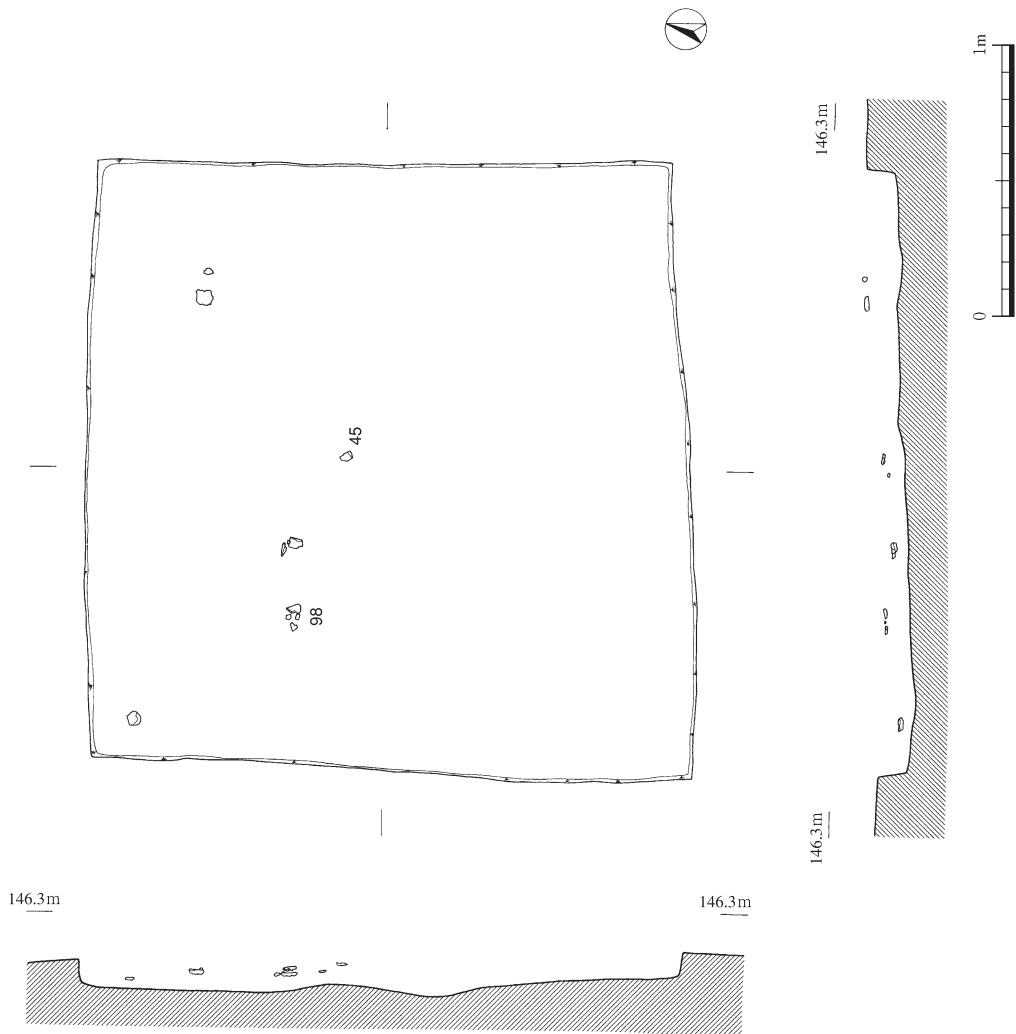
第51図 7号住居跡周辺ピット図



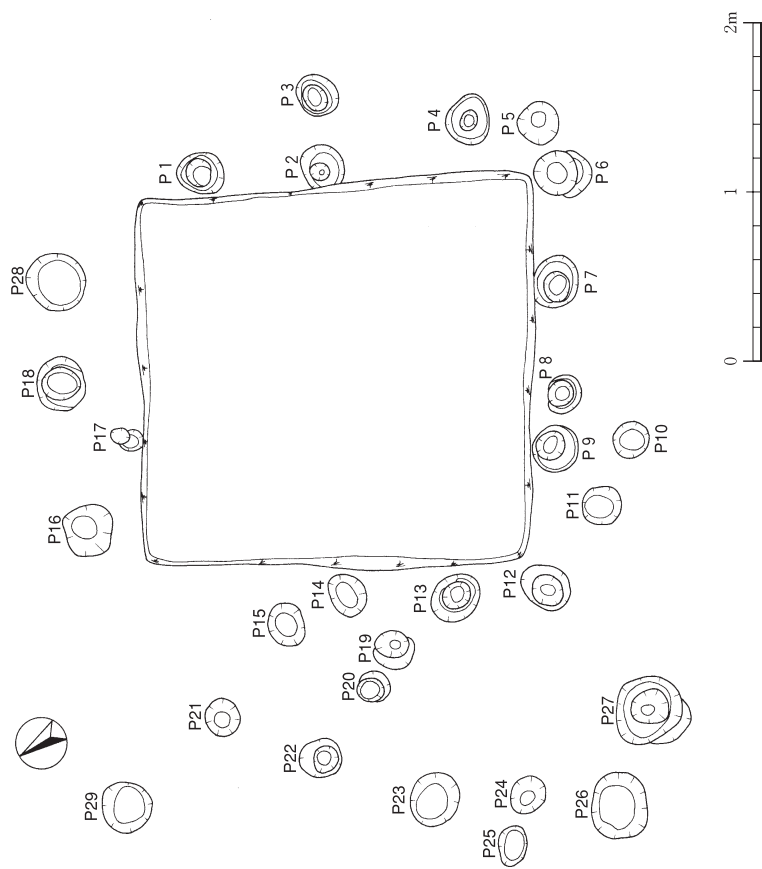
第52図 7号住居跡周辺ピット断面図



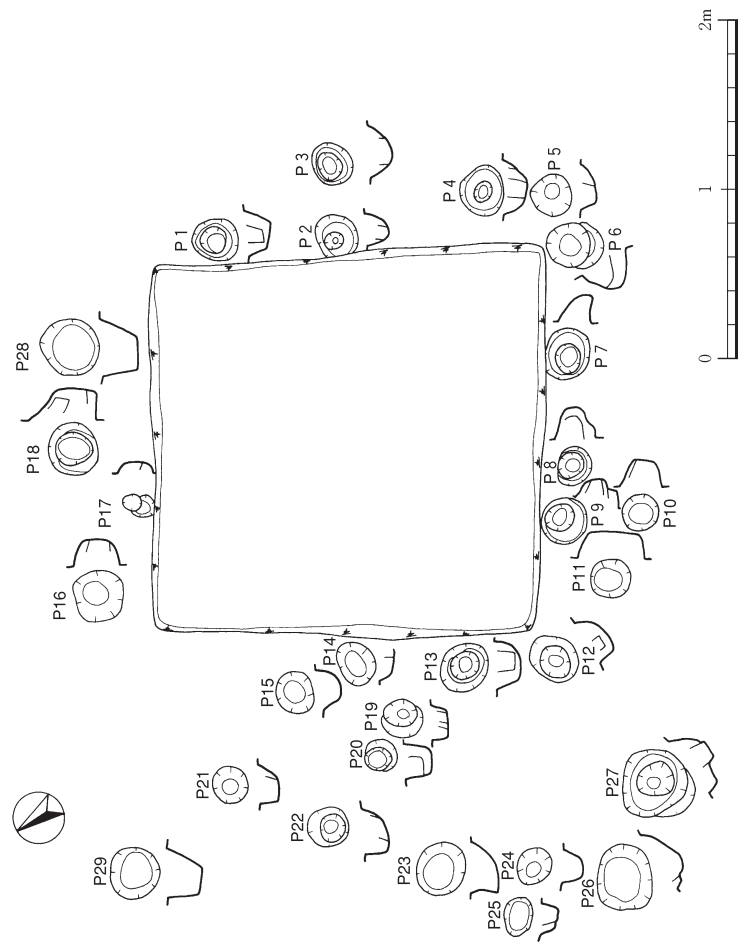
第53図 7号住居跡検出ピット図(1)



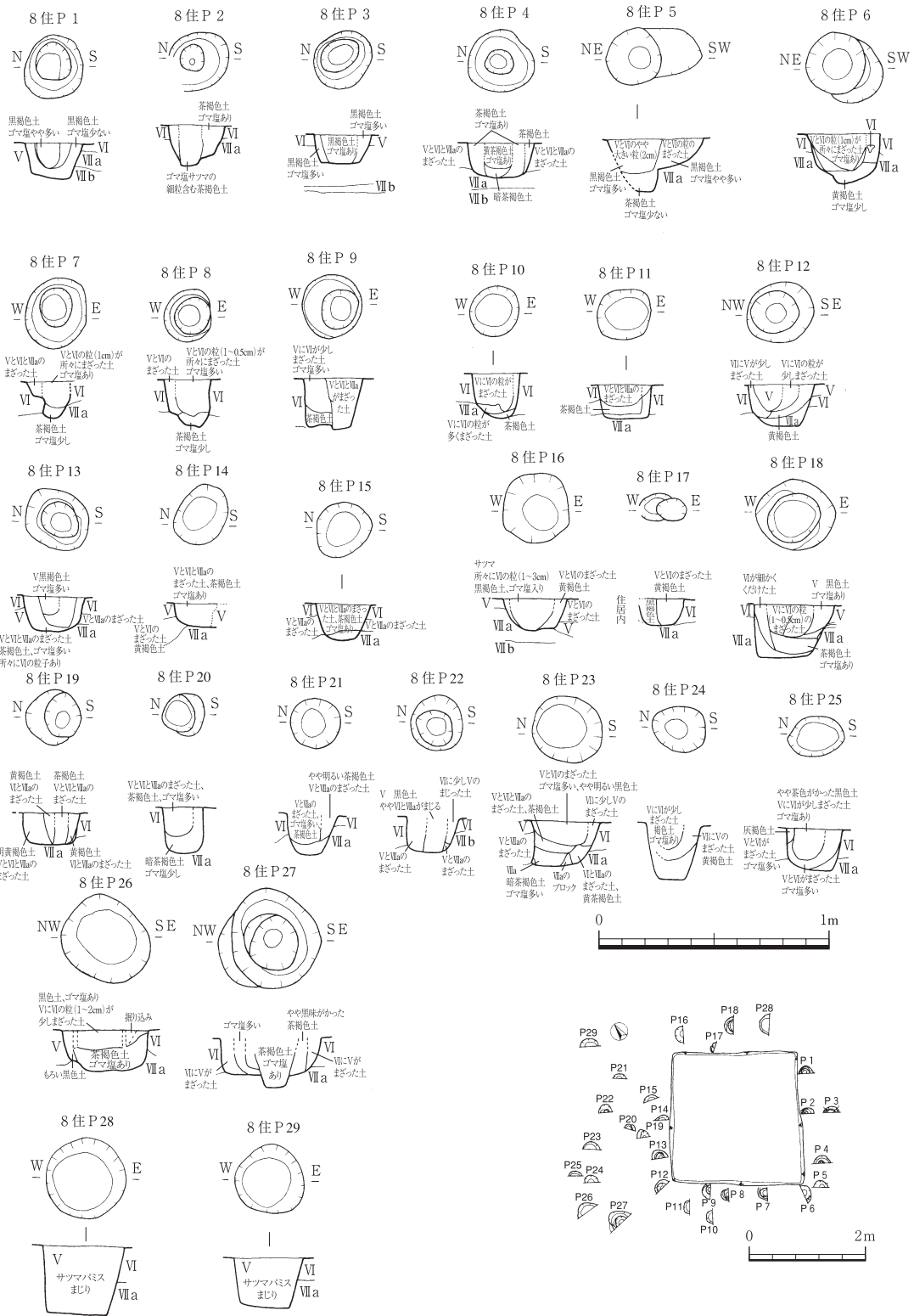
第55图 8号住居跡平・断面図



第56図 8号住居跡周辺ピット図



第57図 8号住居跡周辺ピット断面図



第58図 8号住居跡検出ピット図(1)

9号住居跡（第59図～第61図）

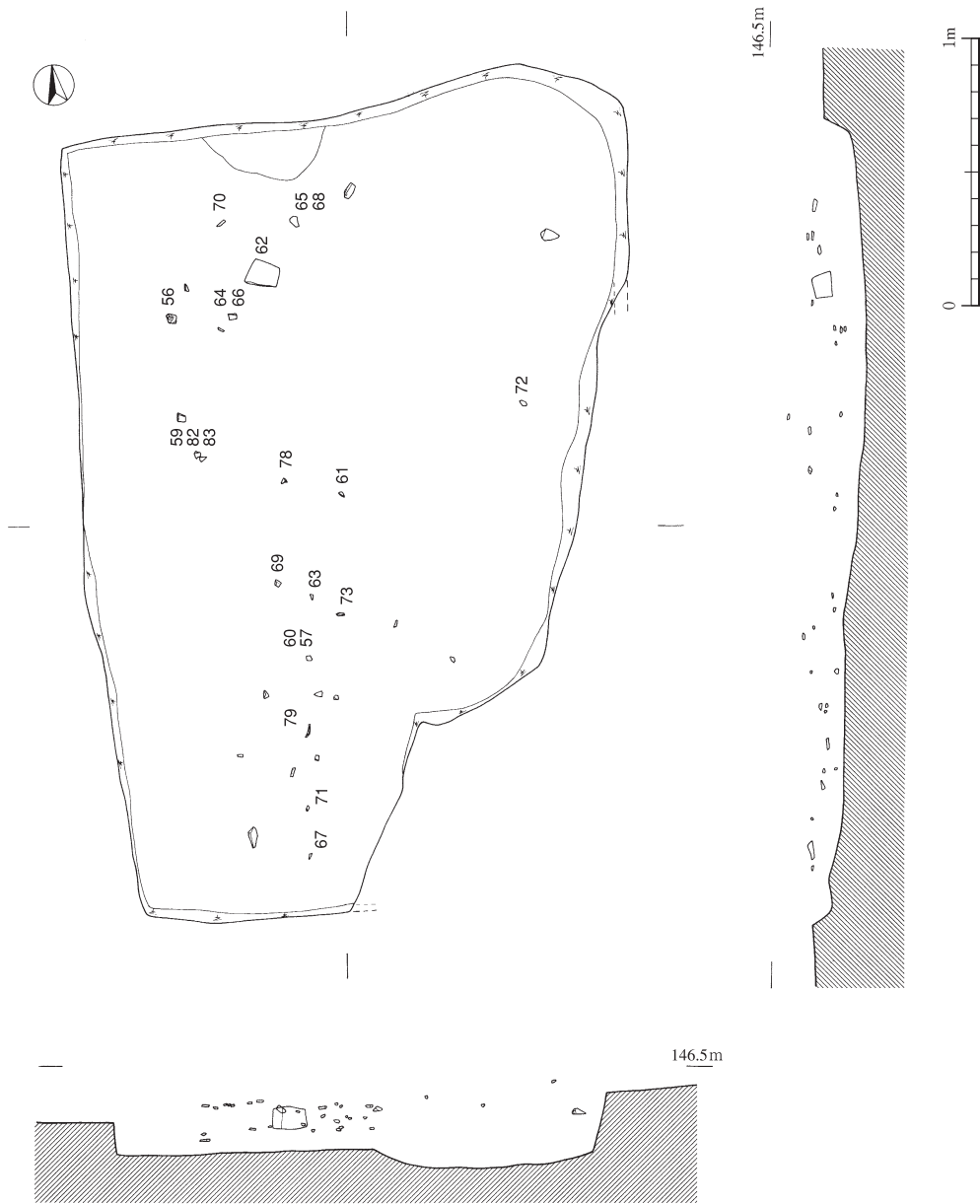
9号住居跡はR-9区で検出された。規模は東西213cm、南北321cmである。地層の横転によって東南の隅は攪乱を受けているため、全体の形状は不明とせざるをえないものの、本遺跡でのほかの住居跡が正方形あるいは長方形を中心とする四角形の掘り方を持つものであり、1基として例外がないことから、この住居跡も長方形の掘り方を持つものと考えて大過ないものと考えられる。そのように考えたとき、主軸の方向はほぼ南北方向に取っていると考えると考えられる。深さは7～21cmであるが、地層の横転によって攪乱されている南東部については、最終的には不明とせざるをえない。

周辺のピットは18個見られ、ほかの住居跡と比べても少ない数である。これは、地層の横転の影響をもろに受けた東南部で1基も確認できなかったことによるところが大きい。横転は住居の廃棄後に起こっており、そのために南東部のすべての場所でピットが完全に移動・破壊されたと考えられるのである。残存しているピットからすると、相当数のピットが本来はあったと推定される。

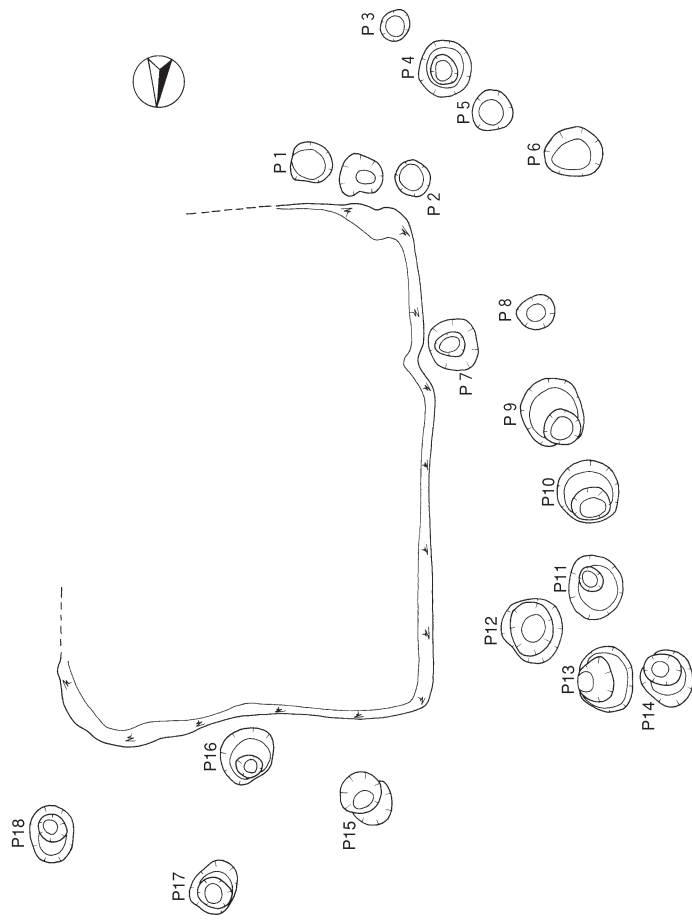
柱痕跡も住居跡から離れたところまで見られ、ほぼ掘り方のラインに沿っているように見られることから、方形に復元される住居かと考えられる。ただし、柱痕跡の残るピットが掘り方の周囲をある幅をもって巡っていると考えるならば、円形に復元される可能性もないではない。ただ、その際は、掘り方が明らかに長軸と短軸に差のある長方形であることが最大の欠点と言えるかも知れない。

住居跡の中からは、土器片や礫のほか、大きな石も見つかっており、台石かとも考えられる。

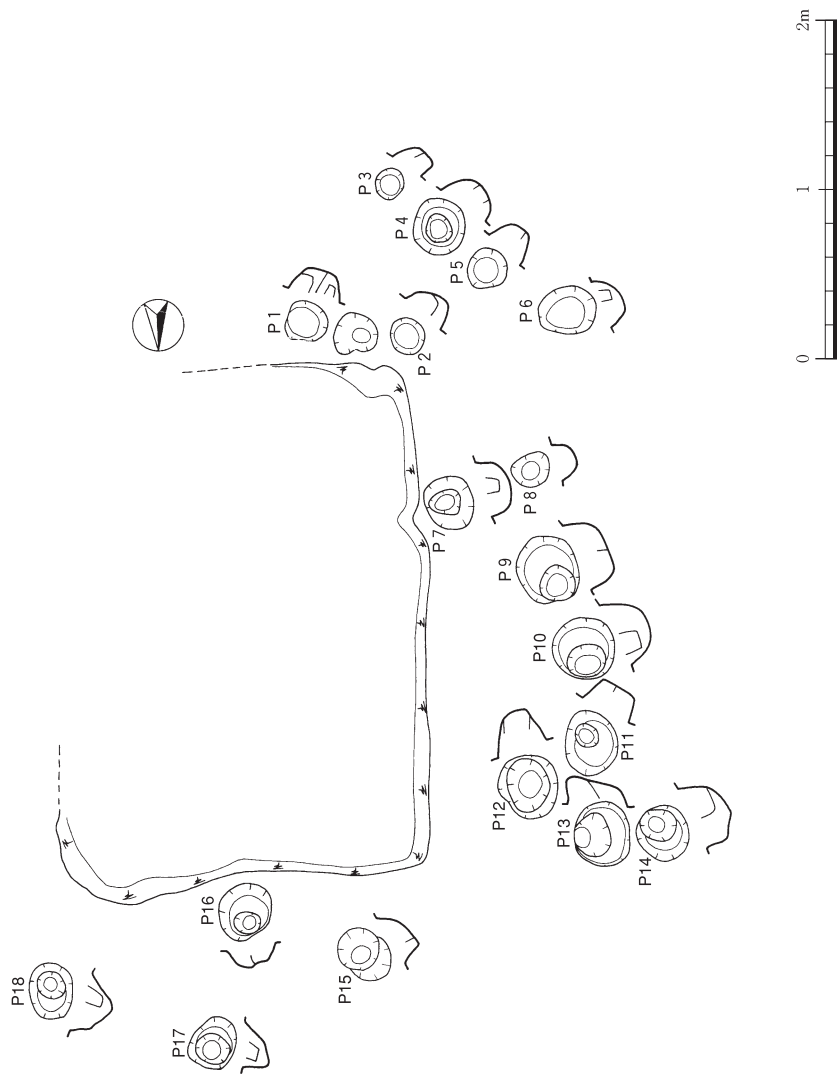
ほかの住居跡との位置関係では、6号住居跡との間が最も近く、約6mである。次いで、5号住居跡と8号住居跡とが共に約11mである。



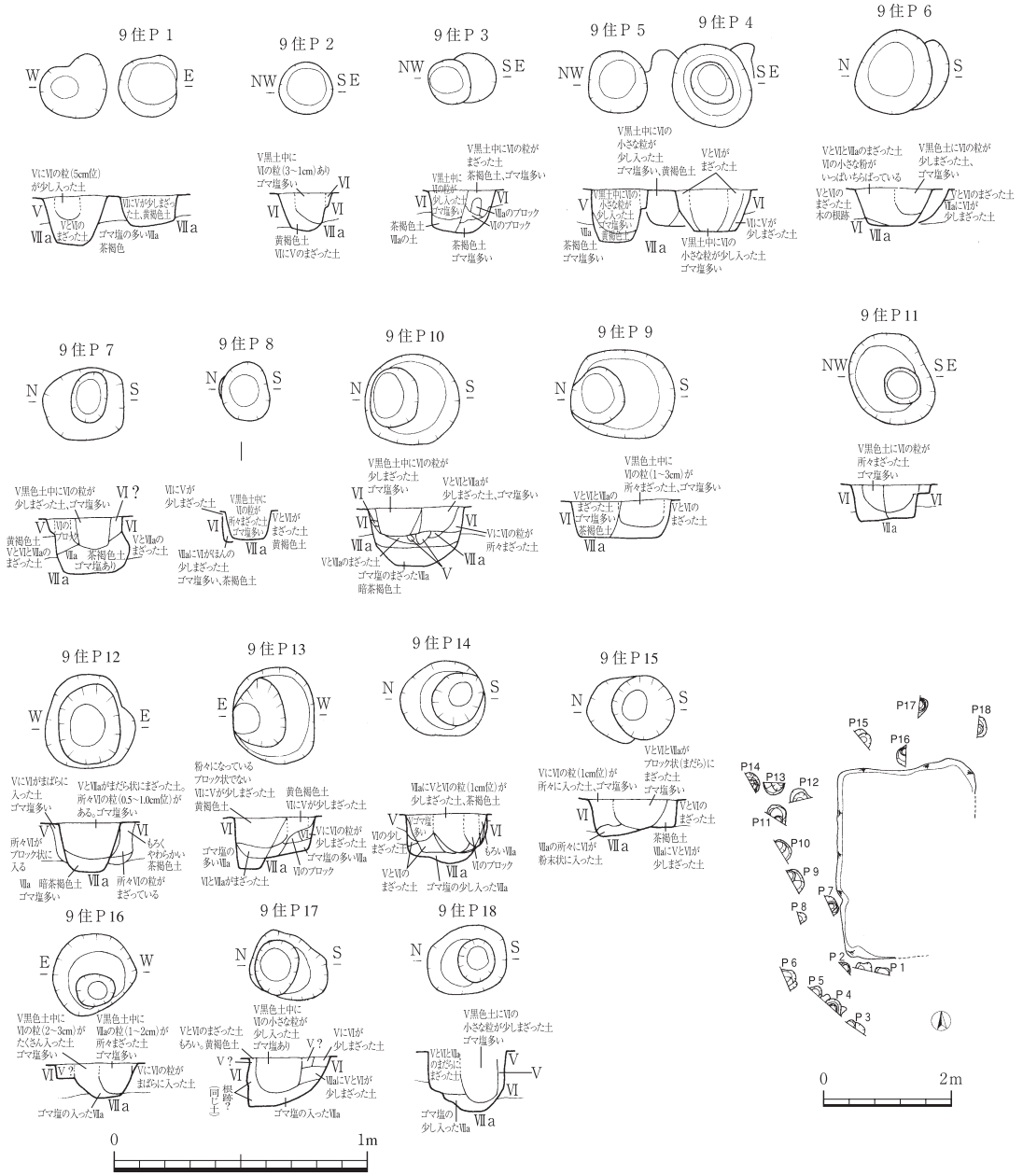
第59图 9号住居跡平・断面図



第60図 9号住居跡周辺ピット図



第61図 9号住居跡周辺ピット断面図



第62図 9号住居跡検出ピット図

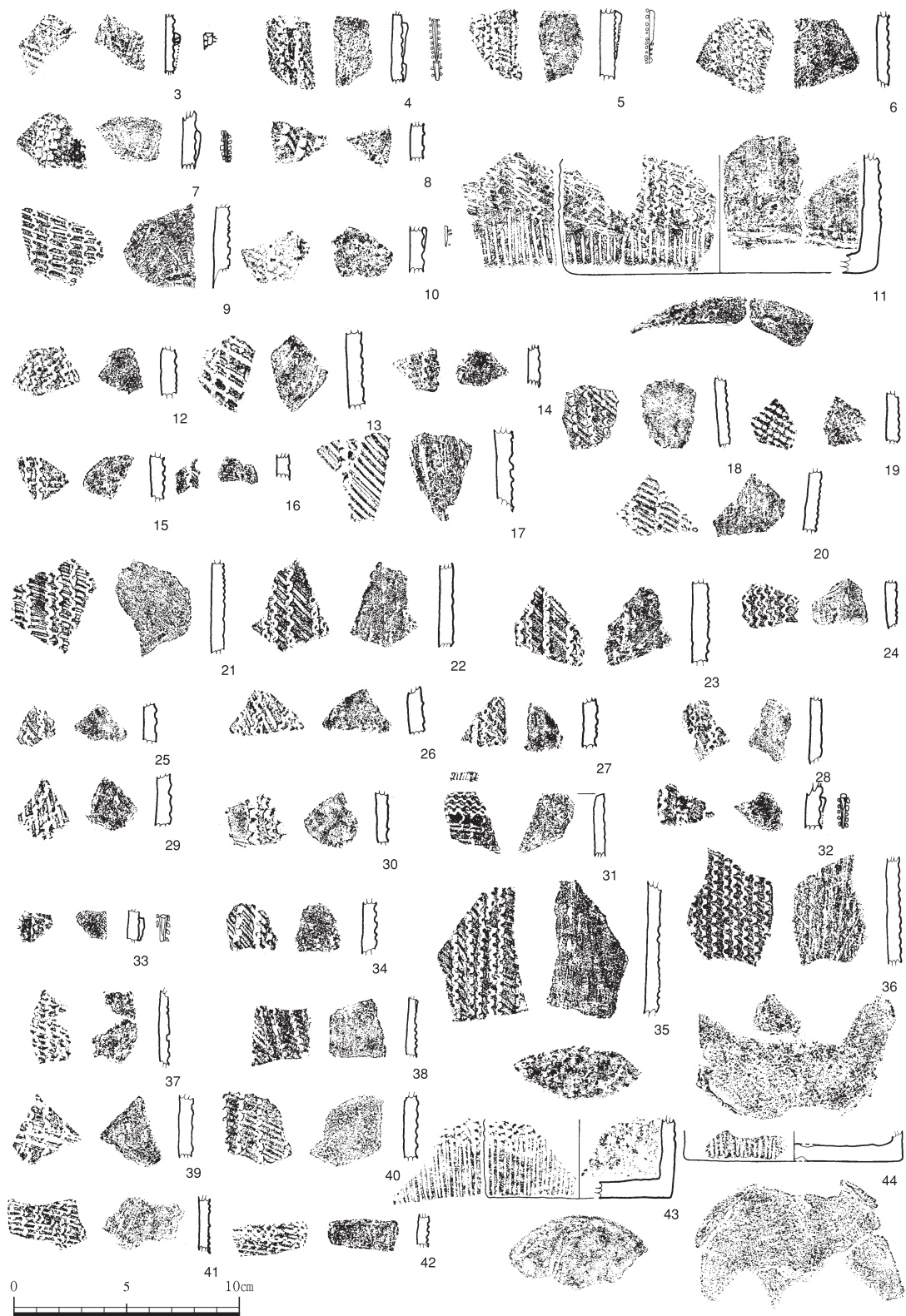
住居跡内出土遺物（第 62 図～第 64 図）

住居跡内からの出土遺物は、細かく割れた土器片多数と、礫(片)のほか、大きな石、軽石の加工品などがある。住居跡毎に遺物の量に差異があるばかりでなく、図化できる遺物にも大きな差異があったため、掲載した遺物は若干バランスを欠いている恐れがある。

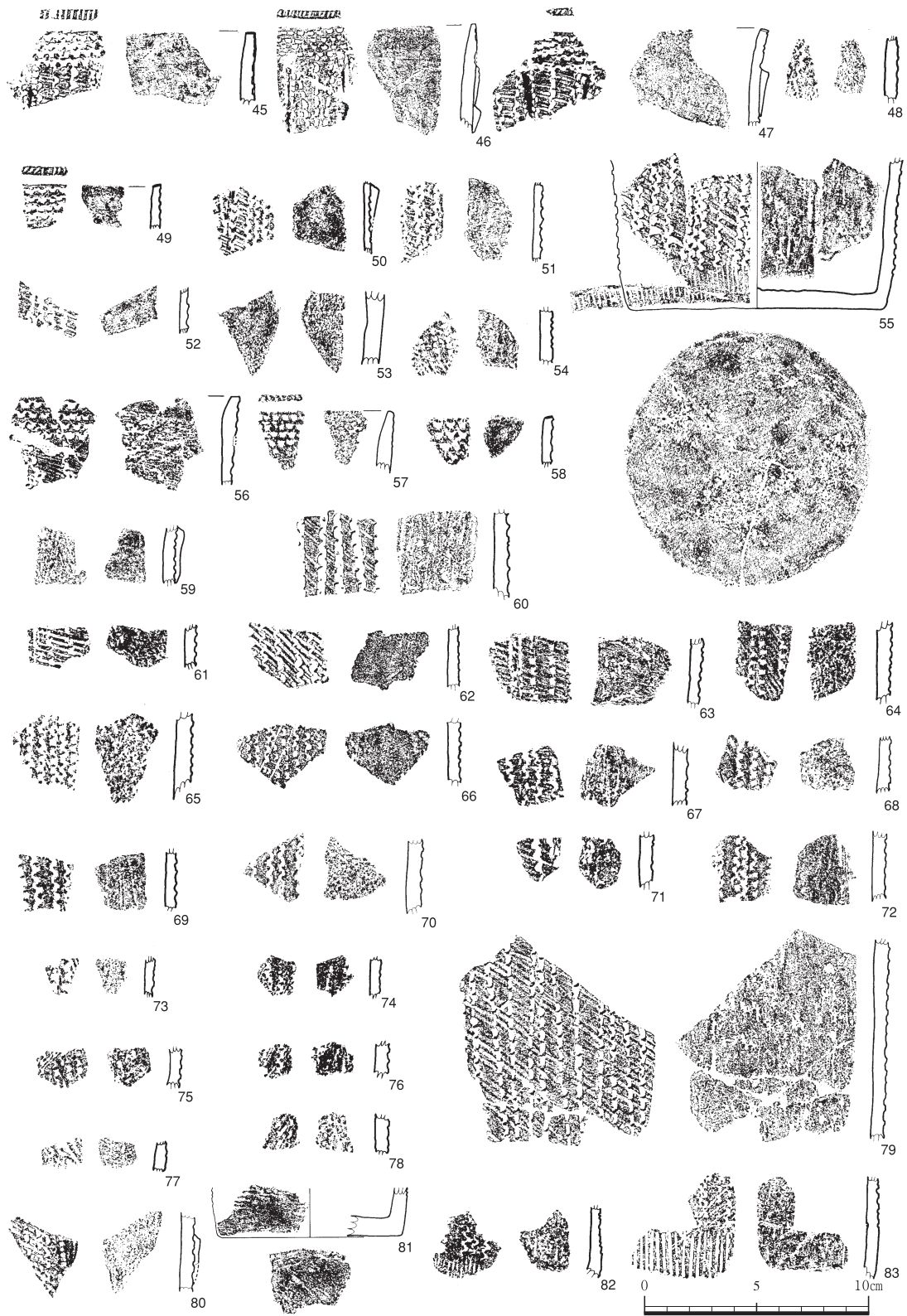
出土した土器片は、いずれも同じタイプであることから、これらの住居跡は全て同時期の遺構と考えて支障はないと考える。これは、全体的に器壁が薄く、口唇部に短く浅い刻みが付され、口唇直下には基本的に貝殻腹縁による刺突が横方向に数条巡らされており、その下位から底部までの胴部全体に斜め方向の貝殻腹縁による条痕が施され、その上に貝殻腹縁による縦方向の刺突が数本ずつを単位として施される。縦方向の刺突は、個体によっては斜めに付されるものもあり、交互に付されることから、X 字状となっているものも見られる。また、割合に密にほぼ等間隔に付されるものもある。口縁部下、胴部上部には、断面三角形の細長い楔の形をした突帯が、2・3 列、縦方向に巡らされているものがある。楔の両側には、平行に施された列点が刺突されており、造形的にも優れたものである。底部外面には、接地面に向けて縦方向の短い直線が刻まれて、一周している。線の間隔は非常に狭いものが多く、線の長さはある程度揃っているものの、細かく観察すると長短があることがわかる。線の太さは、個別には一様である。

内面は、基本的に縦あるいは斜め方向の削りによって器面調整がなされており、器壁が非常に薄手に仕上がっている。底部は外面も削りで調整されるのが基本になっていると見られ、さらにナデによって整えられているような丁寧な仕上げのものも多く見られる。内面はナデによって大まかに仕上げられているものがほとんどである。中央部が若干盛り上がっているものもあるほか、剥離の見られるものもある。

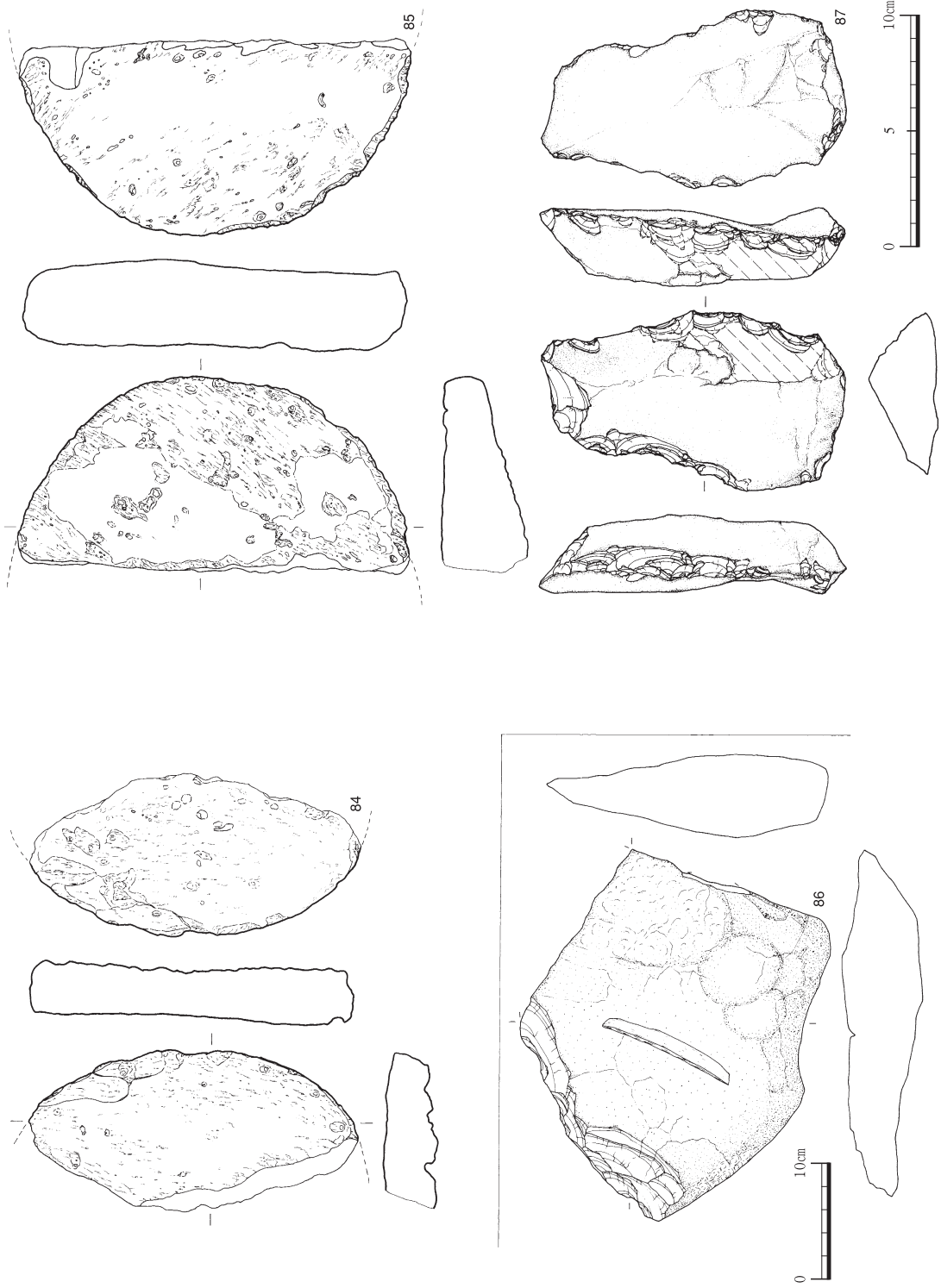
出土遺物の中で、石器は 4 点を図化した。84 と 85 は軽石製品である。84 は 1 号住居跡で出土したもので、厚さは 2.5cm、残存の径は 14.2cm である。85 は 4 号住居跡で出土した厚さ 3.6cm、直径 16.7cm の半円形をしている。両面に擦痕があり、割れていることから完形とは考えられず、本来の形は円形であったと考えられる。86 は 5 号住居跡で出土した大型の石で、表面のほぼ中央に縦方向に擦った跡が見られ、裏面にも全体に擦った痕跡が見られることから、大型の砥石かと考えられる。87 は 7 号住居跡出土の礫石器である。側面に刃部があることから、スクレーパーと思われる。



第63図 住居跡内出土遺物 (1)



第64図 住居跡内出土遺物 (2)



第65図 住居跡内出土遺物 (3)

②集石（第66図～第69図）

集石は、遺跡の東西方向のほぼ中央部の南側を中心に集中する傾向が見られるほか、中央及び北部からも若干確認され、総計18基が検出された。

1号集石はR-11区で検出され、107×97cmの範囲をもち、29個の礫からなり、厚さは13cmである。安山岩を主体としており、煤の付着や赤化、割れなど火熱を受けた痕跡が見られる。掘り込みは見られなかった。

2号集石はR-10区で検出され、56×28cmの範囲をもち、10個の礫からなり、厚さは4cmと浅い。下部に55×50cm、深さ21cmのほぼ円形の2段となる土坑を持つ。石材は安山岩及び砂岩・頁岩である。ほとんどが割れており、赤化したものと煤の付着が見られるものがある。

3号集石はR-12区で検出され、49×47cmの範囲をもち、19個の礫からなり、厚さは12cmである。1個の砂岩以外はすべて安山岩である。煤、赤化、割れなど火熱を受けた痕跡が明確に残る。非常にまとまりの良い集石と言える。掘り込みはもたない。

4号集石から8号集石はR-11区で検出された。4号集石は58×46cmの範囲をもち、10個の礫からなり、厚さは9cmである。石材は1個が砂岩である以外はすべて安山岩である。掘り込みはもたない。

5号集石は62×46cmの範囲をもち、14個の礫からなり、厚さは14cmである。74×63cm、深さ30cmの浅い掘り込みをもつ。3号集石同様よくまとまっている。砂岩1個以外は安山岩である。ほとんどが割れてはいるものの、赤化しているものはほとんど見られない。

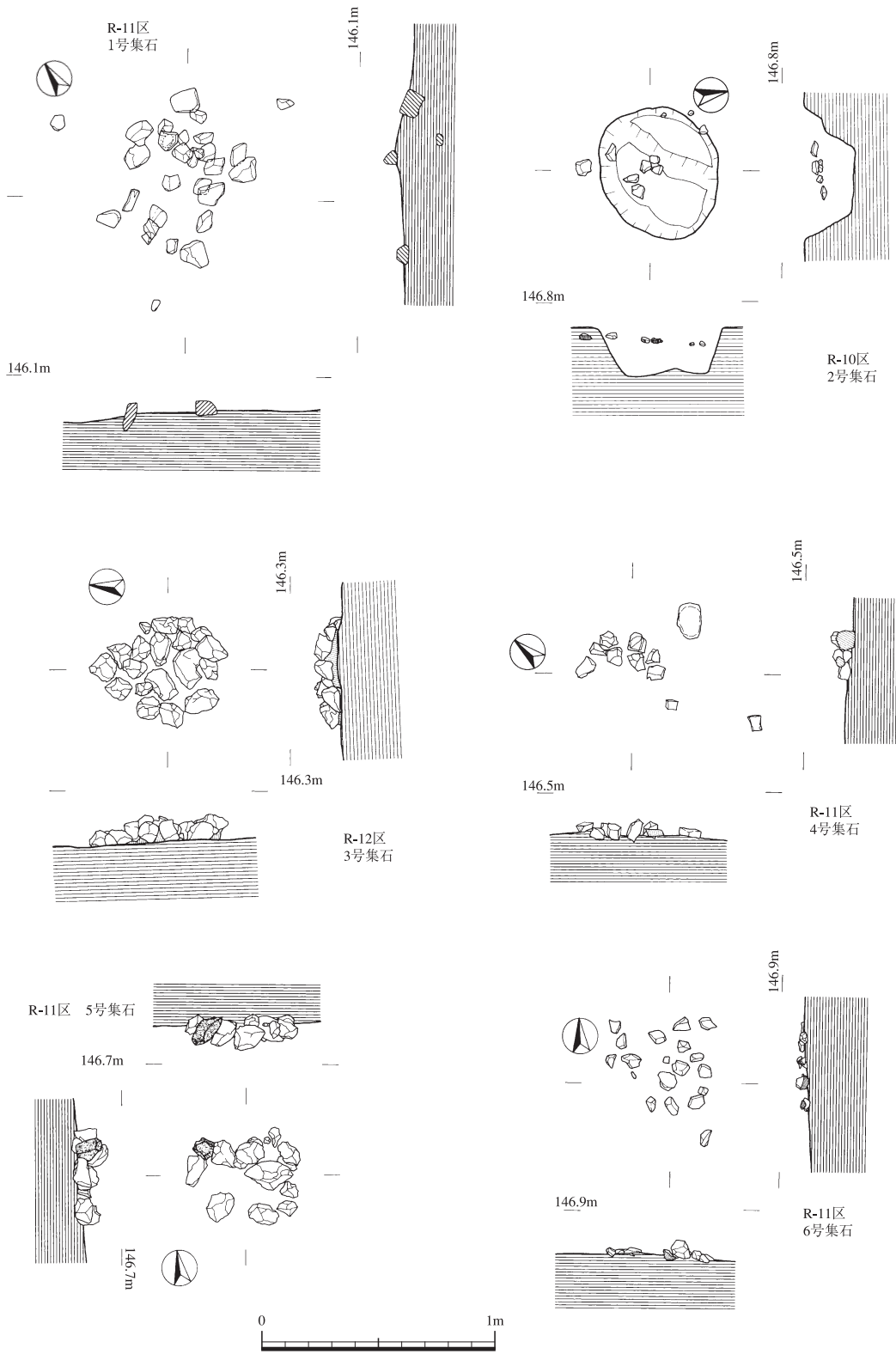
6号集石は68×46cmの範囲をもち、19個の礫からなり、厚さは8cmである。石材はバラエティに富んでおり、安山岩11個、砂岩5個、頁岩・軽石各1個から成っている。割れと赤化が著しく、煤の付着も多く見られる。

7号集石は30×20cmの範囲をもち、6個の礫からなり、厚さは20cmである。63×45cm、深さ10cmの掘り込みをもつ。石材はすべて安山岩である。ヒビ、割れ、赤化のほか、煤の付着が見られるものも多い。

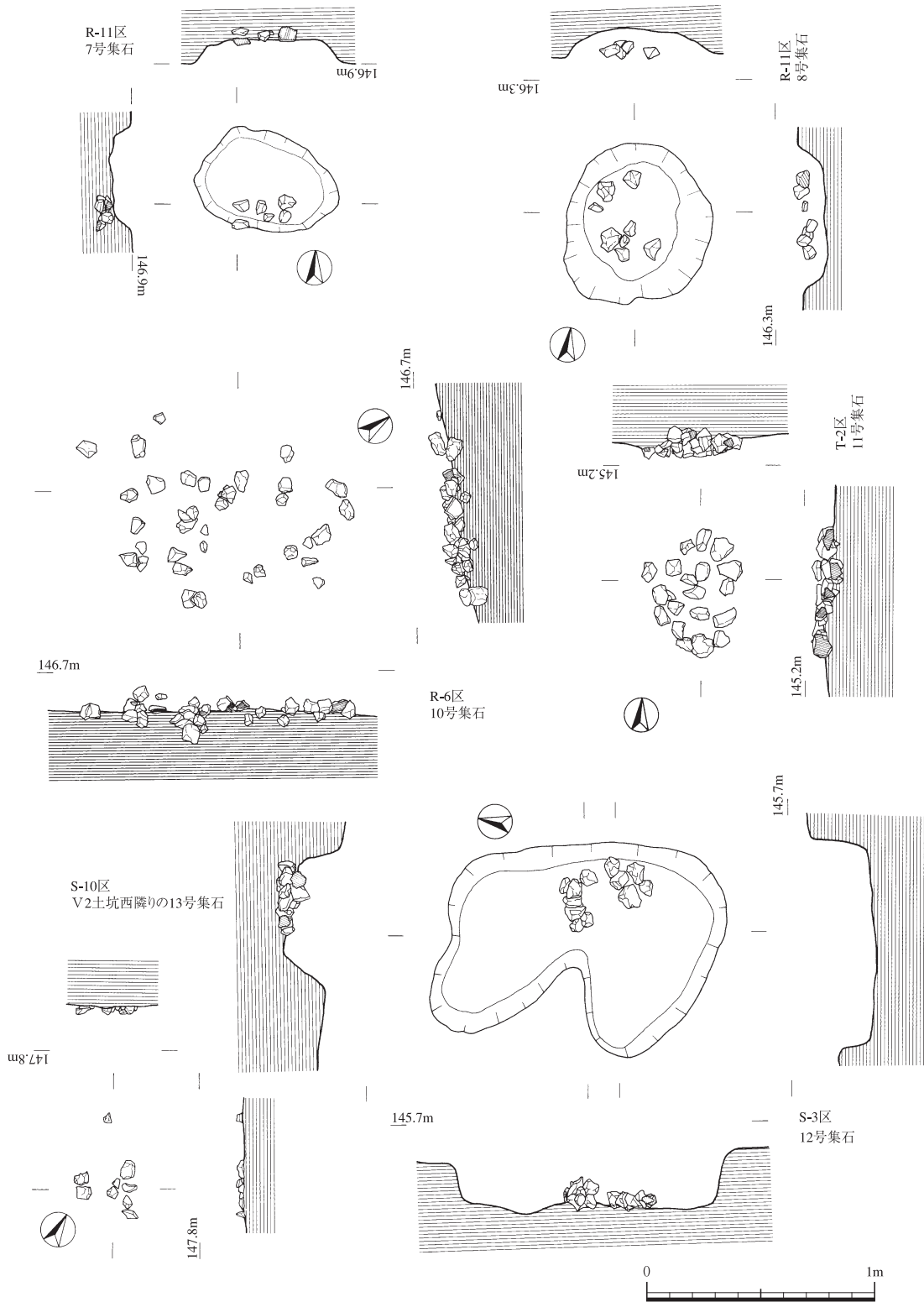
8号集石は42×35cmの範囲をもち、8個の礫からなり、厚さは10cmである。下位には71×65cm、深さ13cmの掘り込みをもつ。石材は砂岩3個、安山岩5個からなっており、割れと煤の付着が著しい。

9号集石はQ-12区で検出され、153×96cmという広い範囲をもち、137個の礫からなり、深さは48cmである。地層の横転に絡んだ集石であることから、使用されて遺棄された当時の状況を表していないことはもちろんではあるが、ただ本遺跡としては最大規模の集石であることは否定できないであろう。確認できた石材は、ほとんどは安山岩であるが、それ以外にも砂岩や花崗岩、ホルンフェルスなども見られる。大部分は割れや赤化が見られることから、火熱を受けていることは明白である。

10号集石はR-6区で検出され、124×83cmの範囲をもち、37個の礫からなり、深さは25cmである。143×136cmの極めて浅い掘り込みをもつ。石材は安山岩及び砂岩である。すべて火熱を受けており、割れや赤化も見られる。



第66图 集石 (1)



第67図 集石 (2)

11号集石はT-2区で検出され、56×42cmの範囲をもち、20個の礫からなり、深さは14cmである。砂岩1個以外はすべて安山岩である。割れや煤の付着、赤化などがほとんどに見られ、火熱を受けていることがわかる。

12号集石はS-3区で検出され、41×25cmの範囲をもち、12個の礫からなり、深さは15cmである。石材はすべて安山岩である。下位に121×95cm、深さ27cmの中央部に張り出しのある楕円形の掘り込みが見られる。

13号集石はS-11区で検出され、52×28cmの範囲をもち、9個の礫からなり、深さは5cmである。

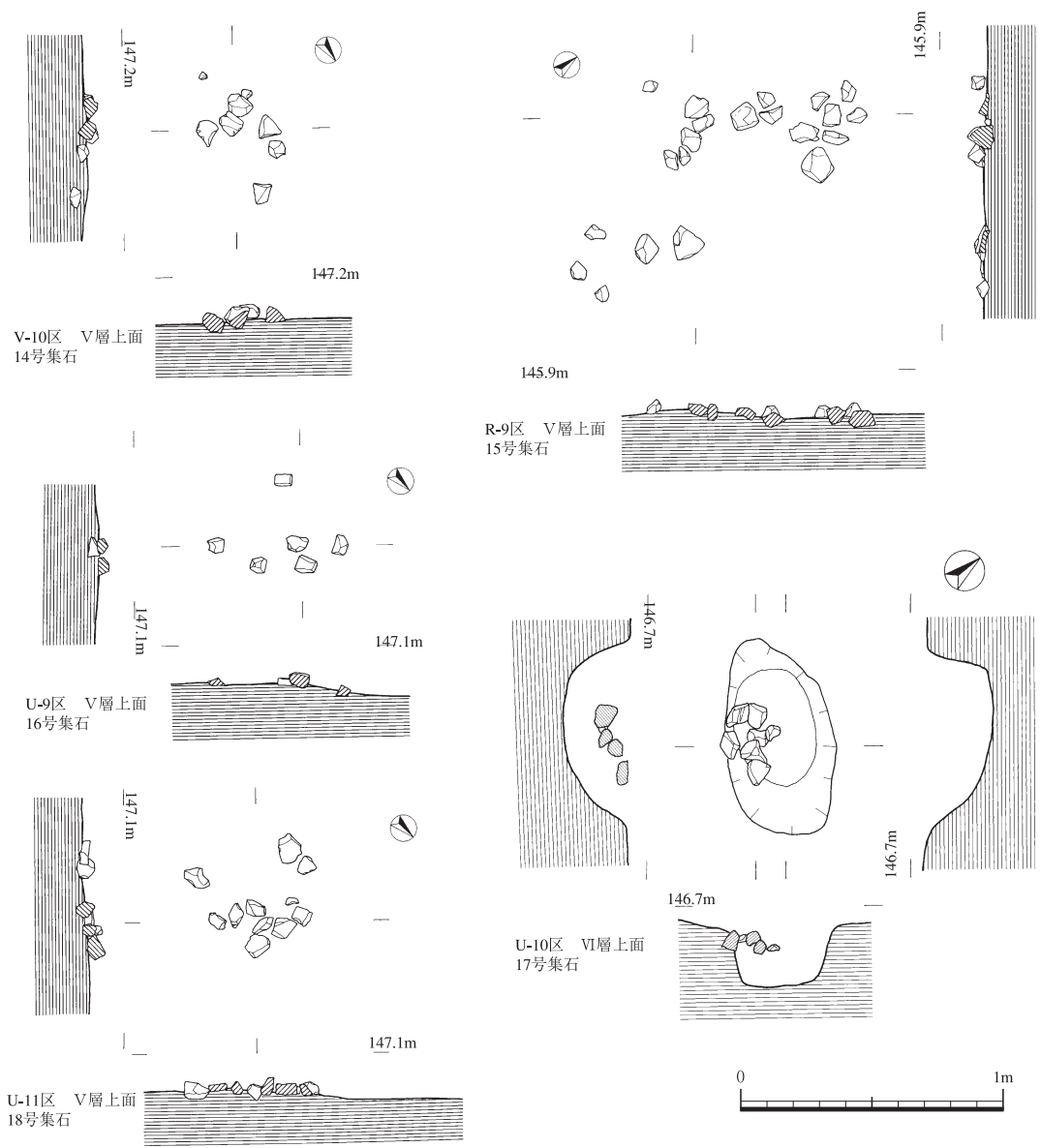
14号集石はV-10区で検出され、56×35cmの範囲をもち、8個の礫からなり、深さは11cmである。石材はすべて安山岩である。

15号集石はR-9区で検出され、129×68cmの範囲をもち、21個の礫からなり、深さは10cmである。安山岩16個、砂岩5個で構成される。割れや赤化、煤の付着など火熱を受けた状況が観察される。

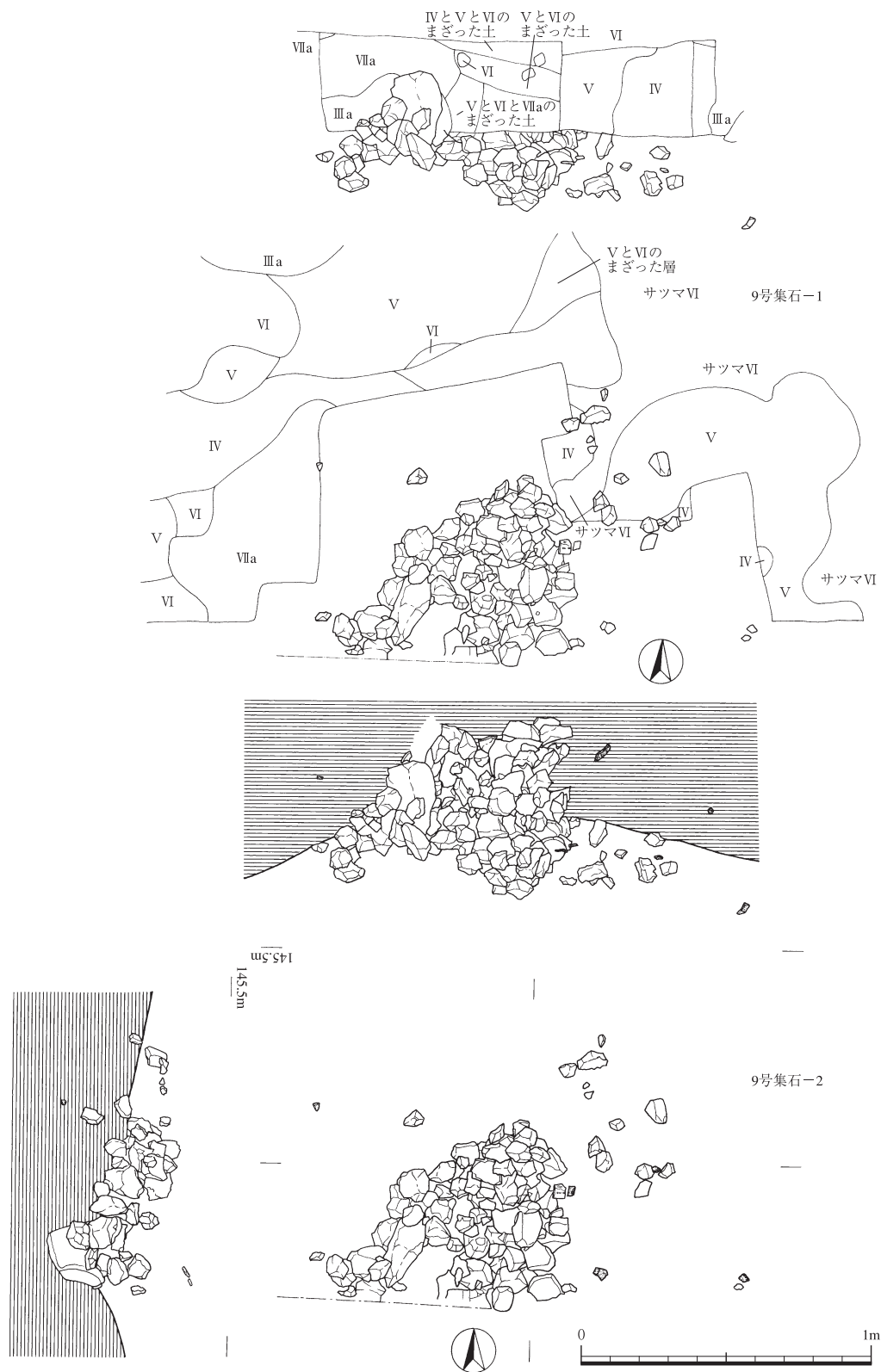
16号集石はU-9区で検出され、55×39cmの範囲をもち、6個の礫からなり、深さは9cmである。石材は2個の砂岩と4個の安山岩とからなり、そのすべてに割れが見られるほか、4個に煤の付着が、また2個に赤化が見られ、火熱を受けていることがわかる。

17号集石はU-10区で検出され、52×49cmの範囲をもち、11個の礫からなり、深さは11cmである。石材は安山岩と砂岩が、ほぼ相半ばしている。加熱を受けた様子が割れや赤化の状況から看過される。

18号集石はU-11区で検出され、32×28cmの範囲をもち、10個の礫からなり、深さは13cmである。70×40cm、深さ25cmの掘り込みをもっている。石材は観察した限りでは安山岩であり、割れなど火熱を受けている様子が見られる。



第68図 集石 (3)



第69図 集石 (4)

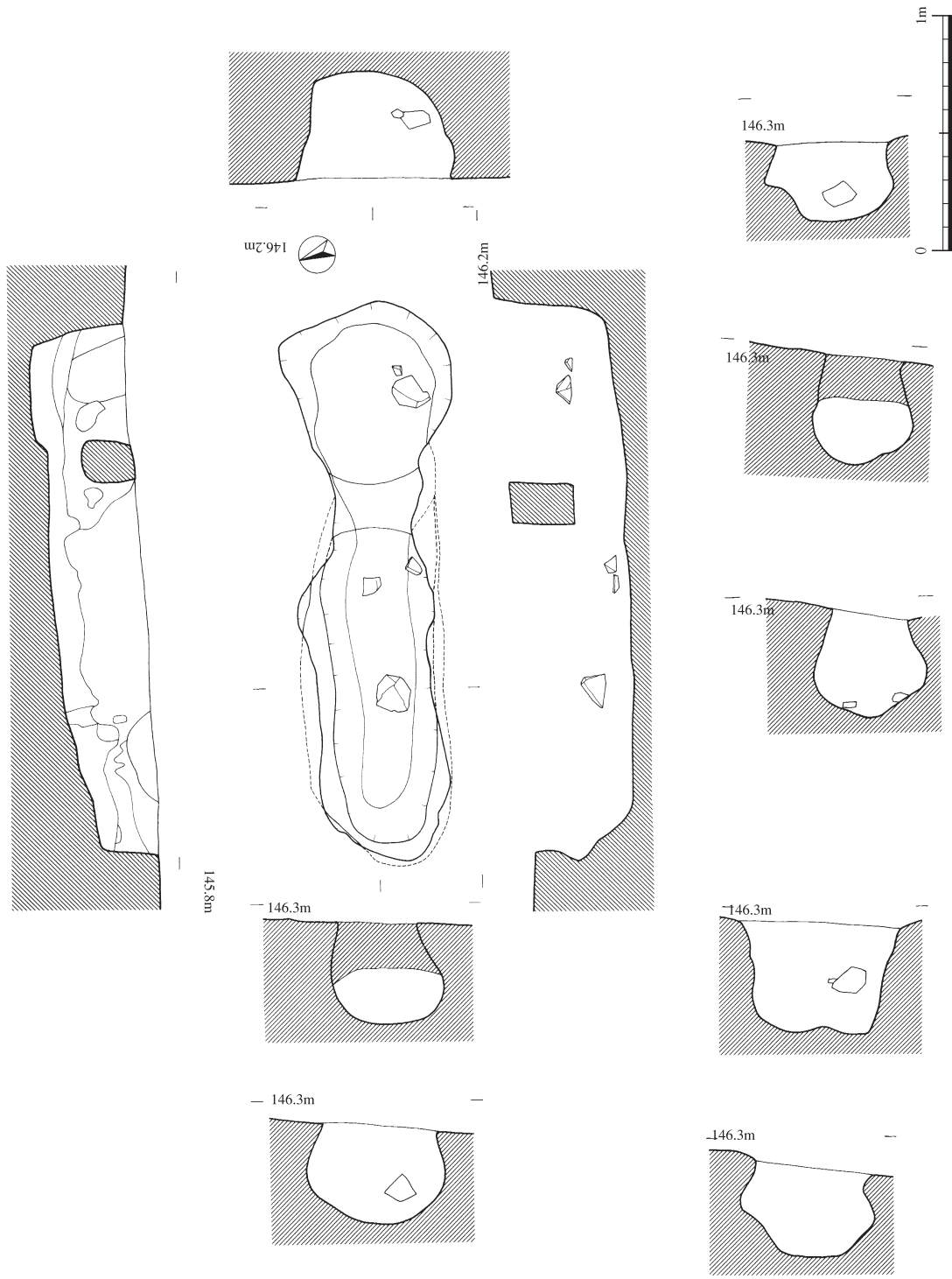
③連穴土坑（第70図～第72図）

調査区の南側中央部及び北東部で合計3基確認された。

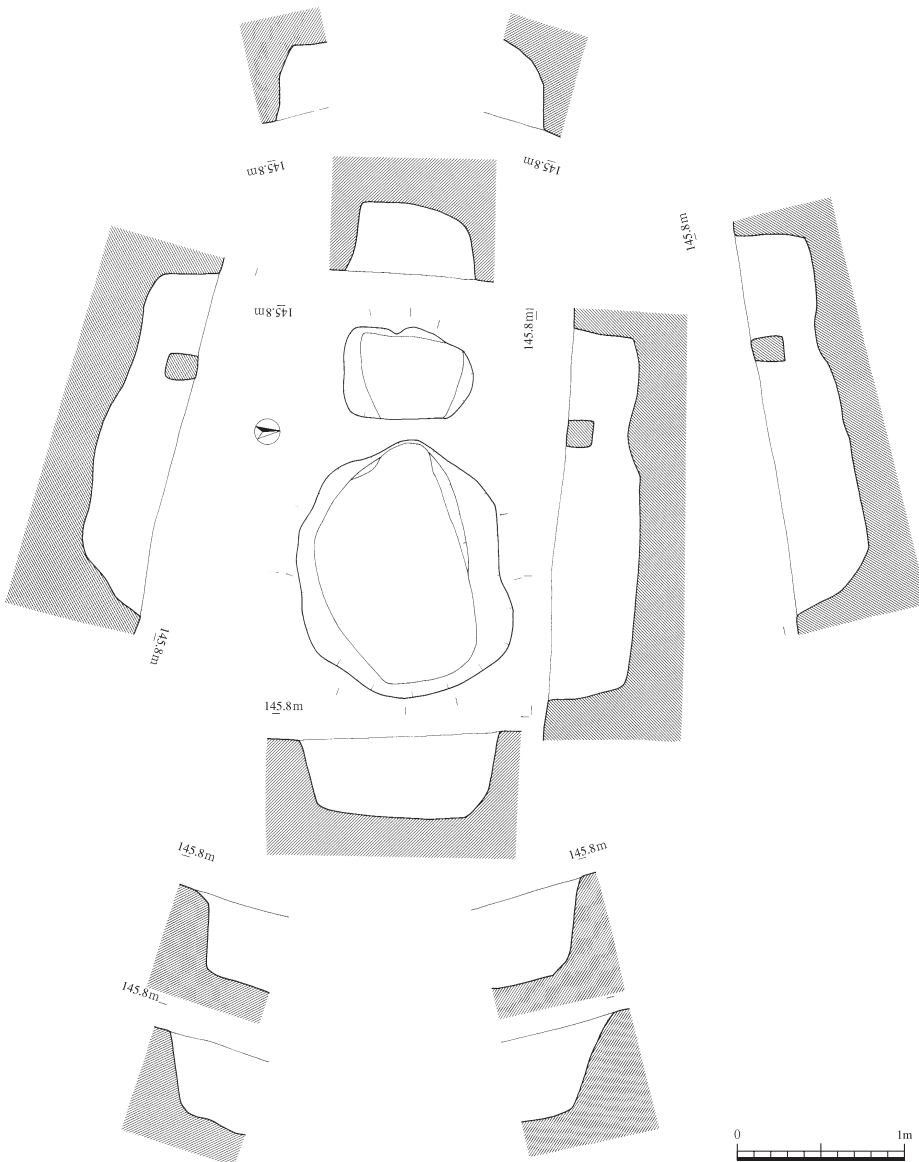
1号連穴土坑はS-11・12区で確認され、全長は231cmある。ブリッジ部分が崩落しているため、各部の規模は推定である。煙出し部（小さい方の穴）は、長軸方向の長さは138cm、幅は63cm、深さは48cmである。ブリッジ部は長さは18cm、厚さは26cmあり、トンネル部は深さが20cmとなる。また、足場部（大きい方の穴）は、長軸方向の長さは75cm、幅は72cm、深さは45cmである。足場部及びトンネル部の足場部側は使用によるものか、中程が奥に向けて抉っており、また、底面のほぼ中央部は更に深く掘ってあるため、2段掘り状となっている。トンネル部の底面は煙出し部より幾分高くなっており、足場部から緩やかな傾斜で煙が煙出し部へ上がっていくような構造となっているように思われる。煙出し部及び足場部には大小の礫が若干浮いた状態で出土している。これは、使用に際して必要なものと言うよりは、連穴土坑の廃棄に伴って遺棄されたものとするのが相当と思われる。礫を観察したが、一般の礫との間に特徴的な違いは見当たらない。

2号連穴土坑はN・O-3区で確認され、全長は220cmある。ブリッジ部は残存しており、完全な計測ができた。煙出し部は、長軸方向の長さが51cm、幅が77cm、深さは40cmである。ブリッジ部は、長さが15cm、厚さは21cmあり、トンネル部の深さは18cmである。また、足場部は、長軸方向の長さが154cm、幅が123cmあり、深さは38cmである。1号連穴土坑と比べても、長軸に対する幅が広く、全体的に非常に大型という印象を受ける。断面を見ると、底面が平坦ではなく傾いていることから、ひょっとするとトンネル部を共通にして軸を北側及び南側に替えながら使用した可能性も考えられる。そうすると、断面に段差があることの説明がつくと考えることもできる。つまり、当初はある軸方向で使用し、その後、軸方向を変えて再度掘り広げて使用した。そのために段差を生じたと考えるのである。足場部から煙出し部へ向かっては緩やかに上がると共に、1段高くなっていることから、煙が煙出し部へと緩やかに上がっていく構造となっていることが考えられるのである。煙出し部及び足場部のいずれからも遺物は出土していない。

3号連穴土坑はM-2区で確認され、全長は236cmある。ブリッジ部は残存しているため、正確な計測が可能であった。煙出し部は、長軸方向の長さが84cm、幅が72cm、深さが61cmである。ブリッジ部は、長さが13cm、厚さが20cmあり、トンネル部の深さは19cmである。足場部は、長軸方向の長さが139cm、幅が85cm、深さが45cmある。煙り出し部からトンネル部を通して足場部にいたるまで2段掘りとなっており、残存するトンネル部は若干斜め方向となっているが、これは当初からの形状なのか、一部崩落の結果なのかについては、いずれとも判じがたい。それは、煙出し部・足場部のいずれも平面形がいびつな印象を受けることから、当初からトンネル部を斜めに作ってあってもそれほど違和感を感じないからである。煙出し部の先端部には浅い小ピットが見られる。また、足場部には、トンネル部側に土器片がある程度集中して出土した。これは、住居跡から出土するものと同様な特徴が見られることから、住居跡と同じ時期の遺構と考えられるのである。

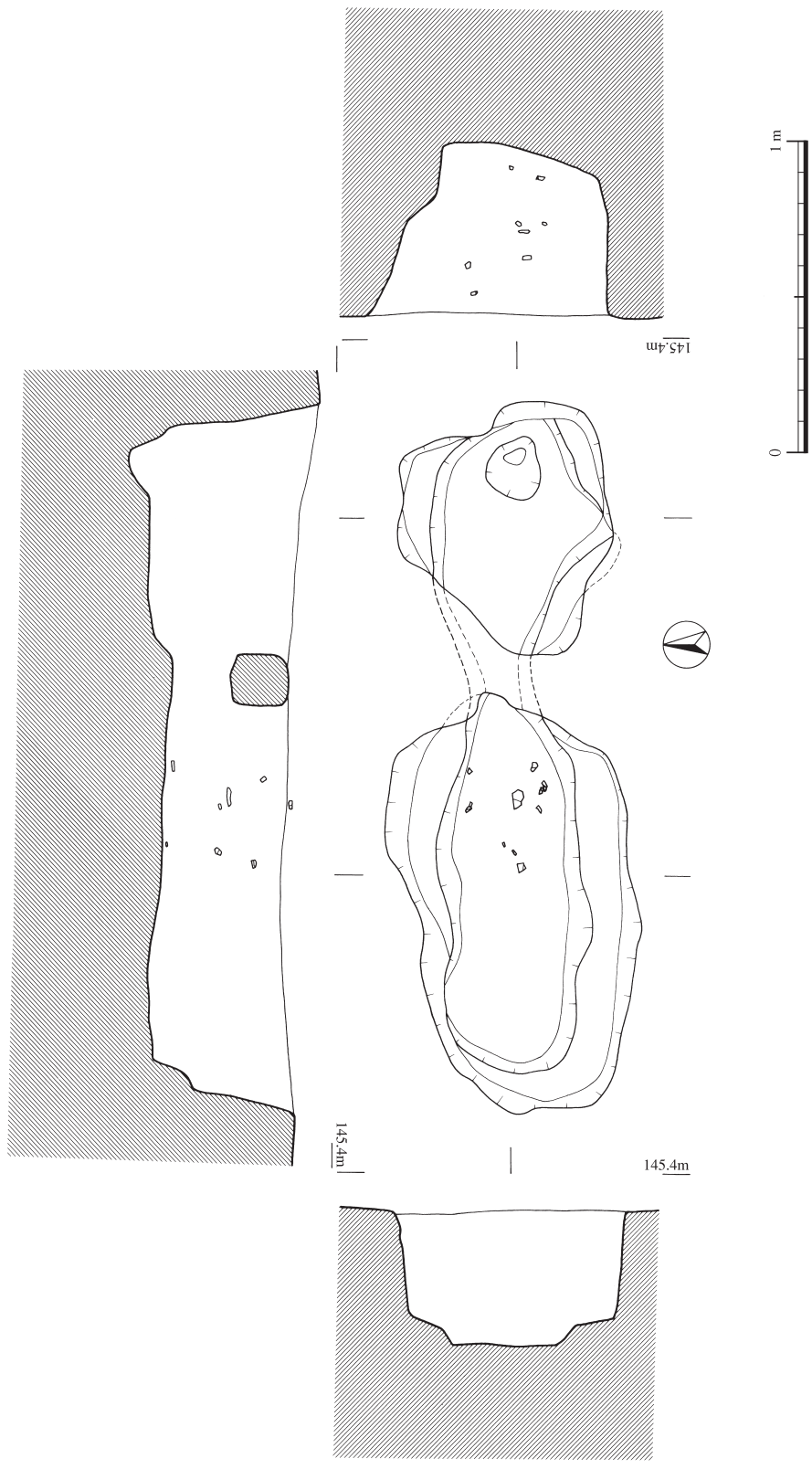


第70図 1号連穴土坑

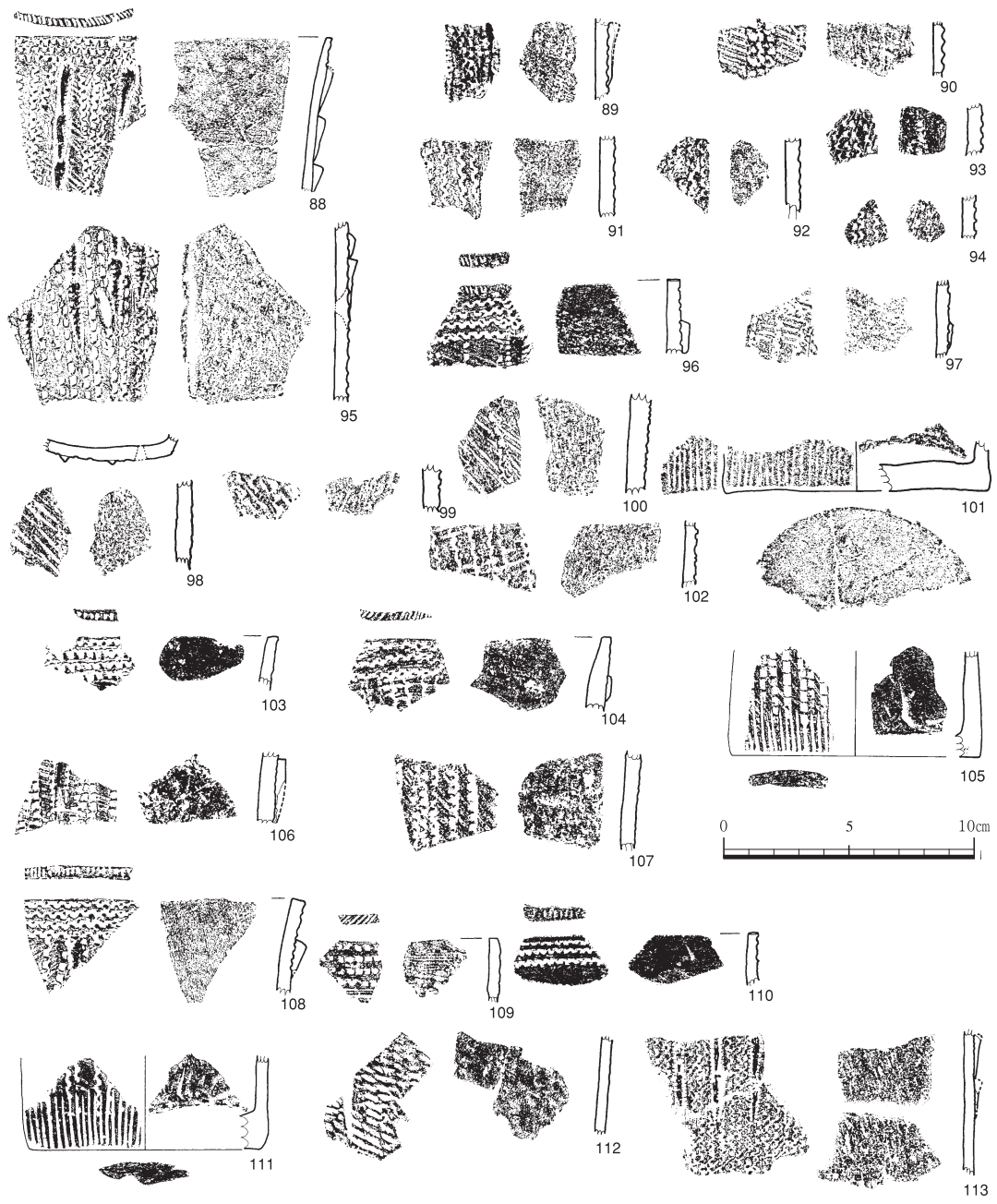


第71図 2号連穴土坑





第72図 3号連穴土坑



第73図 集石・連穴土坑・土坑出土遺物

④土坑（第73図，第74図～第95図，第97図）

土坑は調査区のほぼ全地域から総計 392 基検出された。規模や形状などがさまざまであったため，形態的に分類を行った。

まず，形状からⅠ～Ⅴ類に類別し，さらに単一か複合かと，薩摩火山灰の残存によって 3 類に分類した。Ⅰ類は円形，Ⅱ類は楕円形，Ⅲ類は四角形，Ⅳ類は不整形，Ⅴ類は溝状のものである。Ⅱ類の楕円形は，長軸と短軸の比が 2.0 未満の円形に近いタイプの a 類と，比が 2.0 以上の細長いタイプの b 類とに分けた。これは，機能的に分かれる可能性があるかと判断したためである。また，A 類は単独・単純なもの，B 類は内部に土坑やピットを持つなど複合したもの，C 類は土坑内に薩摩火山灰のブロックなどの残存が見られるものと分類した。したがって，分類上ではⅠ A 類からⅤ C 類までの 15 類に分類できるということになるが，実際はⅡ bC 類とⅤ C 類はなかったので 13 類に分類された。

Ⅰ A 類は単純な円形を呈するものである。円形とは言っても，実際に若干の歪みのあるものや，長軸と短軸の比が 1.3 までのものは，このタイプに入れてある。総数 27 基である。

Ⅰ B 類は円形で，内部に土坑やピットを持つ複合したものである。断面が極端に段を有するものもこのタイプに入れてある。11 基見られる。

Ⅰ C 類は内部に薩摩火山灰が残っている円形のものである。7 基あった。

Ⅱ aA 類は単純な楕円形をしているもので，長軸・短軸の差の小さい，円形に近いものである。総数 82 基である。

Ⅱ aB 類は複合した，円形に近い楕円形のものである。2 重の土坑となるものや複数のピットが底部一面に見られるものなど，いろいろなタイプがある。総数 71 基である。

Ⅱ aC 類は内部に薩摩火山灰が残存している，円形に近い楕円形のものである。薩摩火山灰が広域に残るものと局所的なもの，その中間的なものなど各種ある。総数 17 基である。

Ⅱ bA 類は細長い楕円形で単純な形をしたものである。17 基がこのタイプに入る。

Ⅱ bB 類は複合した，細長い楕円形を呈するものである。12 基である。

Ⅲ A 類は単純な四角形をしているものである。若干丸みを帯びるものも入るが，基本的に角が明瞭に残るもの，大まかに四角形を呈するものである。総数 12 基である。

Ⅲ B 類は内部に土坑やピットをもつ複合した四角形のものである。6 基が入る。

Ⅲ C 類は内部に薩摩火山灰が残る四角形のものである。2 基が入る。

Ⅳ A 類は不整形で単一な掘り方をしているものである。総計 72 基が含まれる。

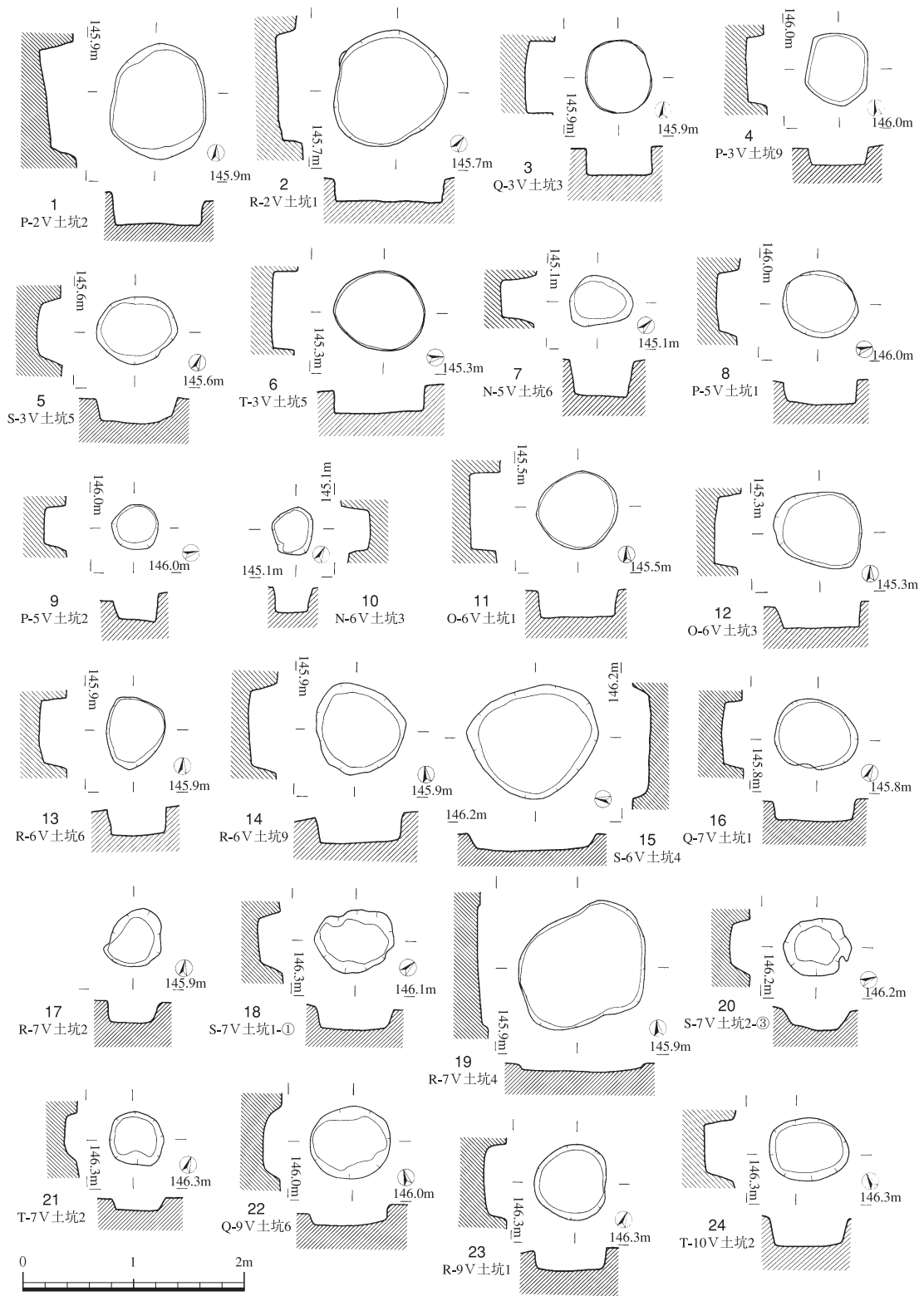
Ⅳ B 類は複合した不整形のものである。31 基が入る。

Ⅳ C 類は内部に薩摩火山灰が残る不整形のものである。20 基が含まれる。

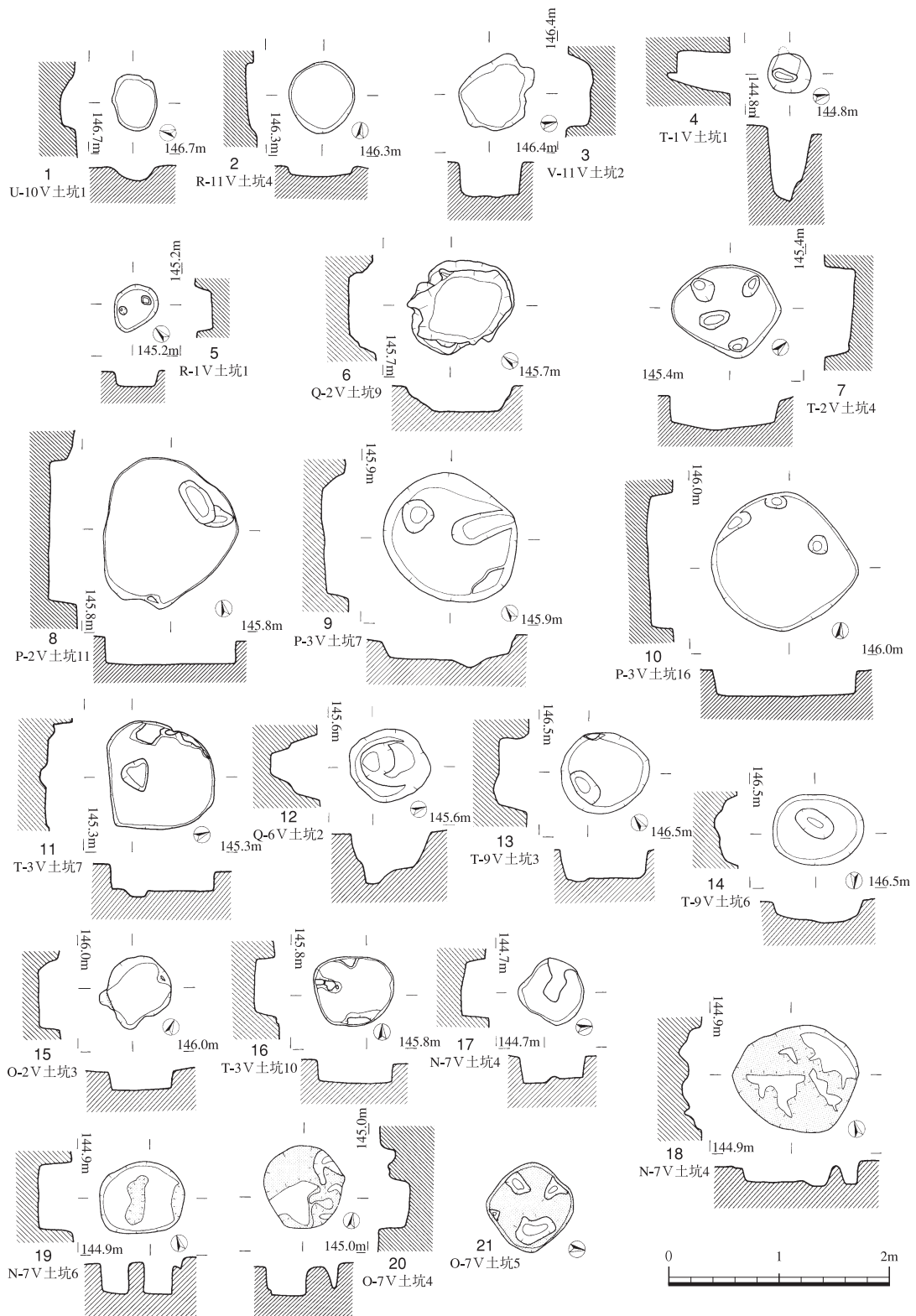
Ⅴ A 類は単純な掘り方を持つ溝状のものである。4 基が入る。

Ⅴ B 類は複合した溝状のもので，7 基が含まれる。

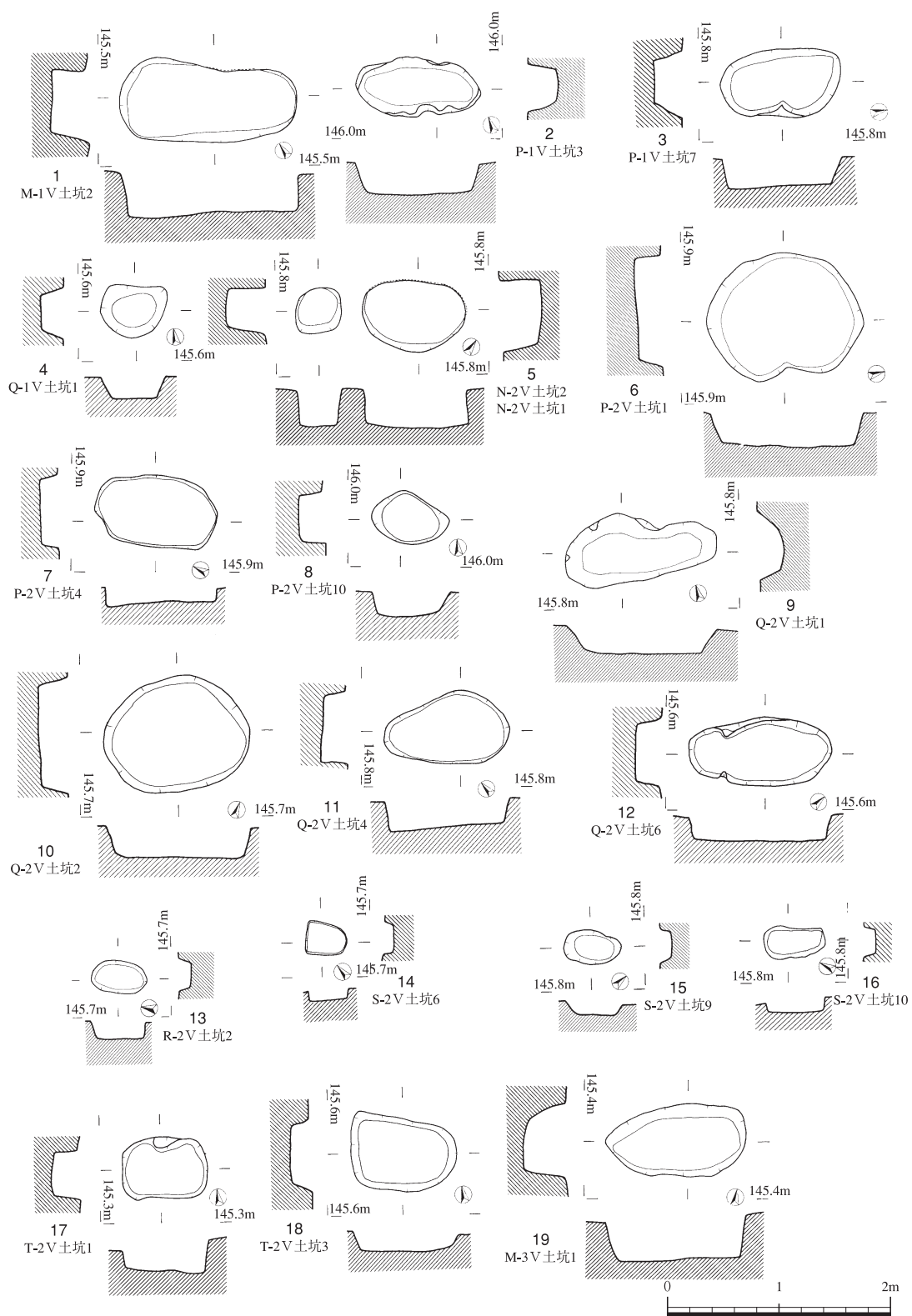
以上，392 基を分類して，その数を上げたが，これを見てもタイプにより偏りのあることがわかる。数の多いタイプは，機能として本遺跡における一般的な性格を表していると考えられなくはない。つまり，日常生活における廃棄の場，あるいは墓所としての使用である。ただ，土壌の分析などの科学的な探求がなされていない現在では，その可能性を指摘するに留めておきたい。



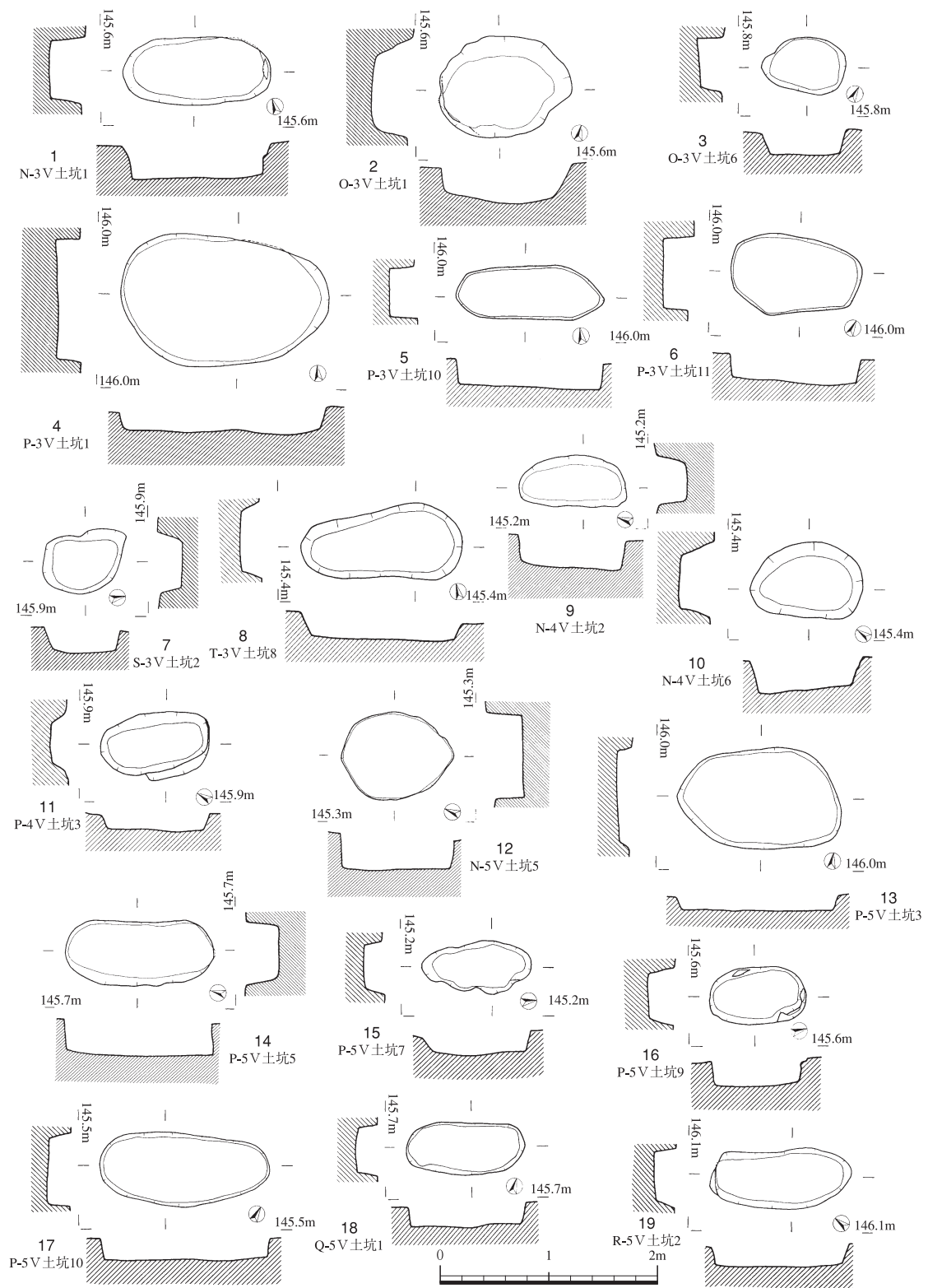
第74图 土坑 1 IA (1)



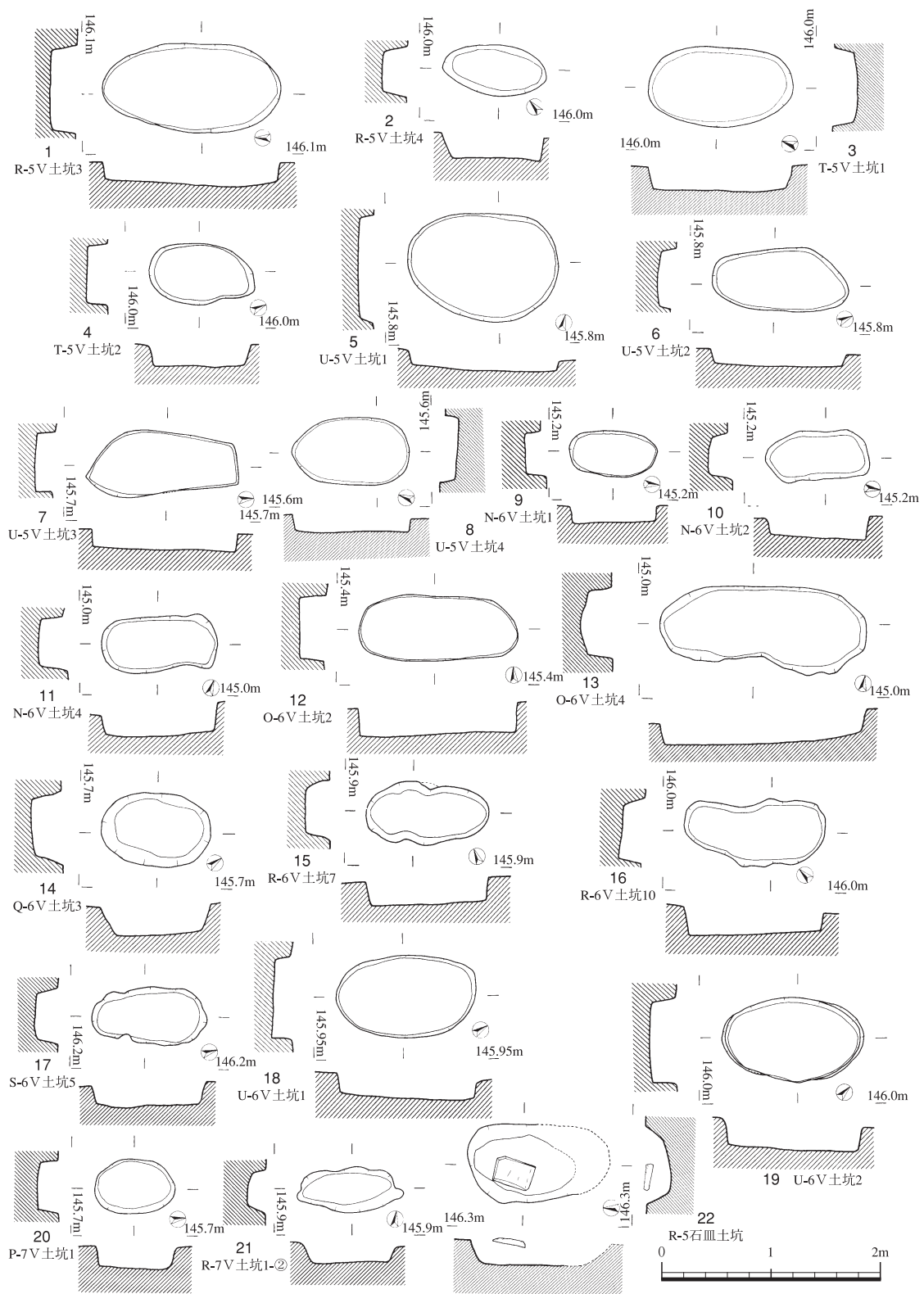
第75图 土坑 2 IA (2) IBIC



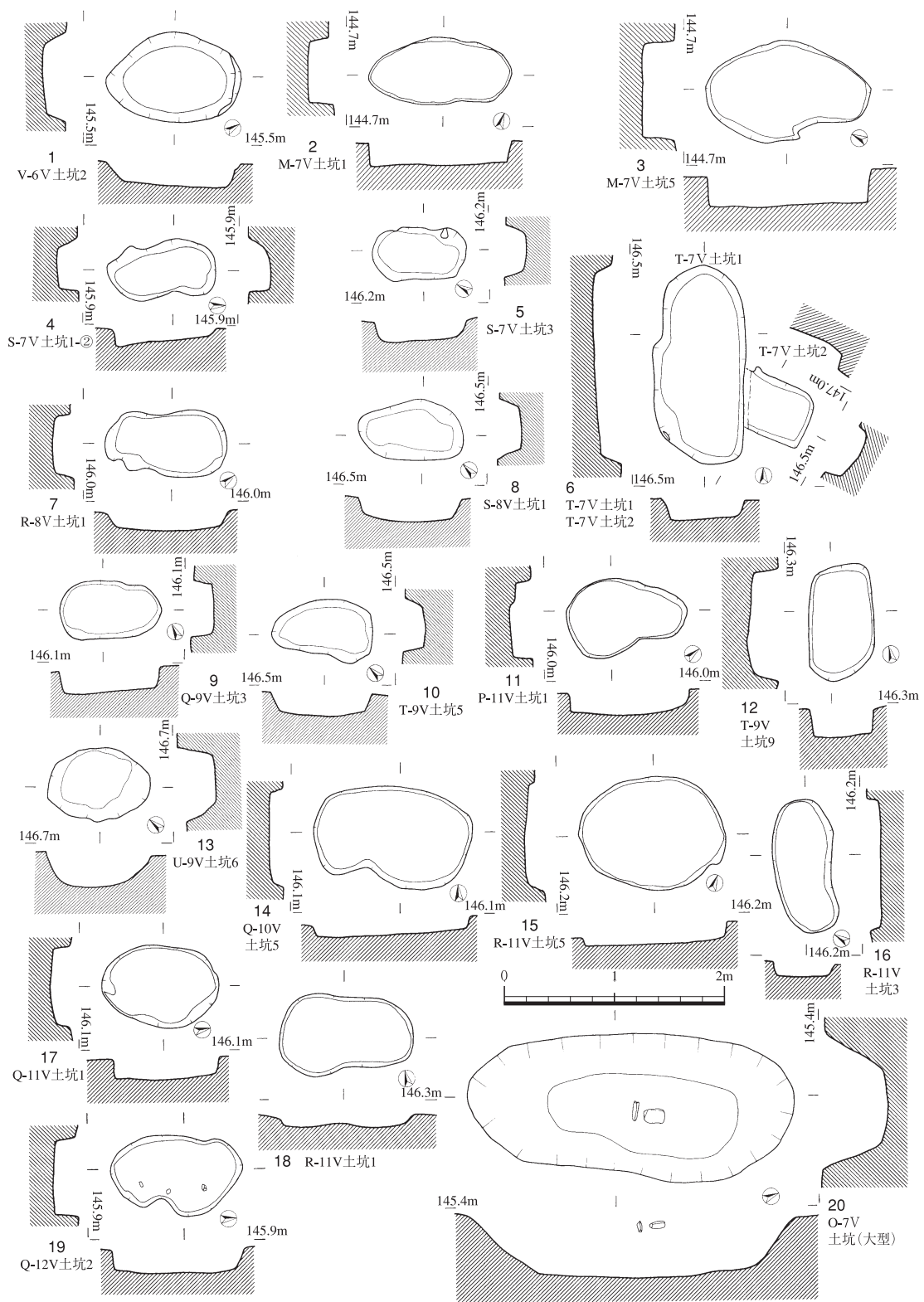
第76图 土坑 3 II a A (1)



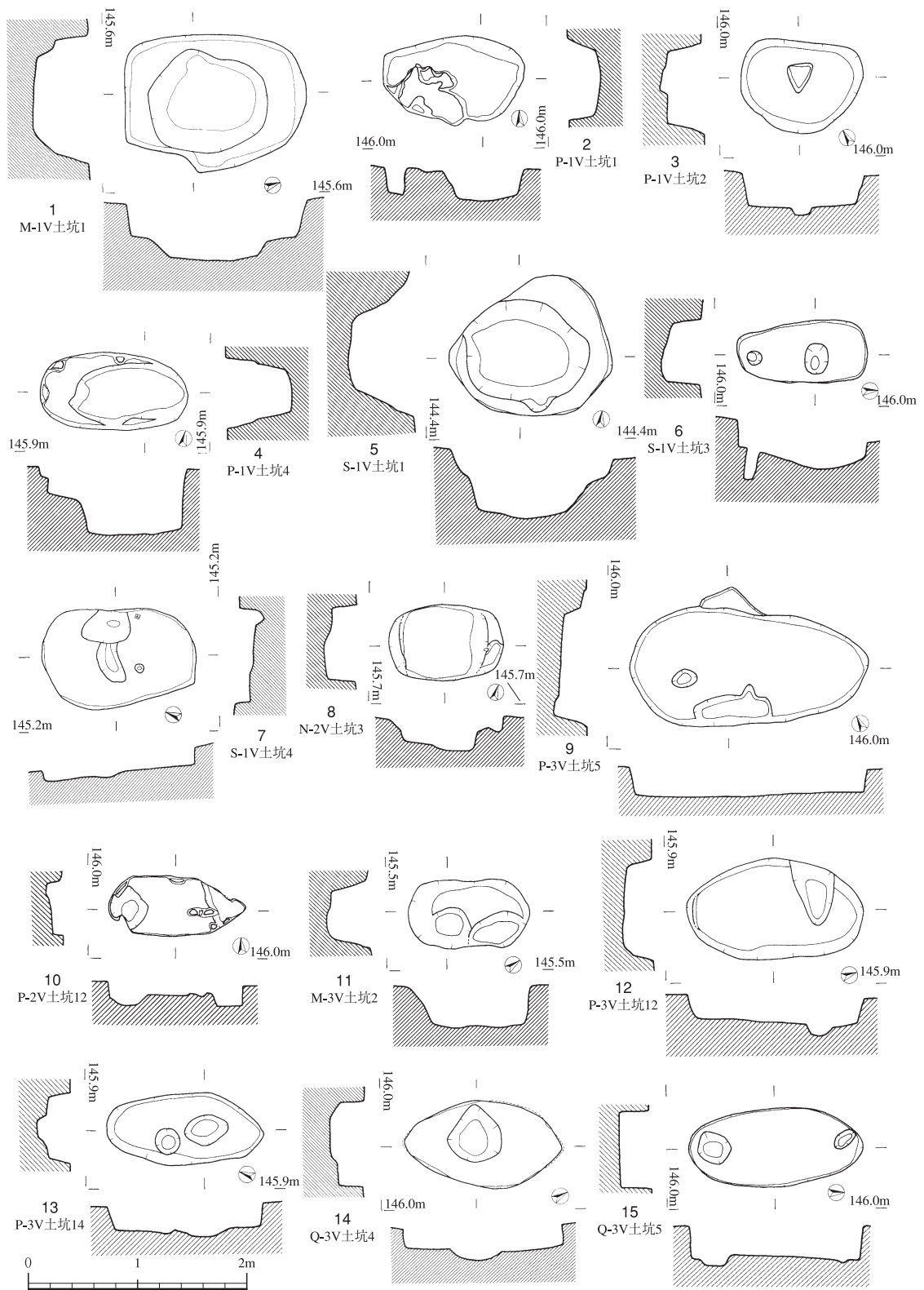
第77图 土坑4 II a A (2)



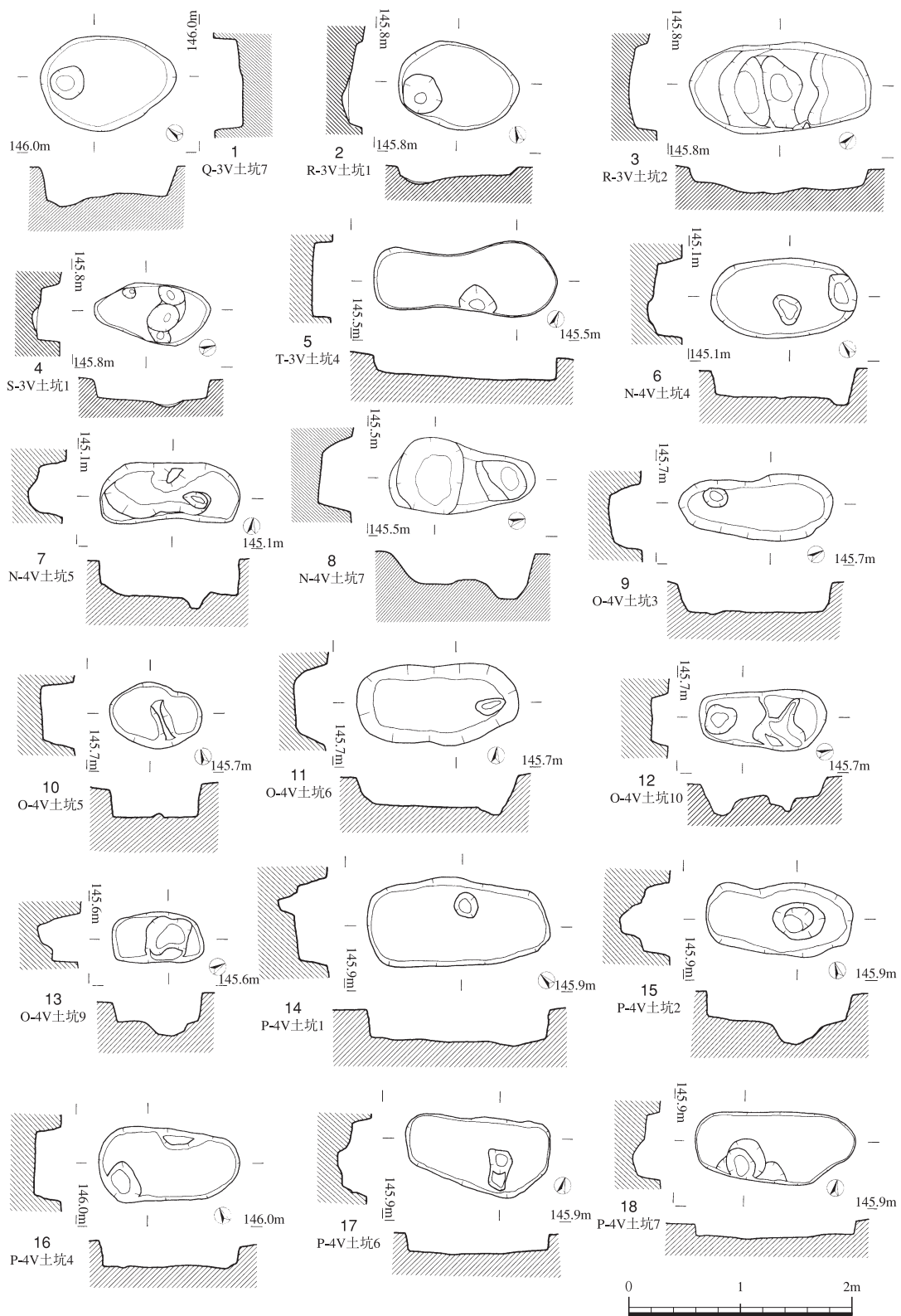
第78图 土坑 5 II a A (3)



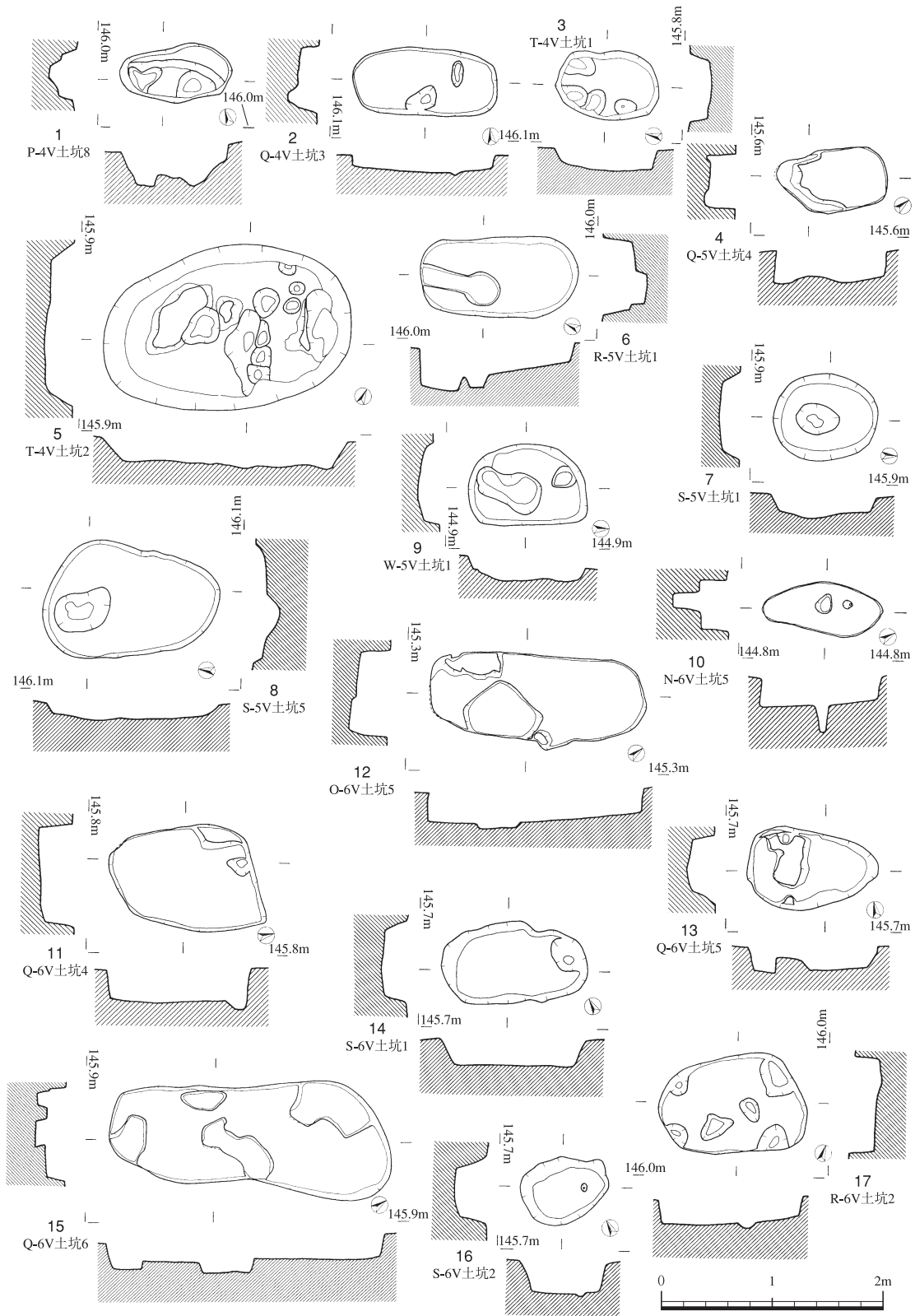
第79图 土坑6 II a A (4)



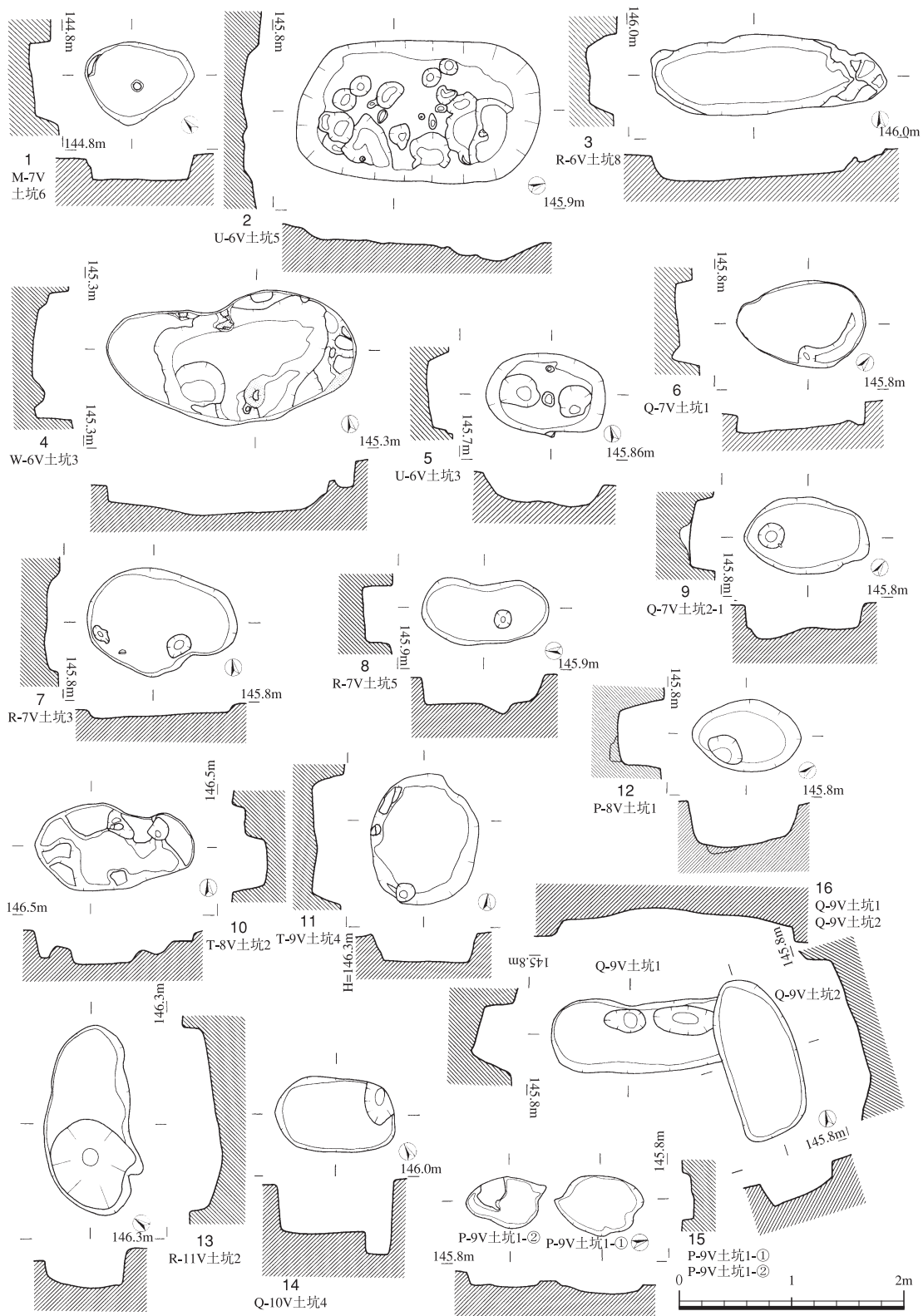
第80图 土坑7 II a B (1)



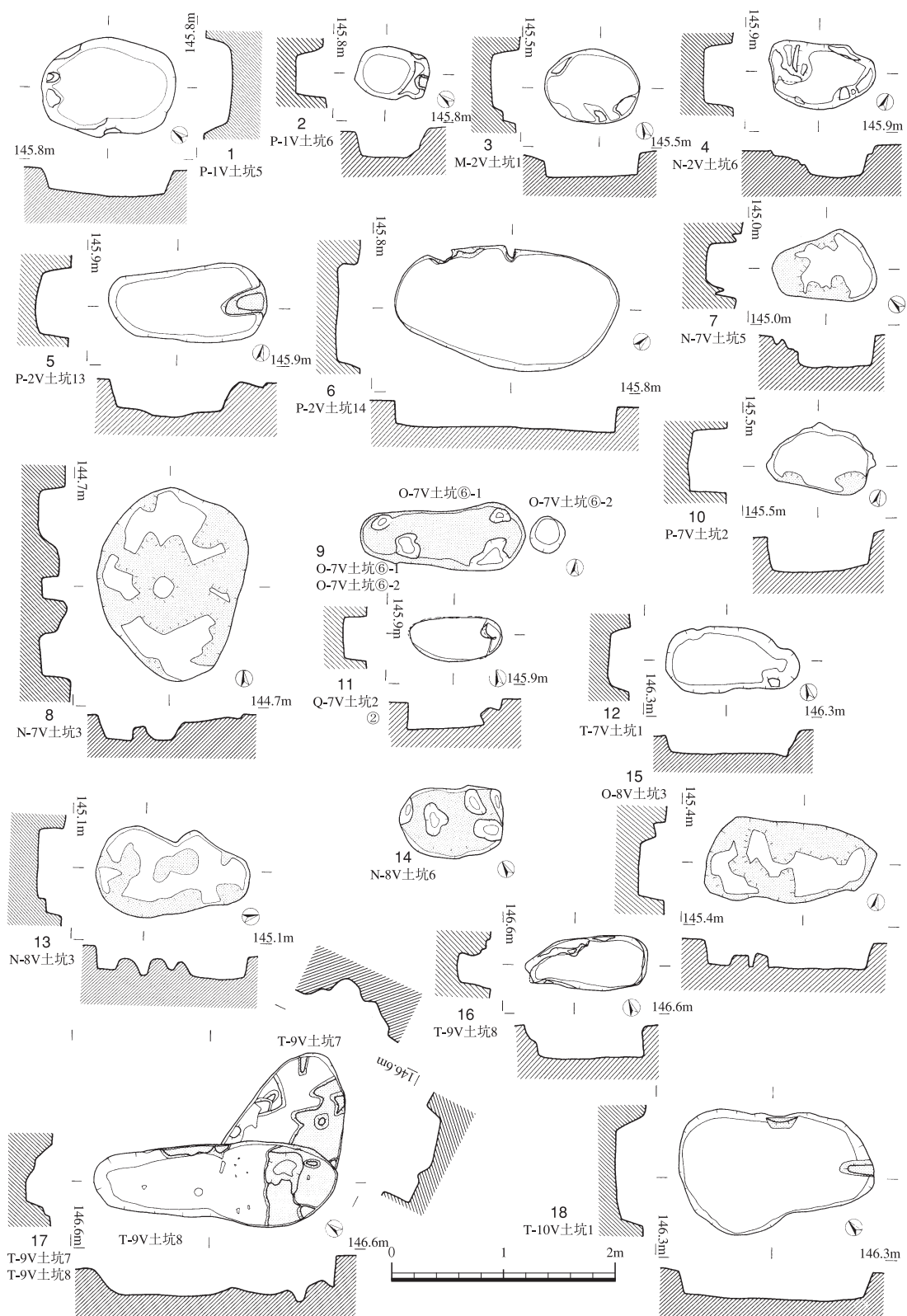
第81图 土坑 8 II a B (2)



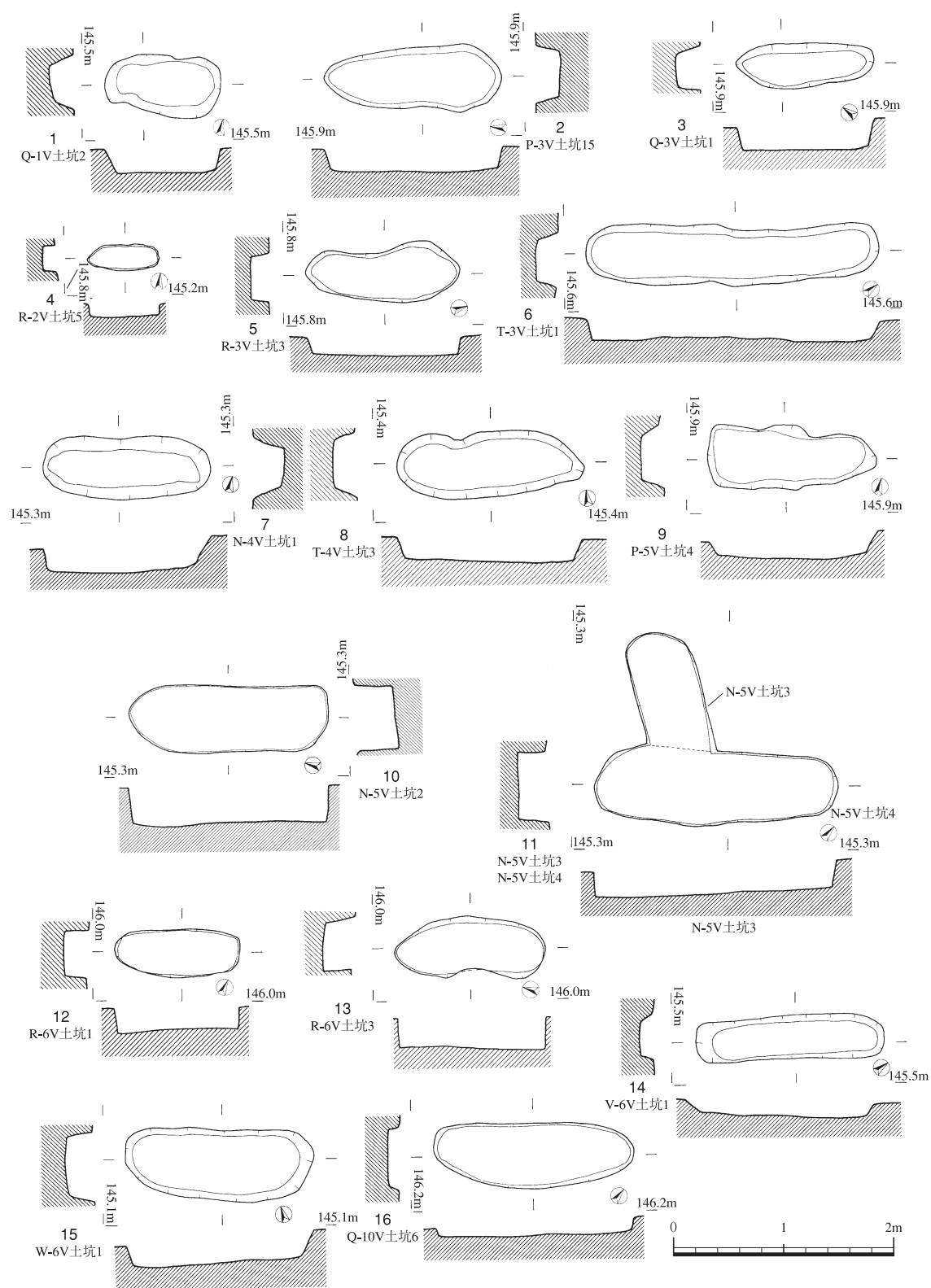
第82图 土坑 9 II a B (3)



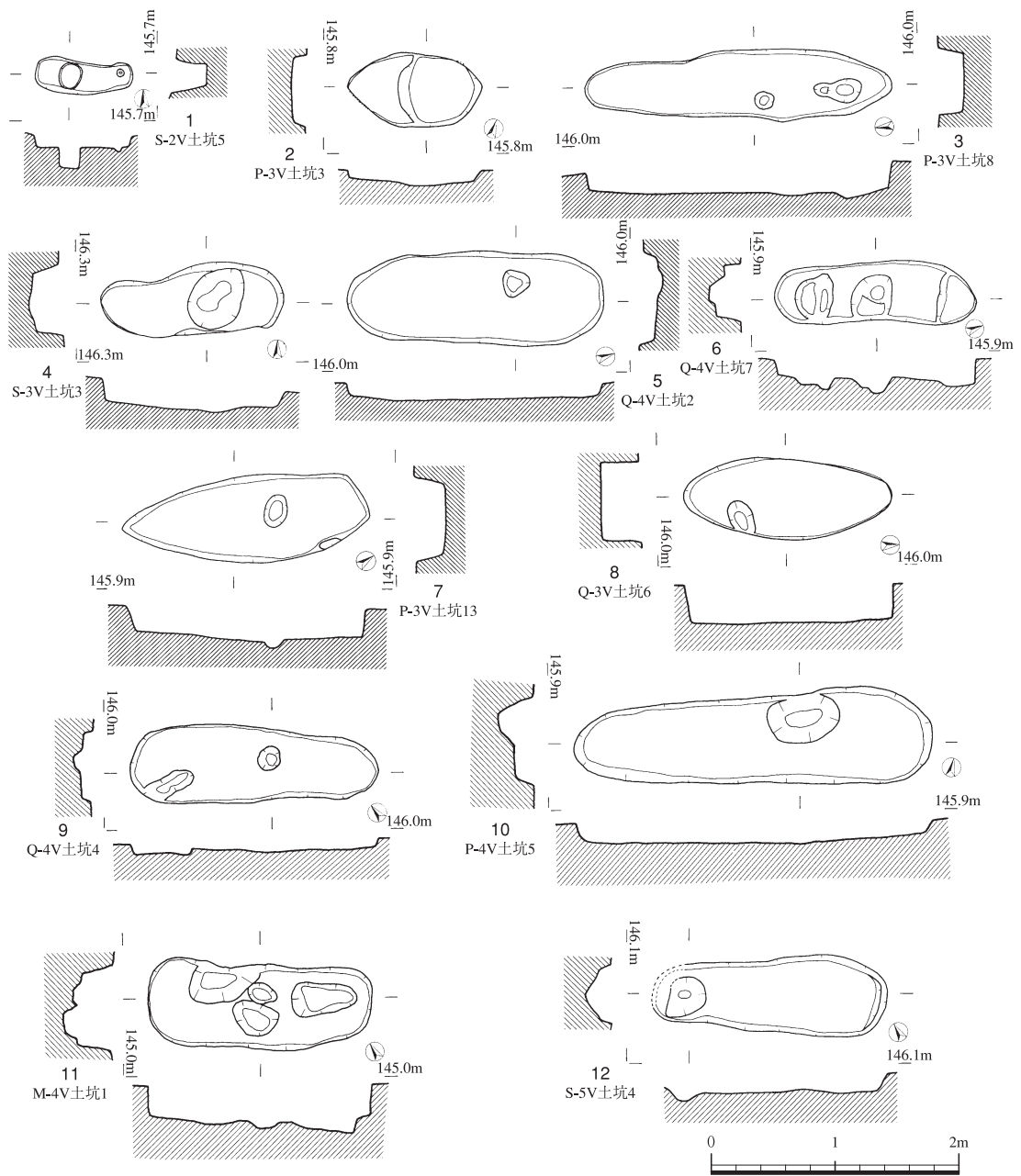
第83图 土坑10 II a B (4)



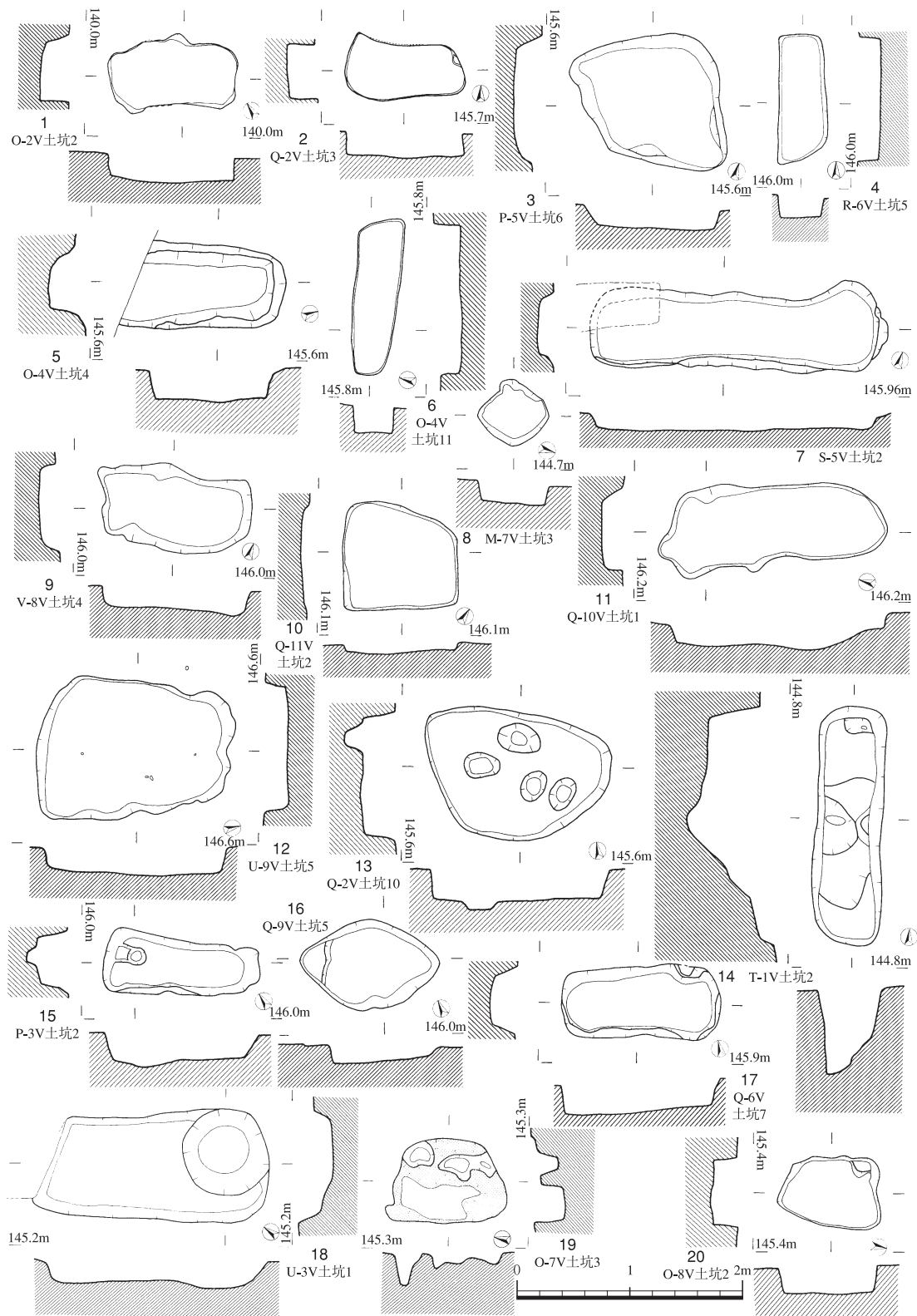
第84图 土坑11 II a B (5) II a C



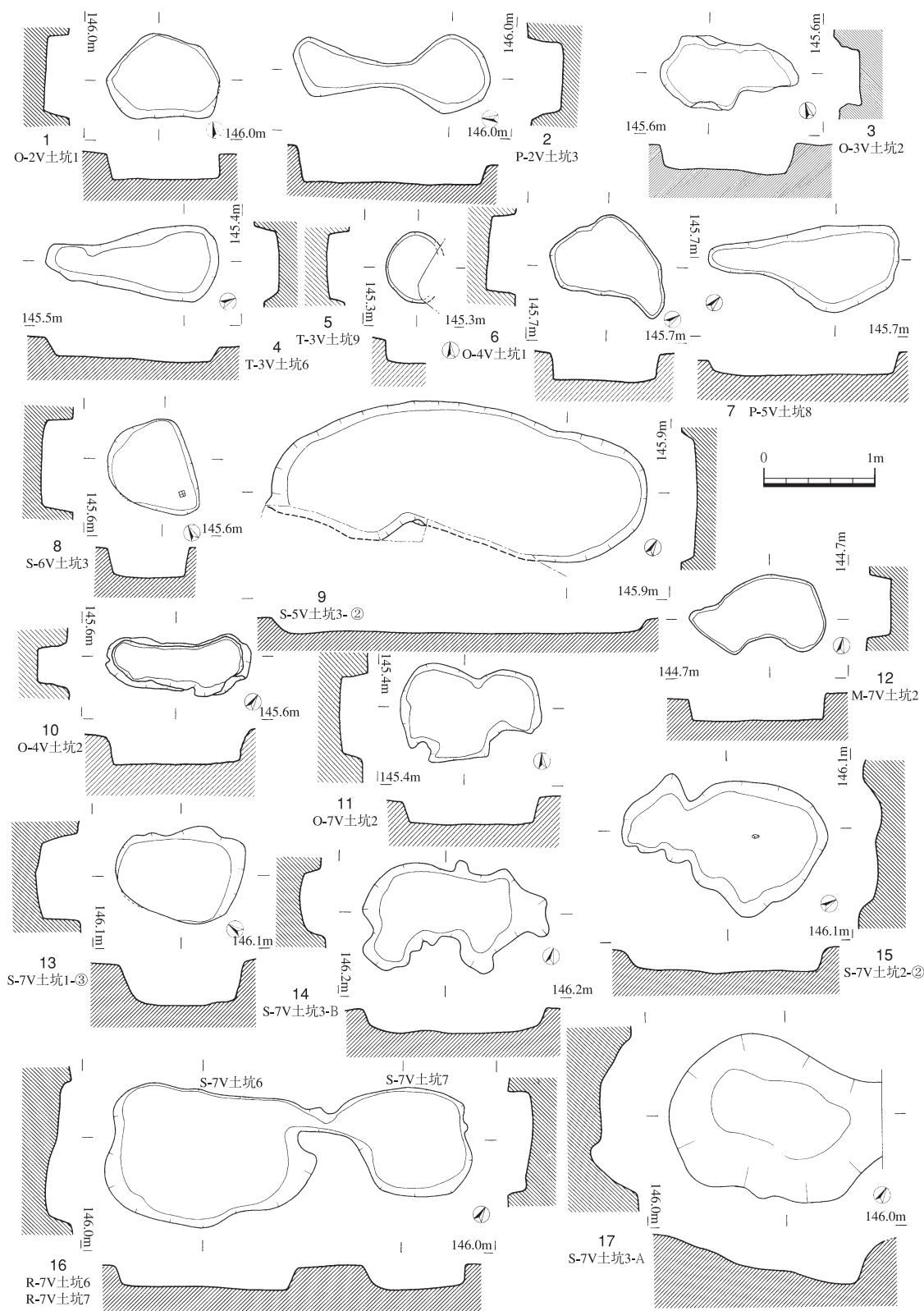
第85图 土坑12 II b A



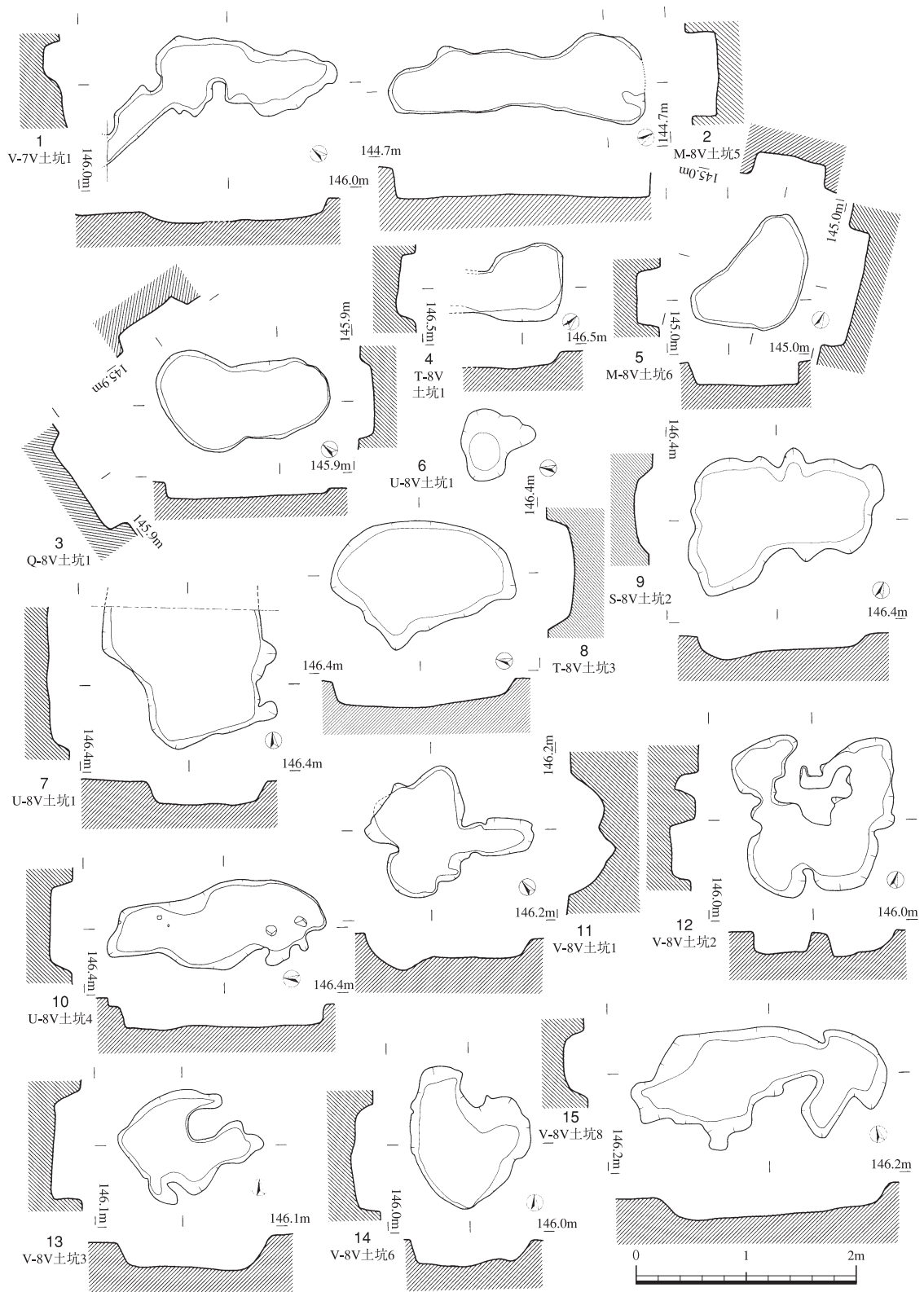
第86图 土坑13 II b B



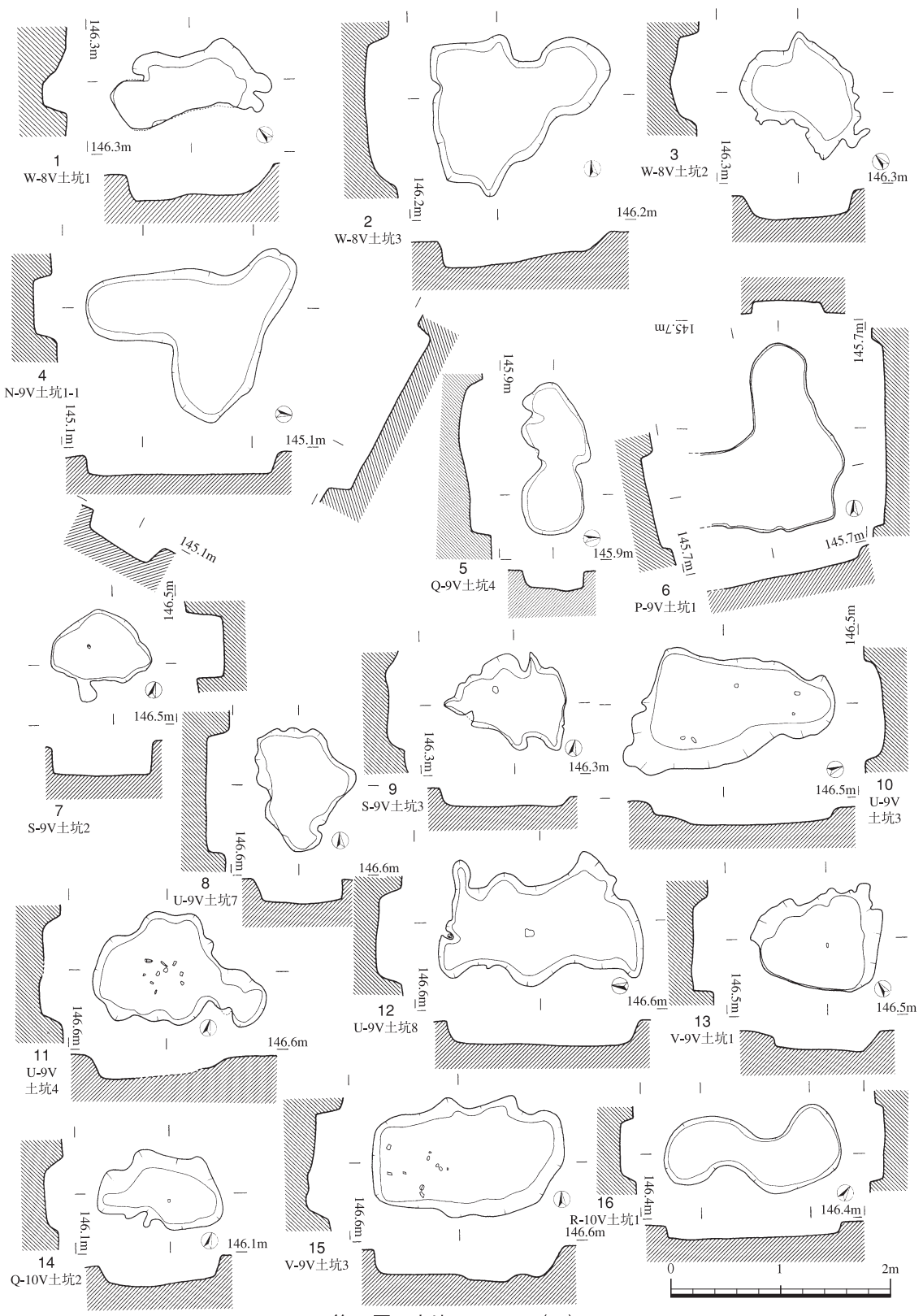
第87图 土坑14 III



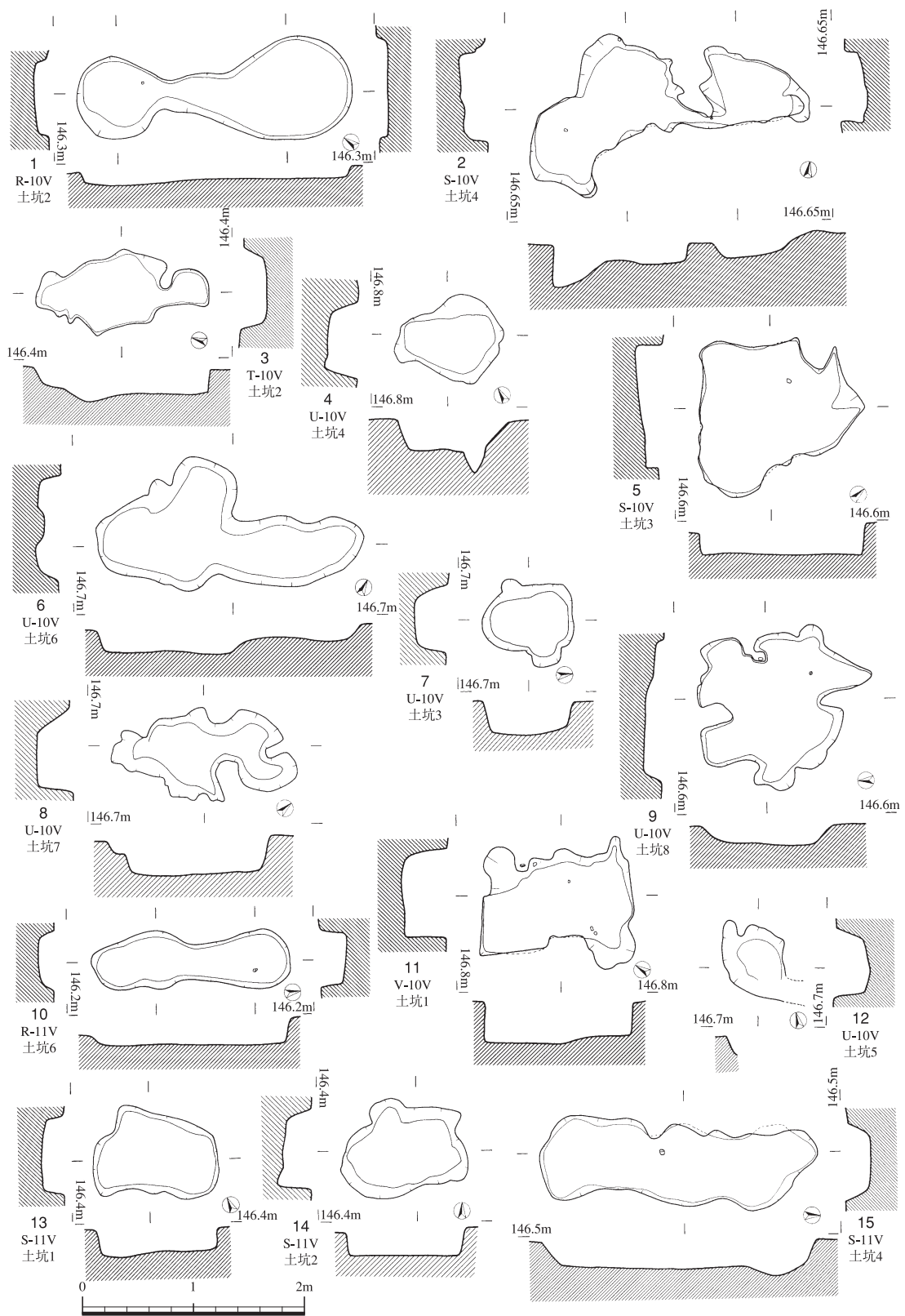
第88图 土坑15 IVA (1)



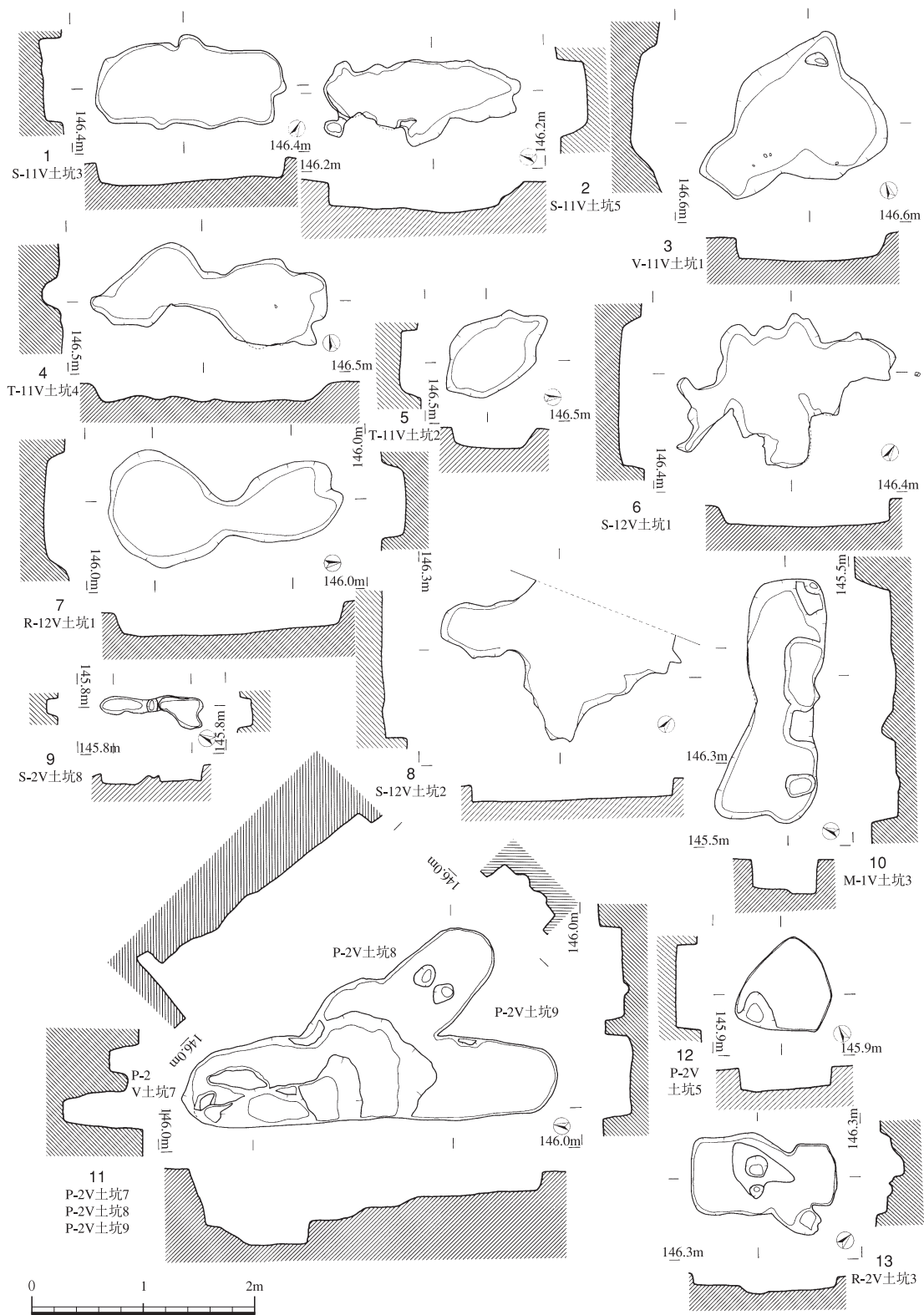
第89图 土坑16 IVA (2)



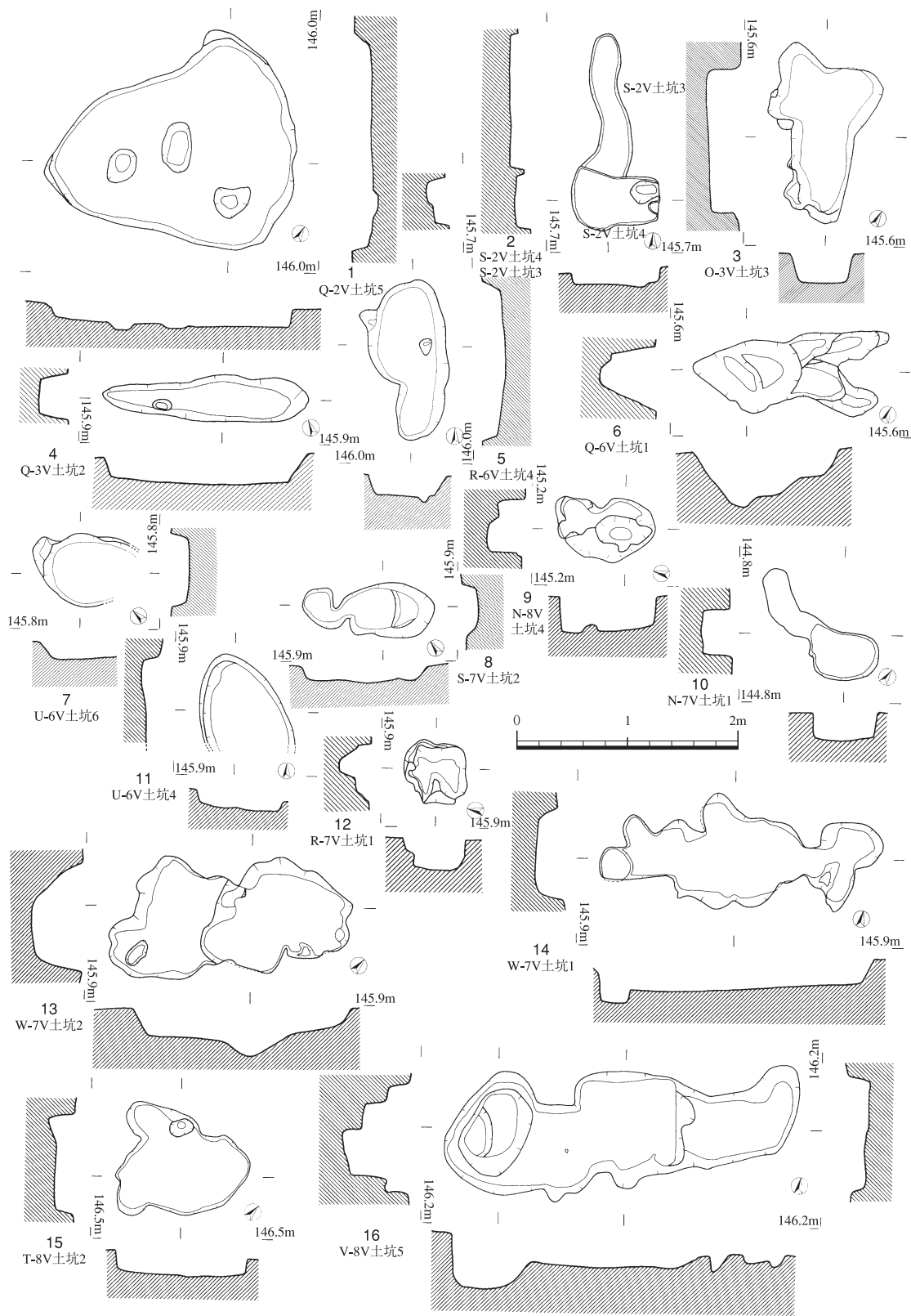
第90图 土坑17 IVA (3)



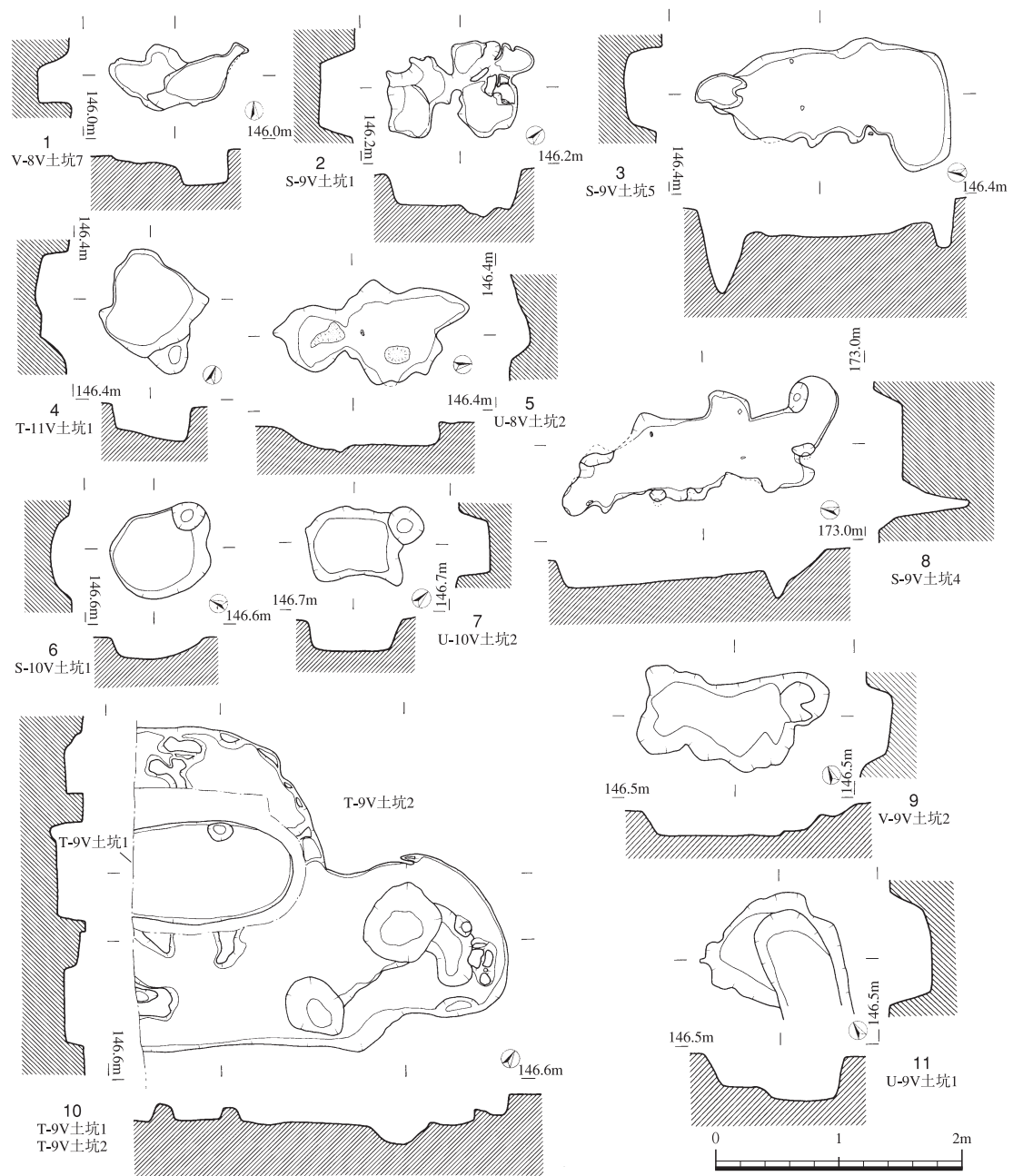
第91图 土坑18 IVA (4)



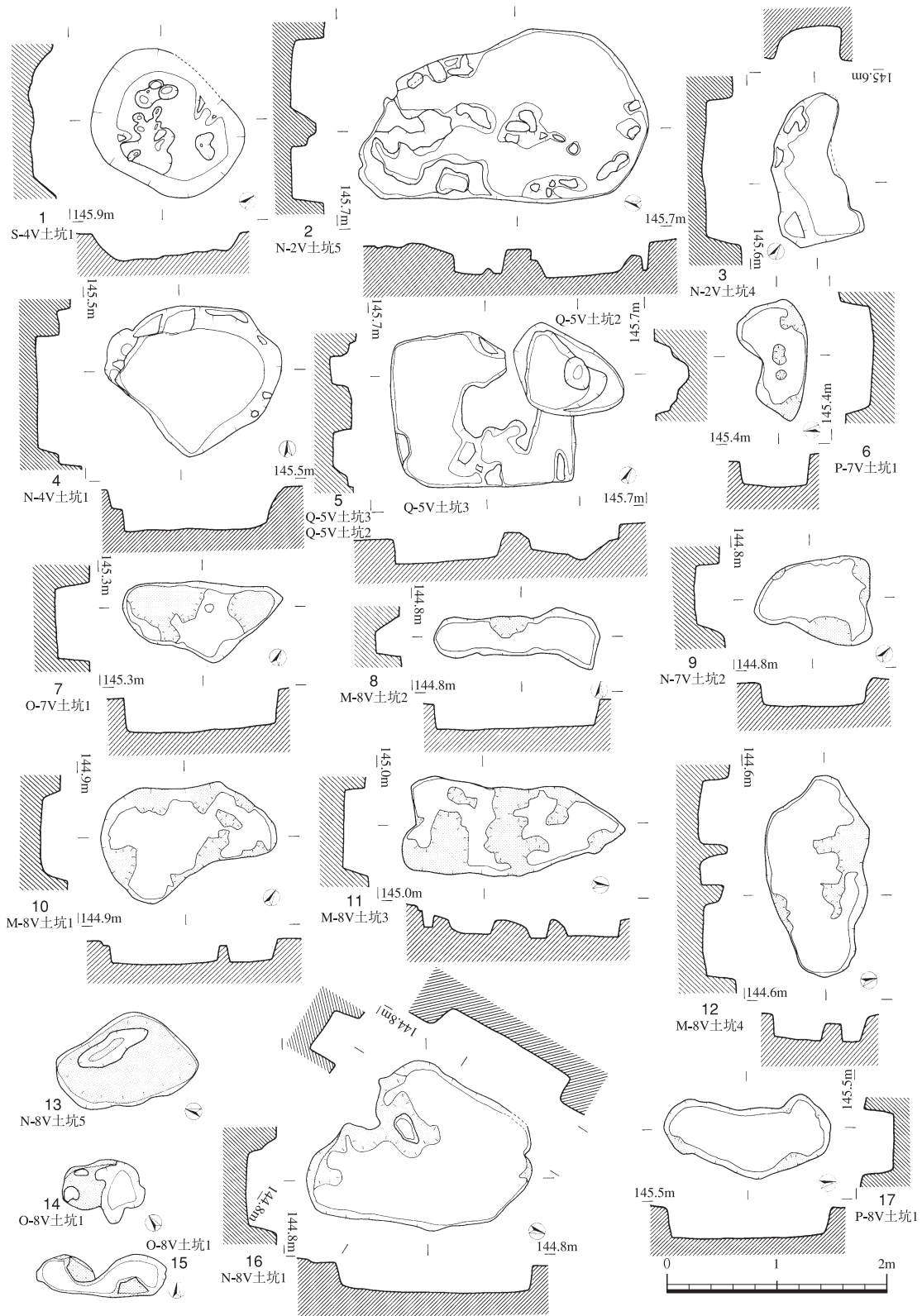
第92图 土坑19 IVA (5) IVB (1)



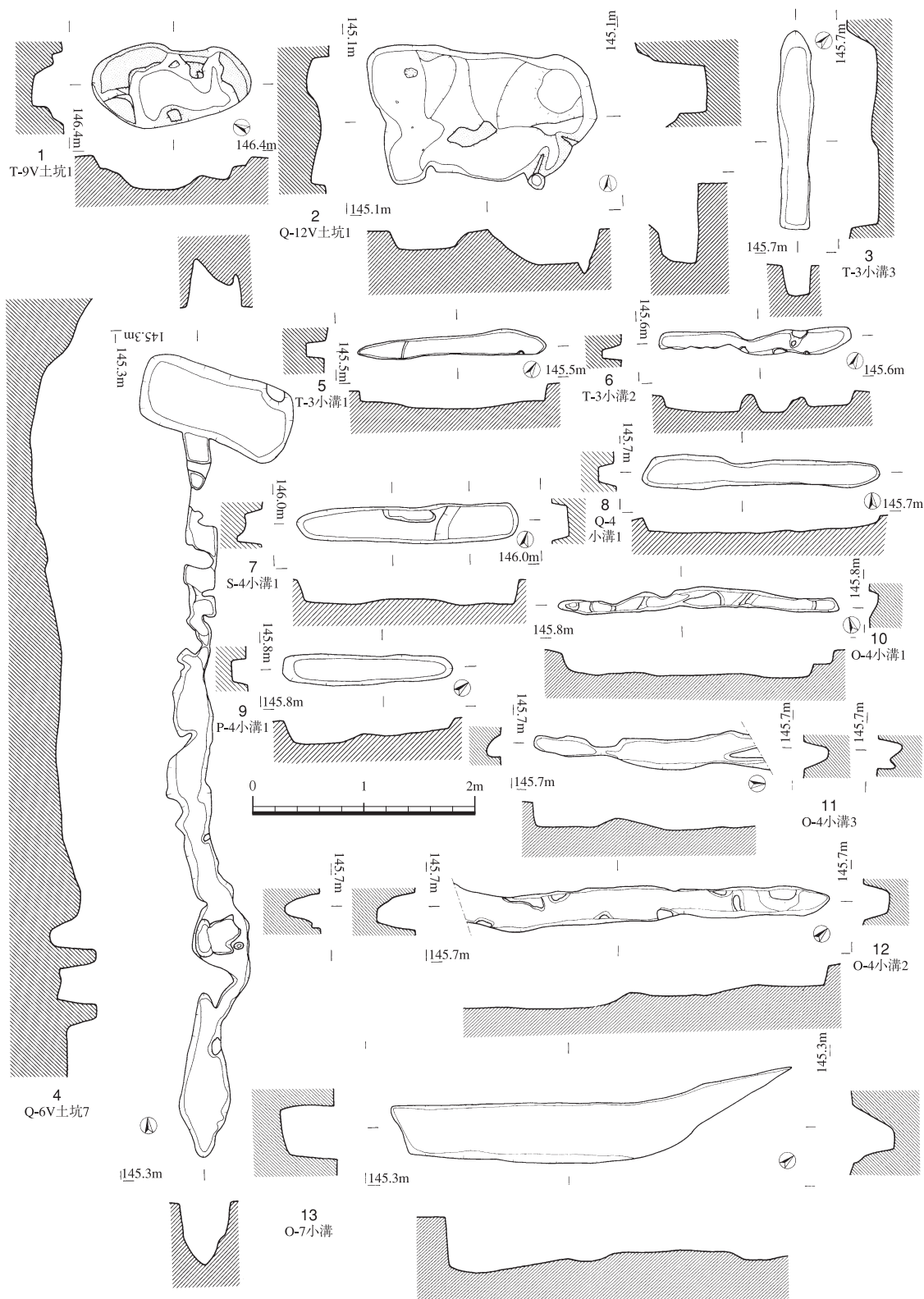
第93图 土坑20 IV B (2)



第94図 土坑21 IV B (3)



第95图 土坑22 IVC (1)



第96图 土坑23 IVC (2) V

土坑内からの出土遺物の中で、主な遺物について概略説明してみたい。

土器は、19点を掲載した。

95は外面に楔の貼り付け突帯のある角筒の土器である。破片のため全体は不明であるものの、楔は2段に付されており、楔と楔の間は2枚貝の肋が縦方向にほぼ直線的に押されており、擦り切りによると考えられる穿孔が見られることから、補修孔と推定される。楔の両端には列点の刺突が見られる。内面は主に縦方向のケズリで調整が行われている。96は口縁部であるが、口唇部にはきめ細かな刻みが付けられ、口縁部下には横方向に2枚貝の肋による押圧文が4列ほど観察できる。その下位には楔の貼り付けとそれに沿う列点が見られる。97も同様な破片である。

98～100は胴部付近の破片である。いずれも、基本的に斜め方向の貝殻腹縁による条痕が見られるものである。101は2枚貝の肋で縦方向に押圧された文様が鮮やかである。102は底部である。底面近くには縦の短い刻みが付されている。外底は丁寧なナデによって仕上げられている。

103と104は口縁部である。双方とも、口唇部には刻みが付されているが、103が点状なのに対して、104は斜め方向の短い線状に細かく付されている。104には楔の貼り付け突帯も付され、両側の刺突は下がり気味に押される。

106と107は口縁部から胴部にかけての破片である。斜め方向の条痕に2枚貝の肋を縦に、ほぼ直線的に押し、106にはさらに両側に列点の刺突を持つ楔が付される。

108～110は口縁部である。口唇部の刻みはそれぞれで異なっている。108は口唇部に対して直交するように細かく刻んでいるのに対して、110の方は刻みの方向は同様であるものの、間隔が空いており、ラフな感じがする。109は細かな刻みが斜め方向に付けられている。口縁部下の文様も108と110は類似している。2枚貝の肋を緩やかな波状を呈するように付している。それに対して、109は肋が四角い列点状に連なっている。108には楔の突帯も付される。

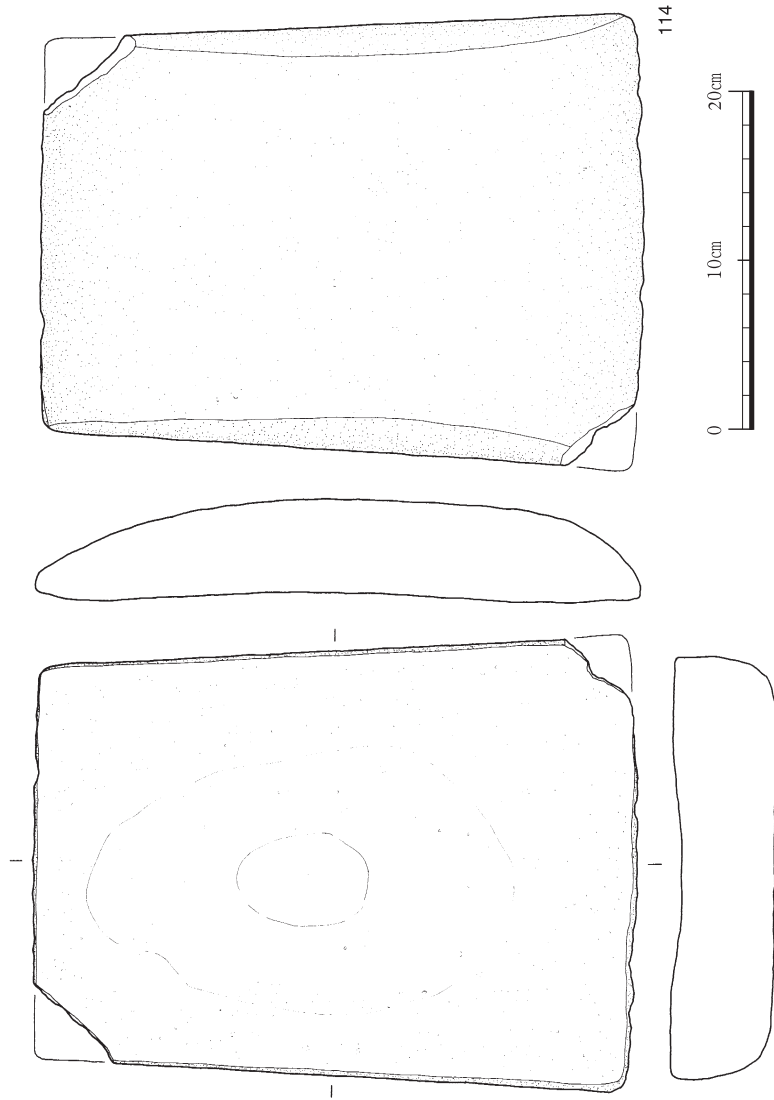
111は底部である。復元された口径は小さいものの、外面の底面近くには鋭い縦の線が丁寧に巡り、その上部は2枚貝の肋が縦に緩やかな波状に付されている。

112と113は口縁部下位から胴部にかけての破片である。112は撚り糸状のものを押圧した文様が付されている。全体の中では極めて異質な感じを受ける。113は2段になった楔の間に、非常に細やかな2枚貝の押圧が縦方向に付されている。楔の両側の列点も非常に丁寧に付けられている。

次に、石器ではS-5区で検出された土坑に置かれていた石皿を図化した。

検出した際、土坑の掘り方のすぐ近くで出土した。このことから、墓坑の可能性を考えて慎重に掘り下げを行ったが、骨とみられる破片はおろか、周囲の埋土との違いは全く観察できなかった。

石皿は使用面を伏せた形で出土した。丁寧に面取りされており、対角線上の両端を欠いている。これは、故意になされたものかどうか、にわかには判断しかねるものの、対角線の部分を欠いていることに、何か意味がある可能性も考えられる。使用面の窪みは1cm程度で、割合に浅いように感じられる。極端にツルツルしている状態でもない。裏面は、緩やかなカーブを描いており、リズムをつけての使用が考えられての造作と考えられる。作りも非常に丁寧に、形の整った石皿であるといえる。



第97図 土抗出土遺物 (石皿)

⑤方形土坑（第 98 図～第 110 図）

竪穴住居跡に形状が似た大型の土坑が検出され、95 基という多数に上り、方形を基調としていることから方形土坑と呼称した。この呼称が適切かどうかはわからないが、一応この名称で記載し、進めていきたい。大型方形土坑とするのが良いのかも知れない。

一般の土坑と同様に、形態から 5 つに分類した。1 類は正方形、2 類は長方形、3 類は台形・平行四辺形などの一般的な四角形、4 類は不整形、5 類は楕円形を呈するものである。また、内部の構造・状態は土坑の分類を援用することとした。つまり、3 つに分類し、A 類が単独・単純なもの、B 類が複合したもの、C 類は薩摩火山灰が残っているものである。

1A 類は正方形で、単純なものである。2 基が該当するようである。

1B 類は正方形の中でも内部に土坑やピットをもつなど複合したものである。13 基が該当するようである。内部に土坑をもつものが多く、それに加えて、その周辺にピットが複数個ある場合が多いようである。

1C 類は正方形の掘り方の内部に薩摩火山灰が主にブロック状となって残存しているものである。1B 類に似て土坑やピットを伴うものも見られるが、薩摩火山灰の残存を主要な要素として類別した。全体で 9 基が該当する。

2A 類は長方形の掘り方をもつものの中で、単純なタイプのものである。5 基が数えられる。

2B 類は複合した形態をもつ長方形のものである。土坑の形状も大型のものからそれほど大きくないものまで、各種のタイプが見られる。正方形のものに比べて、大型の土坑を伴う場合が多いような印象を受ける。土坑の位置も中央部ばかりでなく、掘り方の縁辺や隅にあるなど、この面でもバラエティに富んでいると言える。総数としては 39 基が挙げられる。

2C 類は長方形の掘り方の内部に薩摩火山灰が残存しているものである。残存している場所も縁辺や隅、ほぼ中央部などいろいろなパターンが見られるほか、各辺を繋ぐように延びているものや、延びてまとめ、取り囲まれた形状をなすものも見られる。総計 11 基が該当するようである。

3 類は台形や平行四辺形のほか、一般的な四角形のものである。用地外に延びるものもあることから、最終的な形状が不明な場合でも角が直角でなく、鋭角あるいは鈍角の場合には、この中に類別しているものもある。この類では、単純なタイプの A 類はない。

3B 類は複合した形態の四角形のものである。12 基がこの中に類別される。

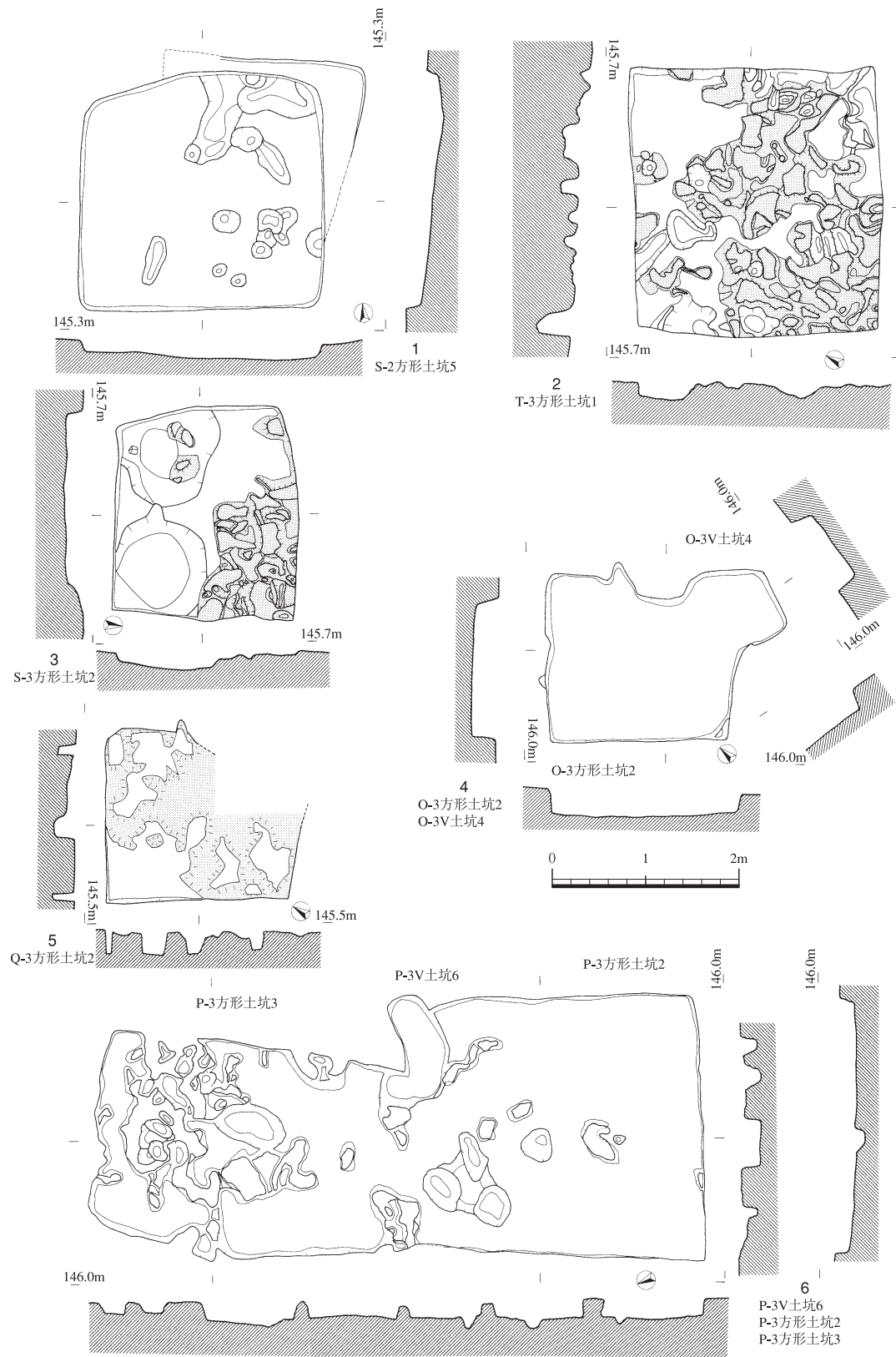
3C 類は内部に薩摩火山灰が残存するもので、四角形を呈するものである。2 基が範疇に入ると考えられる。

4 類は不整形の平面形をもつものであるが、単純なタイプの A 類は見られない。

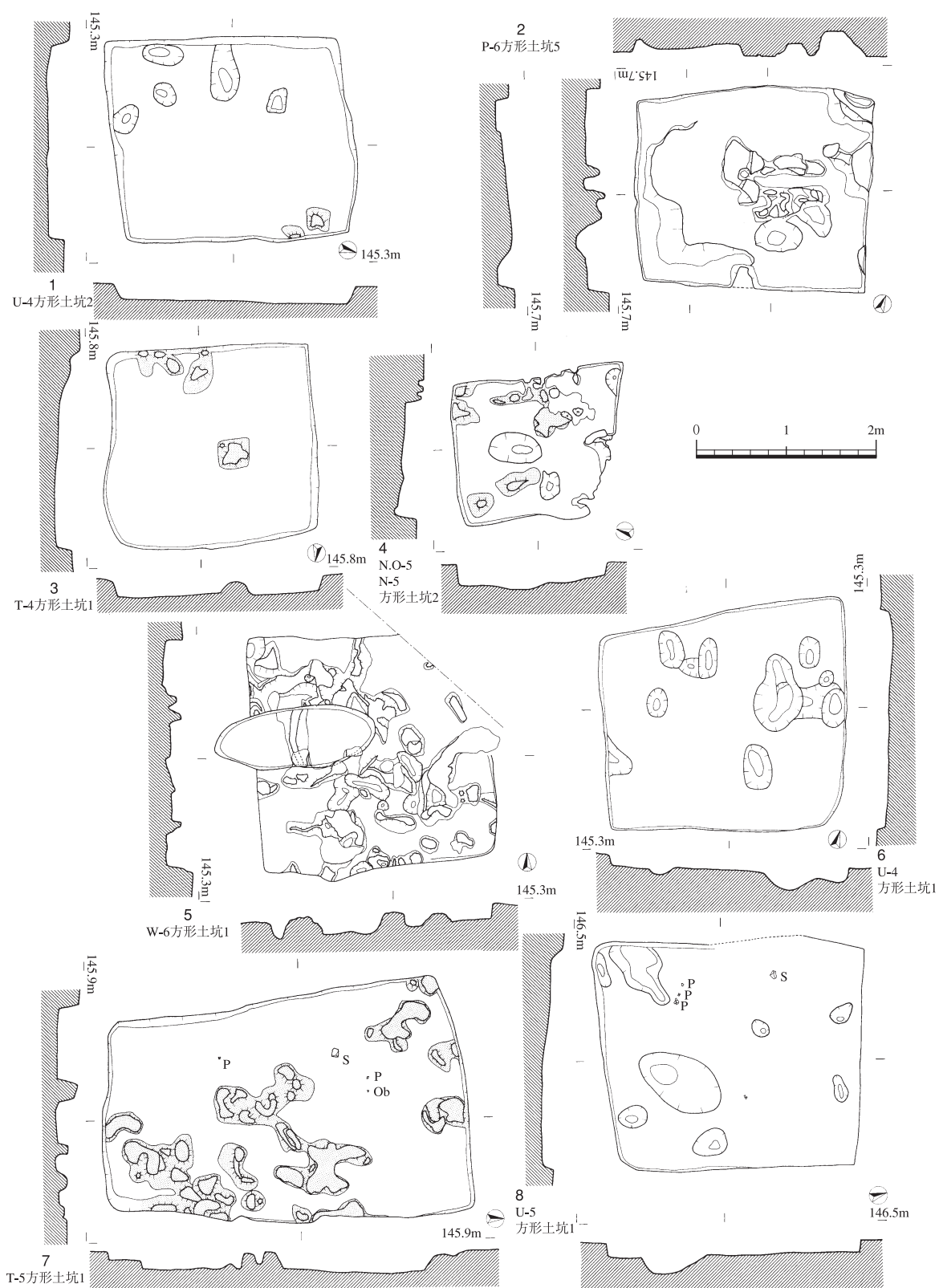
4B 類は複合した形態の不整形のものである。5 基が入る。

4C 類は内部に薩摩火山灰が残存する不整形のものである。4 基が数えられる。

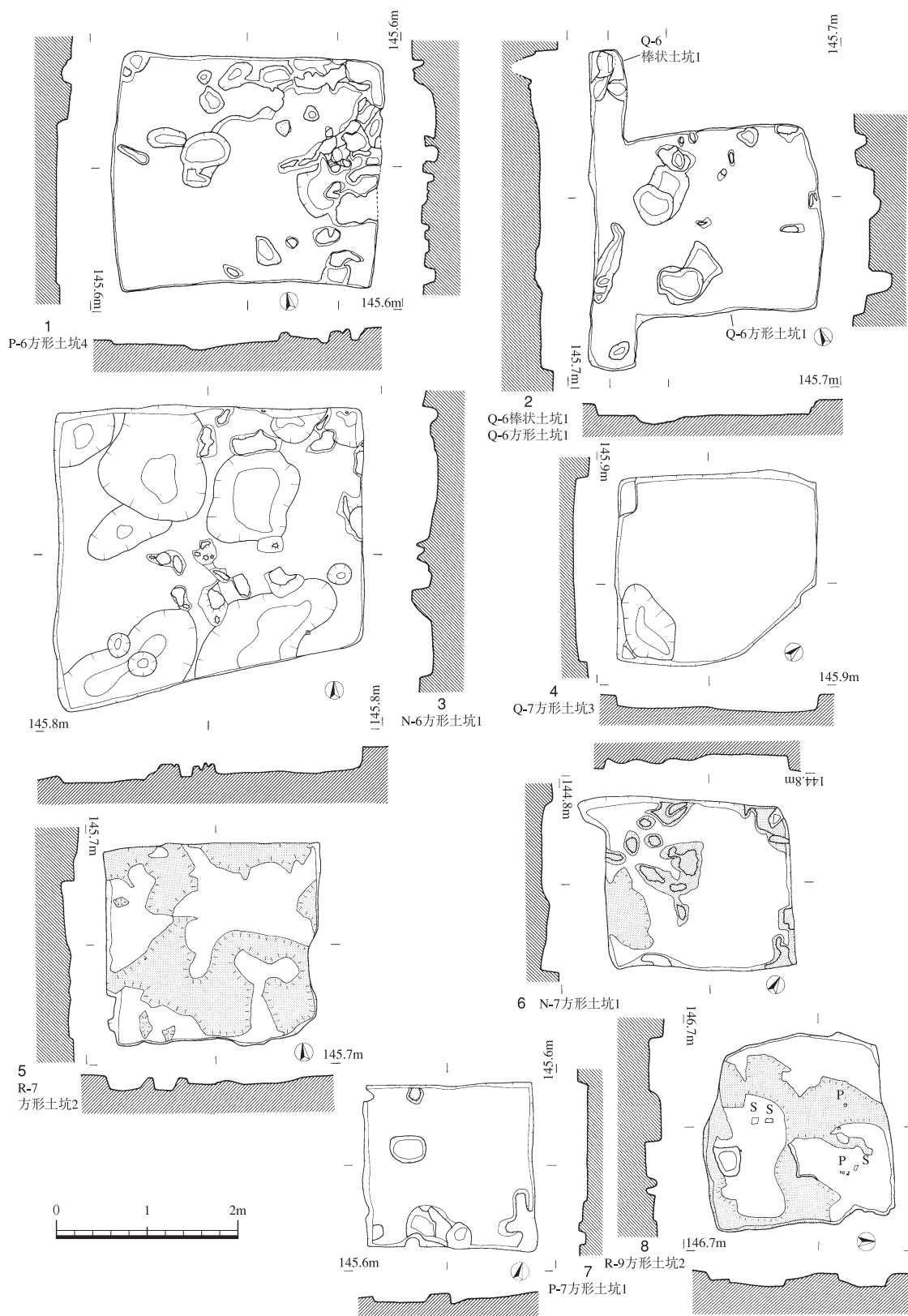
5 類は楕円形を呈するものである。方形を基本とする以上、この類別はふさわしくないと考えられるかも知れないが、4 類までの類別の中でその規模が一般的な土坑に比して際だって大きいことから、これと同様な機能が推定され、ここで扱うこととした。単純な A 類と、薩摩火山灰の残存が見られる C 類とはなく、すべて B 類である。2 基が該当する。



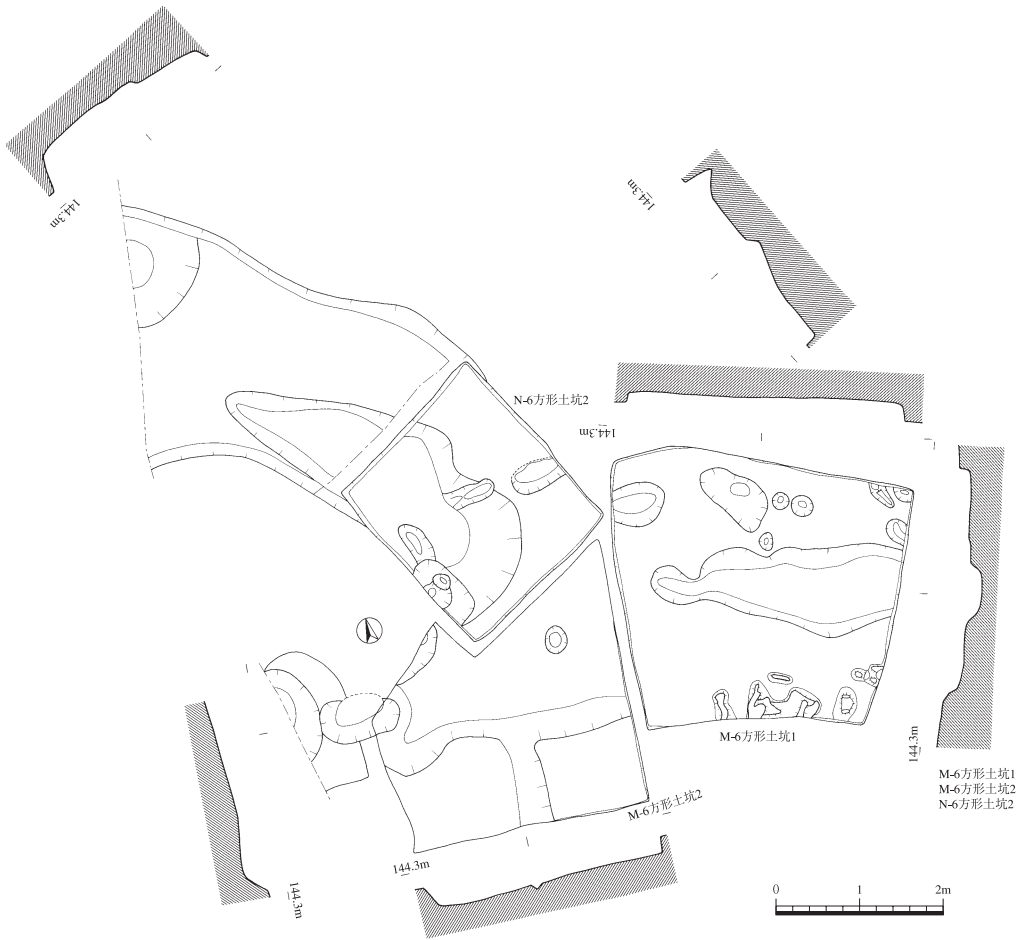
第98図 方形土坑 1 類 (1)



第99図 方形土坑 2 1類 (2)

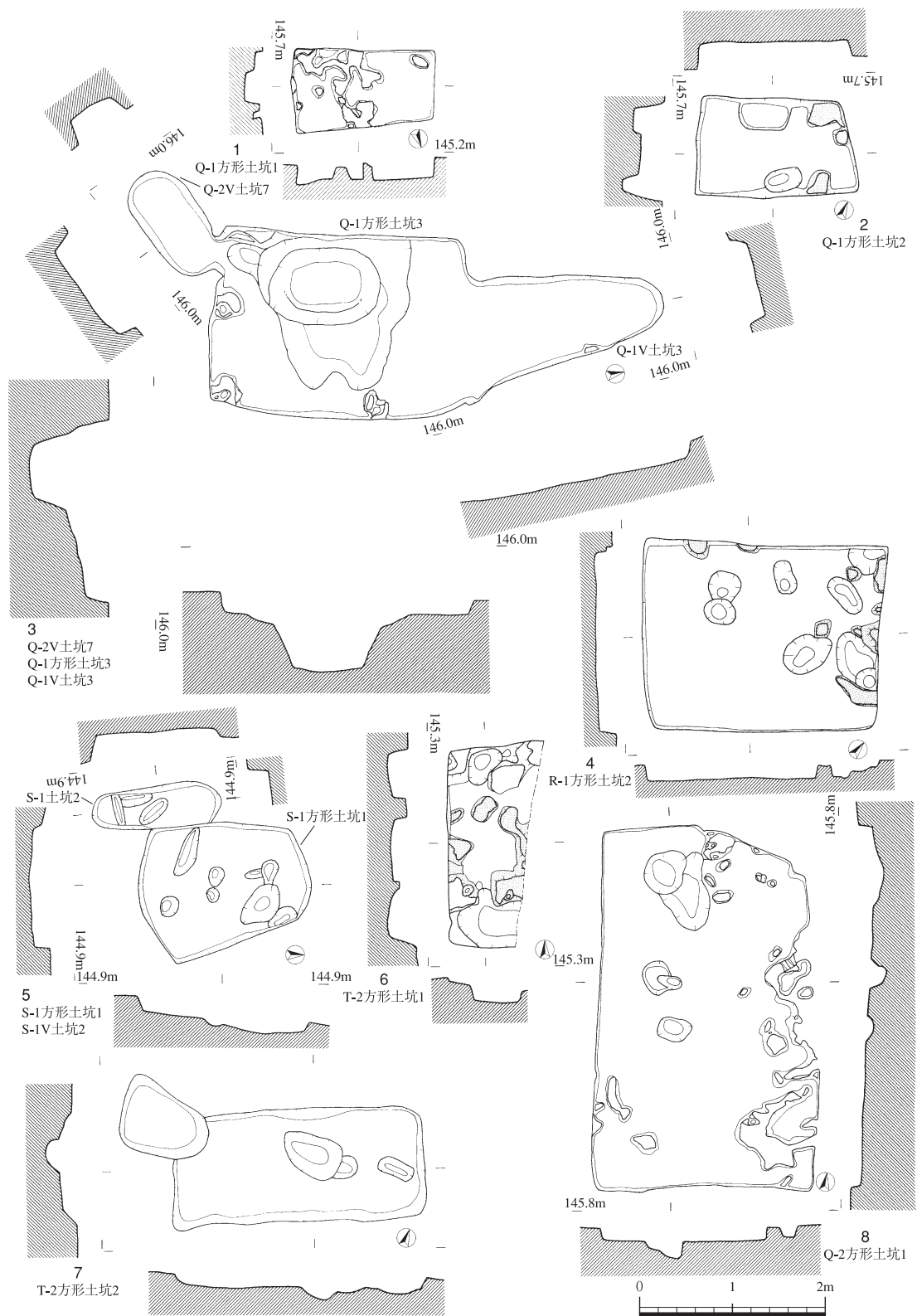


第100図 方形土坑 3 1類 (3)

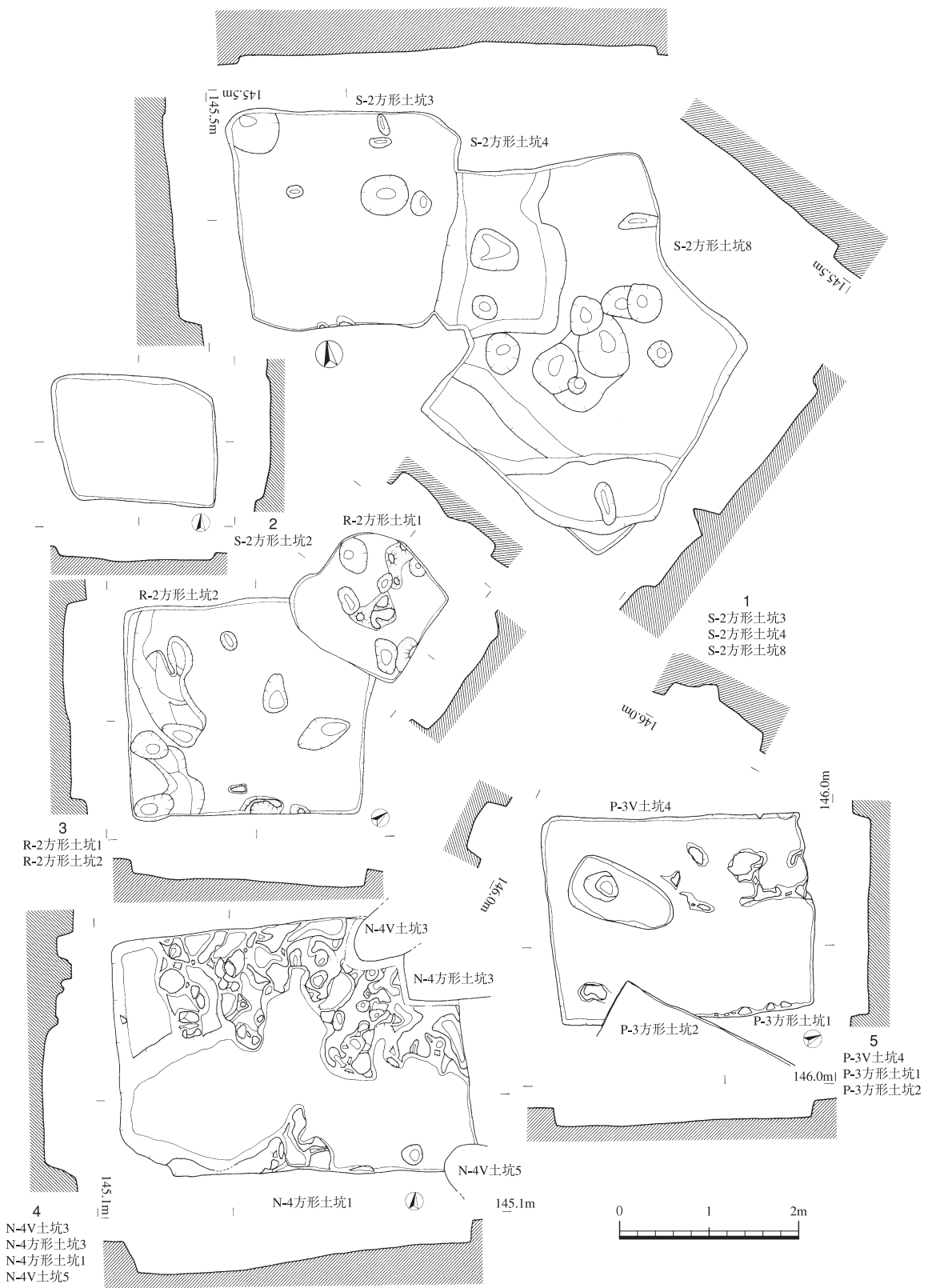


第101図 方形土坑4 2類(1)

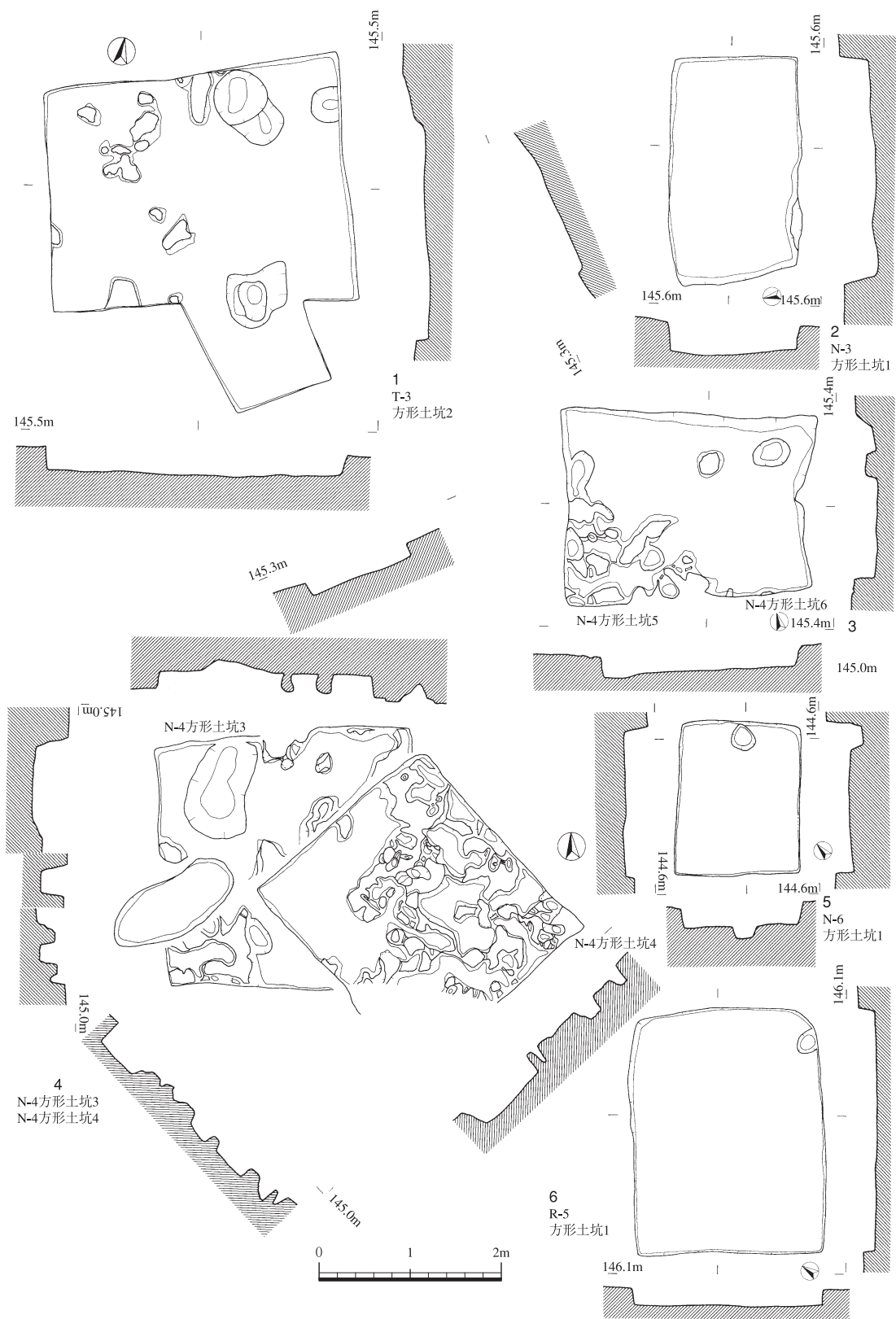




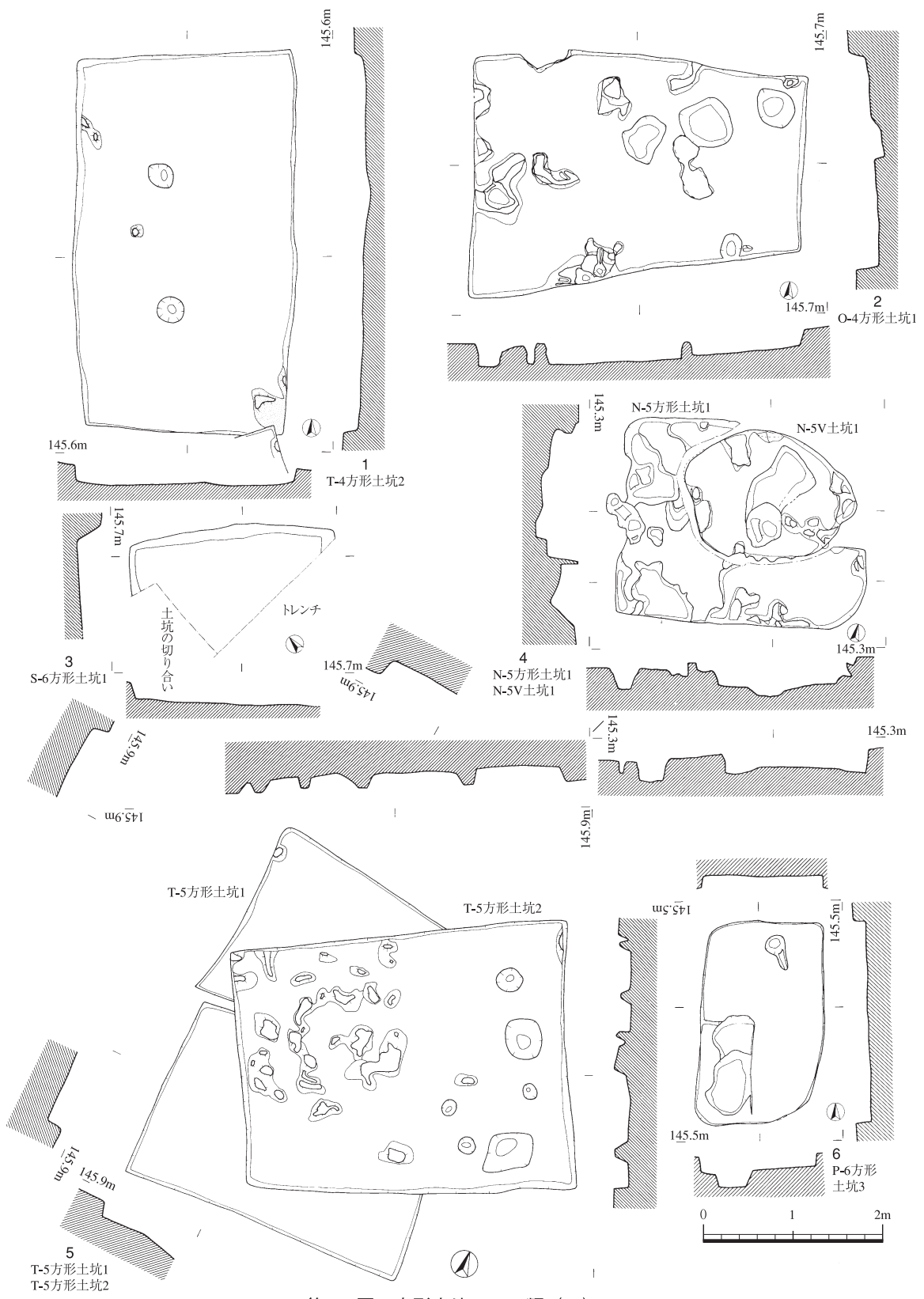
第102図 方形土坑 5 2類 (2)



第103図 方形土坑 6 2類 (3)



第104図 方形土坑 7 2類 (4)



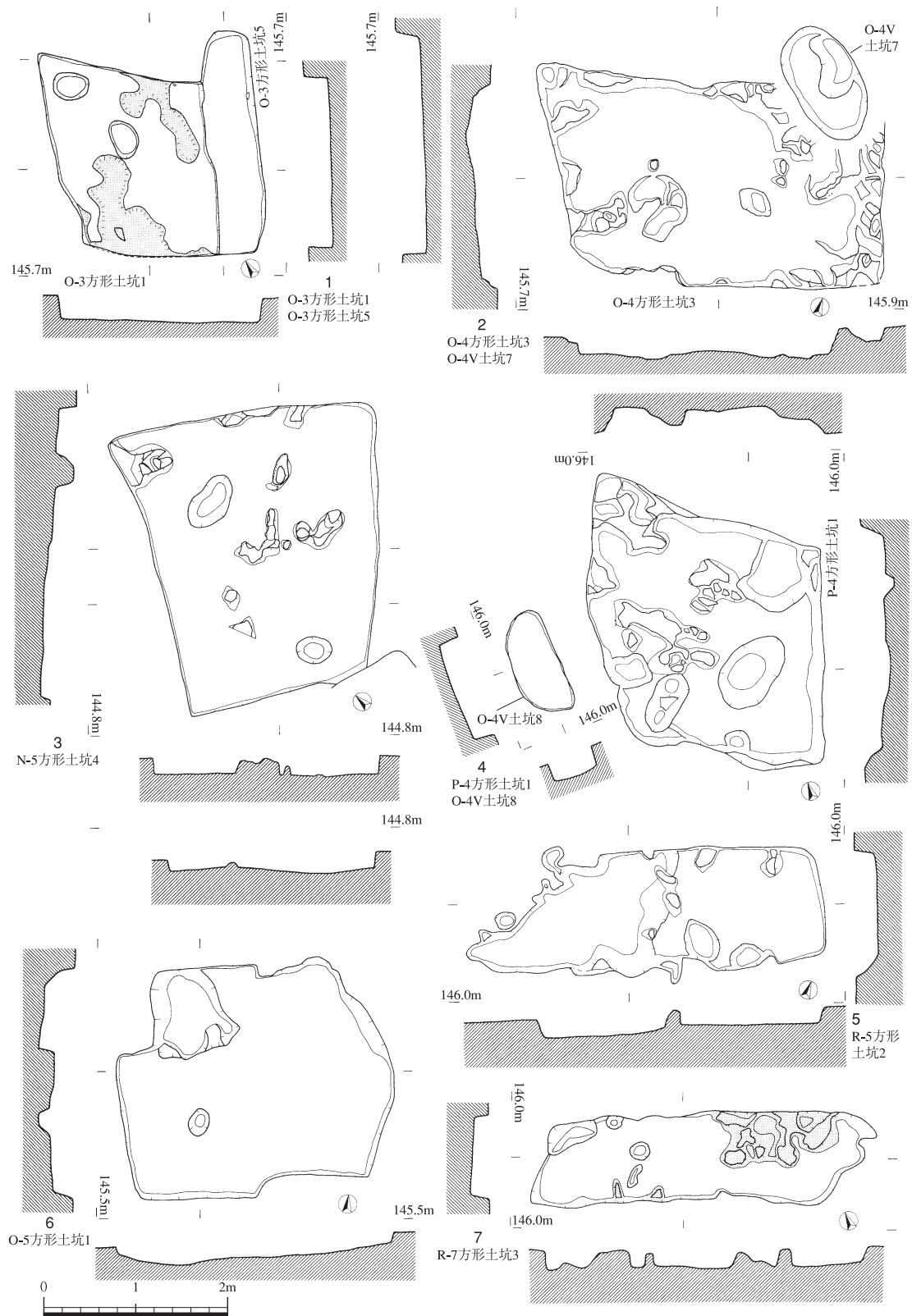
第105図 方形土坑 8 2類 (5)



第107図 方形土坑10 2類 (7)



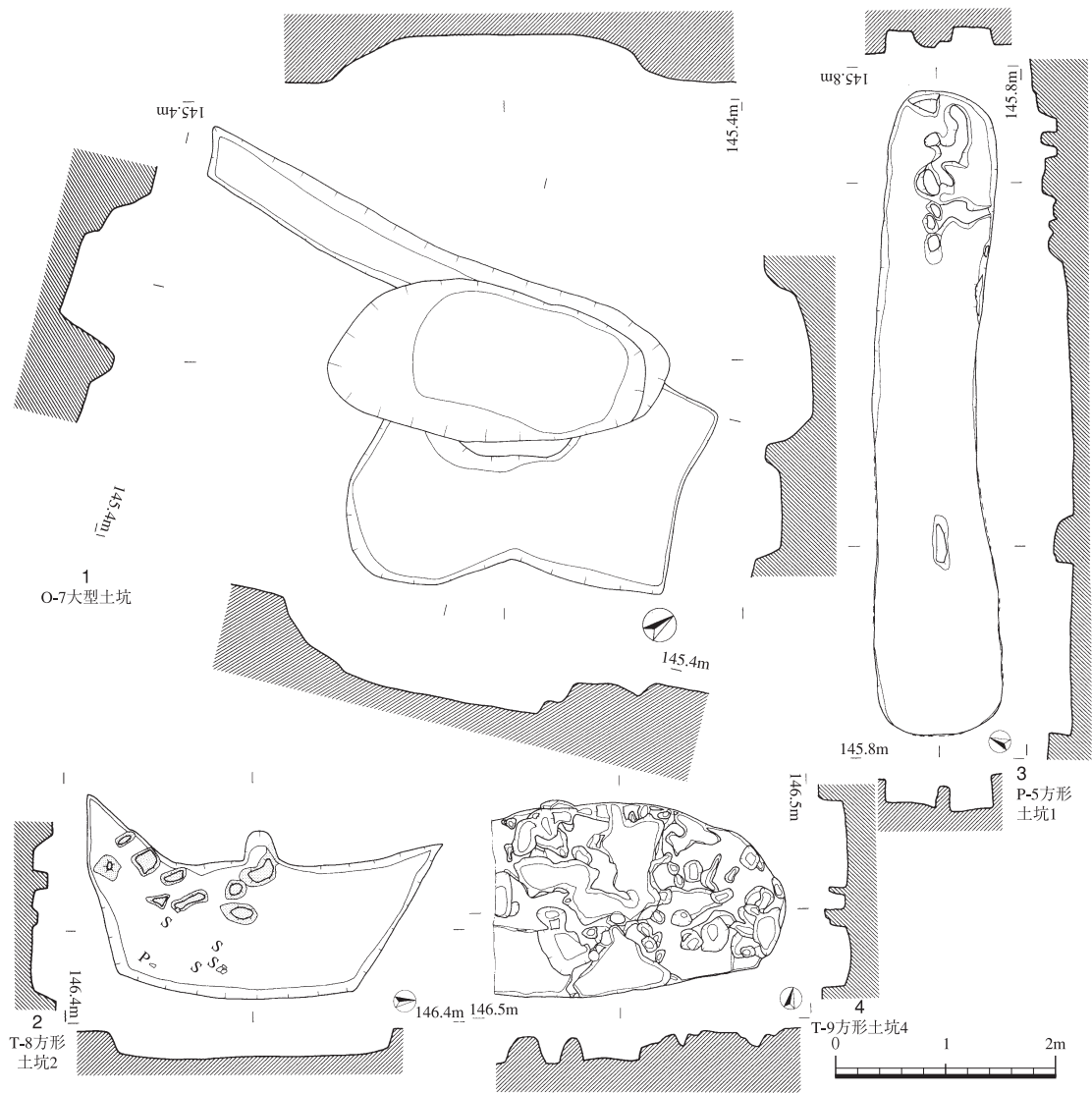
第108図 方形土坑11 2類 (8) 3類 (1)



第109图 方形土坑12 3類 (2)



第110図 方形土坑13 3類(3) 4類(1)



第111図 方形土坑14 4類(2)5類

方形土坑出土の土器（第 112 図）

基本的に、住居跡や土坑などの遺構や、遺物包含層としてのV層中から出土している土器とほとんど同じ形式のものが出土している。

ここでも、土坑内埋土から出土した遺物と同様に、個々の方形土坑に伴う出土遺物として並べるにはあまりにも少数であるため、すべての方形土坑から出土したものを掲載し、その中でも特徴的な遺物について若干説明を行っていくことにする。

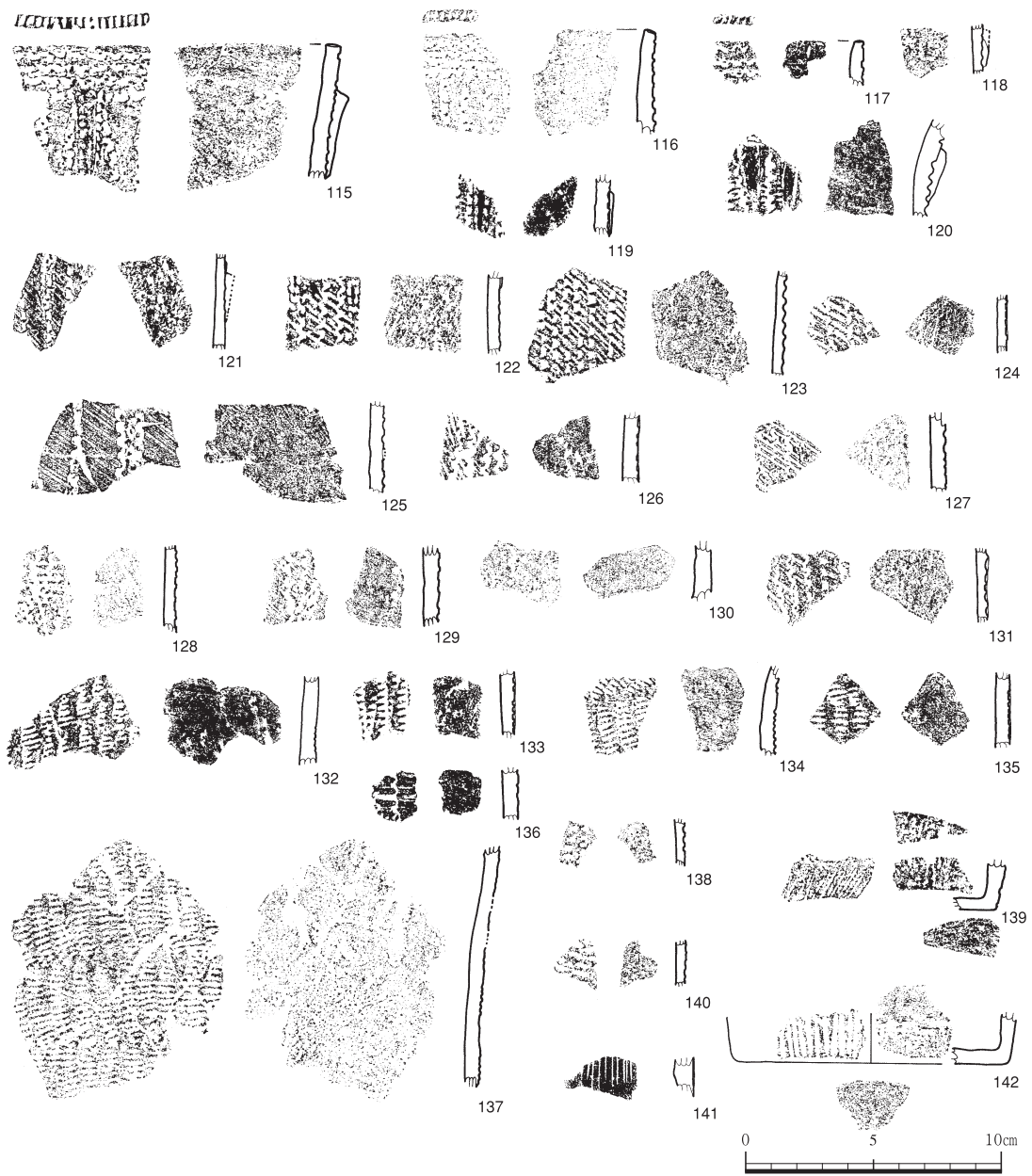
115～117は口縁部である。口唇部に細かな刻みを丁寧に巡らすのが、117は刻みの幅が大きく、116、117となるにしたがって極めて幅の細い刻みとなる。115は、口縁部外面に3条の横方向の、貝殻腹縁部の押圧による模様を巡らしている。その下には、三角形の楔を、両側に細かな列点を刺突することで貼り付けている。内面はケズリの後、丁寧なナデ調整が行われる。116は、横方向の貝殻腹縁による押圧文を巡らしていることは同様であるが、その下位には同様な貝殻腹縁の肋の部分、縦方向に押圧することで文様としていることが異なっている。117も口縁部の下位に横方向の同様な施文が見られるものの、それより下位は破片が小片のため文様は不明である。

118～138、140は胴部を中心としたものである。

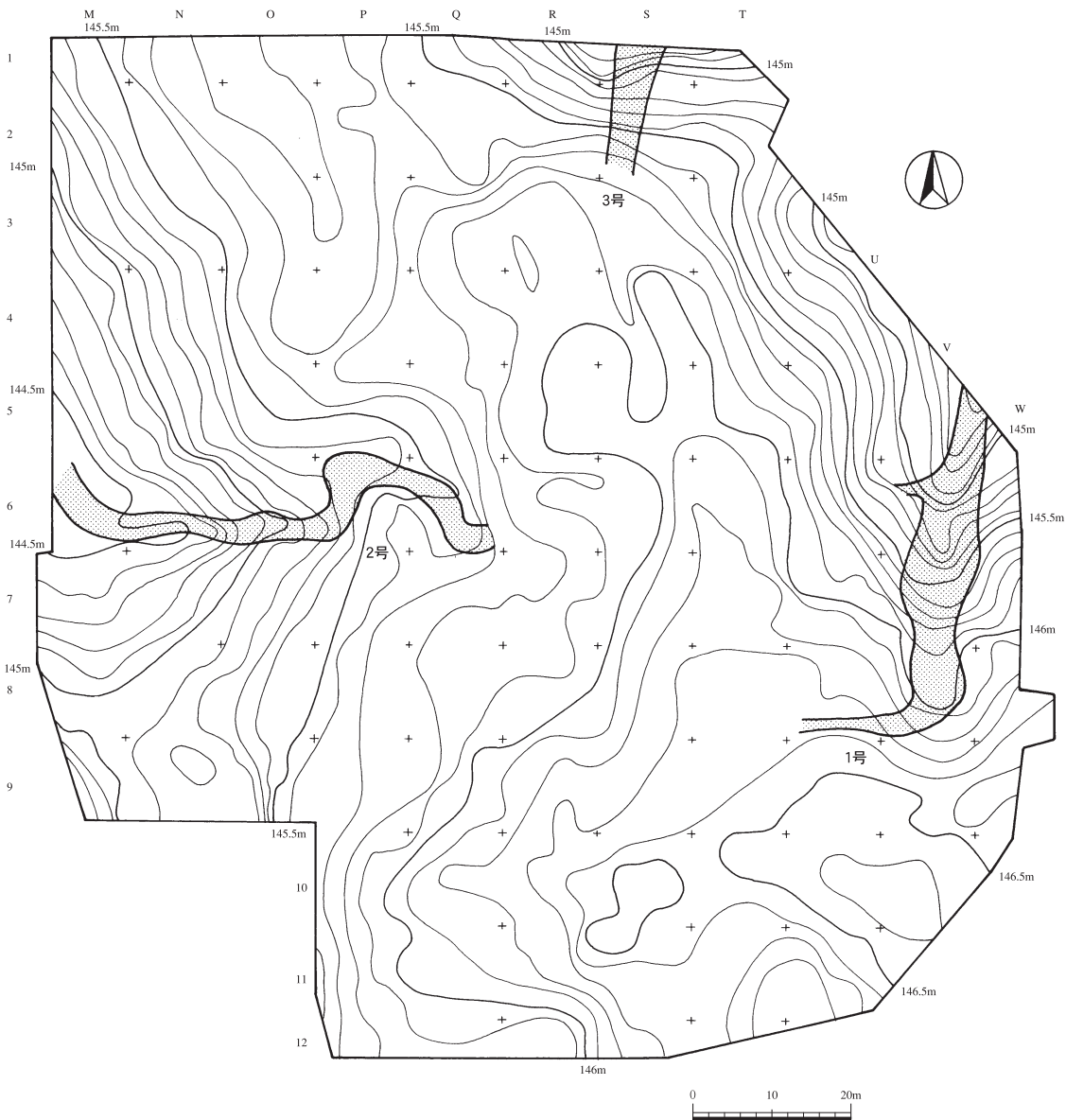
118～131は、外面を主として斜め方向の条痕で器面を調整し、その上に貝殻腹縁を押圧して施文するものである。118は楔の一部であるが、破損が著しい。119も楔を持つものであるが、小さいながらもしっかりした楔の両側には、若干下方に引いたために三角形に見える刺突が見られる。そのほか、縦方向の貝殻腹縁による押圧文が施される。120にも楔が付されており、両端には若干横長になる刺突の列点が見られる。上部が外反することから、口縁部近くと考えられる。121にも楔が見られるが、大きく損壊している。両側には細かい円形の列点があり、先端を丸く尖らせた串状の施文具で刺突して楔を貼り付けたものと考えられる。122～131は破片に楔が見られないものである。斜め方向の条痕に、縦方向を基本とする貝殻腹縁による押圧が見られるものである。これらの内面はケズリが主体の調整が行われているが、中にはナデやミガキによる調整も見られる。

132～138、140も胴部ではあるが、これまでのものとは外面の施文が異なっている。条痕による器面調整も見られない。これらのものの施文は、貝殻の腹縁部を使っていることは同様であるが、腹縁を器面に置いた後、貝殻の頂部方向に向かって引きながら押さえているために、細長い筋状の模様が扇状に広がって見える点が大きく異なっている。この模様を、基本的には横方向に施文しているが（132など）、中には斜め方向に付されるものもある（134）。また、等間隔にほぼ並行に施されるもの（134）や縦横に振りながら適当な間隔で施してあるもの（132）、可能な限り隙間なく施そうとしているように見えるもの（133）など、バラエティーがある。138と140は小片のため、詳細はよくわからない。137は割合に大きな破片である。施文の方法としては134に近いものと考えられる。内面はケズリによって調整されている。

139、141、142は底部である。外面の接地面付近に細く短い沈線が施されている。基本的には縦方向であるが、中には139のように斜めに施されるものも見られる。縦の沈線でもそれぞれ差異が見られ、141は極めて細く、逆に142は極めて太く施される。



第112図 方形土坑出土遺物



第113図 道跡全体図(1)



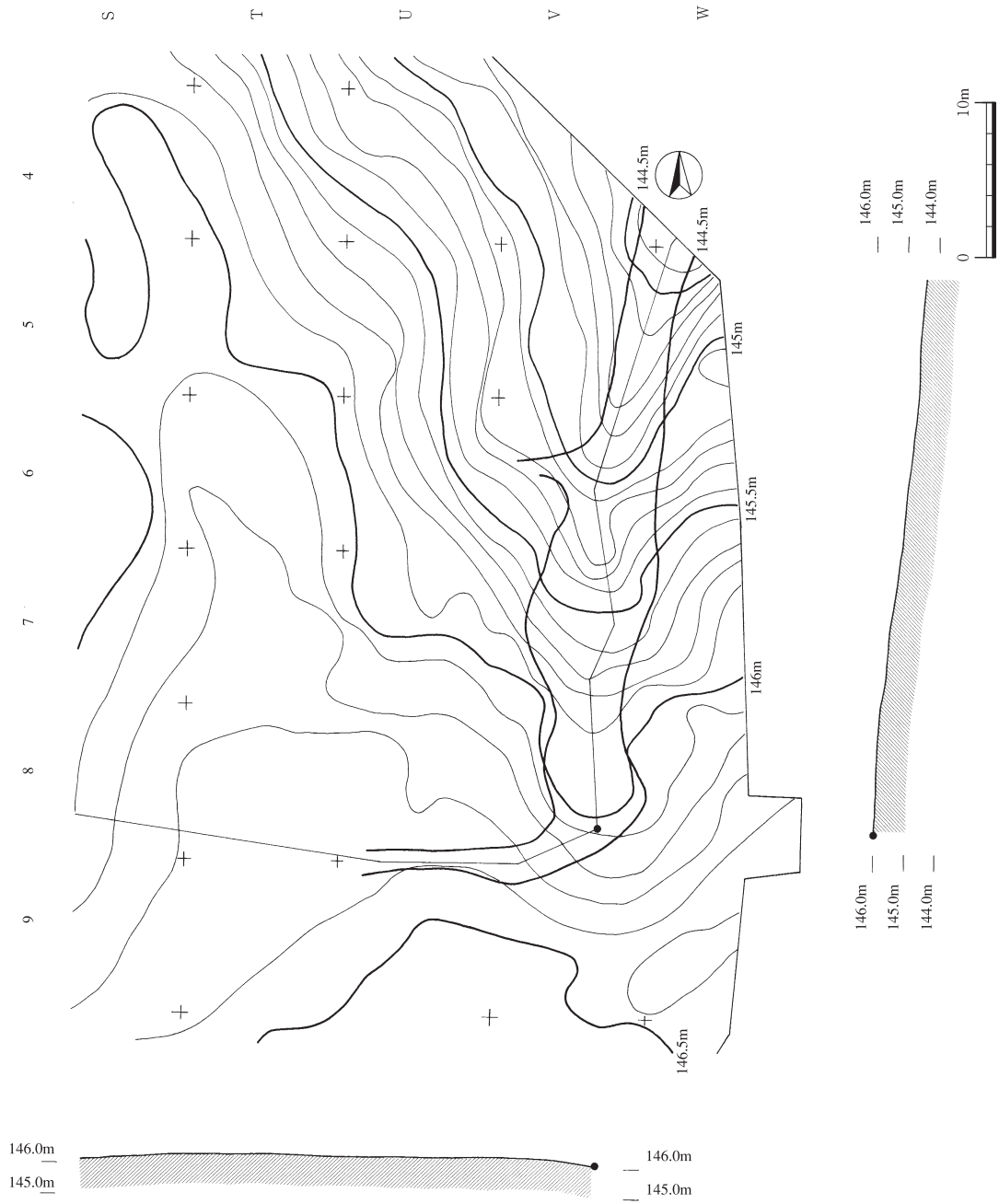
⑥道跡（第 113 図～第 116 図）

調査区域の東・西・北の 3 か所から 3 本の道跡が検出された。道跡の検出に当たっては、層位掘りによって均等に掘り下げて行った際に、周囲と違って濁った状態の帯状に連なる部分が検出された。周囲より若干堅くなっている、しかも中央部を中心としてはいたが窪んだ状態となっていたことと、遠くから眺めた際に硬化面がテカテカに光っていたこと、道の部分の土壤が濁って変色していたこと（図版参照）などから道跡と判断した。

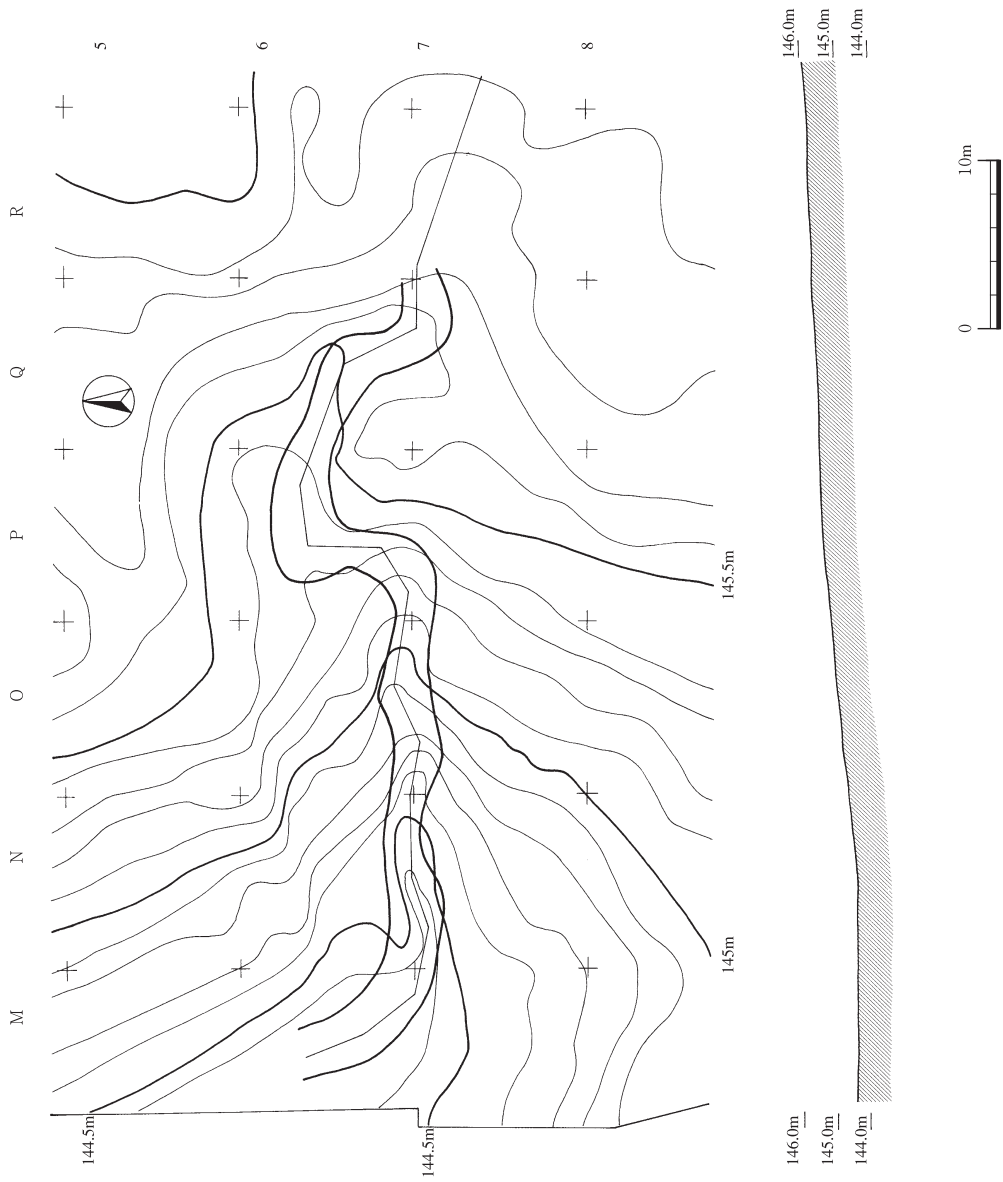
1 号道跡は、調査区の東側で検出された。グリッドでは U～W - 4～9 区にあたる。規模は、幅は最も狭い部分で 1.2m、最も広い部分で 7.4m あり、検出した長さは 57.2m に及ぶ。道は V・W - 4・5 区を最も低い場所として南側に向かって上がって行き、途中、U・V - 6 区で一旦西方向に分岐して上がる。本流はそこから幅を広げながら引き続き南に上がって行った後に、V - 9・10 区で大きく西に進路をとっている。そして、U - 9・10 区まで上ったところで終わっている。コンターで見る最も低いところは標高 144.3m 付近であり、これに対して最も高いところは標高 146.4m 付近である。したがって、比高差は 2.1m ということになる。また、これをもとにした計算上での傾斜角は、始点から分岐点までの間では約 5 度、分岐点から終点までの間では約 2 度となる。もちろんこの数値は発掘調査中に現場で計測したものではないため、正確さという点では劣るかも知れないが、現地で計測したとしても区域毎に異なった数値となることが考えられることから、いずれにしてもその平均値を出さねばならず、それからすると図上の数値ではあるものの、あながち間違った数値とまでは言えないと考えられる。この道(跡)は遺跡の遺構の位置関係などから、東の谷側と集落の中心部を結ぶ道であったと考えられる。

2 号道跡は、調査区の西側で検出された。グリッドでは M～Q - 5～7 区にあたる。規模は、幅の最も狭い部分で 2.0m、最も広い部分で 4.5m あり、検出した長さは 58.0m に及ぶ。道は M - 5 区を最も低い場所として一旦南に向かって上がって行き、M・N - 6・7 区で東に向きを変え、そのまま東方向に上がって行った後で、P - 6・7 区で北に向きを変えた後、P - 6 区でさらに東に向かった後で Q - 6 区で南に行き、Q - 6・7 区で三度東に向かって上がって行って終わっている。コンターで見ると最も低いところは標高 144.3m 付近であり、最も高いところの標高は 145.7m 付近となり、比高差は 1.4m ということになる。また、これをもとにした計算上の傾斜角は、全体を通してみると下部で約 5 度、上部で約 1.5 度となる。西の谷とを結んでいよう。

3 号道跡は、調査区の北東部で検出された。グリッドでは S - 1～3 区にあたる。規模は、幅の最も狭い部分で 3.0m、最も広い部分では 5.5m あり、検出した長さは 19.0m である。ただし、コンターによればそれよりも更に上部、S - 5 区にまで延びていると考えられる。道は S - 1 区を最も低い場所としてひたすらに南の方に上がって行く。途中で向きを変えることはない。道跡として検出した S - 3 区までの最も低い S - 1 区での標高は 144.4m、最も高い S - 3 区での標高は 145.8m であり、比高差は 1.4m ということになり、この部分での傾斜角は 11 度とほかの道に比して倍以上傾斜がきついと言えそうである。ただし、この部分からコンターによる道跡の推定最高地点との傾斜角は 1.5 度であり、ほかの道跡と変わることがない。北の谷からしばらく行くと、東に向きを変えたと考えられ、1 号道跡に繋がっていた可能性が指摘できよう。



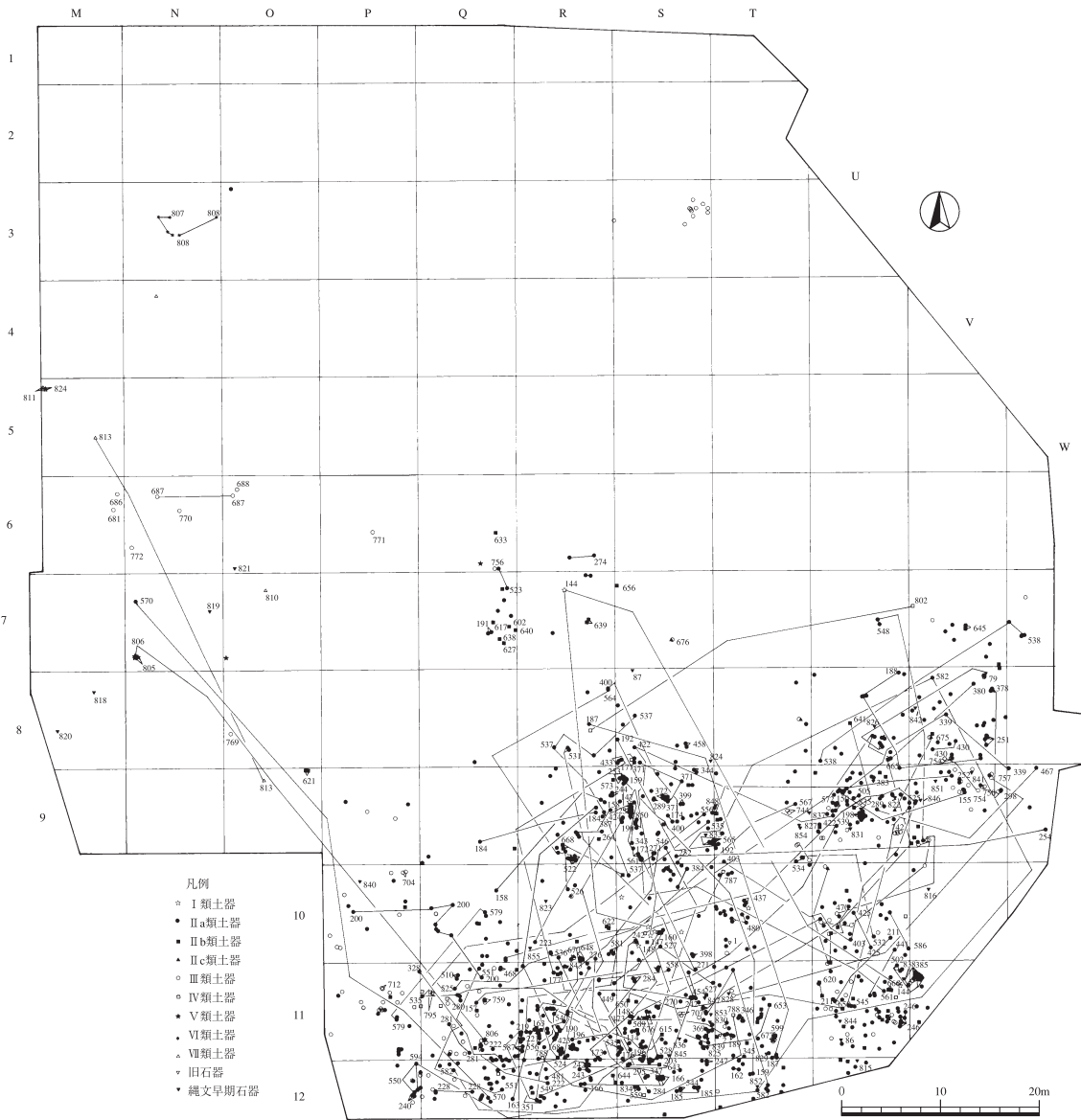
第114图 1号道迹



第115图 2号道迹

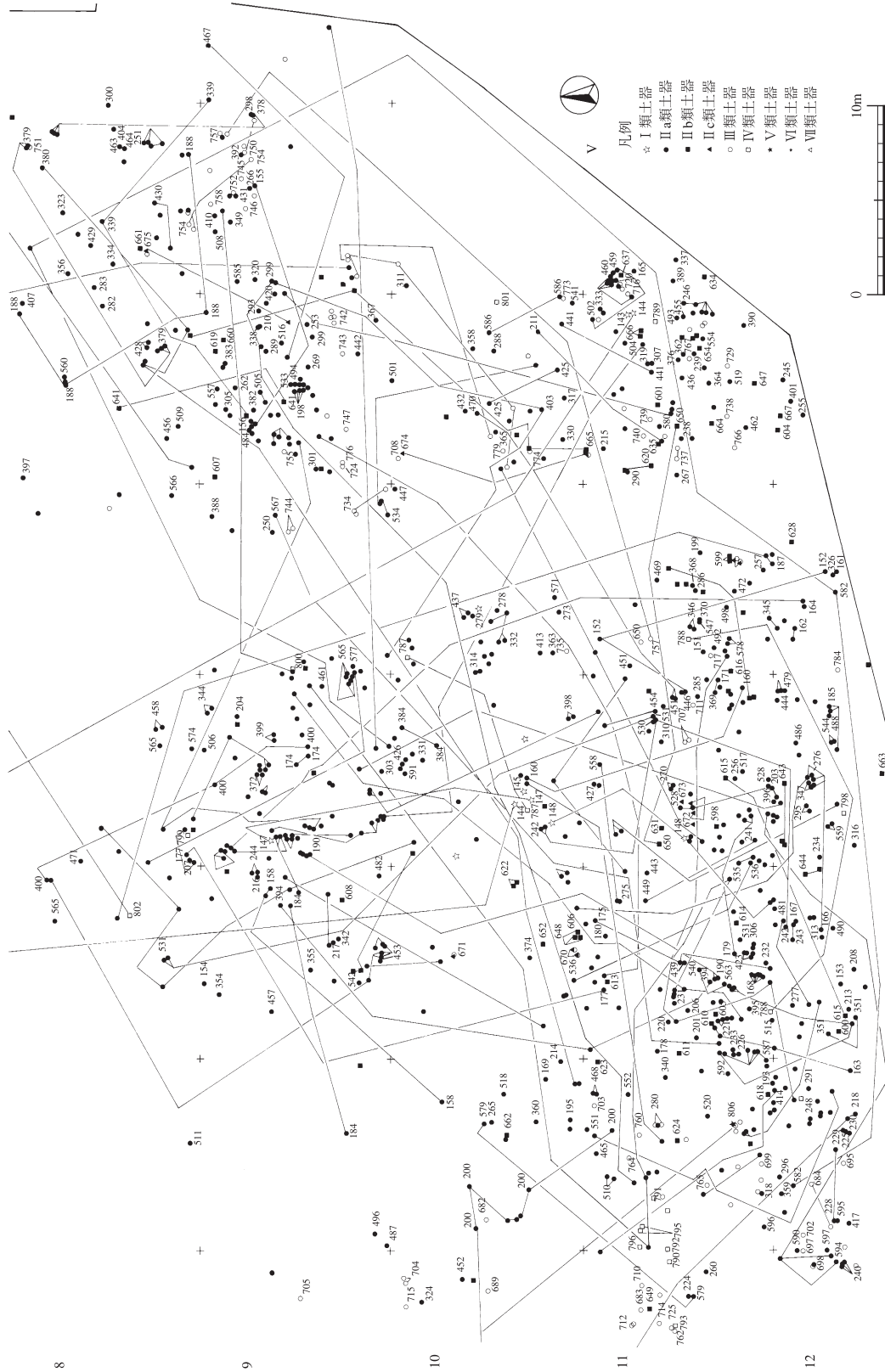


第116图 3号道迹

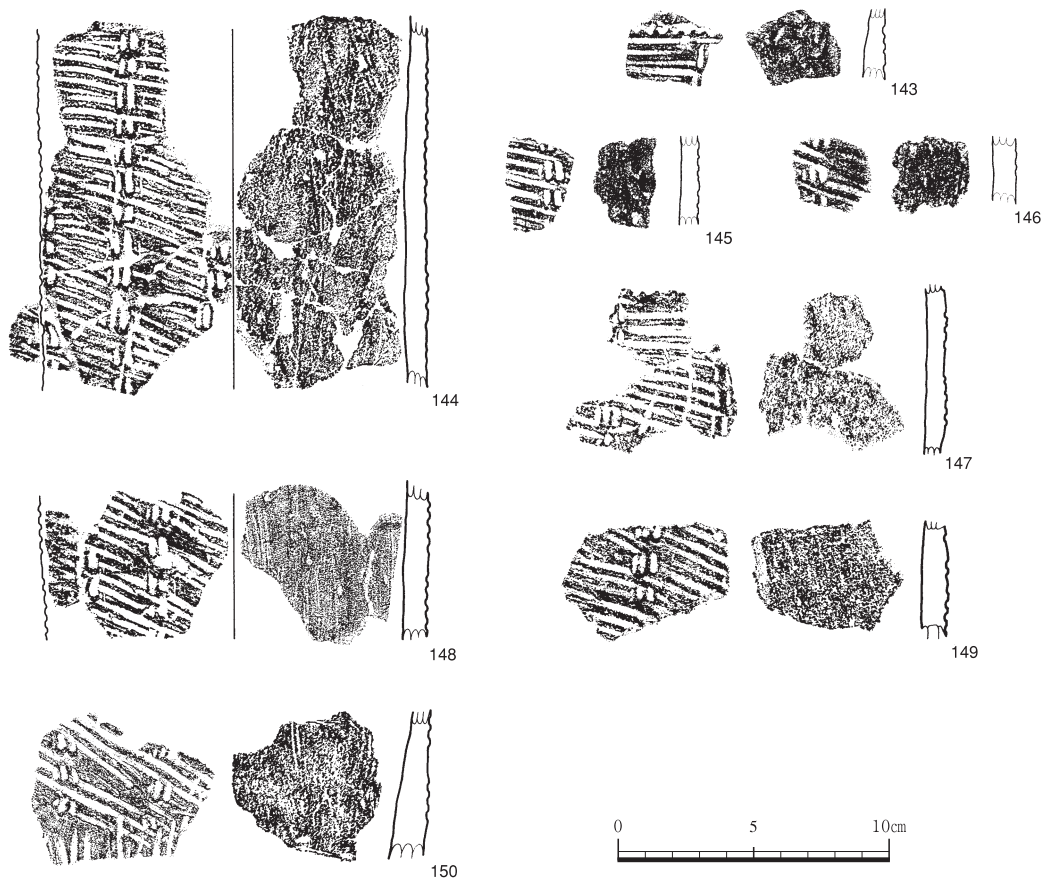


第117図 遺物出土状況図(2)





第118図 縄文早期土器出土状況図



第119図 I類土器

(2) 遺物

① 土器

【I類土器】(第119図)

同一個体であるが、口縁部付近から底部に近い位置までの破片を確認できた。

器形は底部からほぼ垂直に立ちあがる円筒土器である。内面は下から上にケズりあげた後、胴部上位にナデを施す。外面は、斜位の貝殻条痕文を施文後、2・3本が1組となる断続的な短沈線文（おそらく条痕の施文と同様に貝殻の肋を使用）を上から下へ向けて施している。口縁部付近は、143にみられるように貝殻刺突文が横方向に巡る。また、150は底部側の破片であり、底部外面には縦方向の刻目が付される。

I類土器は、2重施文が円筒土器に採用されていることから、前平式土器の中でも新しい段階に比定されるものである。既存の土器型式では、新東晃一氏の（仮称）前原式土器（新東2000）、上杉彰紀氏の志風頭式土器（上杉2000）、黒川忠広氏の志風頭タイプ（黒川2002）に相当する。

【Ⅱ類土器】

本遺跡で最も多く出土した土器である。文様は、口唇部に刻目、口縁部に横位の貝殻刺突文帯、胴部に貝殻条痕文の上から貝殻刺突文を施す2重施文と2～3段の楔形貼付文、底部付近に縦の刻目が施される。2重施文のうち刺突文の施文パターンには、縦位貝殻刺突文間に斜位の貝殻刺突文を施すものと、縦位貝殻刺突文のみを幅狭に施すものの2種類に大きく分けられる。そのうち前者については、縦位貝殻刺突文のみ2条を対にして施す文様パターンもみられる。また、少数ながら横位の貝殻刺突文を組み合わせる個体も確認した。器形は、円筒形・角筒形・平面観がレモン形の3種類が存在する。そのため、器形違いにより大きく3種類に分け、楔形貼付文の有無によりさらに細分した。

〈Ⅱa-1類土器〉(第120図～第135図)

円筒形を呈し、楔形貼付文を有する土器である。

151は完形に復元でき、口径16.2cm・底径12.5cm・器高37.9cmを測る。上げ底気味の底部からわずかに外傾しながら立ち上がり、接地面から約3分の2の高さで胴部最大径に達すると、そこから口縁部までほぼ垂直に立ち上がる。刺突文は縦位・斜位の貝殻刺突文で構成される。内面調整は下から上へのケズリ、口縁部のみ横方向のケズリである。

152～154, 155・156はそれぞれ同一個体である。口縁部から楔のある高さまでは、刺突文を施す前に貝殻条痕文をナデ消している。152～154は内面のケズリ・ナデにより、口縁部が若干外反している。

157～165は完形復元こそできなかったが全体を知り得る。口径20.0cm・底径17.0cmで器高は不明だが、文様のあり方から口径の2倍前後であると考えられる。口縁部はナデによって角と平坦面がしっかりと作り出され、内面は胴部上位まで丁寧なナデが施されている。口径の長さの割に楔の数は少なく、4ヶ所程度と考えられる。破片の大半が黒班をもつが、本来は黄褐色である。

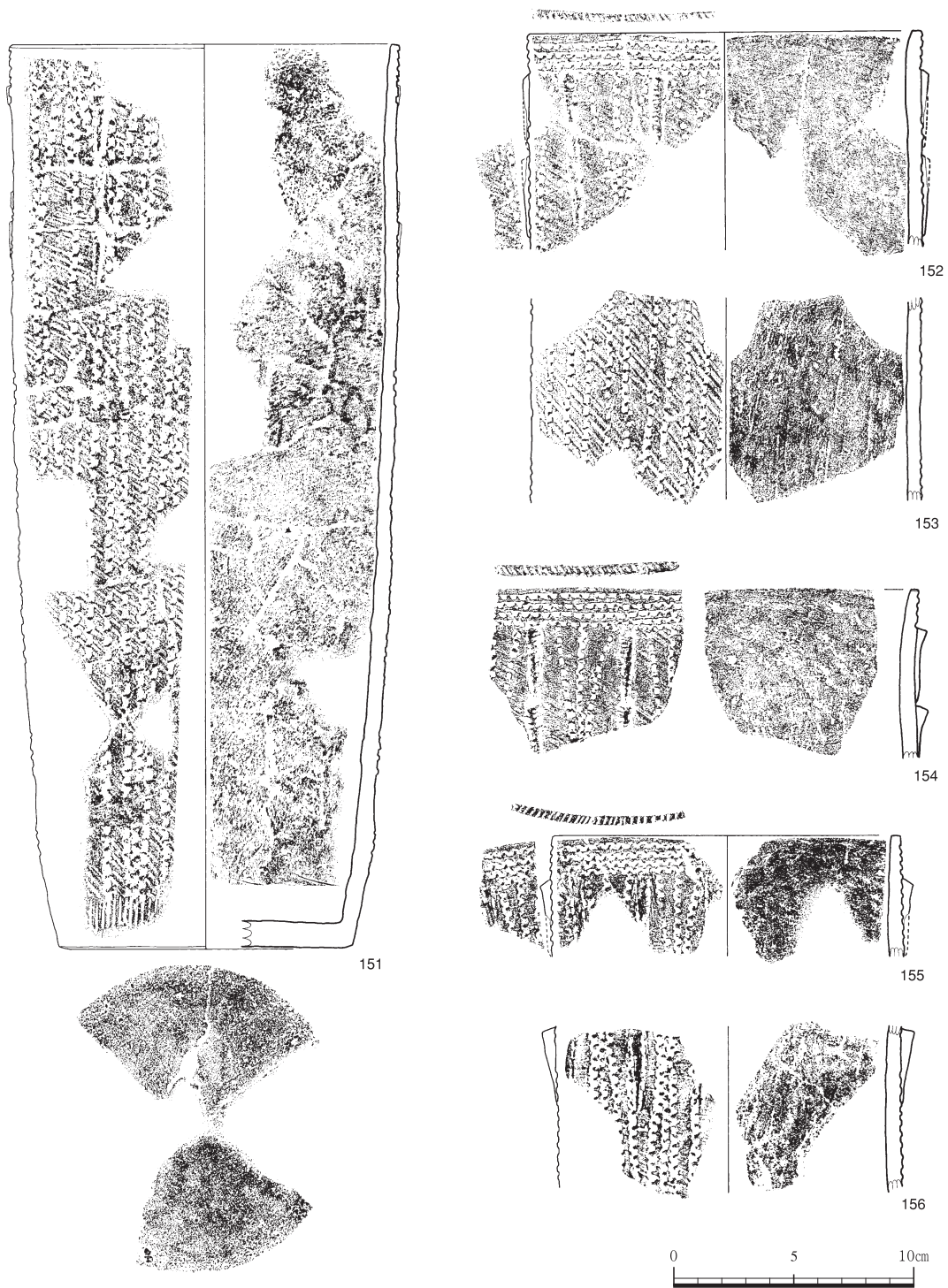
166～171, 172～174, 187・188はそれぞれ同一個体。貝殻を寝かせて刺突しており、押圧気味に施文される部分もある。

175～182は条痕文が丁寧にナデ消されている。胎土に砂粒が多く混入している。

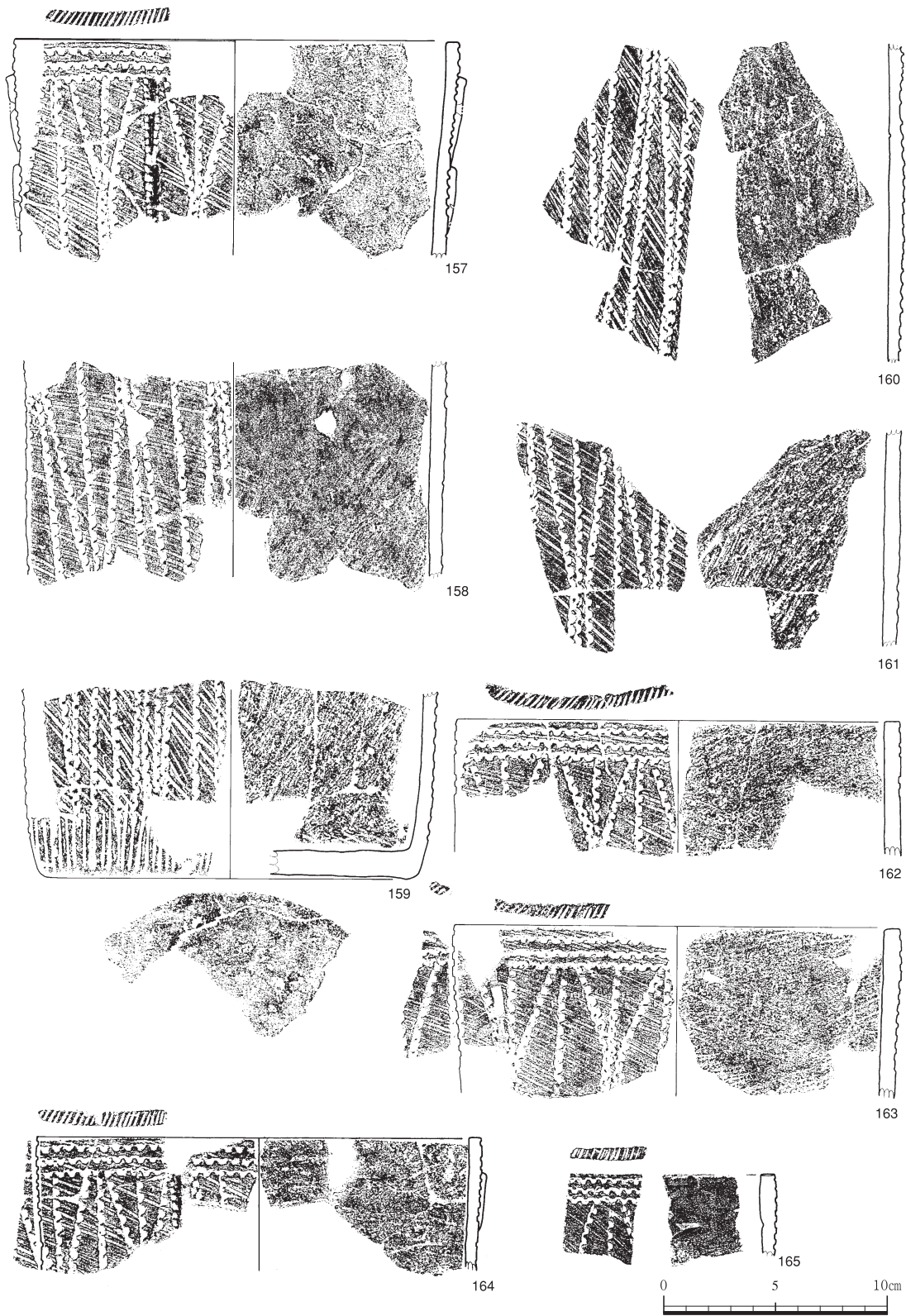
183～186は横方向の貝殻条痕文が明瞭に施され、内面上位は丁寧にナデられている。

189・190, 191～195, 196・197はそれぞれ同一個体で、口縁部が若干開く器形を呈する。191～195は、縦位の貝殻刺突文のみが施文される種類のものである。

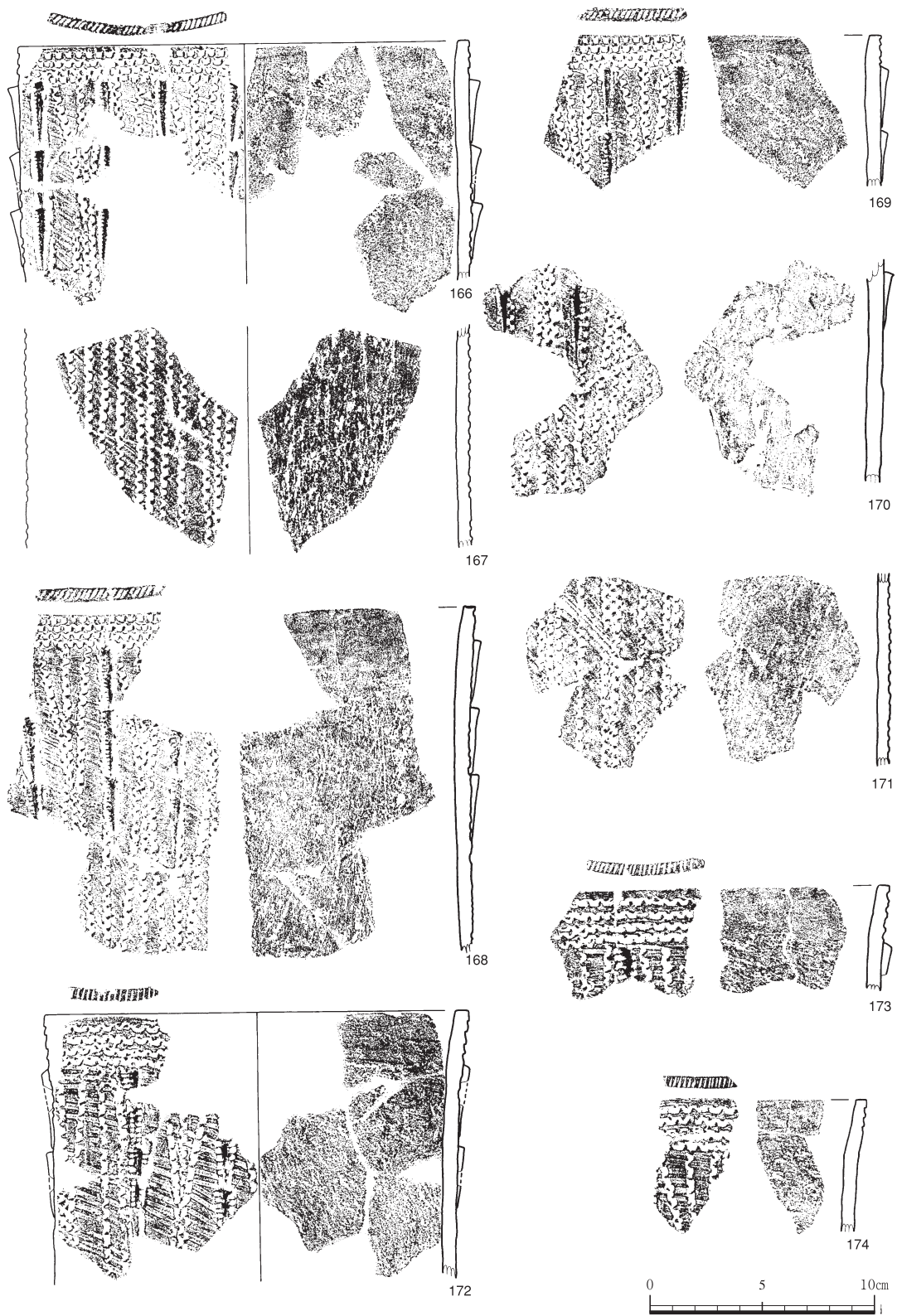
198・199, 200・201はそれぞれ同一個体で、口縁部がさらに開く。198・199は条痕文をナデ消される。200・201には横方向の貝殻刺突文が施され、内面は胴部の下位にまでナデがみられる。



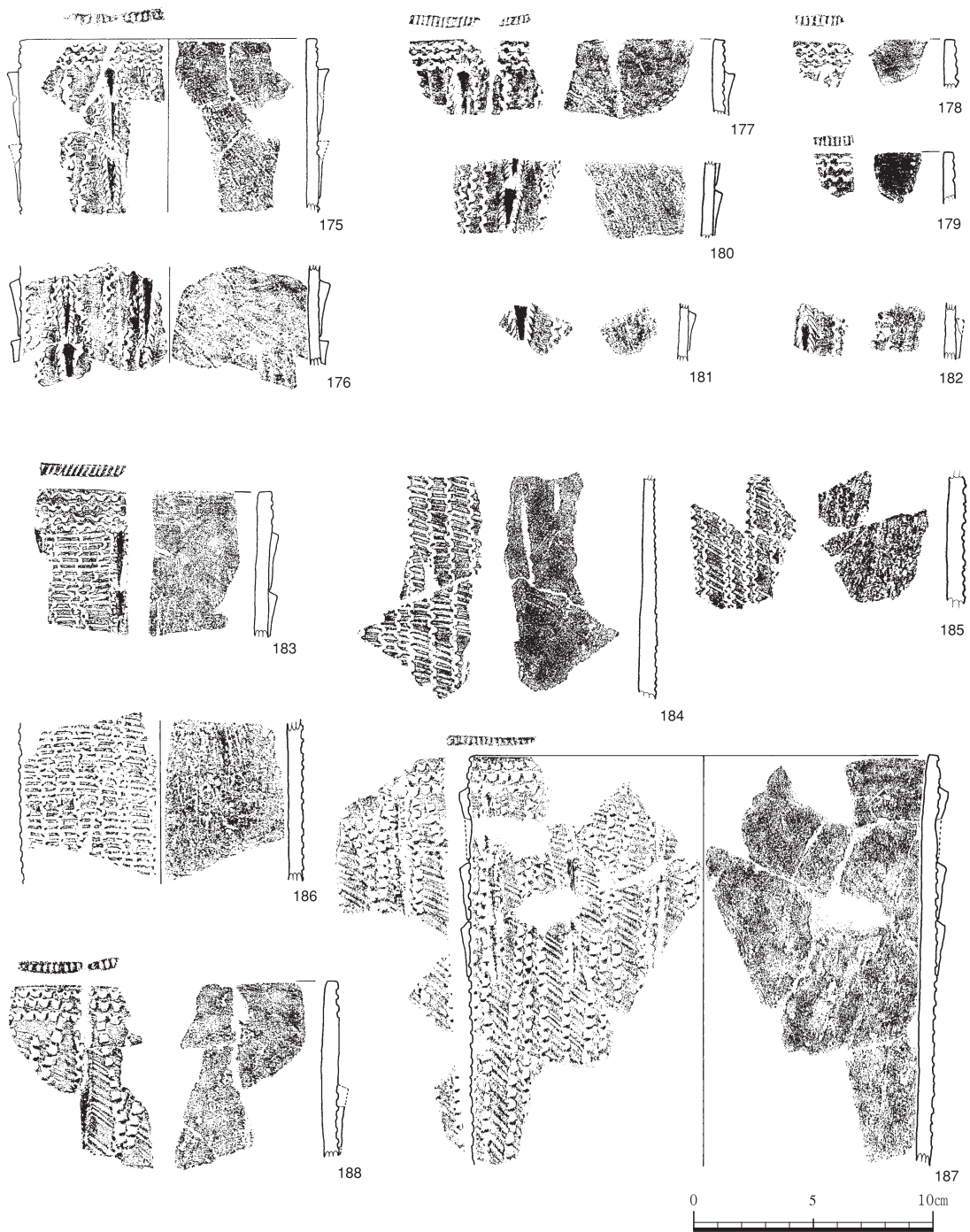
第120図 II a-1 類土器 (1)



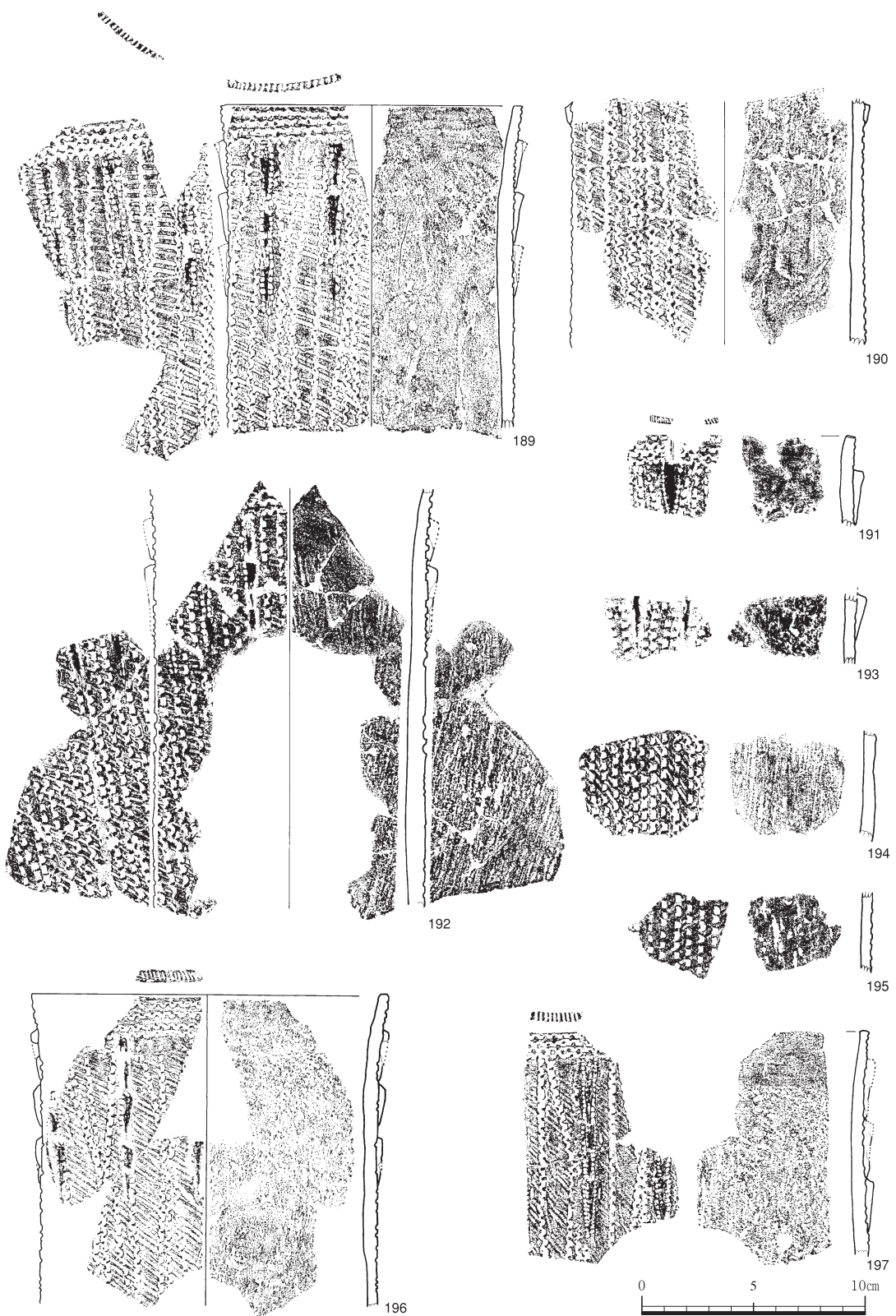
第121図 II a-1 類土器 (2)



第122図 II a-1 類土器 (3)



第123図 II a-1 類土器 (4)



第124图 II a-1 類土器 (5)

202～204は、口縁部内面にミガキ調整が施されている。

217・218は、貝の殻表面を左側に向けた状態で刺突文を施している。本遺跡では少数例しか確認されていない。

219・220は、条痕文がナデ消され、胴部文様は縦位の貝殻刺突文のみで構成されている。口縁端部は丸みを帯び、端部の丸い三角柱状の楔が器面に張り付いている。全体的な作りが粗雑な印象を受ける。

221～235は、全体像をつかむことのできる資料である。口径14.0cm・底径9.0cmで、器形は上げ底気味の底部から口縁部へと徐々に開く。条痕文上は縦位の貝殻刺突文が全面に施される。刺突は上から下へ行われている。胎土が特徴的であり、雲母（いわゆる金雲母）を多く含む。

236～238は外面に煤が付着している。焼成後の被熱によるものか、236・238は内外面とも黒褐色である。237だけが黄褐色を呈し、本来の色調をとどめていると思われる。

241～244は器壁が非常に薄い。刺突文は、貝殻腹縁の肋間溝が器面に触れていないため、櫛歯状の工具による連点文のようにみえる。

245～249は楔の直下に煤がみられ、246の内面には炭化物が付着している。

250～254は底径9.4cmを測る。外底面が接地面から5mm程ドーム状に浮き上がるが、内底面は比較的平坦である。レンズ状に盛り上がった台の上で製作された可能性も考えられる。文様は、底部外面の交差する刻目が特徴的といえる。調整は、胴部内面の下位にまでミガキが施されている。

255～261は、大型の貝殻で押圧気味に施文されている。

270は、一部の楔を器面に接着する際に、楔の片側を刺突、もう片側を工具で練り付けて接着している。Ⅲ類土器にみられる手法である。

276は楔の横に補修孔がみられる。

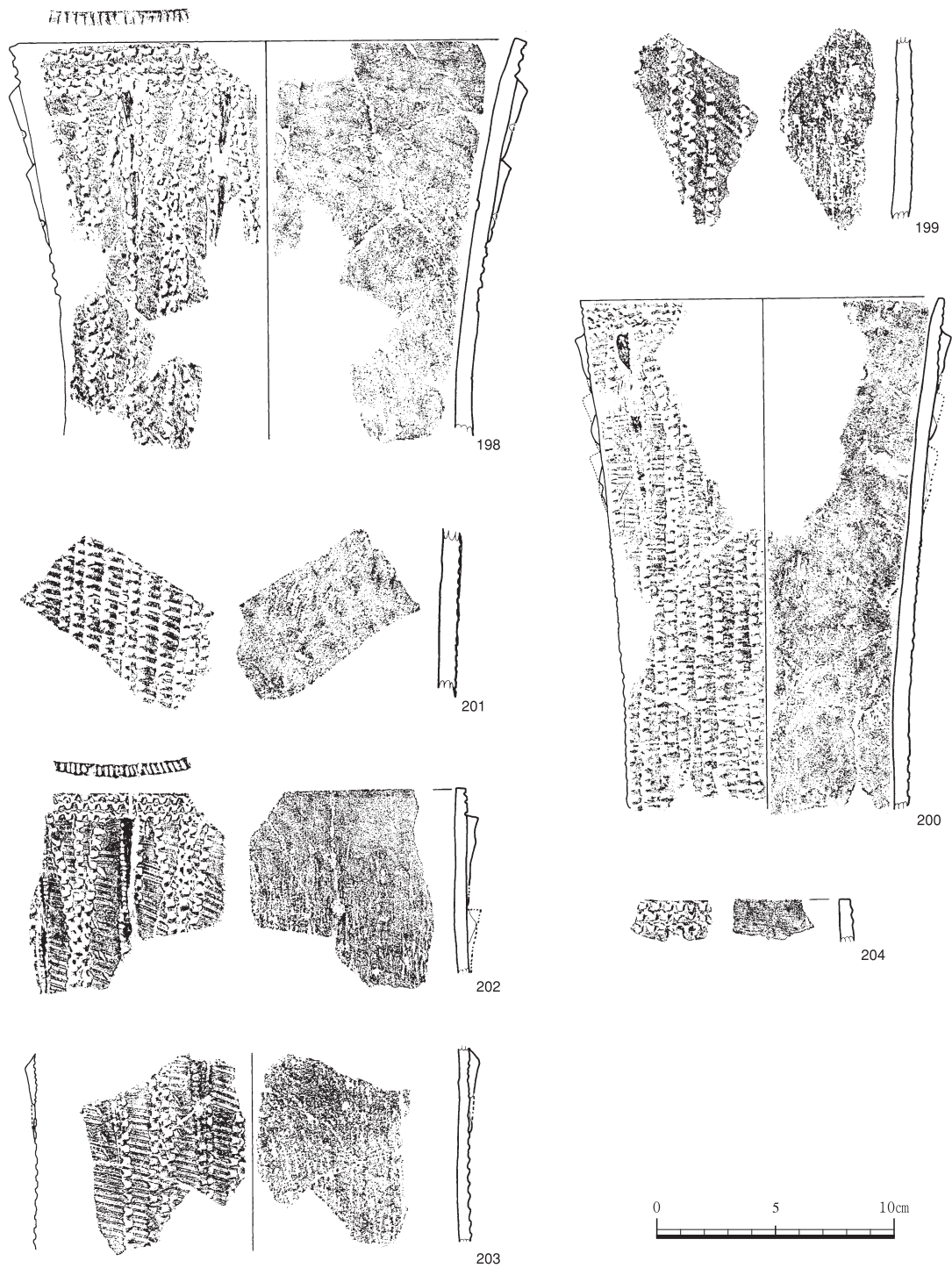
278・279は、縦位の貝殻刺突文のみ2条対で施されている。

280～283の口唇部には刻目が施されているが、施文後に肉眼観察によってようやくわかる程度にまでナデ消されている。

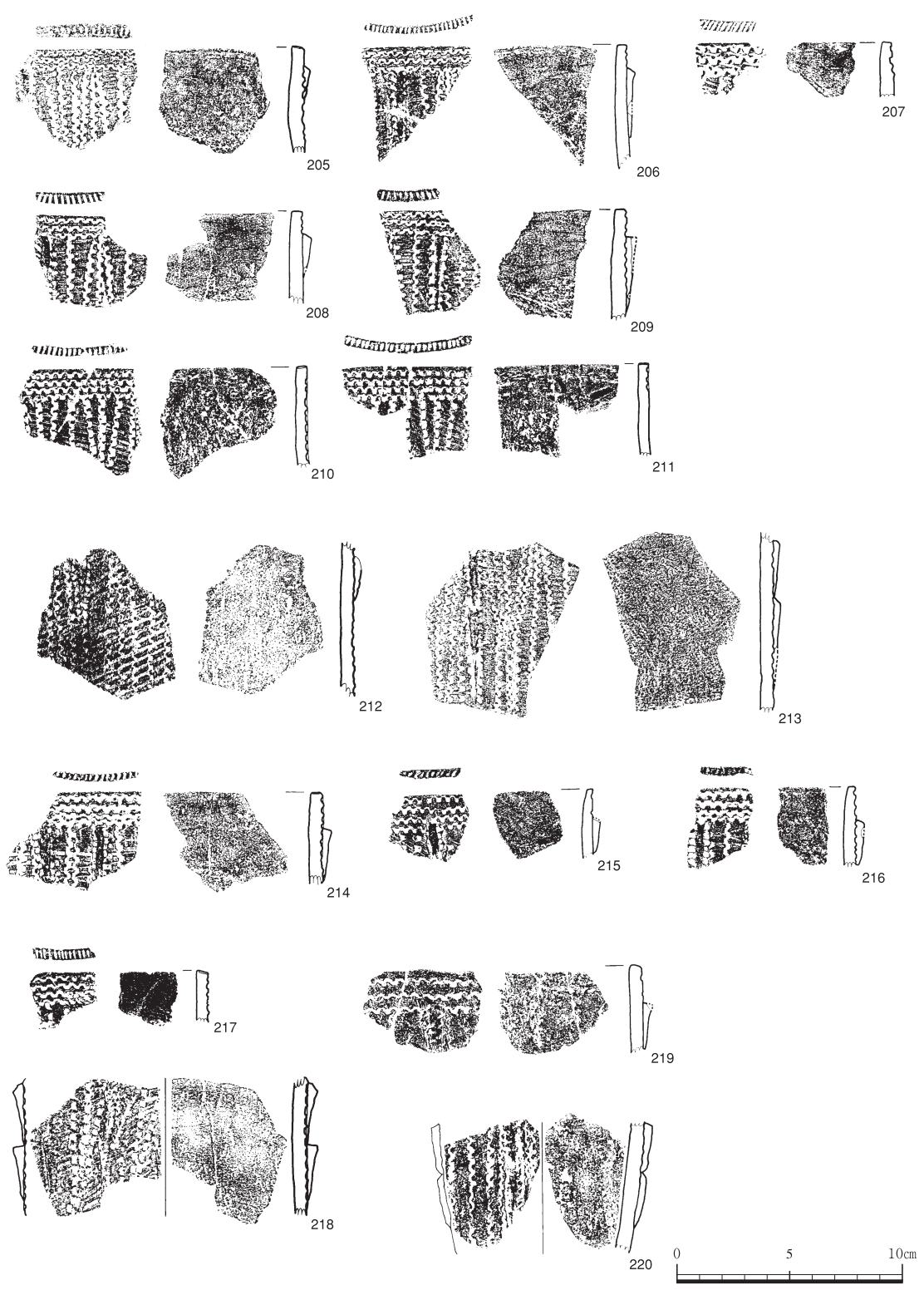
284～337は個々の口縁部片である。

289・294・327は楔の形が不整形で、器面調整・施文も粗く、全体的な作りが荒々しい。298は外面や口唇部が施文後に丁寧になでられ、内面はミガキ調整がみられる。303の楔は、上下両端がすぼまるミミズ腫れ状を呈する。328は楔が剥がれ、その下にあった縦位の貝殻刺突文が露わになっている。楔は大抵の場合縦位刺突文上に貼付されるが、器面の調整を行わないままに楔の側面のみを刺突して貼り付けた様子が窺える。

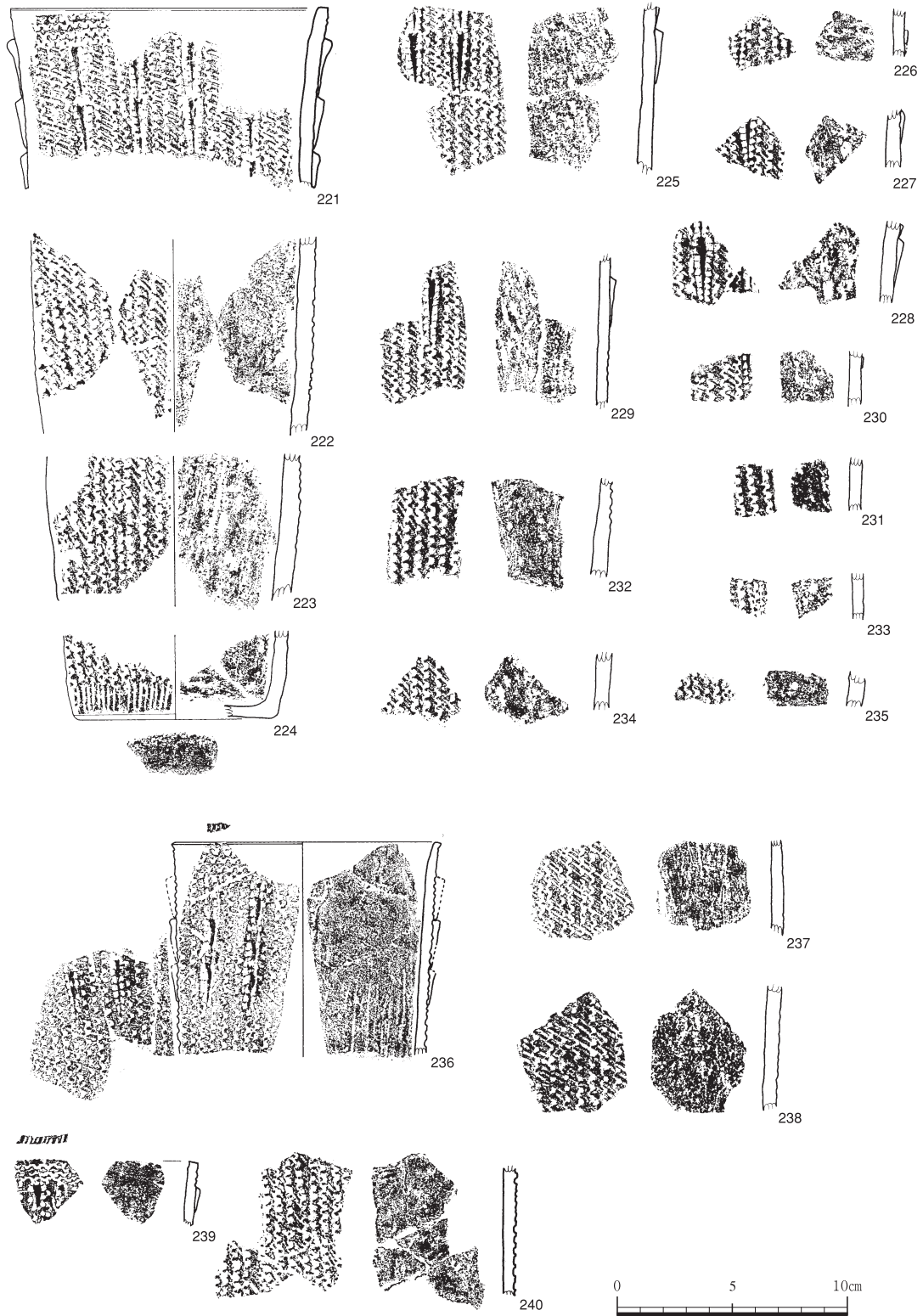
338～370は楔をもつ個々の胴部片である。



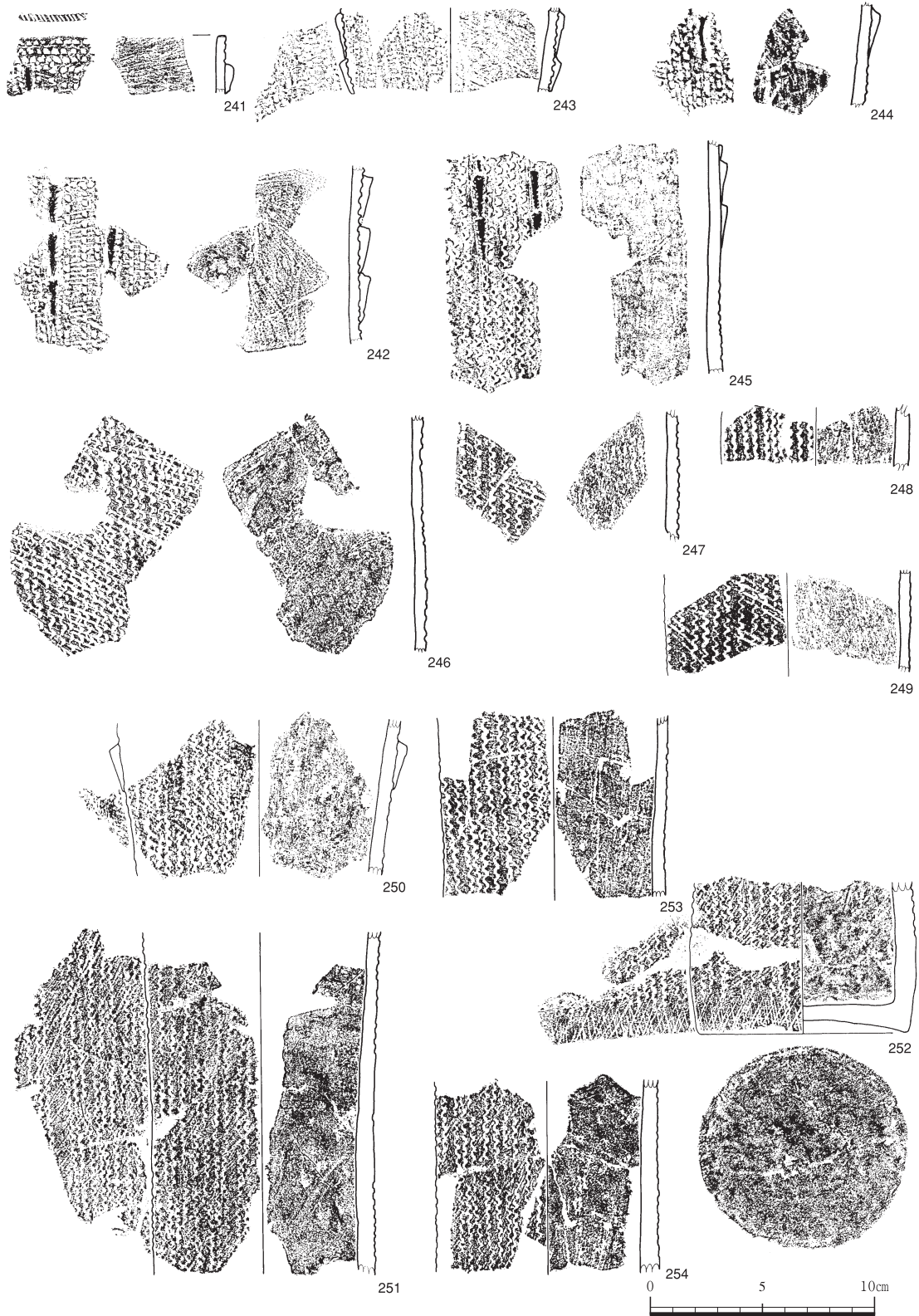
第125図 II a-1 類土器 (6)



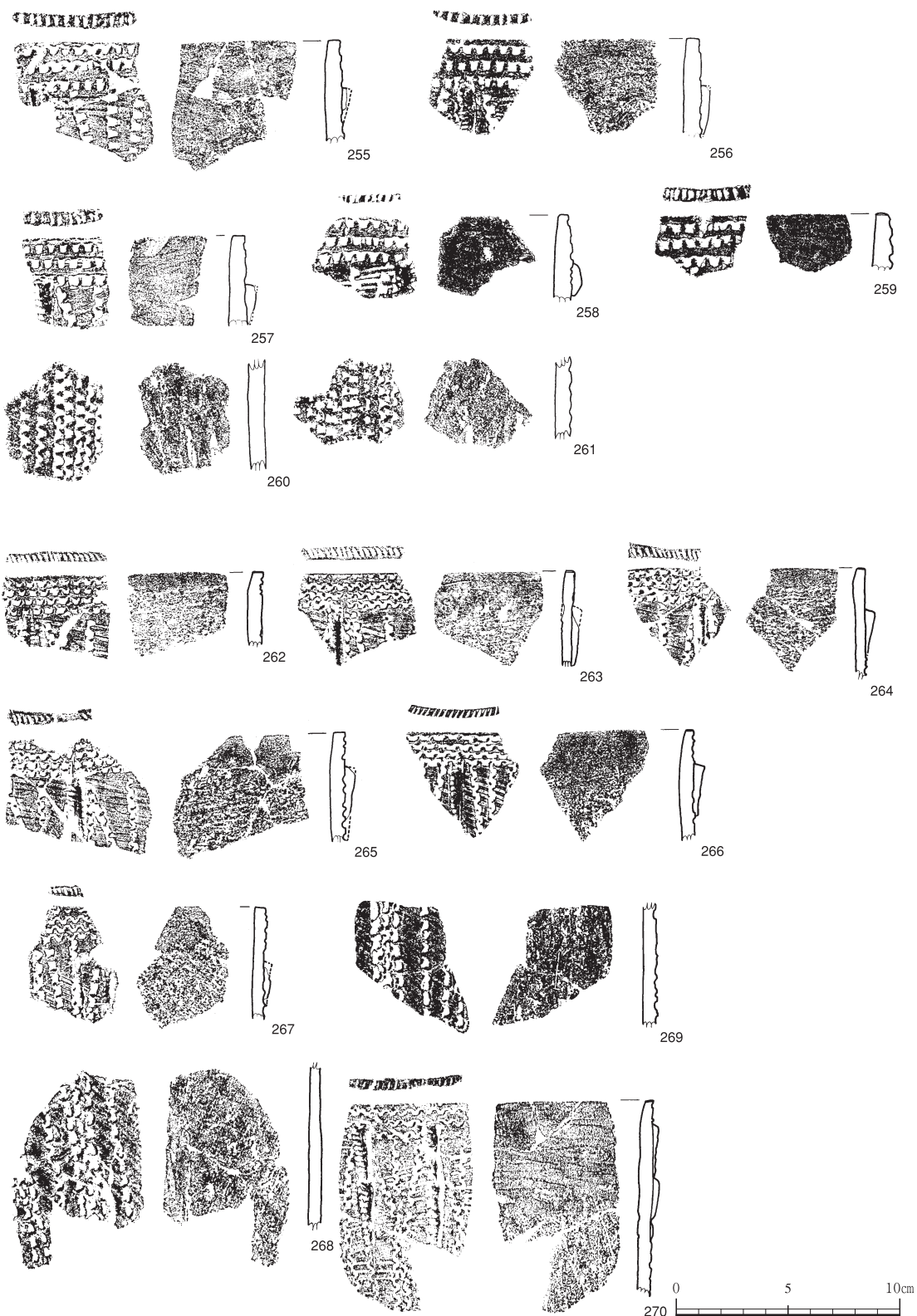
第126図 II a-1 類土器 (7)



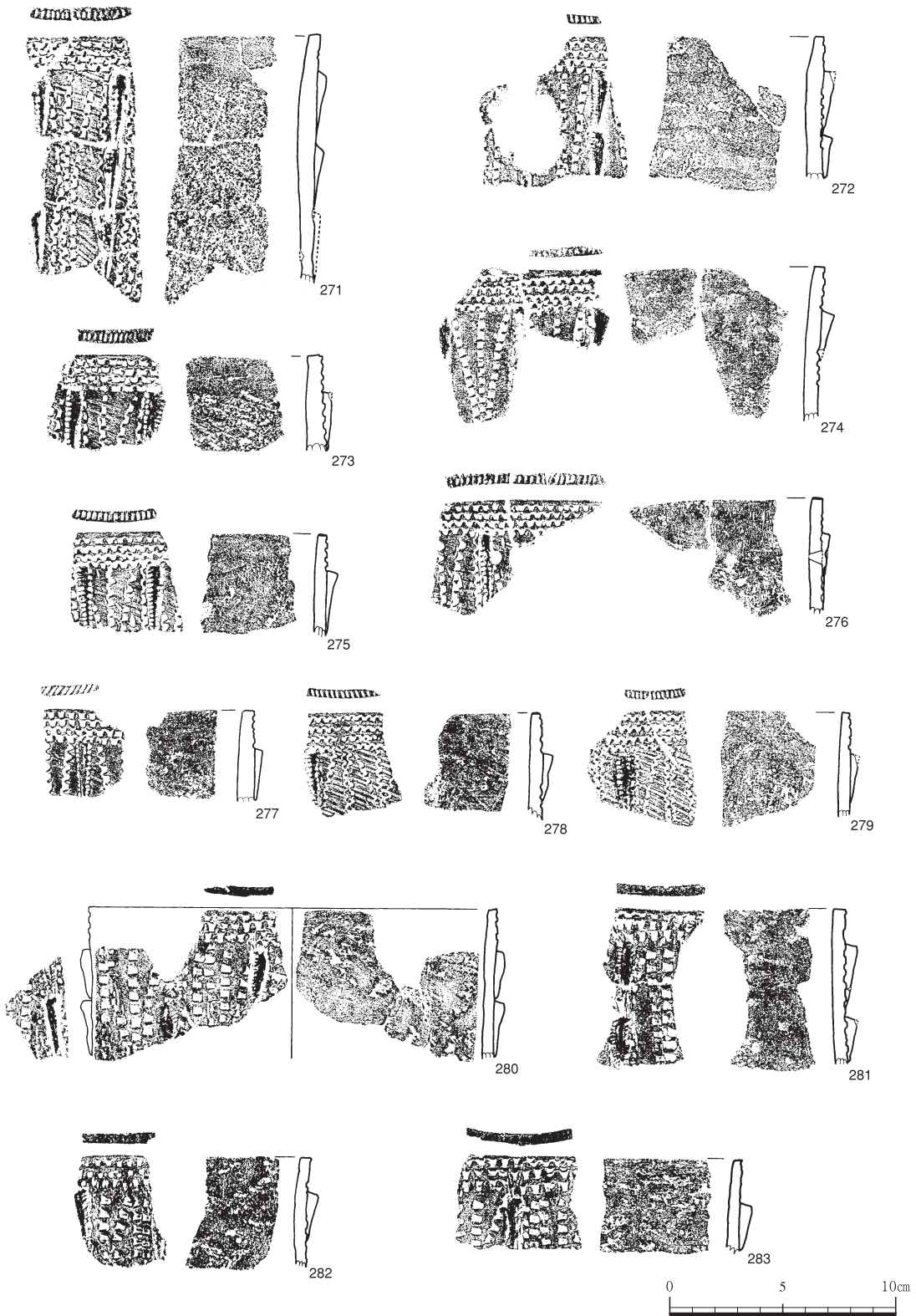
第127図 II a-1 類土器 (8)



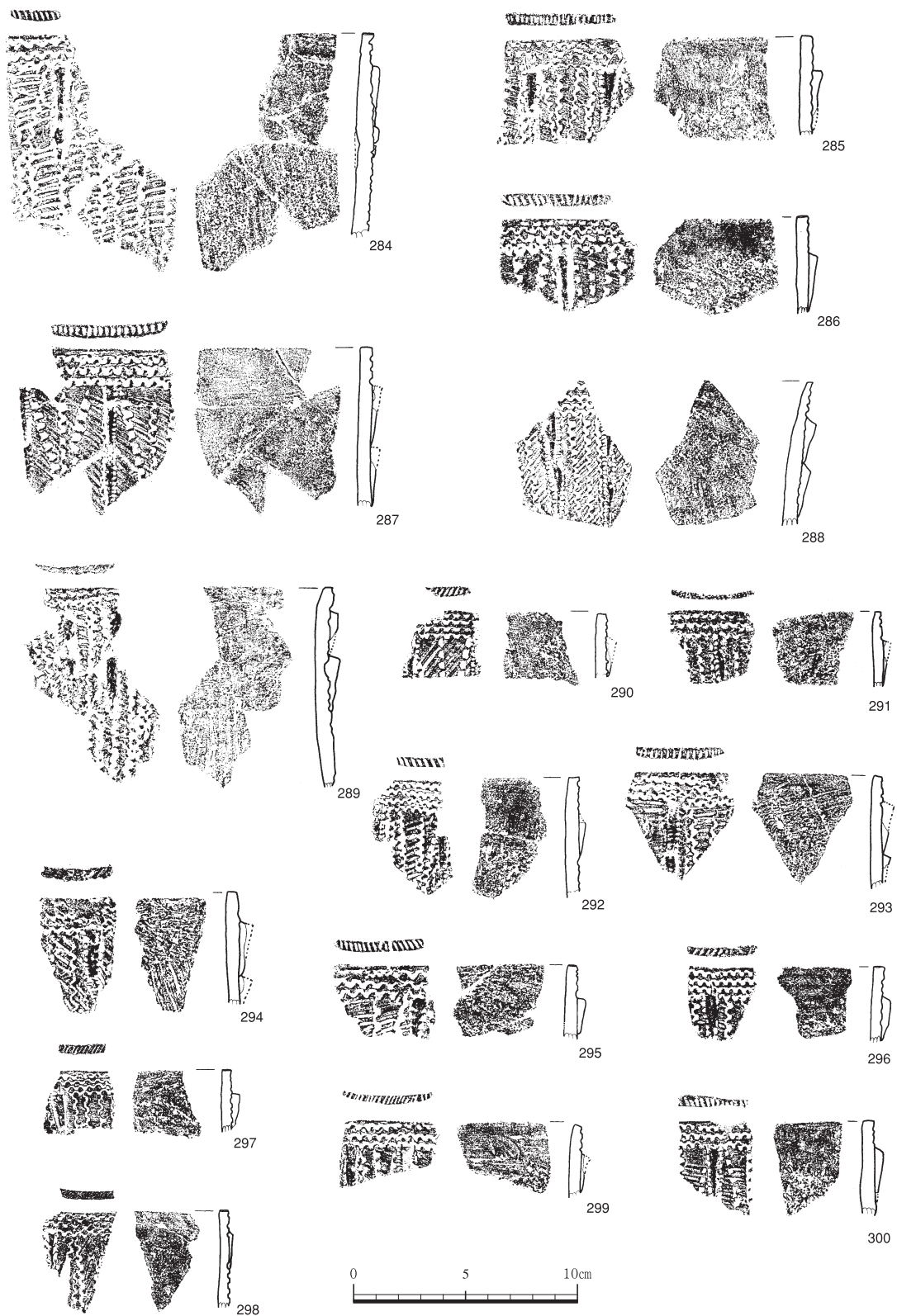
第128图 II a-1 類土器 (9)



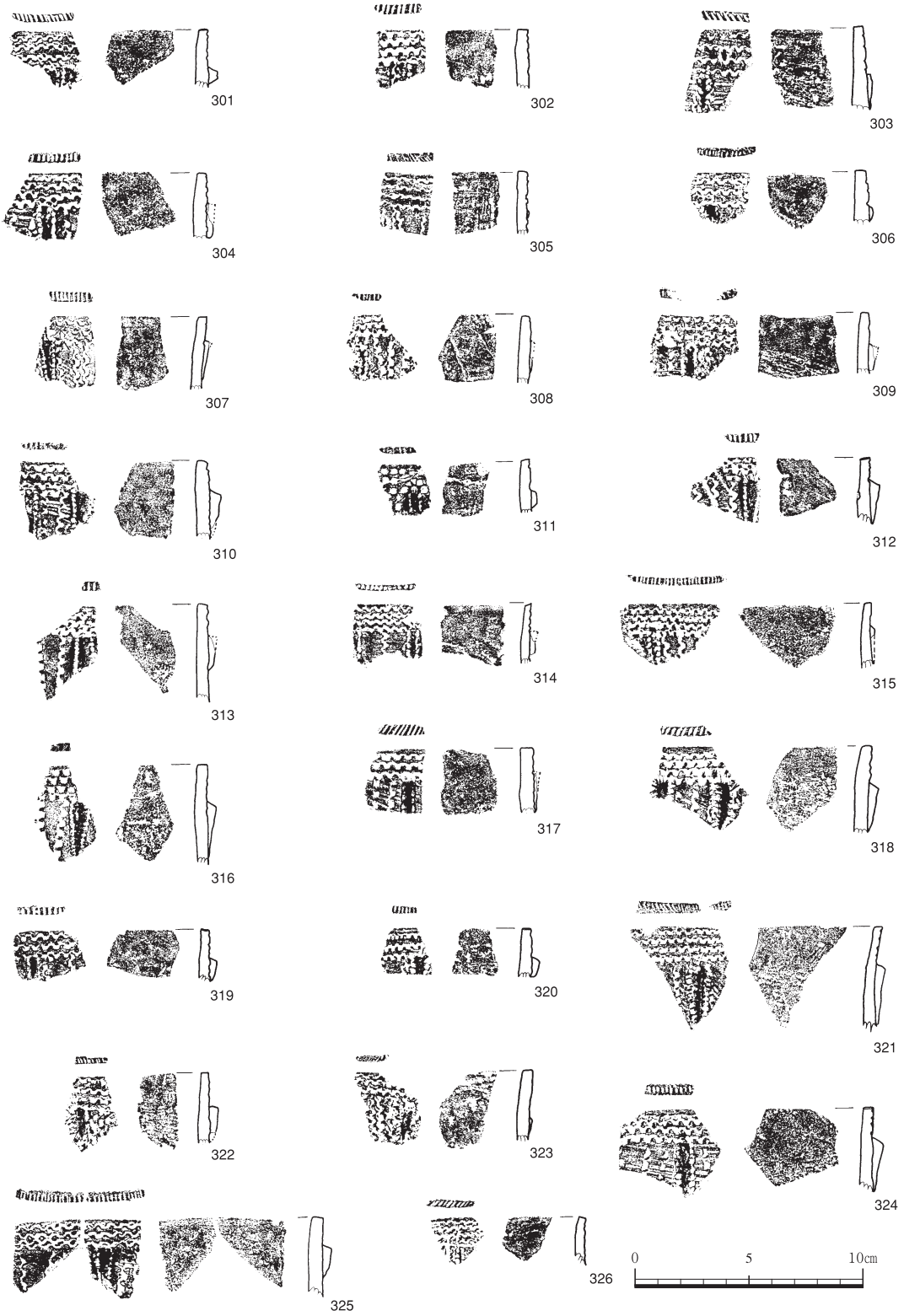
第129図 II a-1 類土器 (10)



第130図 II a-1 類土器 (11)



第131图 II a-1 類土器 (12)



第132図 II a-1 類土器 (13)

340は胎土に特徴があり、黄褐色のパミスが多く混入する。352や354・355は、217・218と同様に貝の殻表面を左側に向けた状態で刺突文を施している。またこの手の土器片には、やはり少数例である右上がりの条痕文が施されている。制作者の利き腕の違いが、施文方向の違いに反映されている可能性が高い。366は縦位の貝殻刺突文が2条対になって施されている。369は楔同士の間隔が狭く、楔自体も小ぶりで、小型の深鉢であると思われる。

〈Ⅱa-2類土器〉(第136図～第139図・第153図 399～404)

円筒形を呈し、楔形貼付文をもたない土器である。ただし、楔がある可能性は否定できないけれども現状ではそれを確認できない破片については、便宜的にここに分類していることをあらかじめ断っておく。

371～374は、底部以外の状況を知り得る資料である。口径20.4cmで、器形は胴部が垂直に立ち上がり、途中やや広がりつつも直線的に口縁部へと至る。文様の切り合いから外面の施文順序を考えると、まず全面に左上がりの貝殻条痕文を施す。口縁部付近のみ条痕文をナデ消し、横位貝殻刺突文を巡らせる。その後胴部に縦位→斜位の順に貝殻刺突文を施文し、底部付近にナデ→刻目が施される。ちなみに、横位刺突文は右から左へ、縦位刺突文は上から下へと継ぎ足されていることがわかるが、斜位の刺突文については判断ができなかった。内面は胴部に下→上方向の、口縁部に右→左方向のケズリ調整が施される。胴部内外面の広範囲に、被熱による黒色化と煤の付着が認められる。

375～384は、上げ底気味の底部から垂直に立ち上がり、その後緩やかに外傾するものの、再び直線的になって口縁部へと至る。文様は、条痕文・刺突文共に乱れ、刺突文は上から下へ継ぎ足されている。底部の刻目は先端の鋭い工具で強く刻まれている。

381～384は、口唇部の刻目がナデ消され、底部には刻目が施されていない。

385・388～390は内面がツルツルに磨かれている。

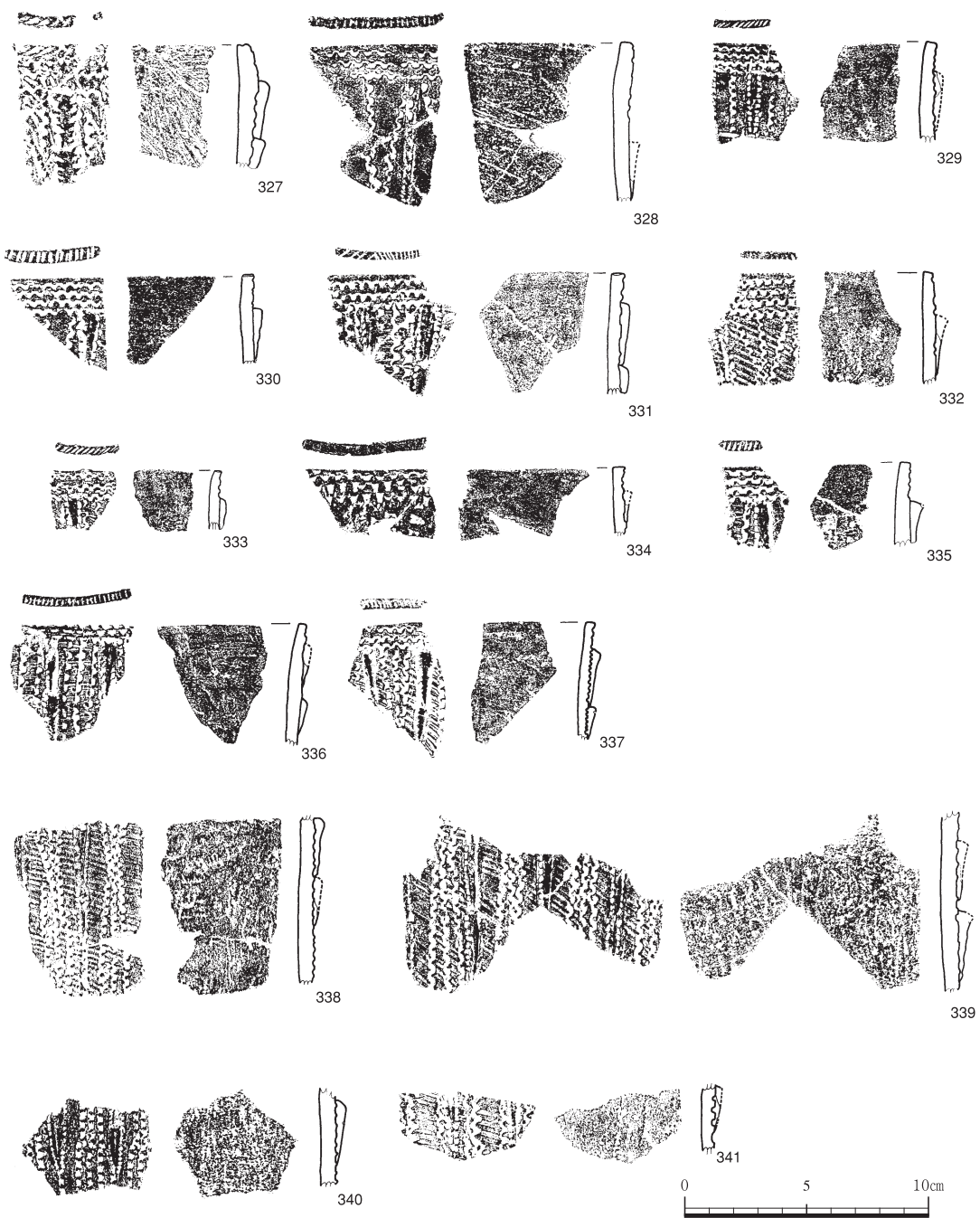
口縁部の横位刺突文は大半が3・4条で、381や387のように2条・5条施文されるものは数少ない。

394・395、396～398は口縁部外面に煤が付着している。

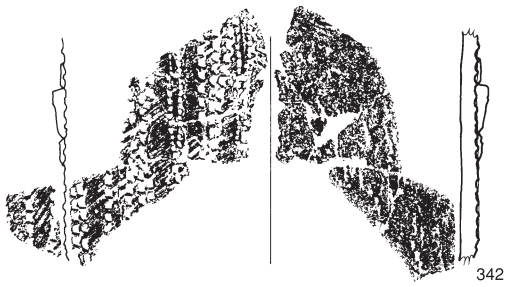
399～402は縦位刺突文のみ2条対で施文される。

〈Ⅱa類土器(楔形貼付文の有無不明)〉(第140図～第152図 405～597)

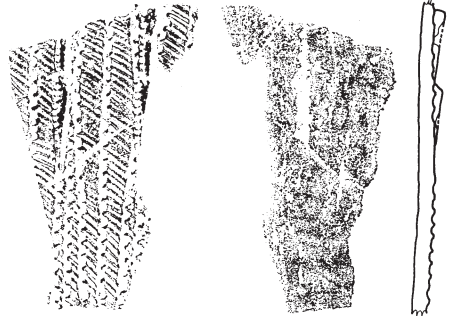
以下の土器については、楔の有無を全く判断できなかったため、Ⅱa-1類・Ⅱa-2類両方の可能性があるものと考え、細分しなかった。



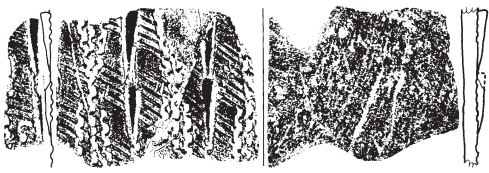
第133図 II a-1 類土器 (14)



342



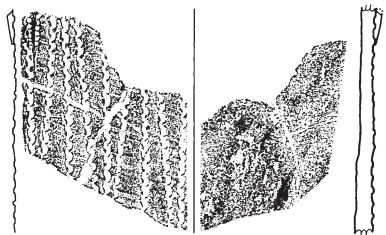
343



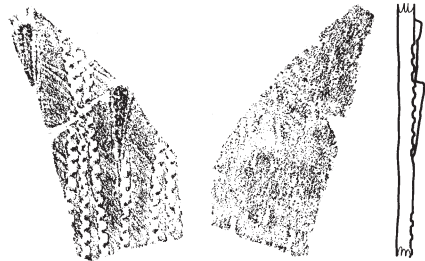
344



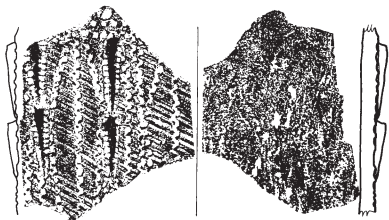
345



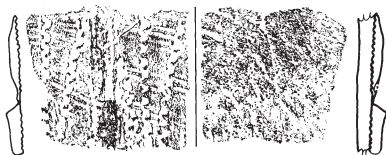
346



347



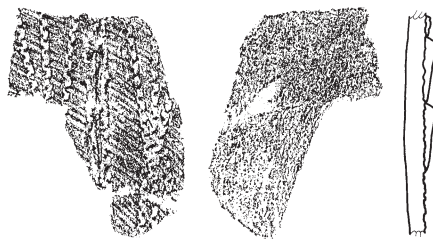
348



350



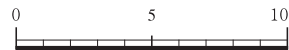
349



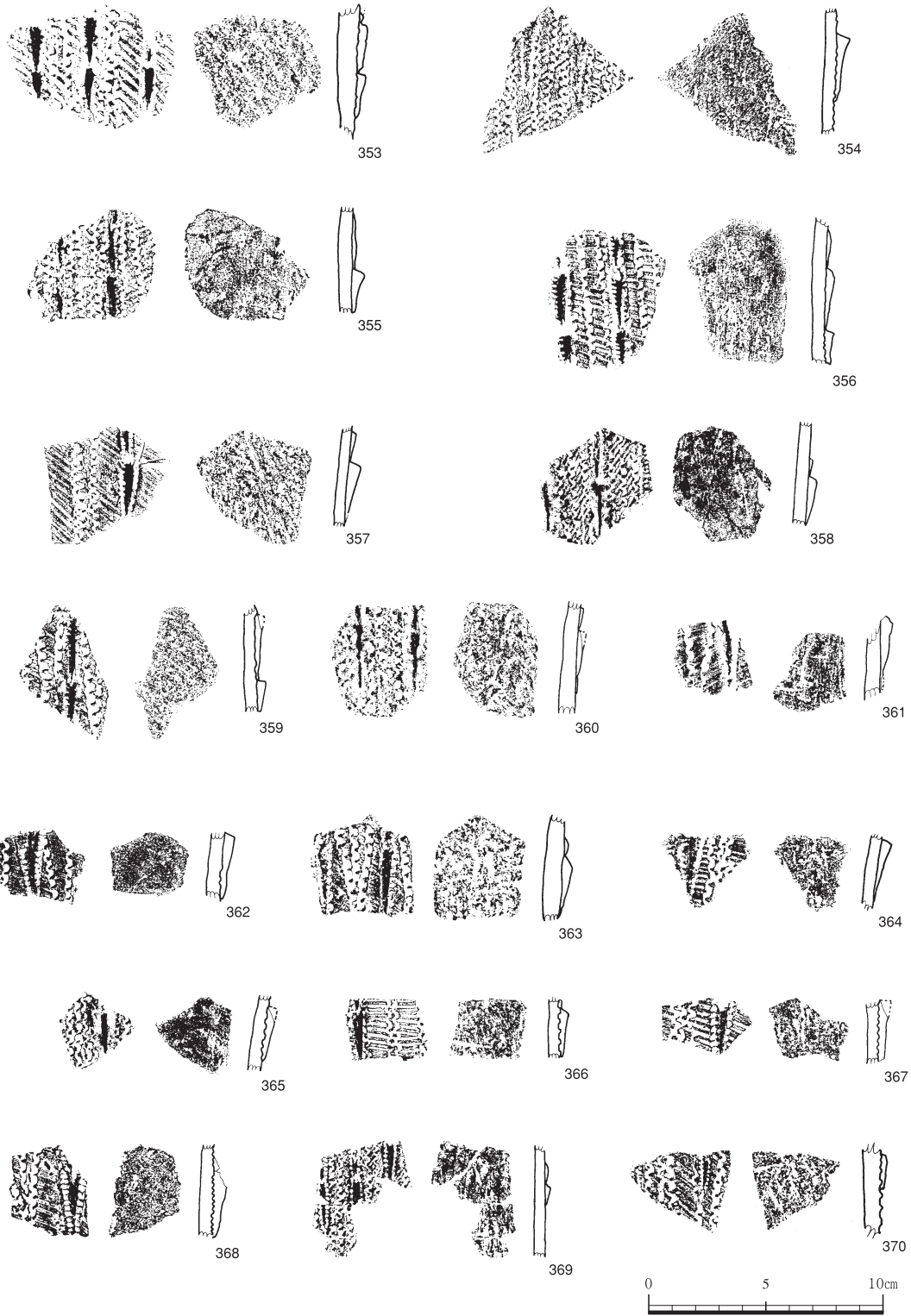
351



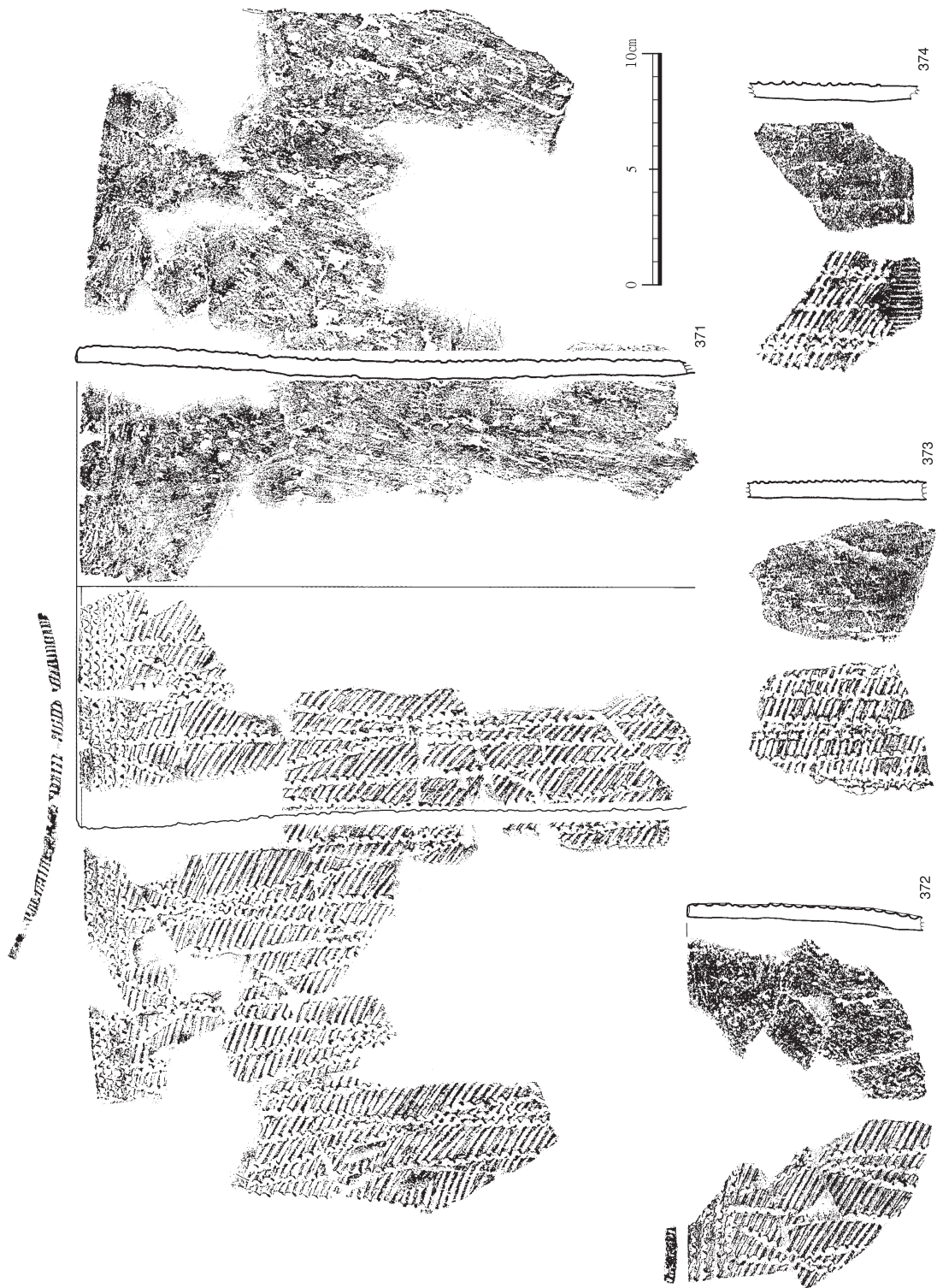
352



第134図 II a-1 類土器 (15)



第135図 II a-1 類土器 (16)



第136図 II a-2 類土器 (1)

405～421は個々の口縁部片である。

405の口唇部および内面は磨かれ、口唇部の刻目は現状では認められない。411は殻表面を左側に向けた状態で刺突文を施している。

422～500は胴部片である。

422, 423, 424, 426, 427, 429, 433, 437, 438, 455, 457, 489, 494, 497, 498は内面が丁寧に磨かれている。また、426, 427, 429, 441, 457, 494, 498の外面には煤が付着している。432は刺突文がやや押圧気味に施文されている。435は貝殻条痕文が施された後、縦方向のナデによって丁寧に消されている。

458～461は外面を丁寧に磨いた後に条痕文・刺突文が施文されており、内面も磨かれている。

465・466の胎土は白色粒子が多く混在し、粗い。

467～470の刺突文は、器面に対して貝殻を寝かせて刺突している。

474～476は非常に堅く焼き締まっている。

477～479は横位の条痕文上に殻表面を左に向けた状態で貝殻刺突がされ、それらの文様を切るかたちで底部の刻目がみられる。

480～485は胴部径が10cmに満たない小型の深鉢である。施文具にも肋や肋間溝の幅が狭い小型の貝が使用されている。外面に煤が付着している。

501～586は底部の破片である。外面の刻目には、間隔や長さが規則的なものと、1本1本の長さや間隔が不規則なものがみられる。前者は貝殻を用いて下から上へ掻き上げた条痕的なものであり、後者はヘラ状の工具によって1条ずつ刻んだものである。前者の割合が高い。

502は内面全体が非常に丁寧に磨かれている。

505は底部付近に指頭圧痕が目立ち、刻目がかすかに残る程度である。

506は底部付近の地文の条痕文をナデ消している。焼成は堅緻である。

519, 547, 554, 569は刻目同士の間隔が不規則であり、ヘラ刻みによる施文であると思われる。

522, 524, 526, 529, 531, 533, 535～538, 540, 543～546, 548～550, 554, 555, 562, 566～568, 570～573, 577, 579, 581～584, 586の外底面は丁寧に磨かれ、光沢をもつ。中心よりも周縁部分が特に丁寧に磨きこまれている。

524, 526, 535, 538, 545, 567, 580, 584の外底面には煤が付着している。

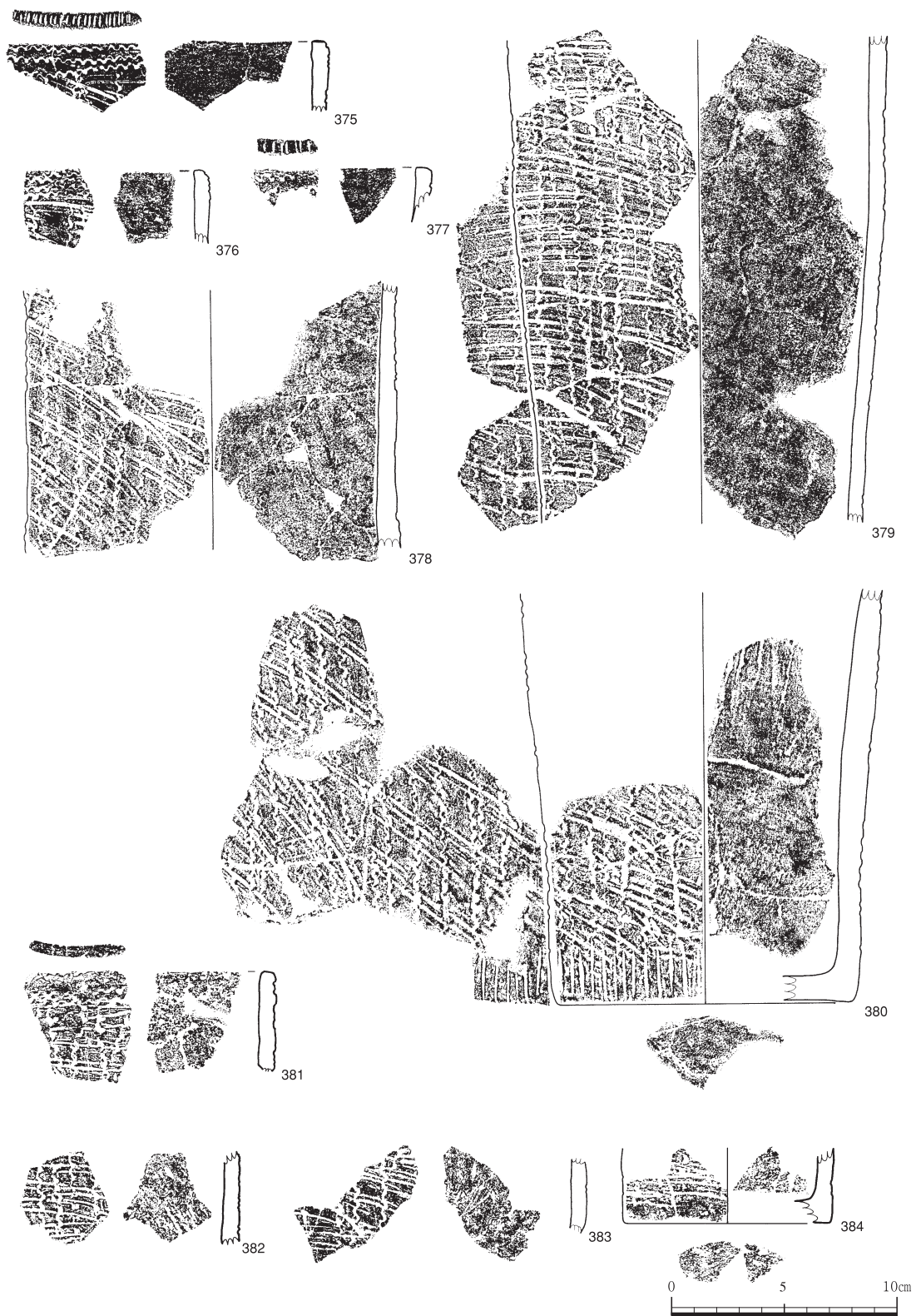
531は内底面に炭化物が付着した痕跡が残り、黒ずんでいる。

528, 532, 538～541, 548, 550, 554は内壁に炭化物の付着が認められる。

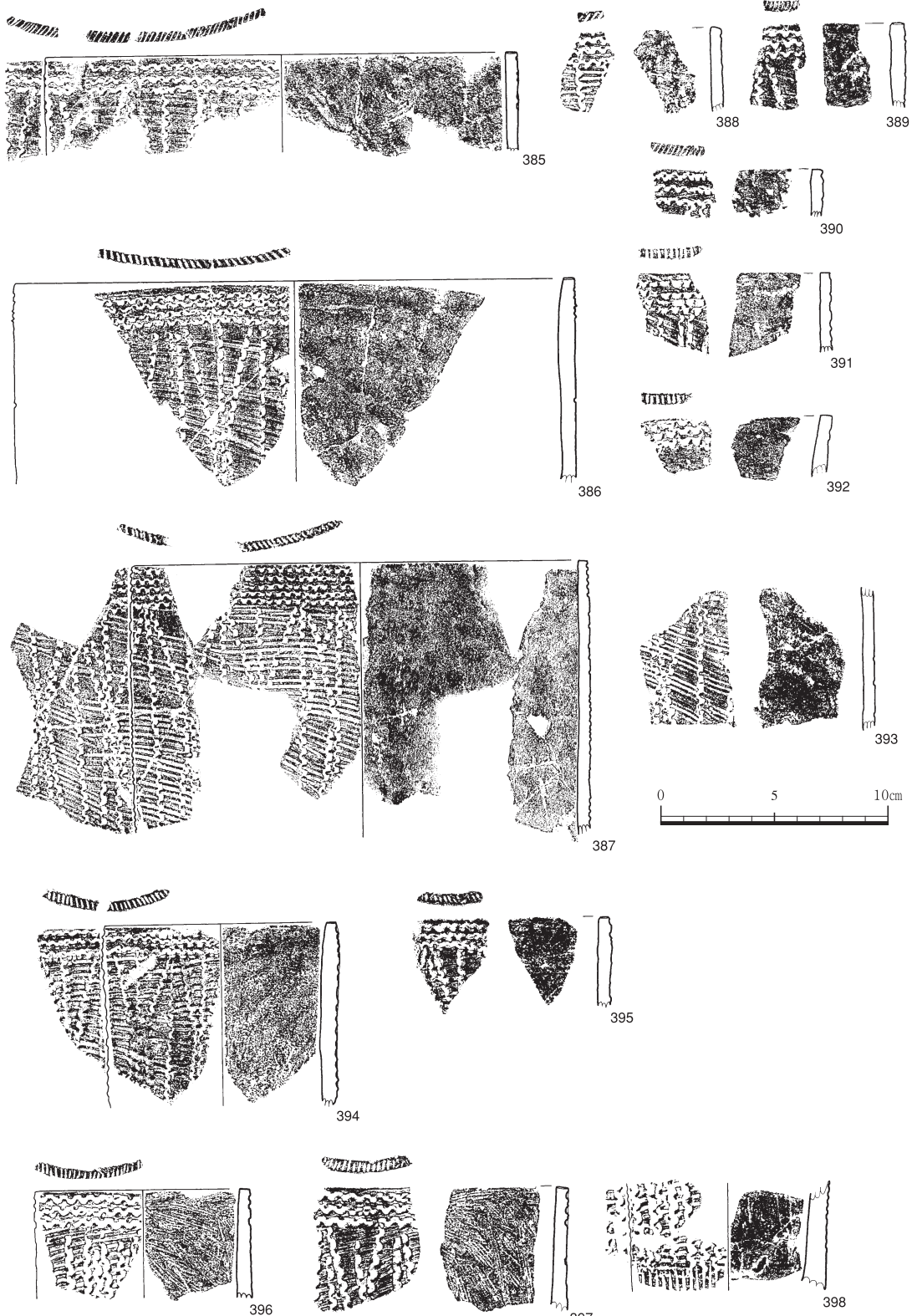
537は、殻表面を左に向けた状態で刺突施文されている。

541, 563は刻目がみられず、ナデのみが施されており無文である。

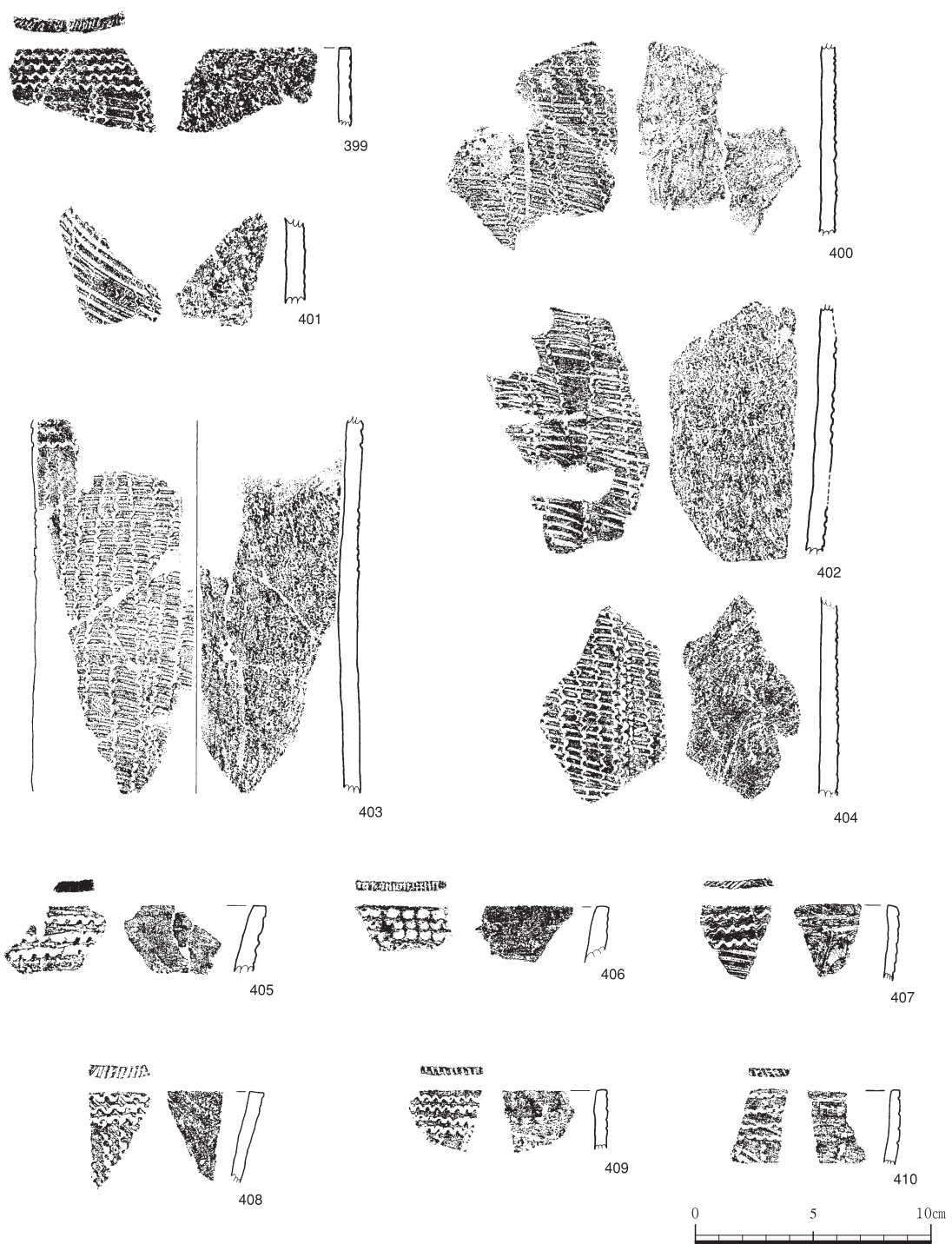
571は底部内面の中心に深さ5mm程の窪みがみられる。焼成後のもので、摩擦によって加えられている。



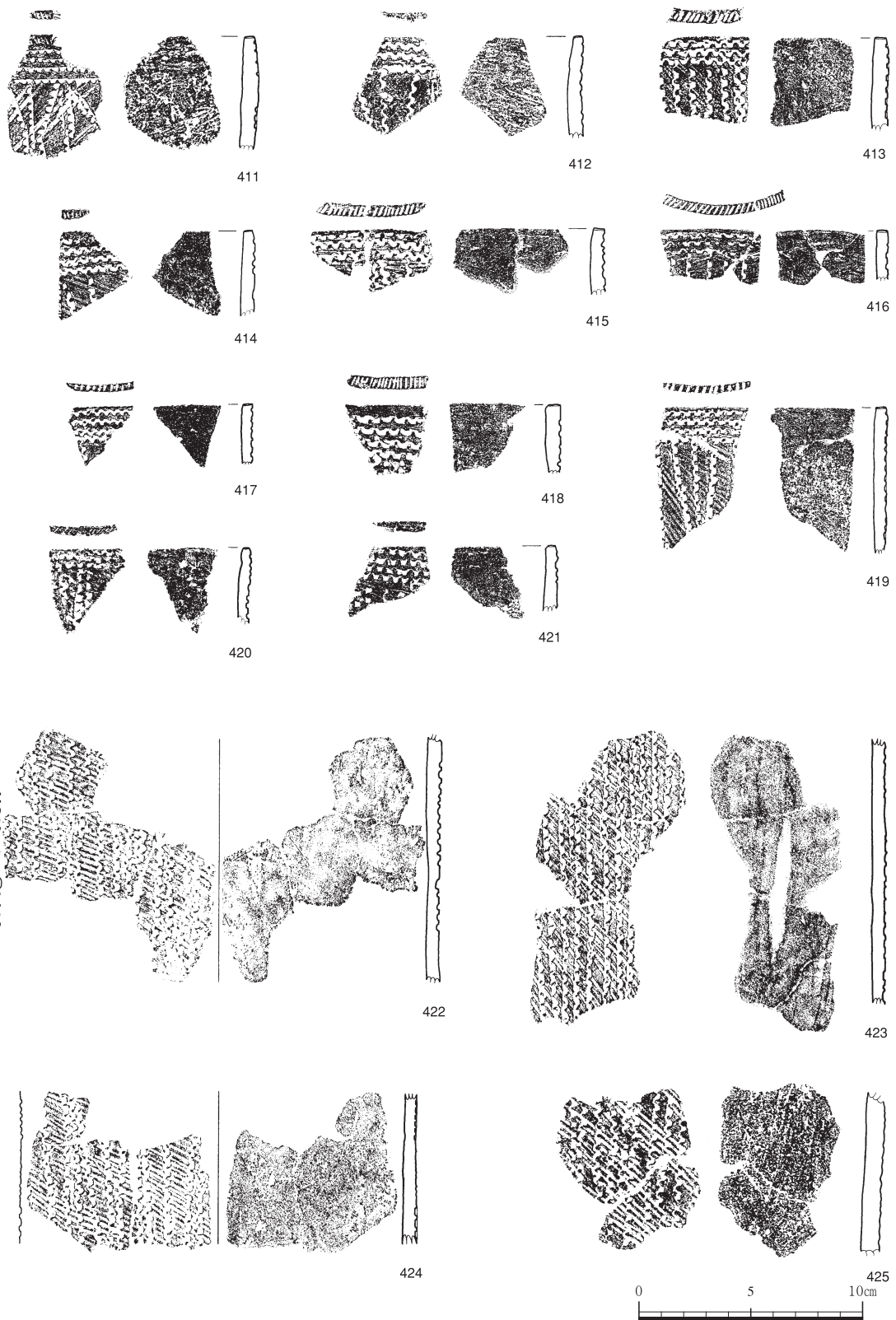
第137图 II a-2 類土器 (2)



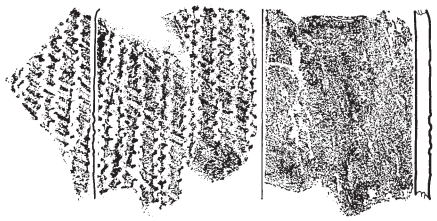
第138图 II a-2 類土器 (3)



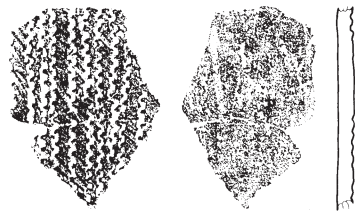
第139図 II a-2 類土器 (4)



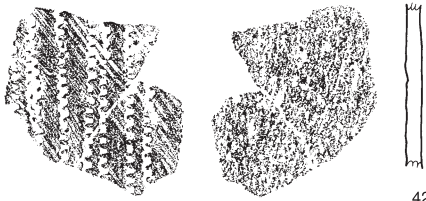
第140図 II a類土器(1)



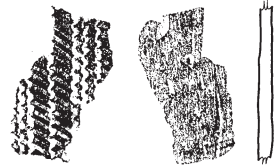
426



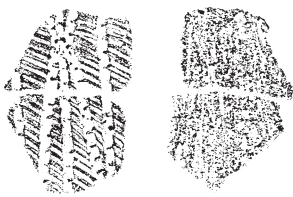
427



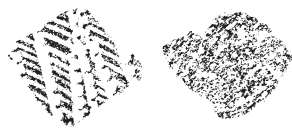
428



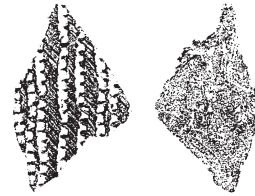
429



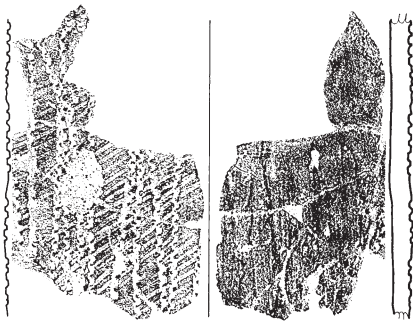
430



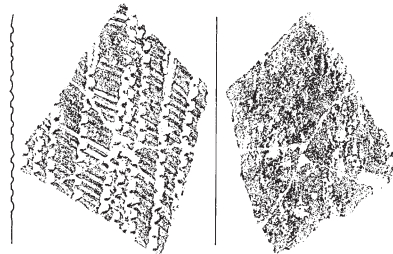
431



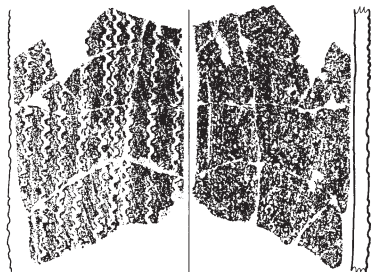
432



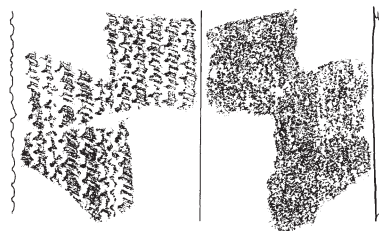
433



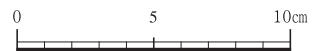
434



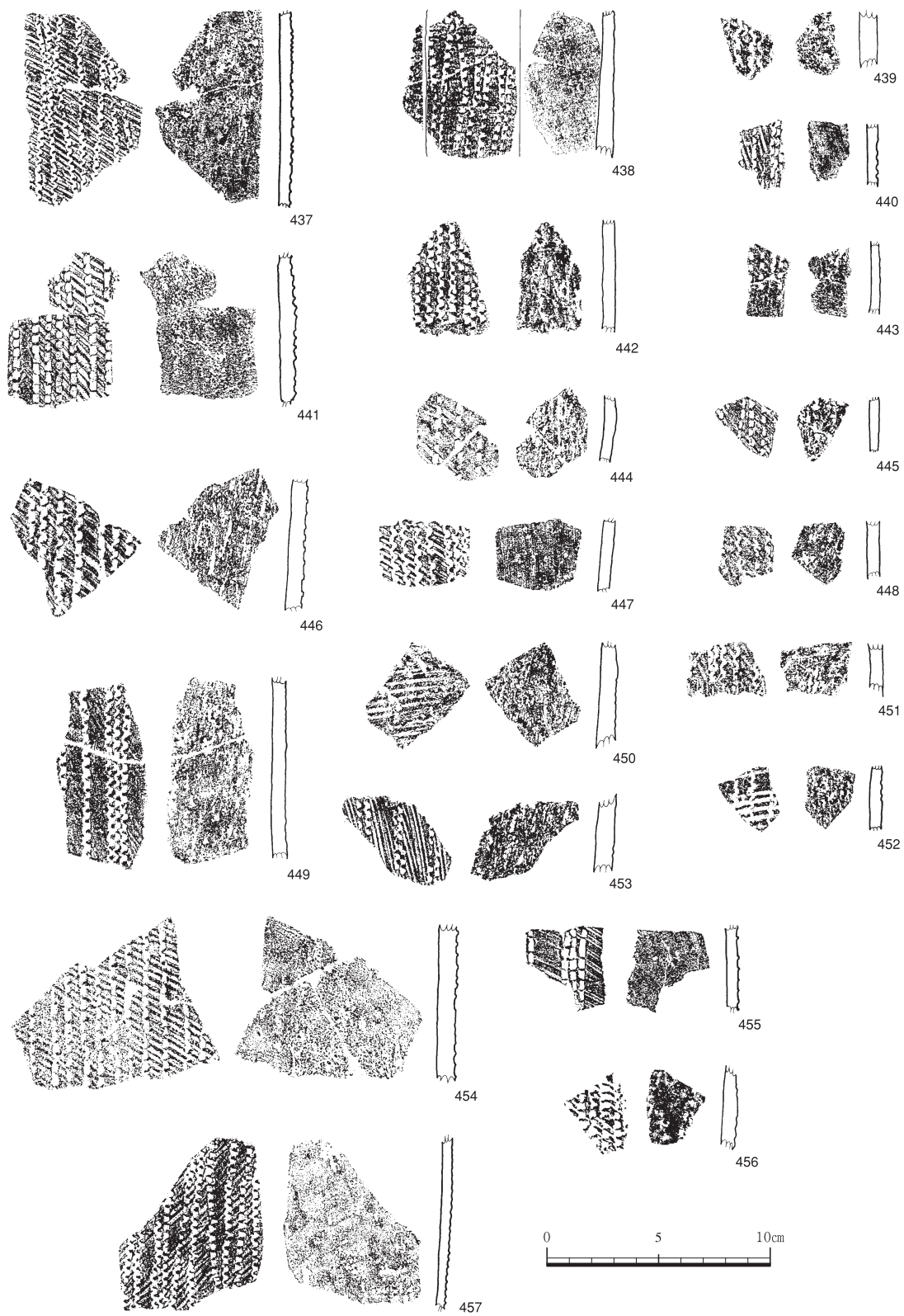
435



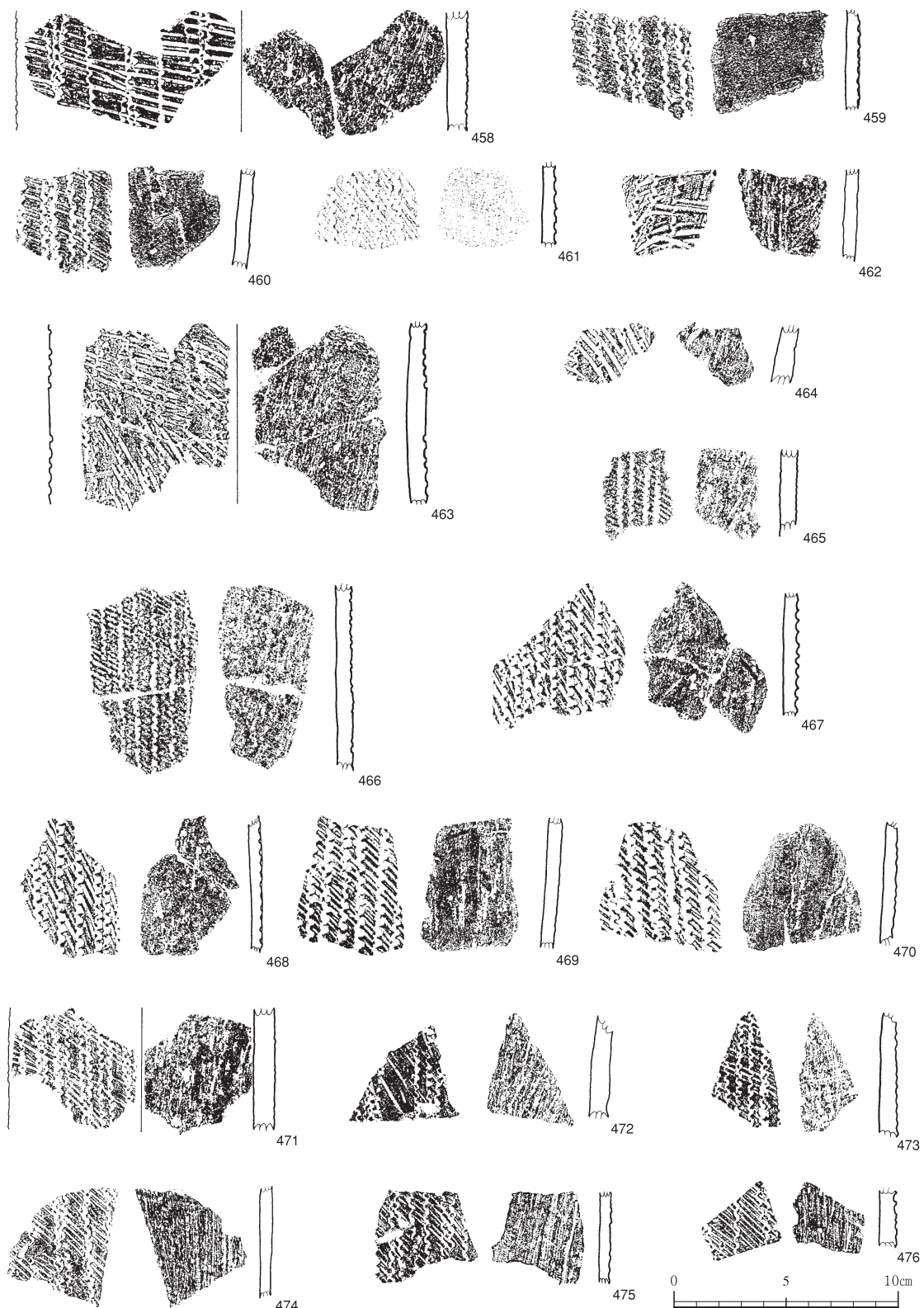
436



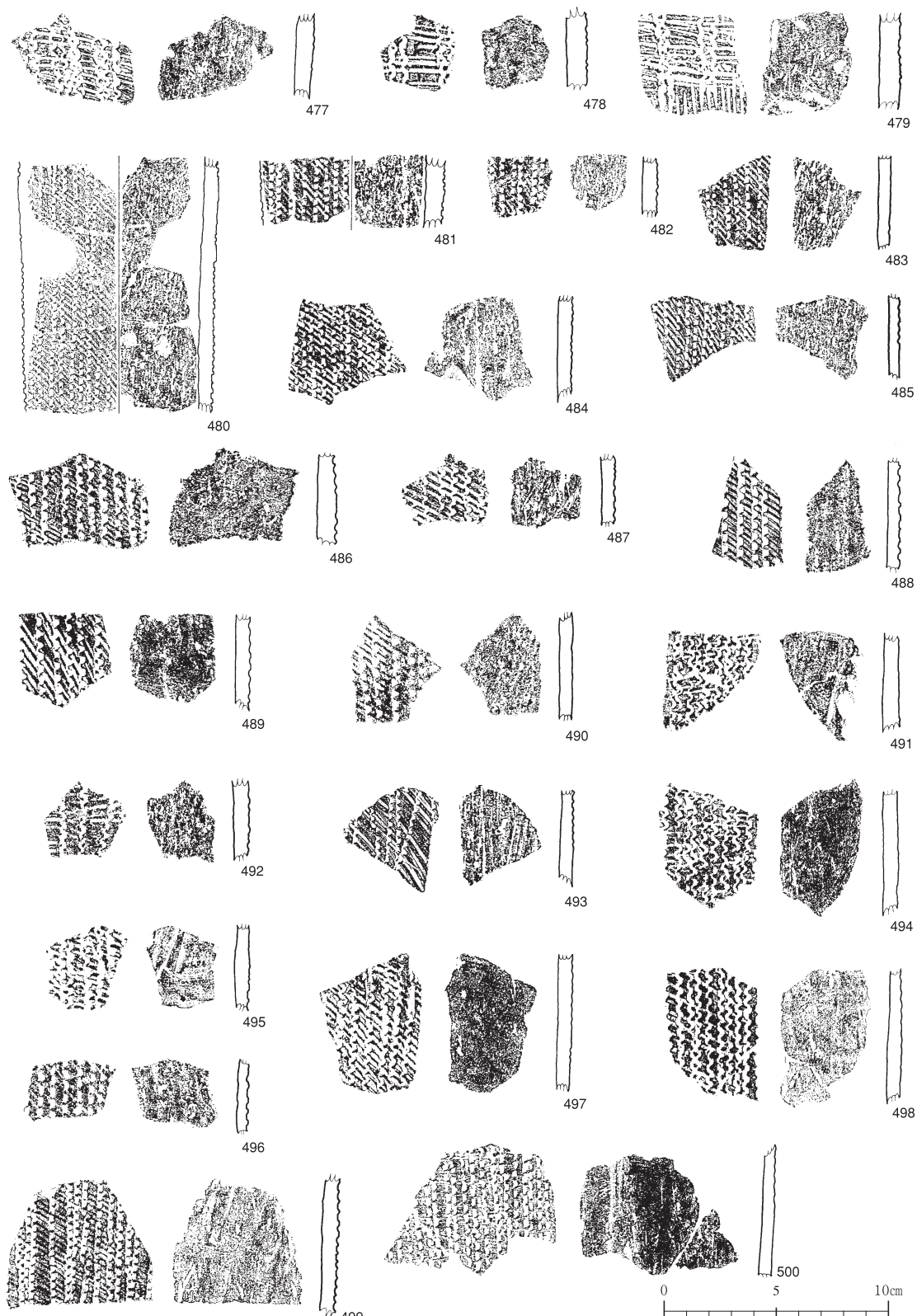
第141图 II a類土器(2)



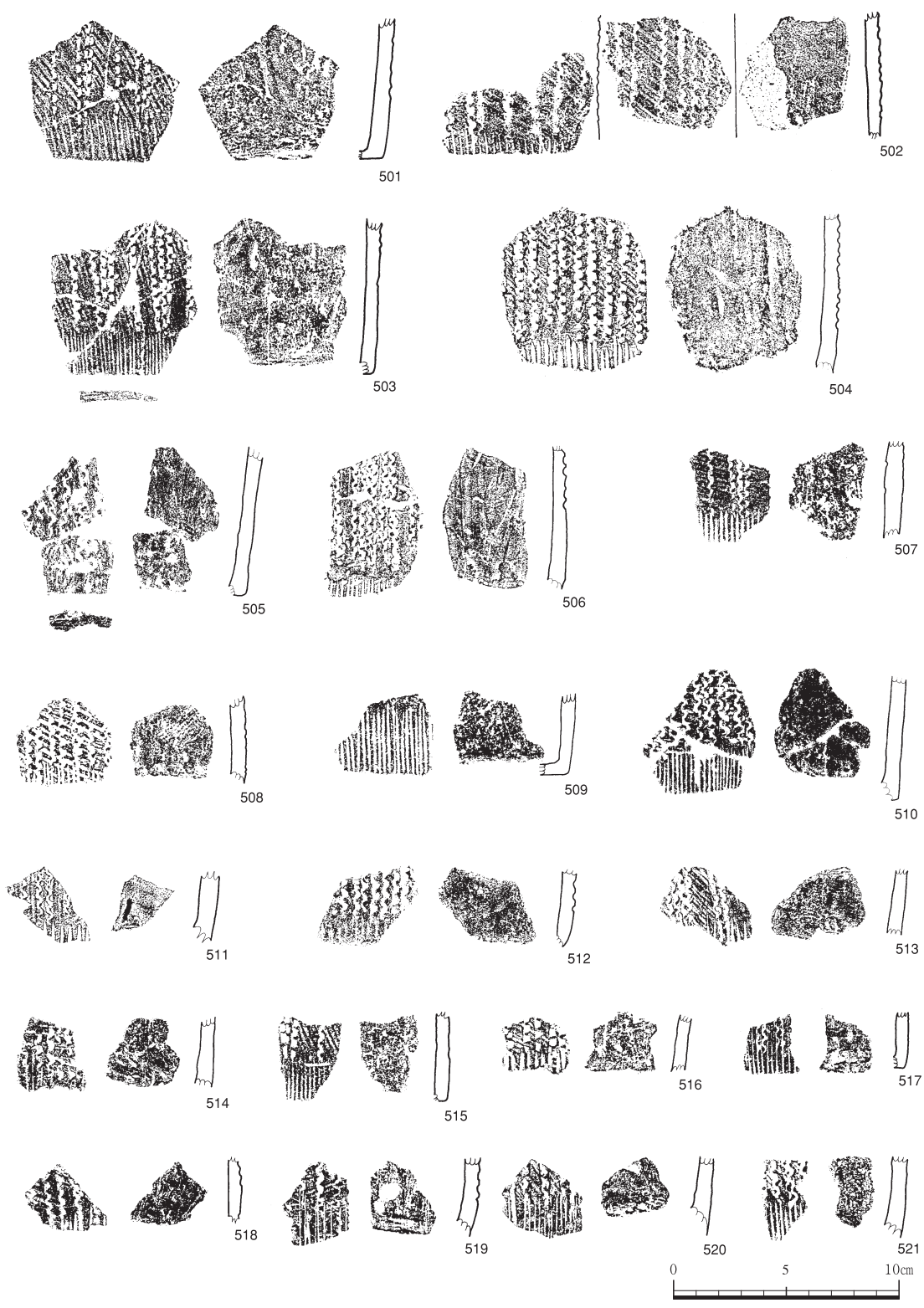
第142図 II a類土器 (3)



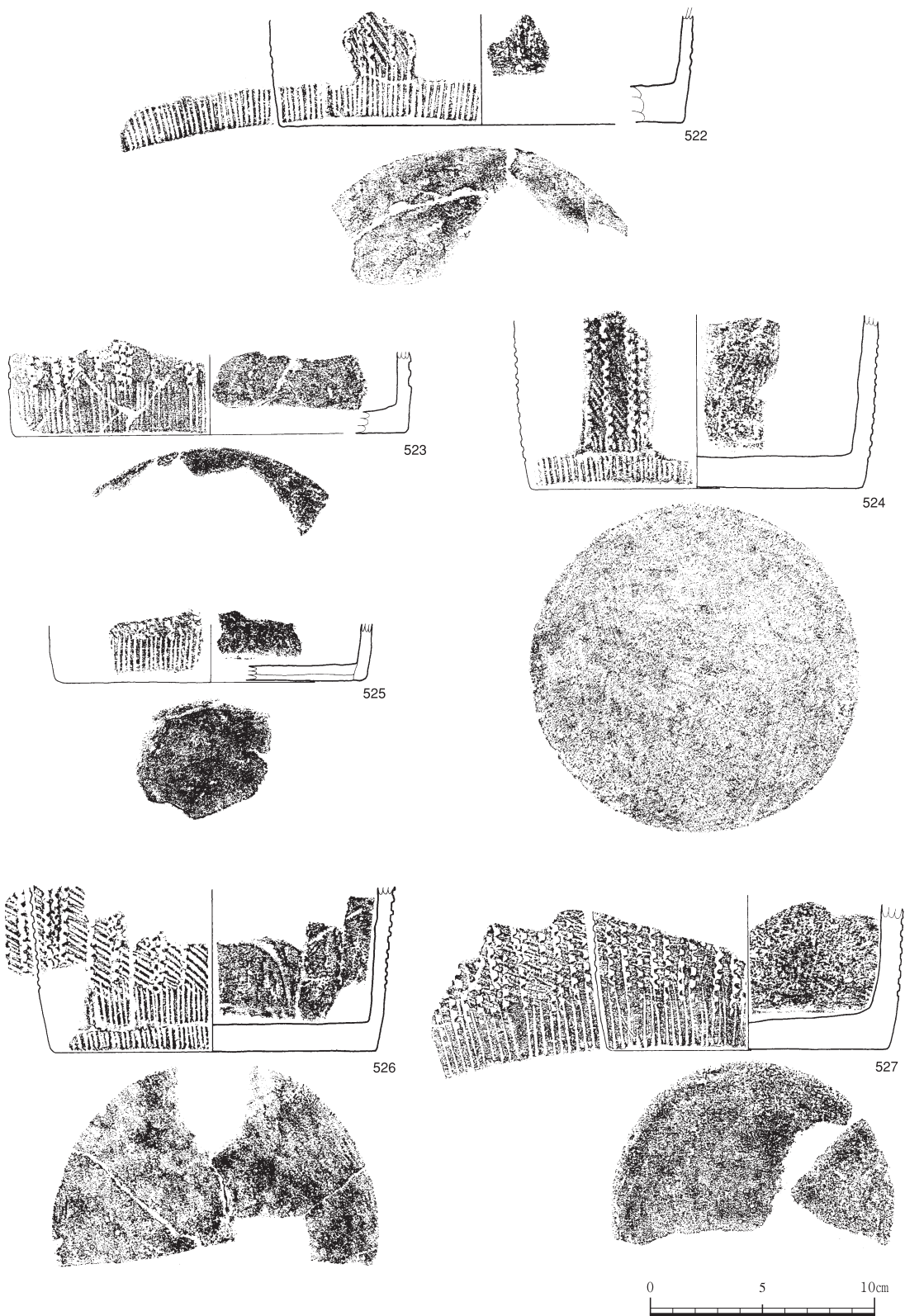
第143図 II a類土器(4)



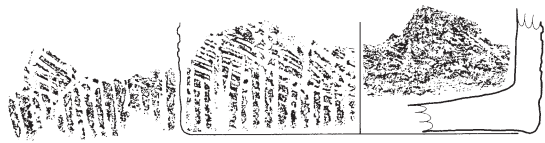
第144図 II a類土器(5)



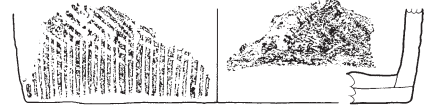
第145图 II a類土器 (6)



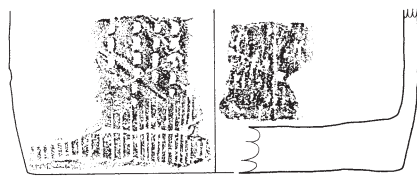
第146図 II a類土器(7)



528



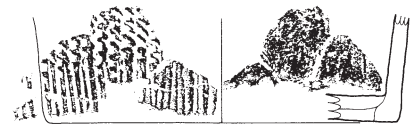
529



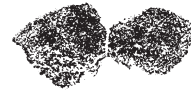
531



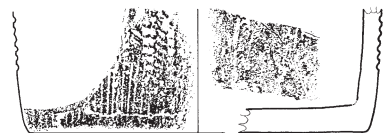
530



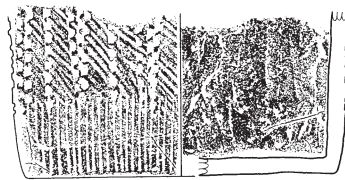
532



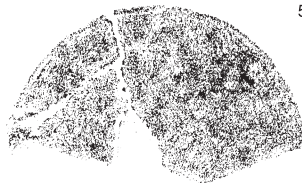
533



534



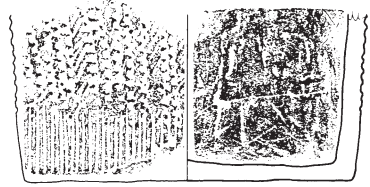
535



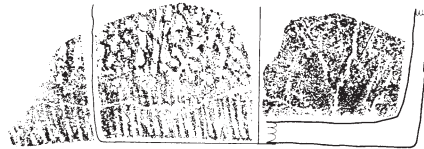
536



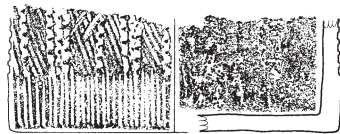
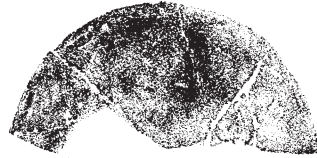
第147図 II a類土器(8)



537



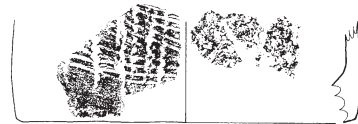
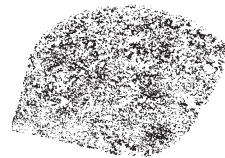
538



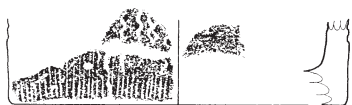
540



539



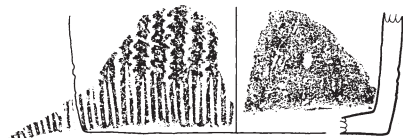
541



542



543



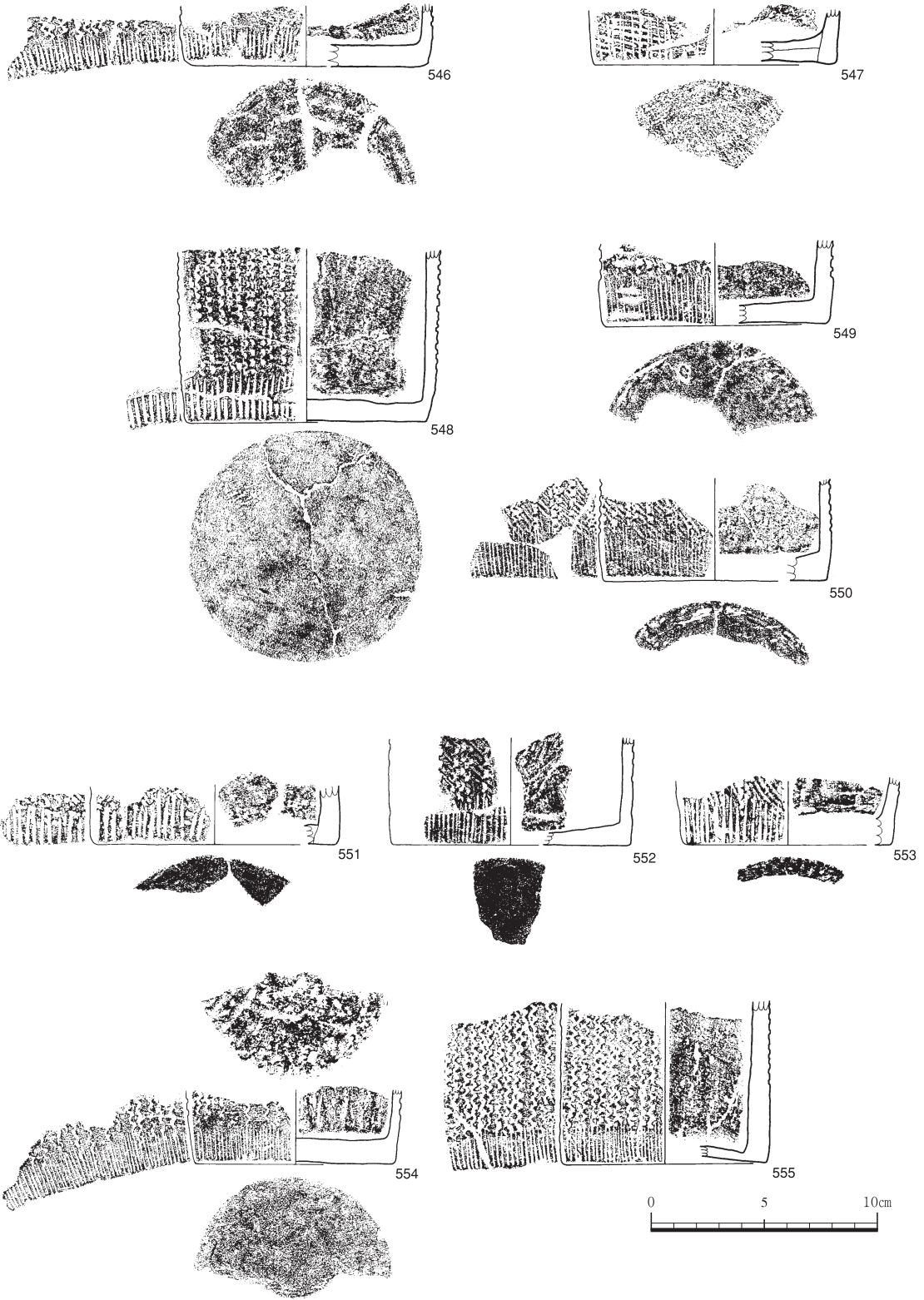
544



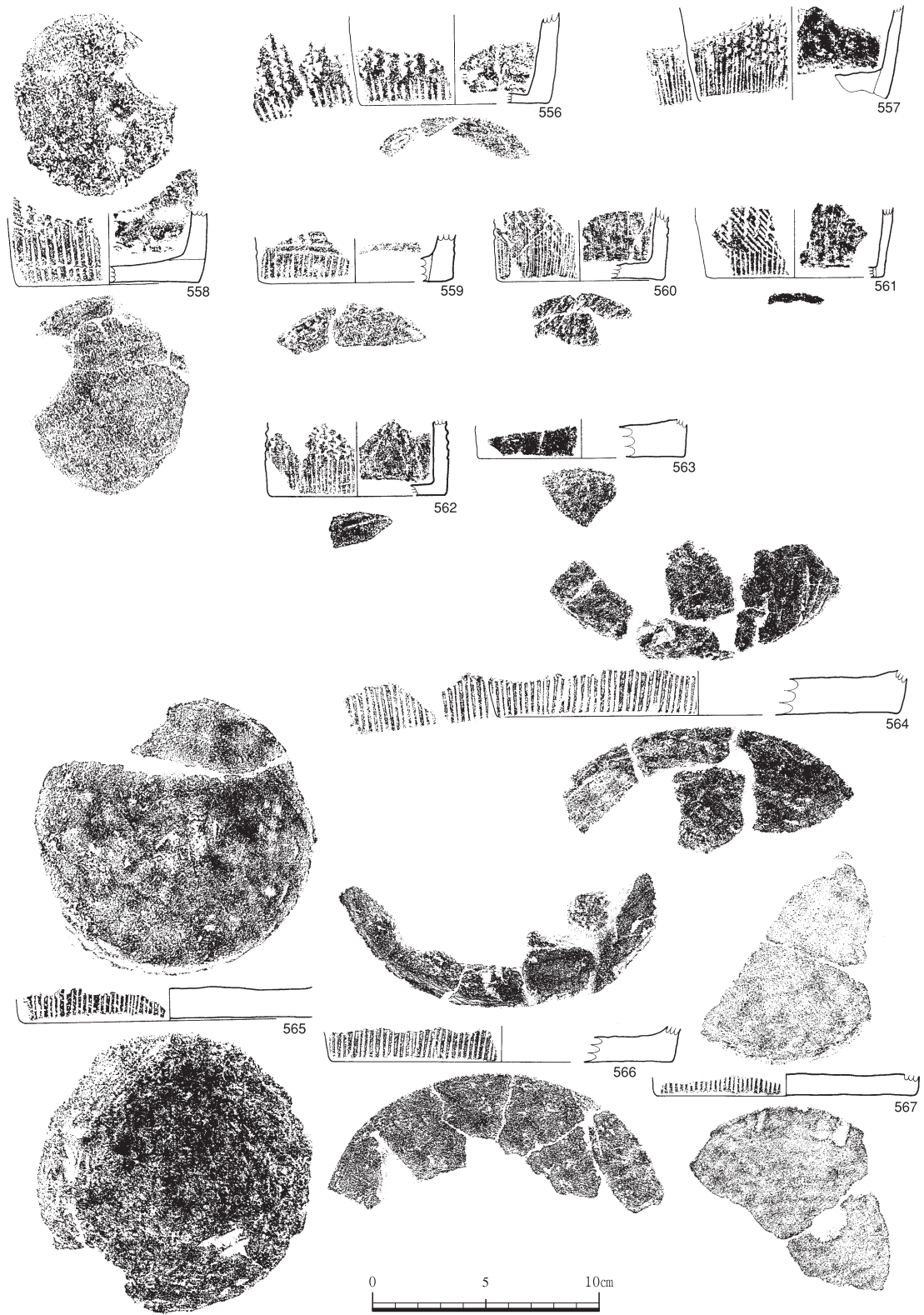
545



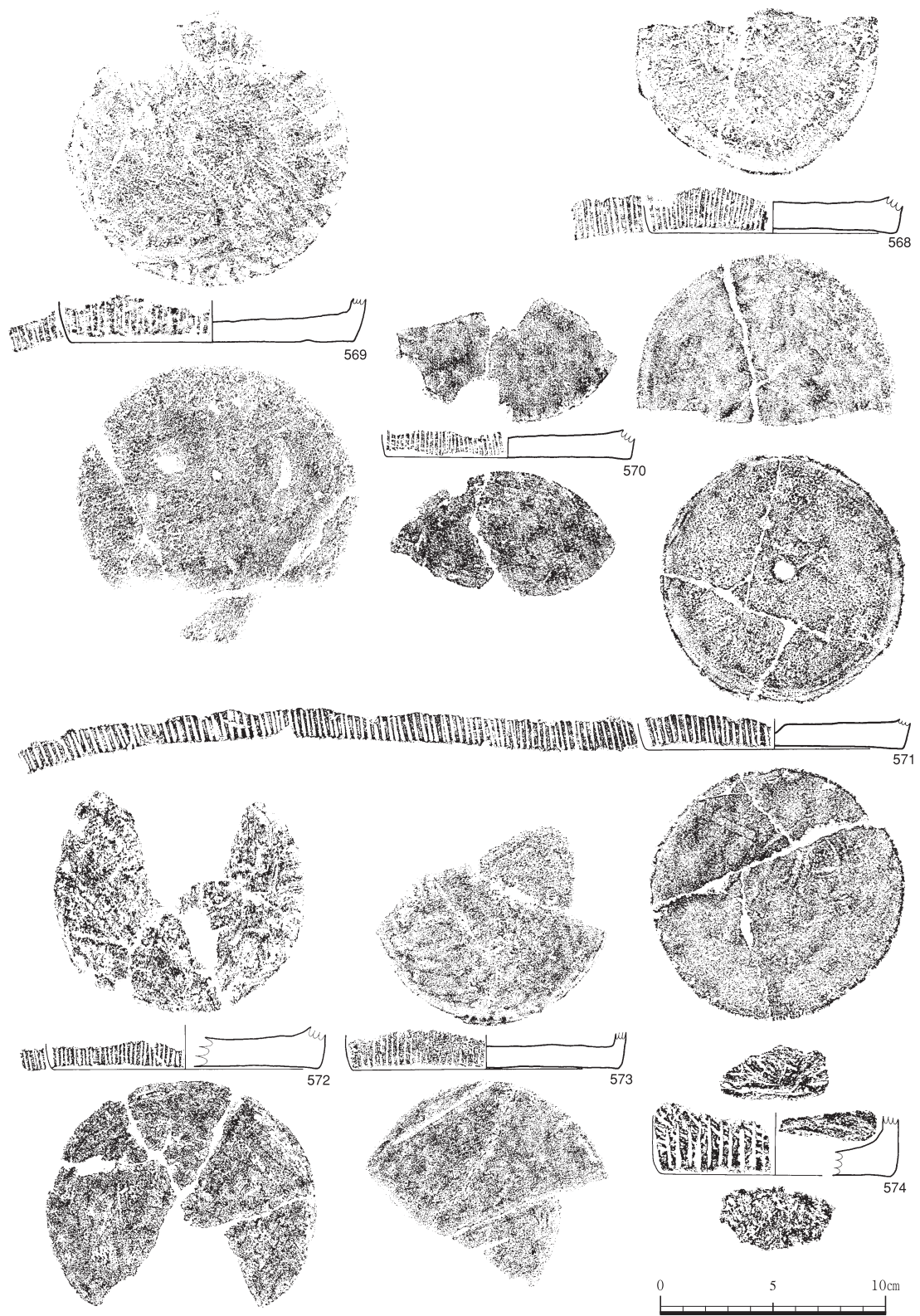
第148図 II a類土器(9)



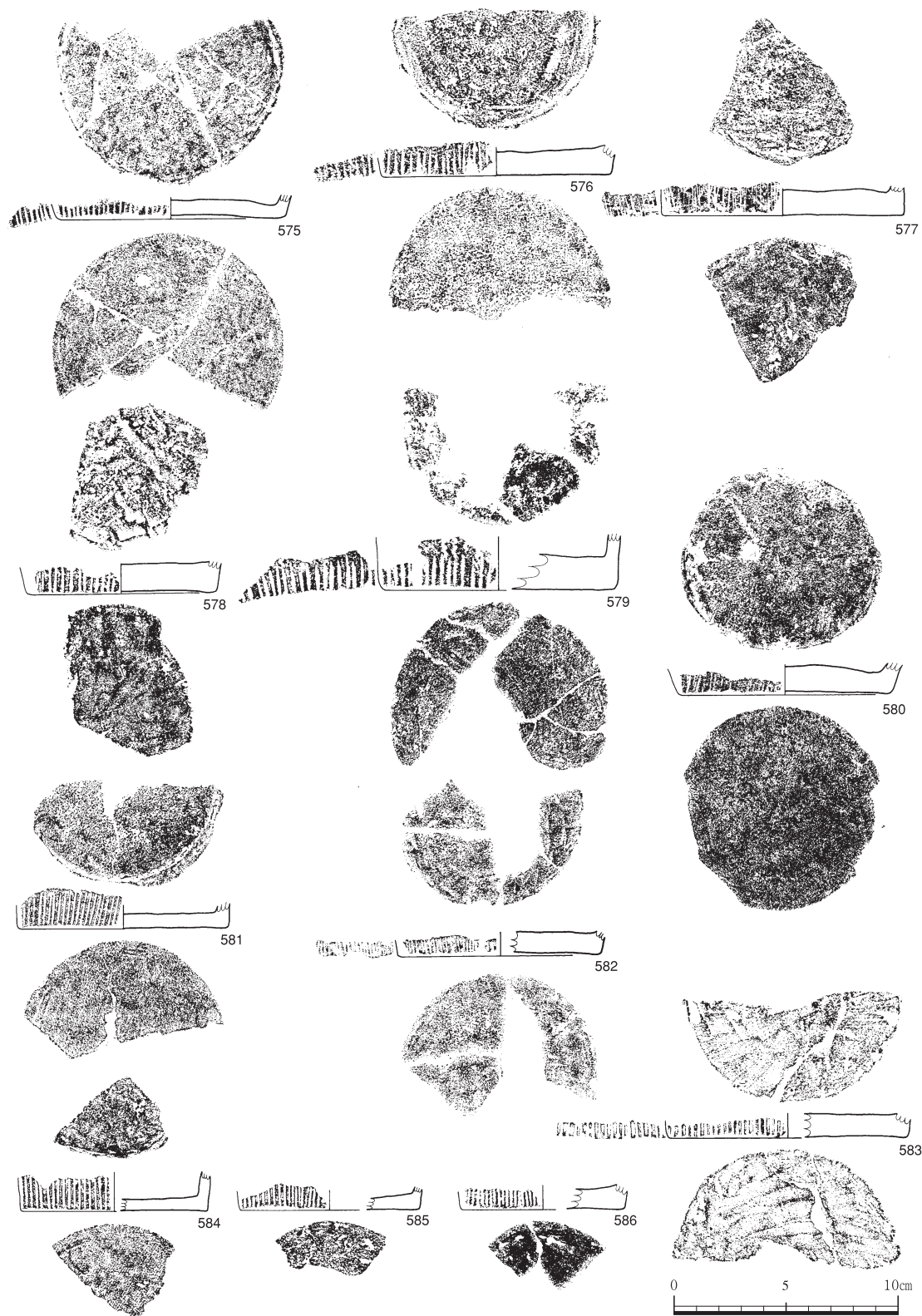
第149图 II a 類土器 (10)



第150图 II a類土器 (11)



第151図 II a類土器 (12)



第152図 II a 類土器 (13)

587～597は、胴部の縦位・斜位の貝殻刺突に加え、横位の貝殻刺突が施されている土器である。2個体分を確認した。

587～593は、器壁が薄くけずられて丁寧な作りである。胴部文様は、まず横方向の条痕文の上から4条1セットの横位の刺突文帯が間隔をあけて施される。その後、縦位・斜位の貝殻刺突からなる通例の施文がなされ、最後に口縁部の横位刺突文が付される点は、先に述べてきた多くのⅡa類土器と変わらない。縦位・斜位の貝殻刺突文は、若干乱れている。口縁部外面や、胴部内面に炭化物の付着が認められる。胎土に0.5mm大の角閃石が多く混入し、焼成は良好である。

594～597は、胴部片のみが出土した。文様は、縦位・横位の貝殻刺突によって格子状の施文がされており、特徴的である。施文順序は、やはり横位刺突文の施文が先である。胎土も1mm以下の角閃石が目立ち、587等の胎土に近い。器壁の厚み、内面調整でケズリの後丁寧になでられている点が、587等とは異なる。

〈Ⅱb類土器〉(第154図～第157図)

角筒形を呈する土器である。小破片が多く、楔形貼付文をもたないと断定できる個体は少ない。

598は最も残りの良い破片である。文様構成はⅡa類と同様で、地文の上は縦位貝殻刺突文のみが施されるタイプである。明瞭な角部が形成され、そこに楔形貼付文や「へ」の字状の連続貝殻刺突文が付される。胴部外面に煤が付着している。

603は、不定方向の貝殻条痕文の上に縦位・斜位の貝殻刺突文が施される。角部は磨滅が激しいが、「へ」の字状の貝殻刺突であると思われる。胎土に2mm以下の赤色粒子が目立つ。

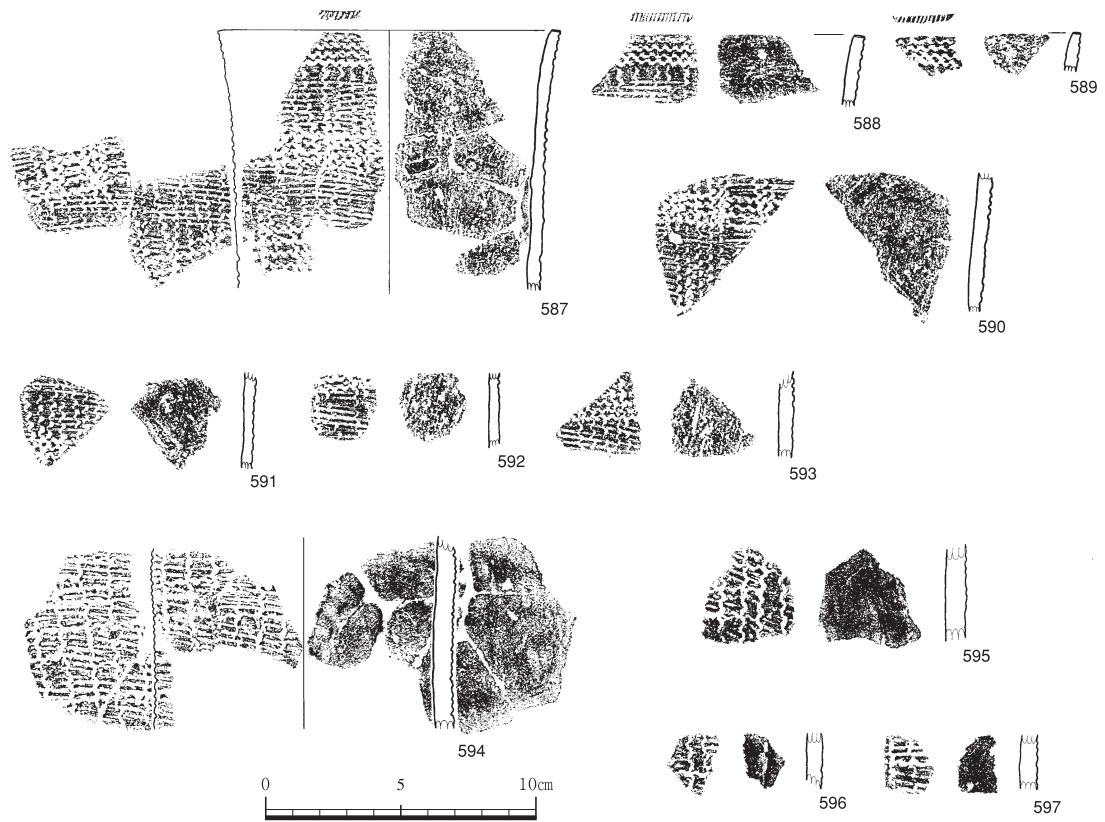
599～602、604～610は口縁部付近の破片である。

599・607・608は内面が丁寧に磨かれている。600は外面に煤が付着している。604は角部に楔形貼付文がみられず、縦位の貝殻刺突文が施されている。

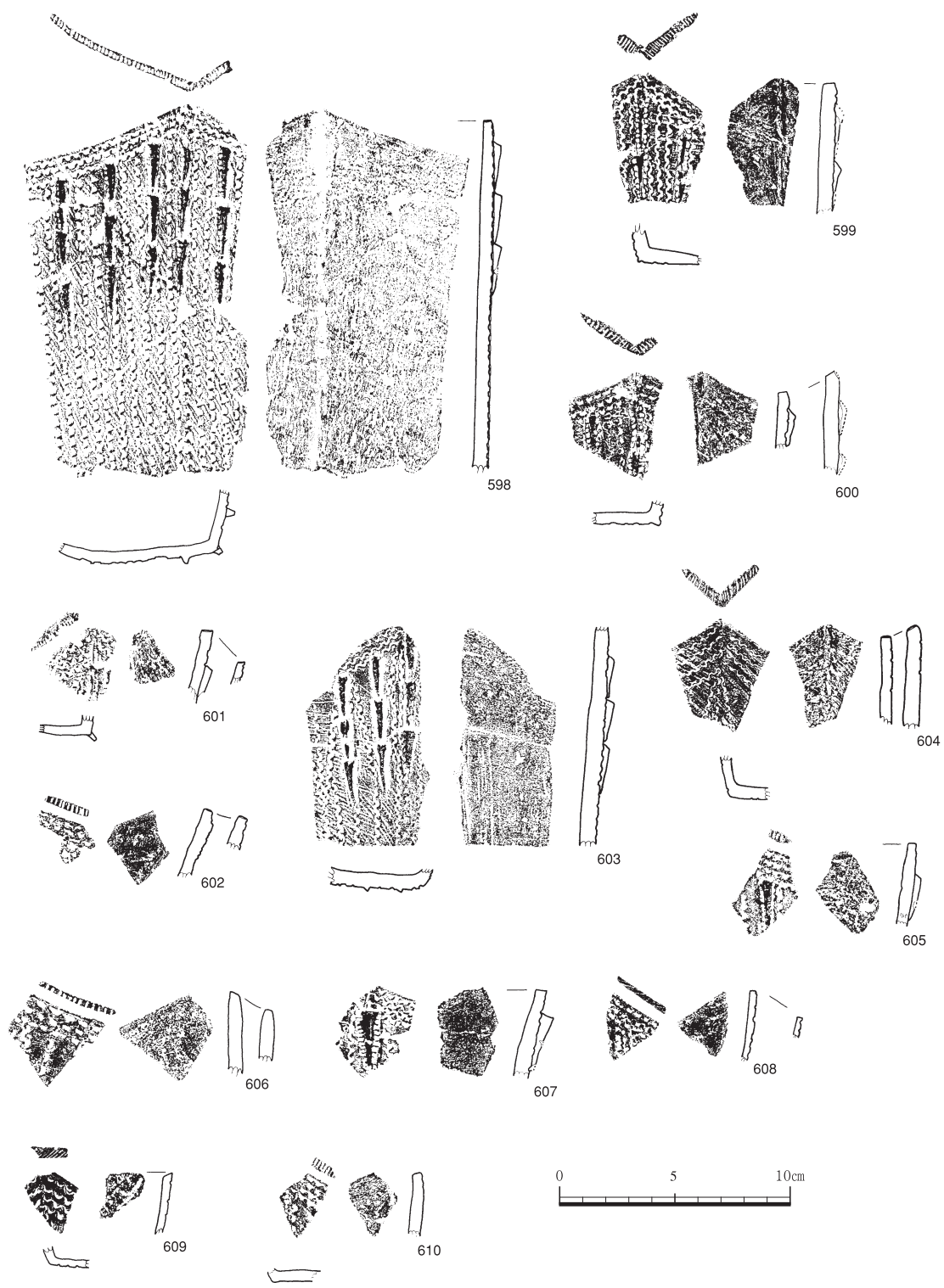
611～629は楔形貼付文を有する胴部片である。

614・619には両端がすぼまるミミズ腫れ状の楔が貼付されており、こうした土器は本遺跡では数少ない。両者とも、角部は無文である。614は器壁が厚く、貝殻刺突文が雑に施文されている。618は楔の側面に煤が付着している。

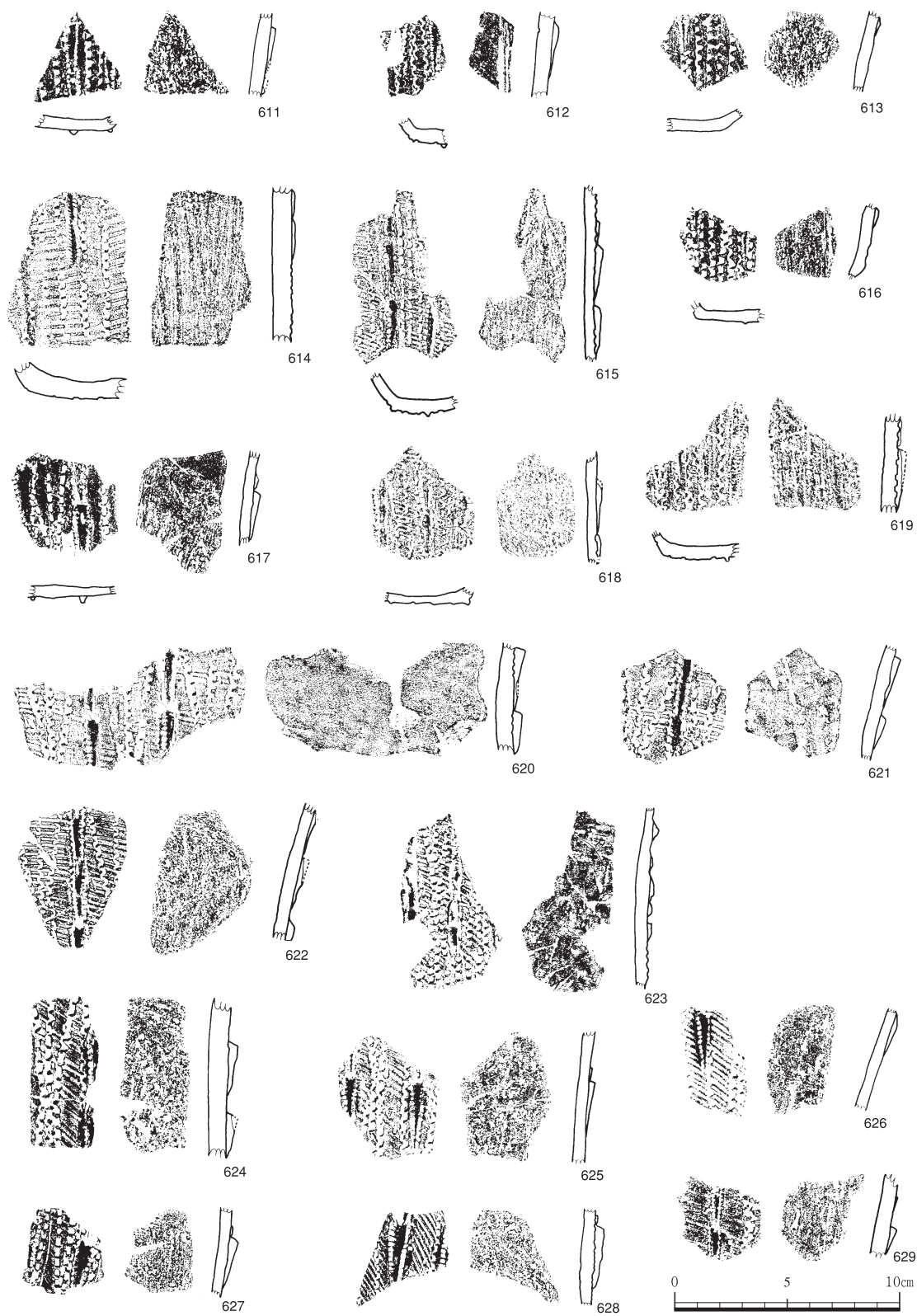
630～664は楔の有無が不明な胴部片である。



第153図 II a類土器 (14)



第154图 II b類土器 (1)



第155图 II b類土器 (2)

630～634・635～637・638～640はそれぞれ同一個体であり、635～637は603の胴部である可能性が高い。641・642の角部には、細い工具による刻目が施される。643・644は、縦位の貝殻刺突文のみ2条対になって施文されている。角部に縦の貝殻刺突文が施されている点や、調整方法・胎土が似ている点から604の胴部であると考えられる。楔形貼付文をもたない個体である。654は角部が非常に明瞭な個体である。器面に対して貝殻を寝かせて刺突しており、押圧気味の施文となっている部分もある。

665～669は底部片である。底部内面にはケズリ、底部外面には丁寧なナデ調整がみられ、II a類土器との間に違いはみられない。底部の刻目は、665・666・668が短く細かいのに対し、667・669は長く粗雑である。

〈II c類土器〉(第159図)

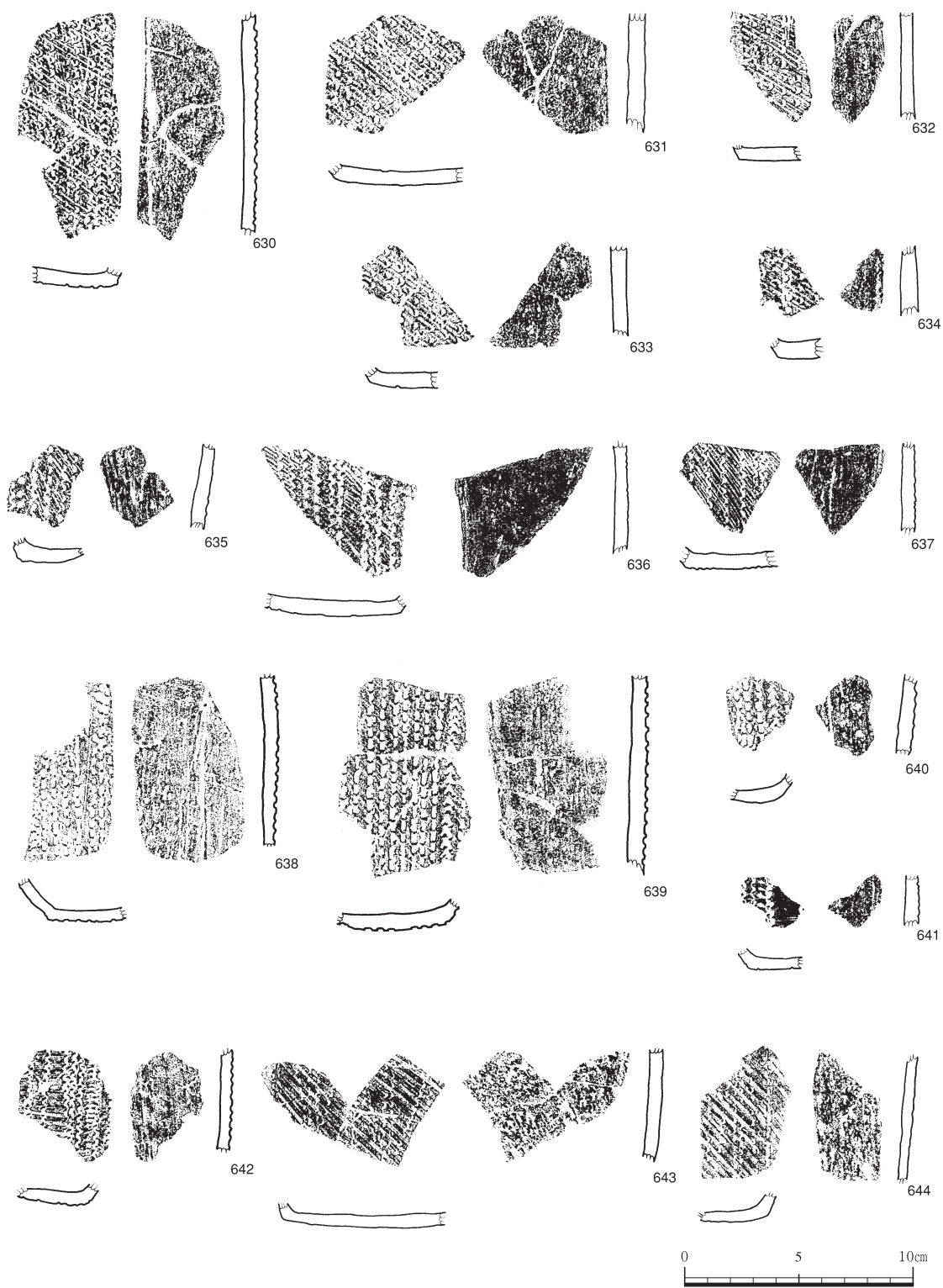
平面観が、いわゆるレモン形を呈する土器である。楔形貼付文の有無は判断できない。胴部文様は、条痕文の上から縦位の貝殻刺突文を施すもののみが認められた。

670～673は縦位の刺突文が比較的密に施され、角部には貝殻刺突文が「へ」の字状に連続刺突されている。

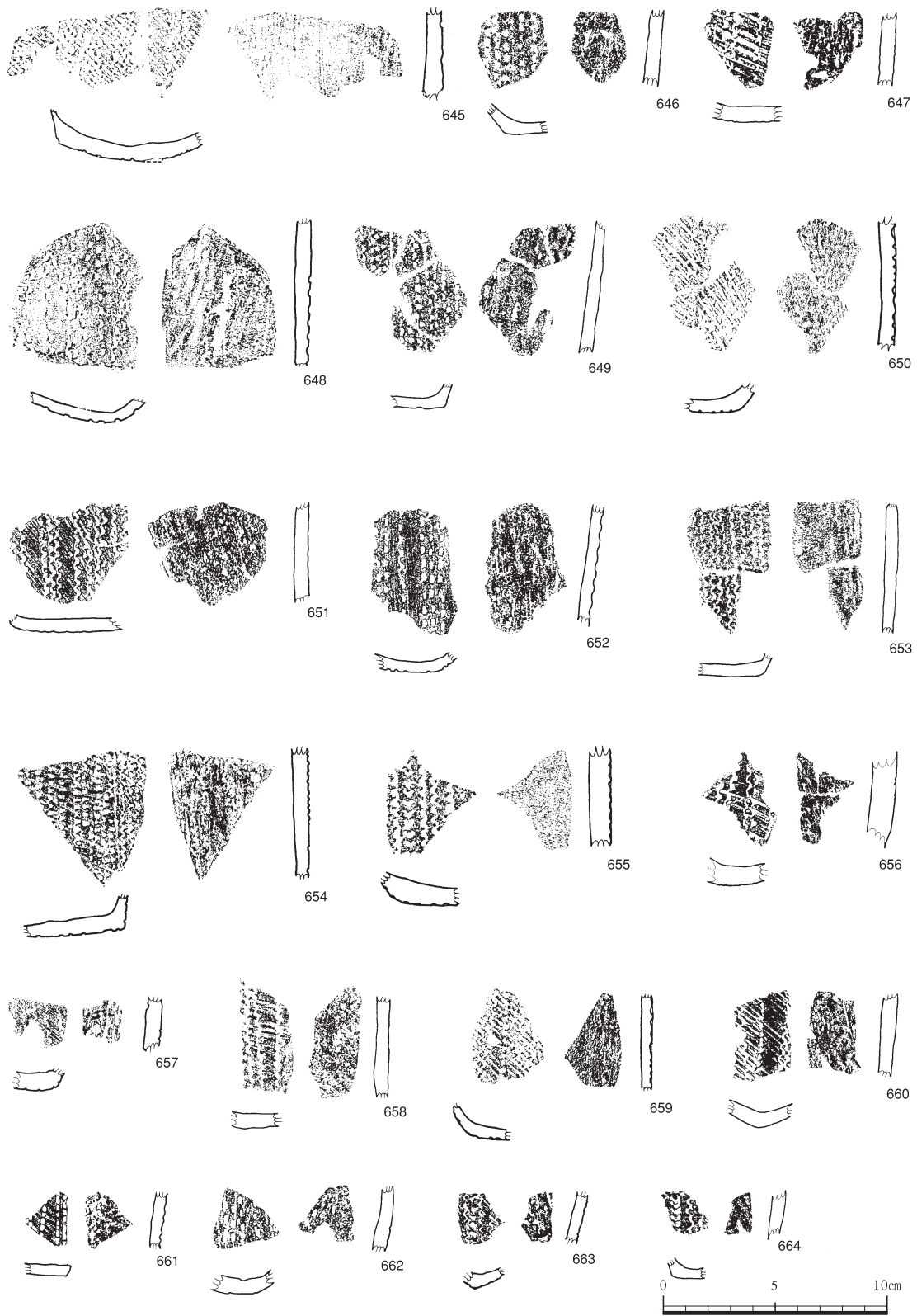
674・675の角部には、つまみ出しにより明瞭な稜線が形成されているが、文様は付されていない。地文の条痕文は、縦方向のナデによって消され、うっすらと残るのみである。

676・677・678は底部片である。底部付近に縦位・斜位の刻目が施され、内面はケズリ・ナデ、底面は丁寧なナデ調整がなされる。

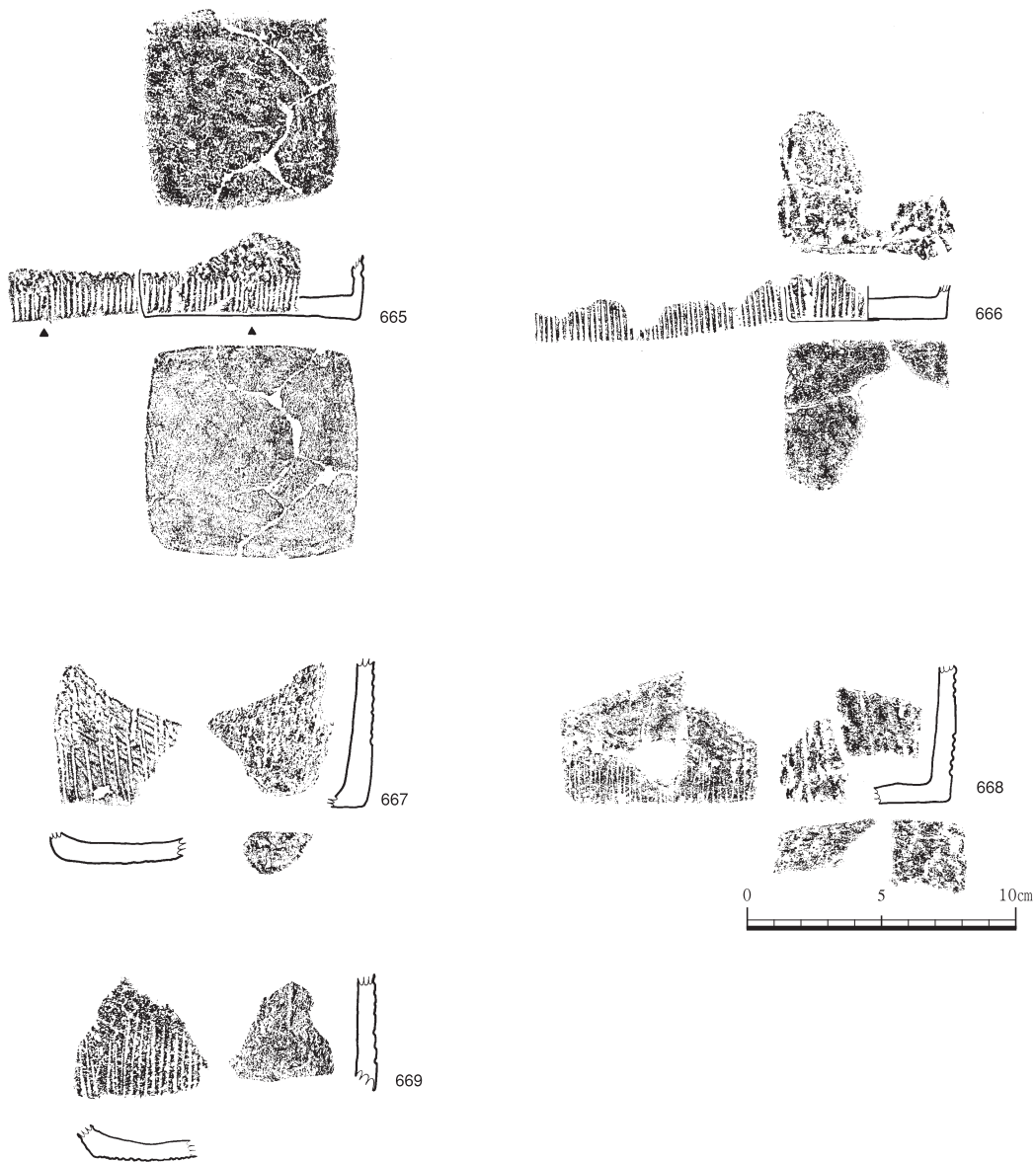
II類土器は、研究者によって様々な名称で呼ばれている。鹿児島市加栗山遺跡を標識遺跡とする加栗山式土器に比定でき、寺師三國氏・新東氏の知覧式土器(寺師1943・新東1989)、河口貞徳氏の前平式土器(河口1980)、本田道輝氏の柵ノ原タイプ(本田1986)に相当する。



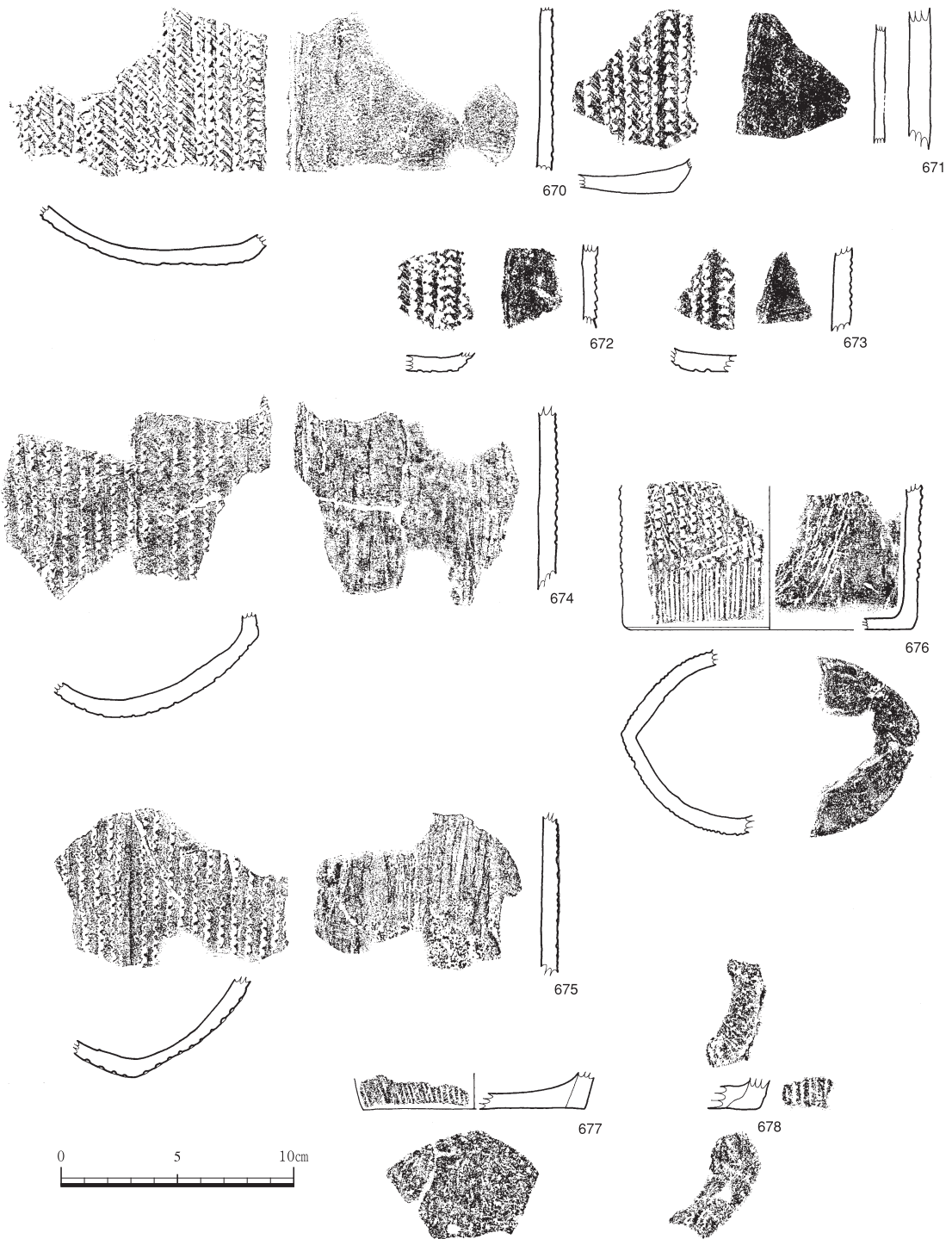
第156図 II b類土器 (3)



第157图 II b 類土器 (4)



第158図 II b類土器 (5)



第159図 II c 類土器

【Ⅲ類土器】

器形は、平底から胴部を経て口縁部に至るまで若干外傾しながら立ちあがる円筒形を呈する。Ⅱ類土器に似た器形であるが、口縁部付近がより開く傾向にある。全体的に器壁の薄いものが多く、作りが精緻な印象を受ける。楔形貼付文をもつⅢ－１類と、もたないⅢ－２類に分類できる。Ⅲ－１類は先述したⅡa－２類に比べて楔同士の間隔が狭く、密に施される。また、楔がY字状に貼付されたものもみられる。

文様については、口唇部の刻目や口縁部文様帯が施されることに、Ⅱ類との違いはない。しかし、楔と同様に口縁部文様帯の幅もⅡ類より狭く、密な印象を受ける。また、二重施文の地文である貝殻条痕文はなく、貝殻による押圧文・押し引文が主である。底部付近に刻目があるものと、胴部文様が底部まで続くものの２種類が確認できる。

〈Ⅲ－１類土器〉（第160図・第161図）

679・680・683の口縁部文様帯は、横位ではなく斜位の貝殻刺突文で構成されている。楔の両脇には、連点ではなく浅い沈線が巡るので、接着方法は、刺突ではなくヘラ状の工具で練り付けたような手法であることがわかる。

681・682は同一個体で、口縁部には横位3条の貝殻刺突文、胴部には縦位貝殻刺突文が施される。内面は斜位のケズリの後、口縁部のみ磨かれている。

684～686、687・688はそれぞれ同一個体である。器面の楔がある位置には、貝殻施文がみられない。

689・690は胎土に金雲母・1～2mm大の白色粒子が多く含まれ、同一個体の可能性が高い。689・690、691の胴部には貝殻による押圧文が密に施されている。

692～699は文様・胎土が酷似することから同一個体と思われ、全容を知り得る資料である。器形は、口縁部が開く円筒形を呈する。特筆すべきは胴部文様で、一見複雑に見えるが、おそらく貝殻腹縁に成長線をもつ貝殻を使用している。それを器面に対して右上がりに構え、横方向に繰り返し押し押圧を加えたものと思われる。底部付近にはナデの後、刻目が、底面にはミガキが施される。

703～719は、胴部に斜位の貝殻押し押圧文を密に施す一群である。

703・705・706は同一個体で、口縁部の内外面がしっかり磨かれている点が特徴的である。突帯間の間隔はそれほど密ではない。

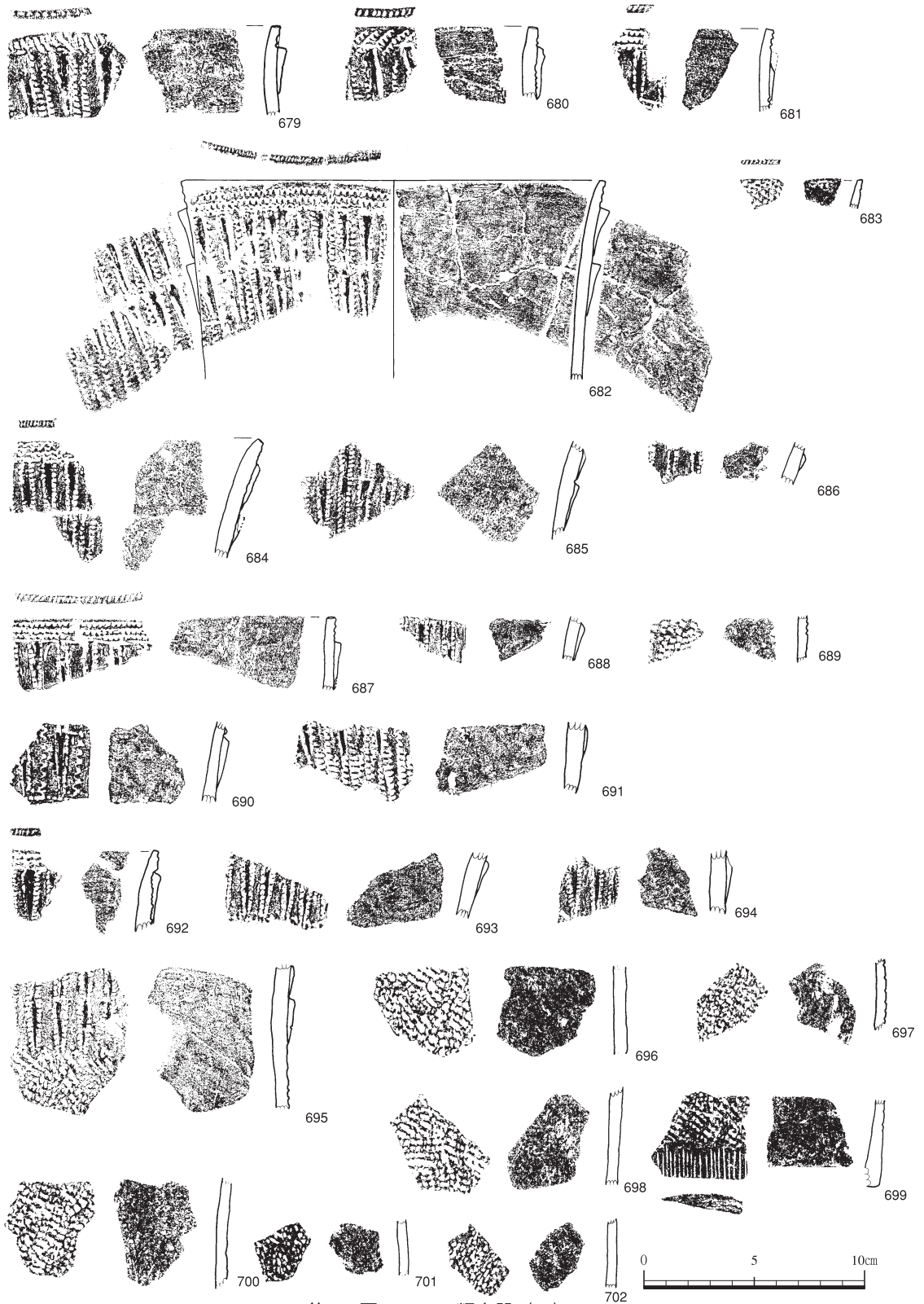
704は胎土に金雲母・1mm大の白色粒子が目立ち、689・690に非常に似た胎土である。

707～715の外面には煤が付着しており、煮炊きに使用された土器である可能性が高い。

720～723は、楔形貼付文がY字状に貼付された一群である。

720の胴部文様は斜位の貝殻押し押圧文で、内面は磨かれている。胎土に石英・1mm大の赤色粒子を多く含む。

721～723は同一個体。楔が長く、器壁に厚みがあり、大型の深鉢であるとみられる。



第160図 Ⅲ-1類土器(1)

〈Ⅲ－２類土器〉（第 162 図）

楔の存在が確認できなかった個体の土器片はこちらに分類されていることをあらかじめことわっておく。

724・729～733 は同一個体であり、全体像がつかめる。平底の底部から外傾する胴部を経て、開き気味の口縁部へと至る器形を呈する。口縁部の貝殻刺突文帯直下から底部まで、縦位・斜位の貝殻押圧文を横方向に連続的に施している。胎土に 1～2mm 大の赤色粒子を多く含む。725～727・728 も同じような文様をもつ。

734 はあまり開かない口縁部である。文様は一部乱れるが、押引文に近い部分もみられる。

734～741 は同一個体で、胴部片のみが確認された。小刻みな押引文が巡る。

742～744 は、文様・胎土の特徴から同一個体と思われる。平底から垂直に近い角度で立ち上がり、口縁部は若干開く。右下がりの断続的な押引文が横方向に巡る。底部付近にはうっすらと刻目が確認できるが、上からよくなでられている。内面はケズリの上に軽いナデがみられ、口縁部付近にのみ丁寧なナデが施される。胎土には石英・角閃石が多く認められる。

〈Ⅲ類土器（楔の有無不明）〉（第 163 図・第 164 図）

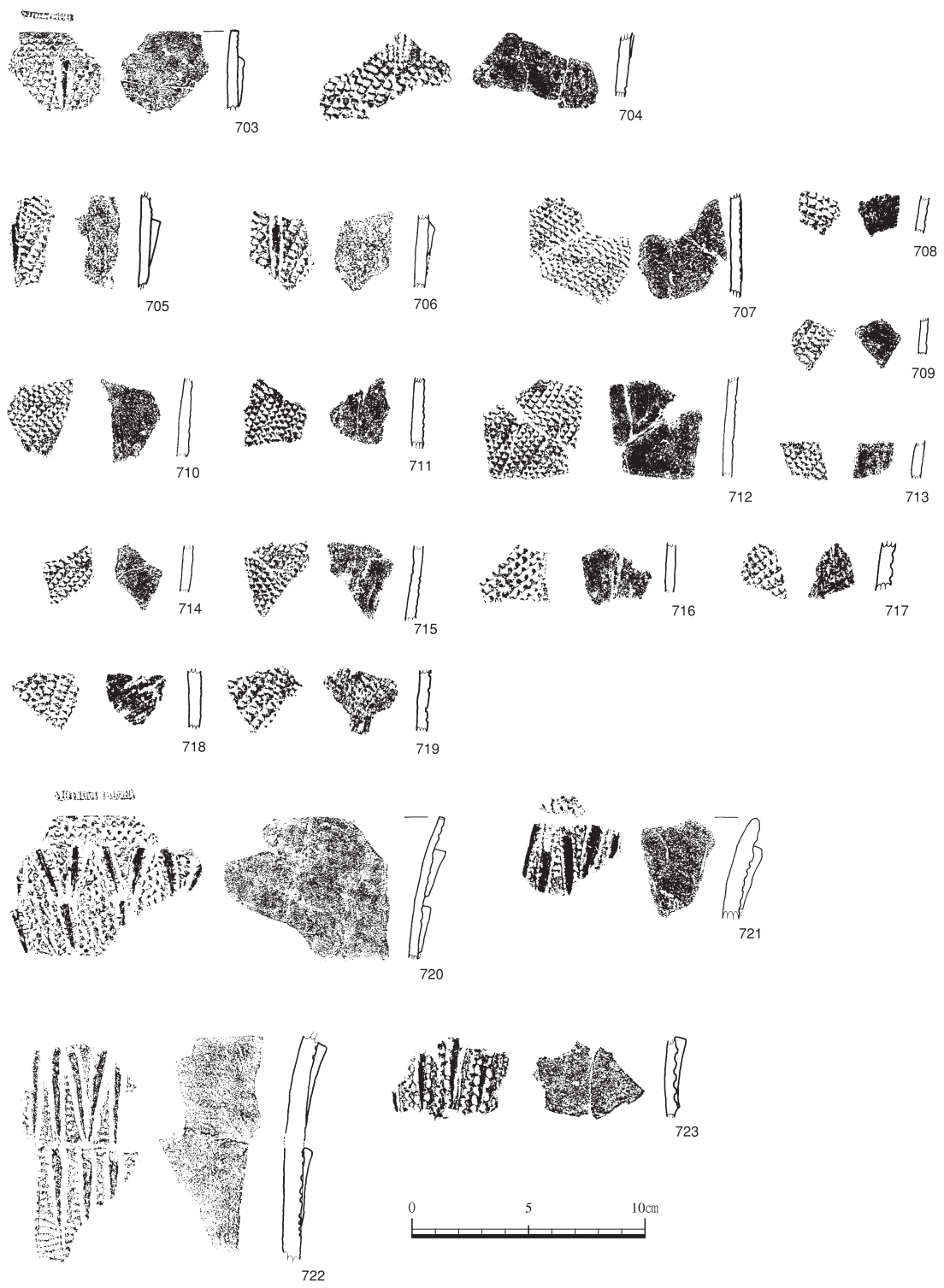
745～758 は同一個体である。胴部に、成長線のある貝殻の腹縁を横方向に連続して押圧施文している。底部付近には刻目がみられる。内面は、底部付近にまで丁寧なナデが施されている。746・748・754 の外面には煤が付着している。

759～765 は胴部片のみ確認できた。押圧文が縦に連続して施文される。器壁に若干厚みがある。

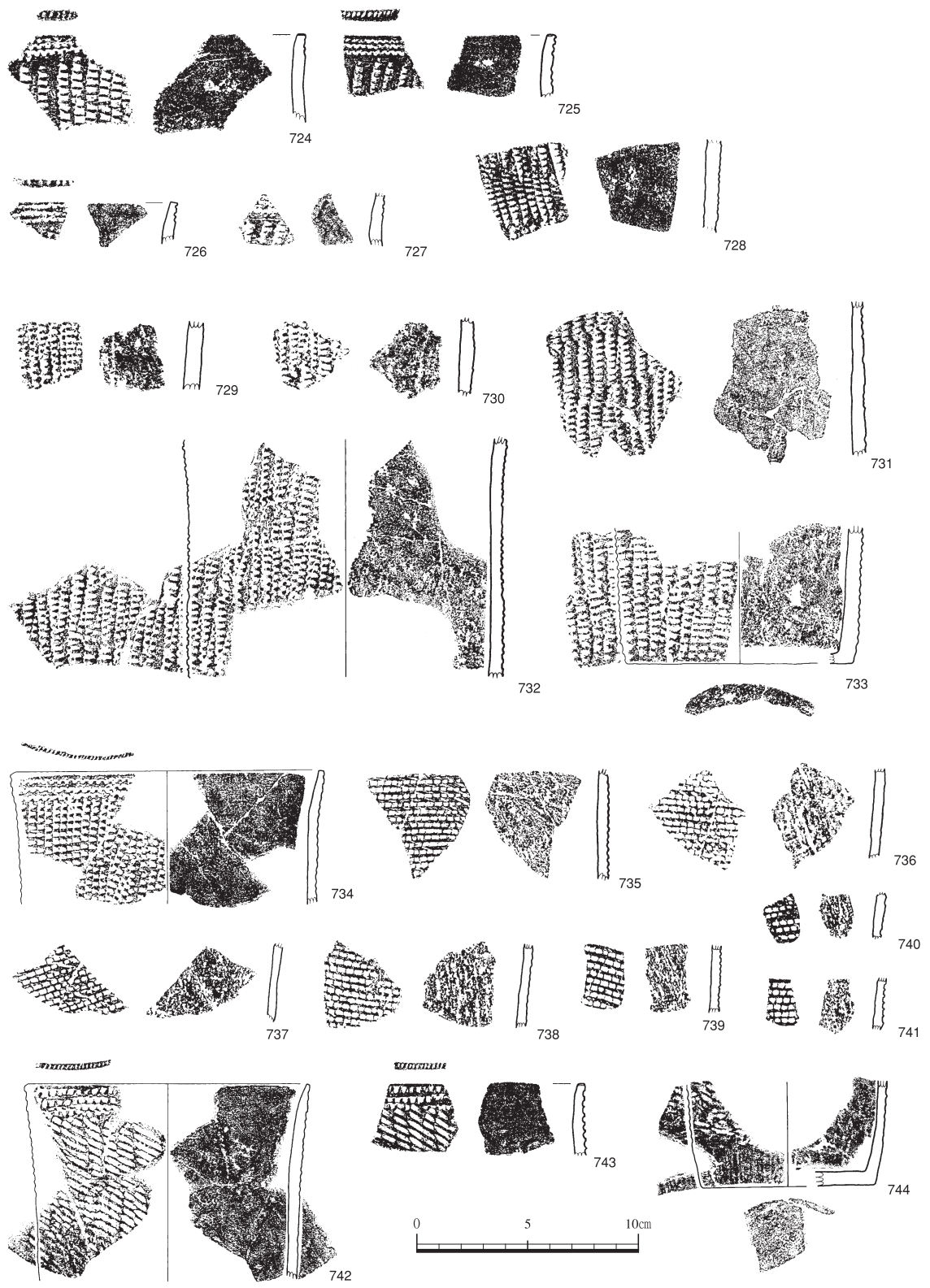
766・767 は貝殻押圧文が横方向に連続的に施される。胎土には角閃石が目立つ。

768～786 は、その他の胴部・底部片である。778 の外面の上位には押圧文が、下位には押引文が施されている。783 は貝殻押圧文が不規則に施され、その上に細い棒で引っ掻いたような痕跡が残る。灰褐色を呈する資料はこの一点のみである。784 は押圧文を横方向に連続的に施文しており、底部に刻目を施している。

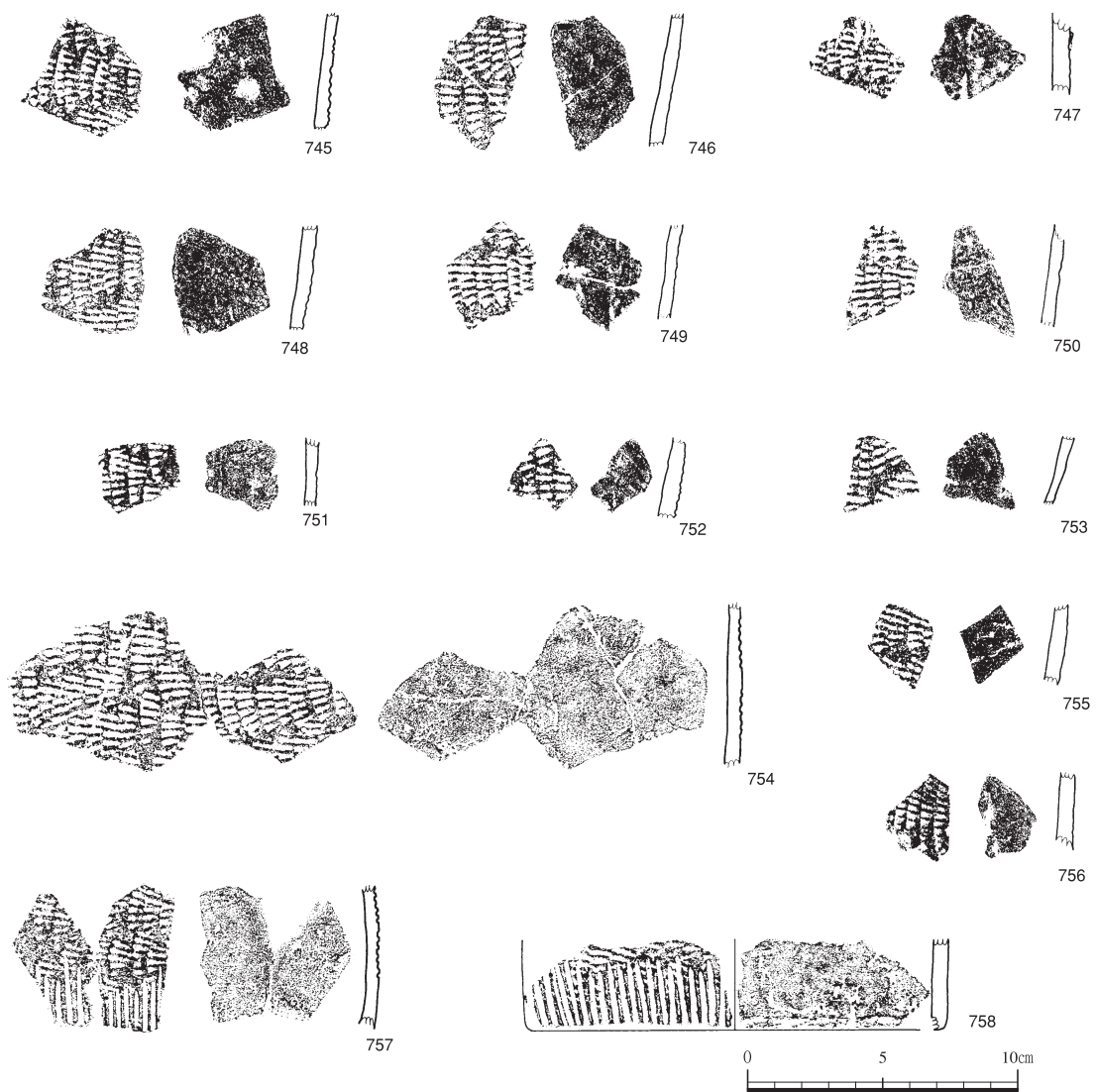
Ⅲ類土器は吉田式土器に比定でき、そのうち、押引文になりきらず断続的な貝殻押圧を施している土器は、前迫亮一氏の小牧 3A タイプ（前迫 2000）に相当する。



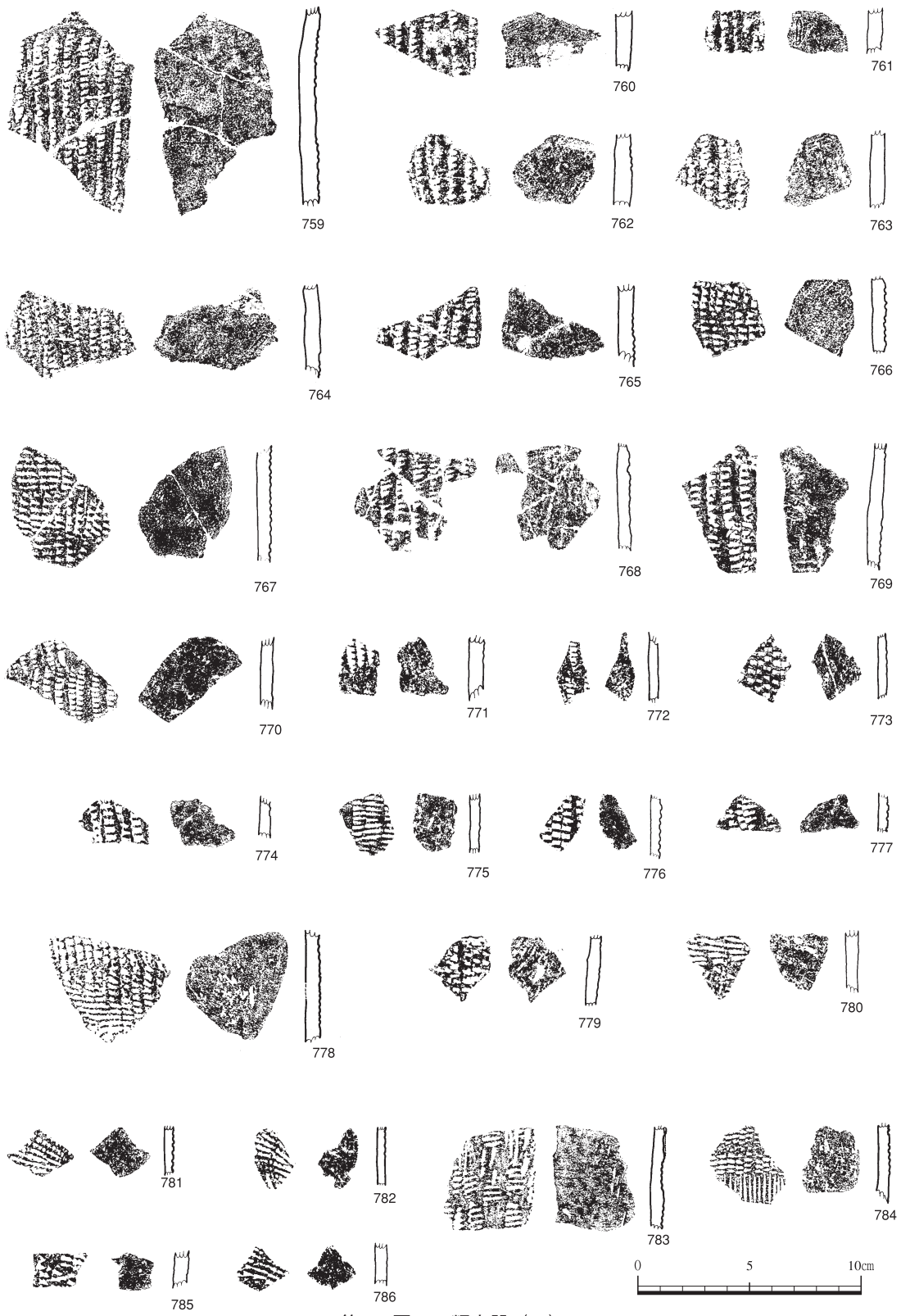
第161図 Ⅲ-1類土器(2)



第162図 Ⅲ-2類土器



第163図 Ⅲ類土器（1）



第164図 Ⅲ類土器 (2)

【IV類土器】(第 165 図)

個体数が少なく、口縁部から底部まで器形全体を知り得る個体はないが、文様が貝殻刺突文のみで構成されることが共通する特徴である。

787～789は同一個体であり、IV類土器の中で唯一口縁部形態のわかる資料である。

口縁径 7.0cm の小型の鉢で、器形は胴部に張りをもち、断面が胴部から口縁部に向けてすぼまる形状を呈する。口唇部にはナデによって平坦面がつくられ、器外面はユビオサエによる凹凸が著しい。破片同士が輪積みの積み目から剥離しており、接合が不十分であったことが窺える。内面はケズリ調整である。文様は、まず器面全体に縦位の貝殻刺突文を施した後、口縁部に横位の貝殻刺突文を 2 条施している。胎土は細かく、0.1～0.5mm 大の石英が多く混入する。790～797・798～802 はそれぞれ同一個体で、ともに平底の底部からほぼ垂直に立ちあがる円筒形土器である。795 は底径 13.1cm で外面に縦位の貝殻刺突文が密に施される。底部付近に文様は施されず、ミガキのような調整がなされている。胎土には 1mm 以下の石英・輝石が多く含まれ、角閃石・白色粒子も若干みられる。802 は底径 14.4cm で、斜位の貝殻刺突文が間隔をもって施文される。795 と同じく底部付近はミガキがなされ、底面も磨かれている。胎土は石英・輝石の他、砂粒を多く含むが、内外面の調整がしっかりされているため、表面では確認しにくい。

IV類土器は、下剥峰式土器に比定できる。

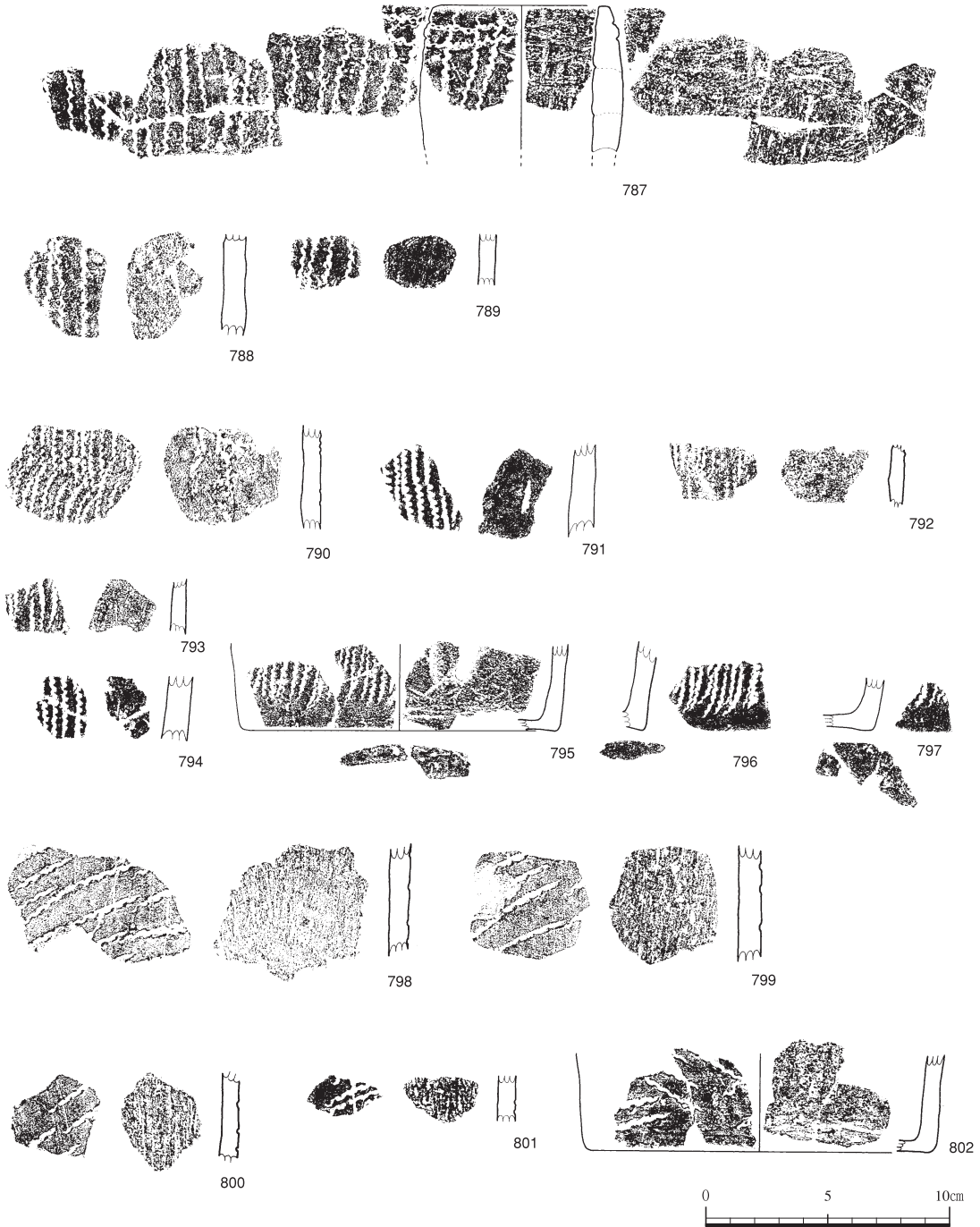
【V類土器】(第 166 図 803～806)

押型文土器の一種で、1 個体のみが確認できた。器形の全容は知り得ないが、丸底がやや潰れたような底部で、平坦面をもつ。胴部は丸みを帯び、口縁部は「く」の字状に外反する。文様は、山型押型文原体を口縁部から胴部にかけては縦方向に、底部付近には横方向に回転押捺している。また、口縁部内面にも横方向に 1 条、単独施文がみられる。押型文の山と山の間隔は広めで、頂部は丸みを帯びている。

V類土器は、不明瞭ながらも平底を有する点を重視すると、「田村式」土器の中でも新しい段階に比定できる。

【VI類土器】(第 166 図 807～809)

器形は、平底から角度をもって立ち上がり、緩やかに内湾しながら胴部最大径へと至る形状を呈する。文様は、L の燃糸文を不定方向に回転押捺し、底部外面はそれをナデ消している。内面は斜方向のケズリの後、横方向の雑なナデが施される。胎土は石英・雲母・角閃石の他、5mm 以下の白色の小礫や砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好である。



第165図 IV類土器

VI類土器は、V類土器と同様に平底をもつ。器形から判断すると、V類土器に近いが、やや新しい段階の撚糸文土器であると思われる。

【VII類土器】(第167図)

器形・文様構成の違いにより2種に分類した。

〈VII a 類土器〉(810)

やや上げ底気味の平底から胴部へと直角に立ちあがり、口縁部がラッパ状に開く小型の鉢である。緩やかな波状口縁を呈し、口径17.0cm、底径8.7cm、器高15.0cmを測る。

文様は、刻目・貝殻刺突文・沈線文・撚糸文帯を沈線文で区画する文様帯(施文順序に反するが、便宜上、以下「沈線区画撚糸文帯」と表現する)、この4種類の要素で構成される。口縁端部に刻目を、その直下に1条の横位の貝殻刺突文を1条施し、その下に4つの稜をもって一巡りする沈線区画撚糸文帯が施文される。頸部屈曲部には貝殻条痕文が1条巡る。胴部は、縦方向の沈線区画撚糸文帯と、円形の沈線区画撚糸文帯が交互に3度配され、円形の沈線区画撚糸文帯の内側には流水状の沈線文が施される。底面はケズリのみで調整され、器面が粗い。内面は、底部がユビオサエ・ケズリ、胴部が斜めのケズリ・ユビナデ、口縁部が横方向のナデによって調整される。

胎土には1mm以下の石英が多く混入し、精緻である。

〈VII b 類土器〉(811～814)

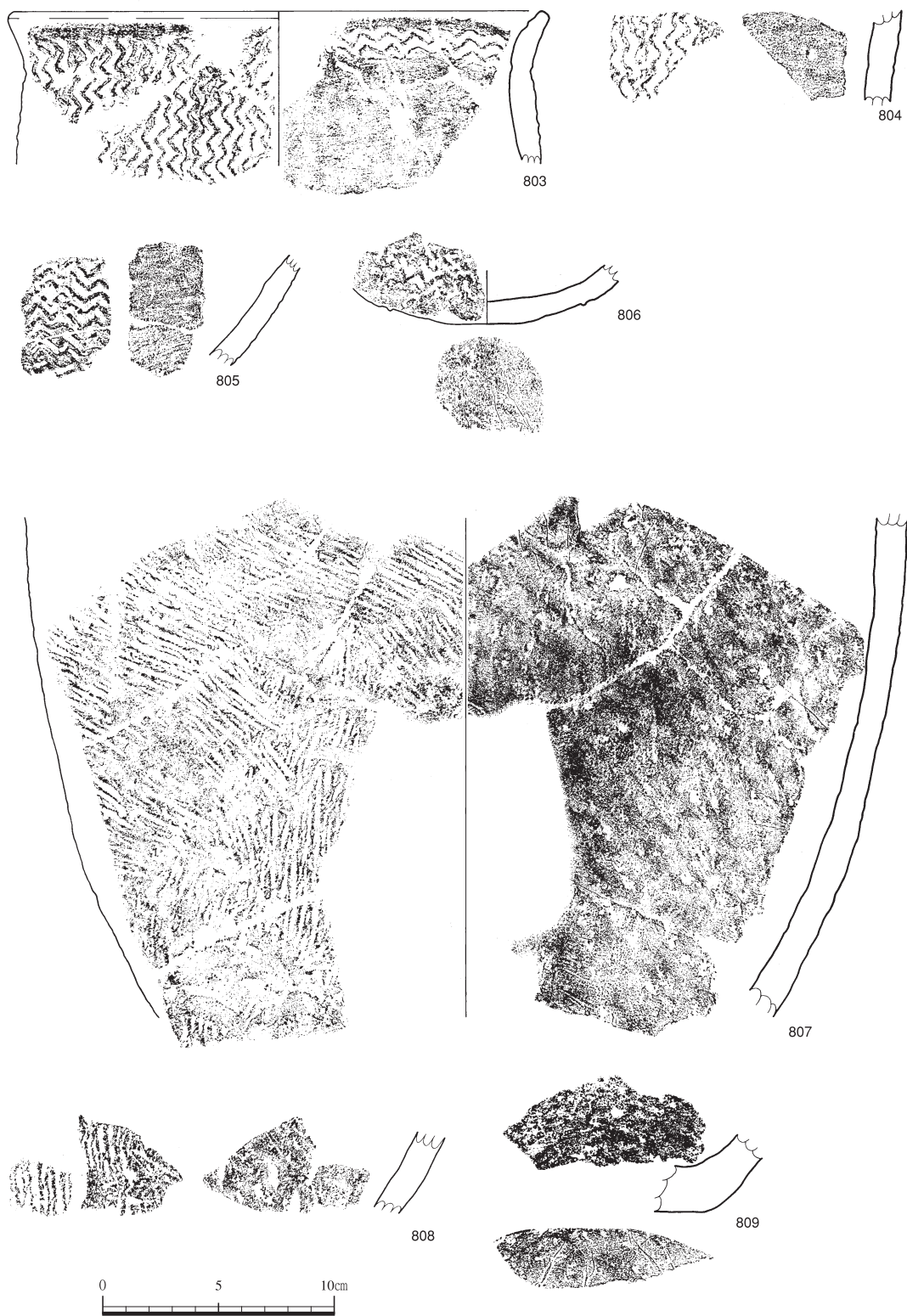
わずかに外傾する直線的な胴部から外に開き口縁部へ至る深鉢形土器で、波状口縁を呈する。811～814は同一個体である。

口唇部の文様は、「ハ」の字状の刻目や細い沈線文からなる。外面の文様は縦に回転押捺された網目撚糸文と横位沈線文で構成され、施文順序は沈線文が後である。撚糸文の原体については断定することはできない。しかし、撚糸文同士の間隔、および器面に微かについた原体の芯の擦痕から考えると、2条1組のものと、1条のみのもので2種類の原体があったのではないかと考える。内面は丁寧になでられ、磨いたようにツルツルしている。胎土には3mm大の白色粒や茶粒が多く混入している。

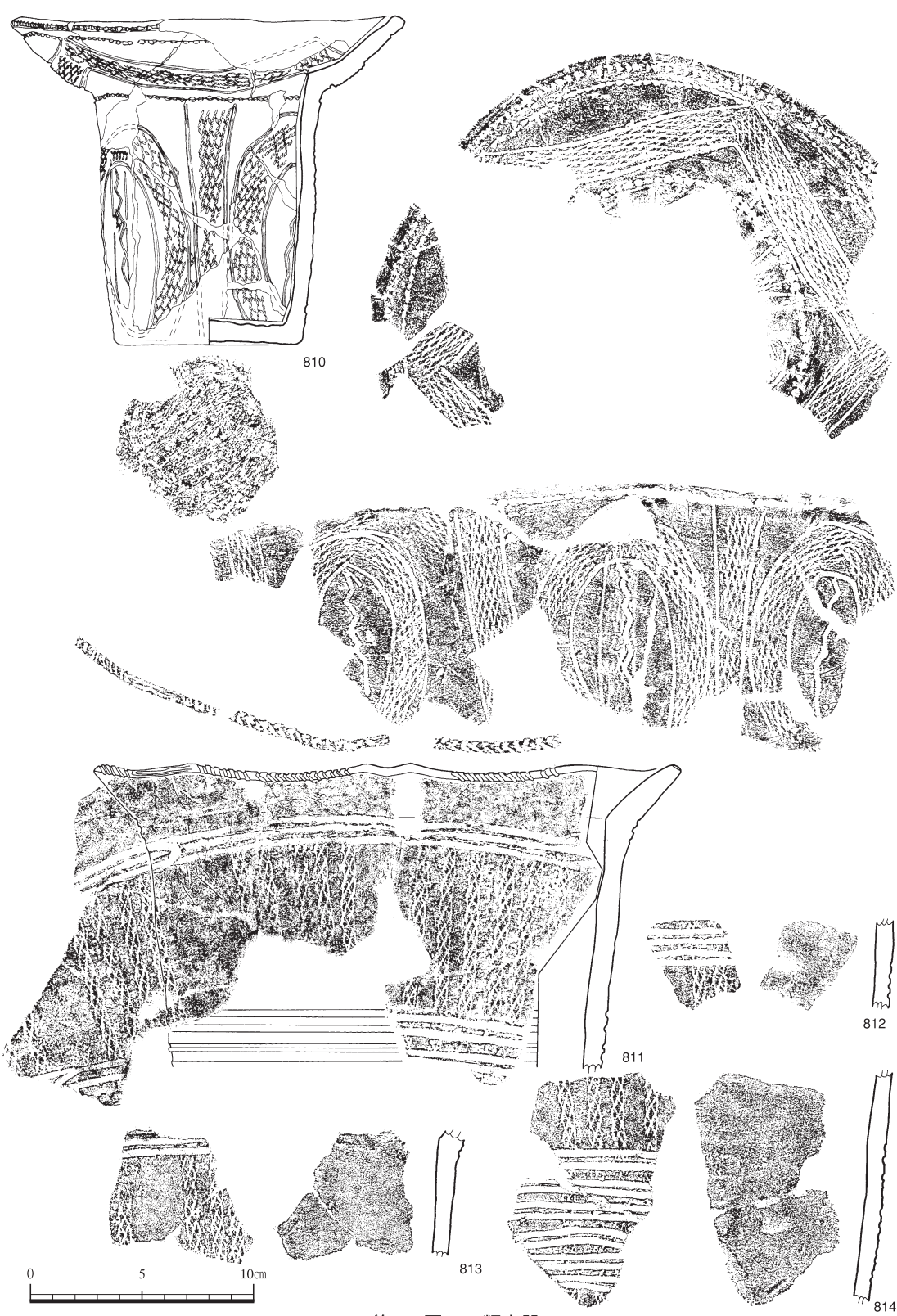
VII類土器は、既存の土器型式では塞ノ神式土器に比定される。その中でもVII a 類土器は、河口氏の塞ノ神 Aa 式土器(河口1972)に、新東氏の鍋谷式土器(新東1983)に相当し、VII b 類土器は新東氏の柵ノ原式土器(新東1983)に相当する。

参考文献：

- 上杉彰紀 2000 「調整技法からみた縄文早期貝殻文土器」『南九州縄文通信』No.14
南九州縄文研究会
- 河口貞徳 1955 「鹿児島県における貝殻条痕文土器」『鹿児島県考古学会紀要』第4号
鹿児島県考古学会
- 河口貞徳 1972 「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第6号 鹿児島県考古学会
- 黒川忠広 2002 「第2章 各土器型式の概念」『南九州貝殻文系土器Ⅰ～鹿児島県～』
南九州縄文研究会
- 新東晃一 1983 「塞ノ神式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 新東晃一 1989 「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』小学館
- 新東晃一 2000 「南九州の縄文時代早期－遺構と空間利用－」『旧石器から縄文へ－遺構と空間利
用－』日本考古学会 2000年鹿児島大会実行委員会
- 寺師見國 1943 『鹿児島県下の縄文式土器分類及び出土遺蹟表』
- 本田道輝 1986 「鹿児島県考古学の諸問題－縄文時代－」『鹿児島考古』第20号
鹿児島県考古学会
- 前迫亮一 2000 「第Ⅴ章 発掘調査のまとめ」『大中原遺跡』根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
根占町教育委員会



第166図 V・VI類土器



第167图 VII類土器

②石器（第166図～第173図）

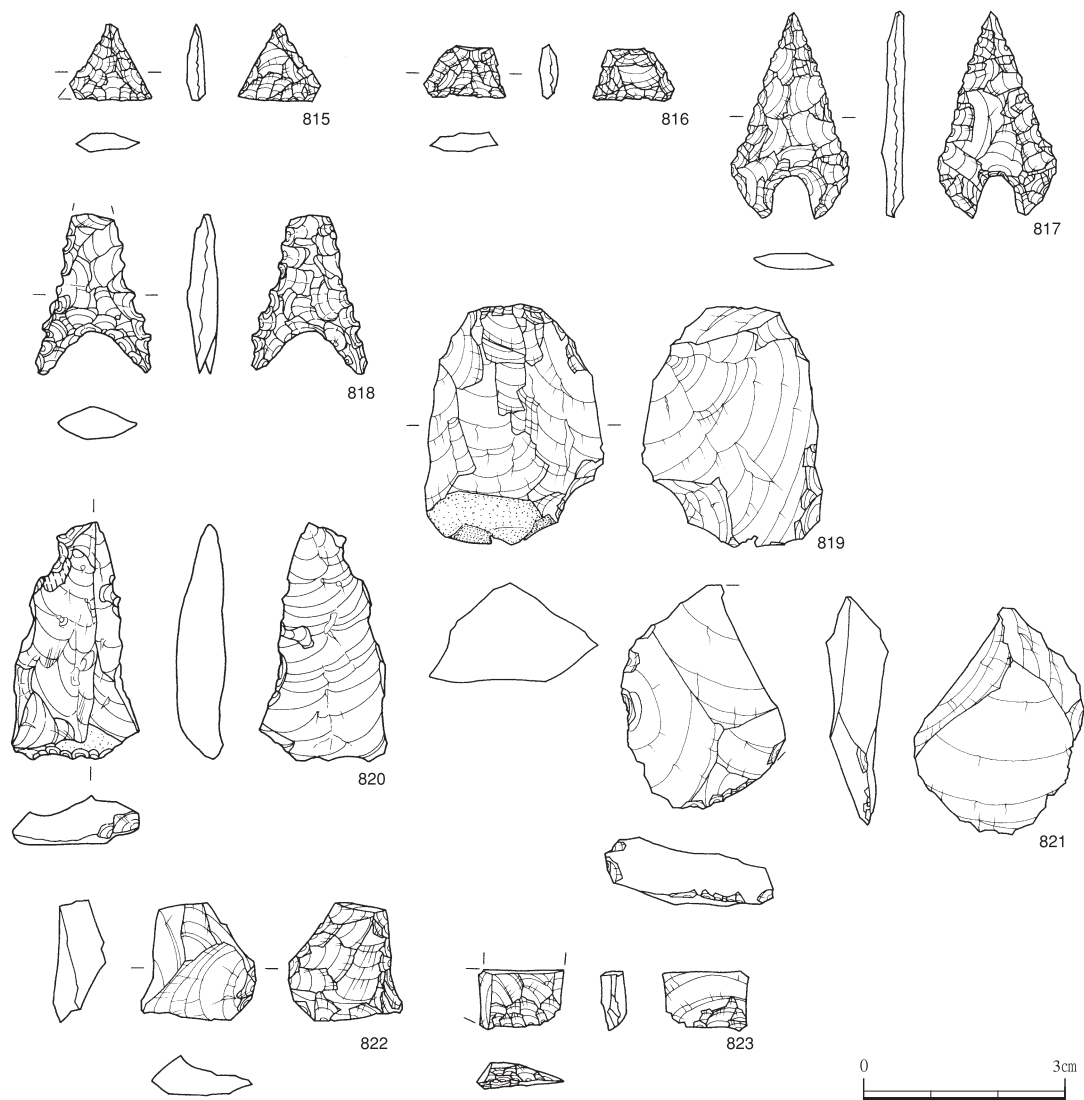
815～818は石鏃である。V層からは4点が出土した。815と816は小型の三角形鏃である。815は長さが1.1cmで、基部の1角が欠損している。816は先端部を欠くが、基部の長さから815とほぼ同じ程度の長さをもつものと考えられる。817と818は基部に挟りが入るもので長さの長いものである。ただ、基部の形状は異なり、817は挟りが小さく脚が内側に向いているのに対して、818は挟りが広く外に開いている。

819は使用痕のある剥片、820と821はスクレイパー、822は調整剥片、823は加工痕のある剥片である。819は先端部が使用され、両極技法の諸特徴を示している。820と821は下部に刃部を設けることでスクレイパーとしている。822は1側面のほぼ全体と反対の側面のごく一部に細かな調整が施されている。823は下部に丁寧な加工の痕跡が見られる。

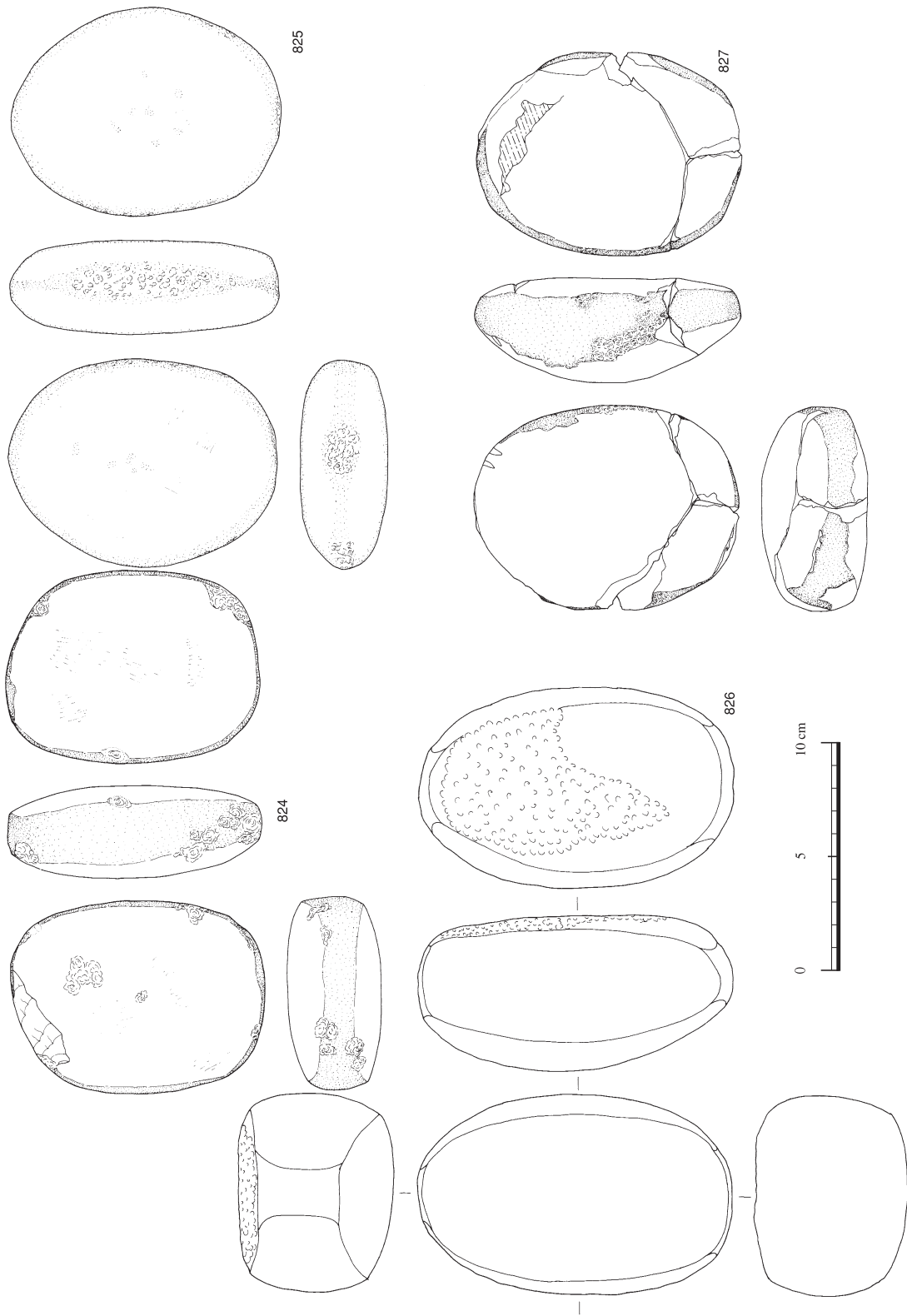
824～835は磨石、836と837は敲石、838～841は凹石である。共に円礫を主に使用しているが、中には棒状や不整形の礫を用いているものも見られる。826は一つの面が割合に平坦で、敲打を主に行っているのに対して、反対の面は曲面を呈して、磨られて光る程になっている。そのほかの磨石は、広い二つの面を磨る目的で使用し、周囲の側面は敲打を主に使用している。ただし、中には828や832、834などのように広い面のほぼ中央部が窪んでおり、敲打が集中して行われた結果と考えられる。また、827や829などのようにひびが入っており、火熱を受けたことが考えられる。830や831、833などのように割れているものもあり、火熱によるか、強力な敲打などに起因するかは判断できない。敲石でも不整形の自然礫の主に1つの先端部を敲打に用いた837のようなものと、棒状の自然礫の側縁を主に敲打した839のようなものが見られる。

842は自然礫を素材とし、自然面を多く残した打製の石斧である。広い一つの面は自然面を残しつつ、反対側の一面を大きく打ち欠き、刃部は両側から調整を行って丁寧に刃を設け、基部は大まかな調整を行っているのみである。843～845は扁平な礫を中心に一つないし二つの辺に簡易に調整を行うことで刃部を設けて、石器としている。843～845はいずれも砂岩を素材としており、843は側面を両側から細かな調整を行って刃を設けている。刃部の上部は潰れていることから、部分的に敲打が行われていたことがわかる。844も両側及び下方の端部に調整によって刃が設けられており、使用痕は両側面に見られる。845も843と同じように、側面に細かな調整によって刃部を造りだしている。846は棒状の短い礫の一端部を刃状に尖らせて作ったものに、反対側の端部から敲打を加えて使用していると考えられる。楔あるいは木などを裂く際に使用されたものの可能性があると思われる。

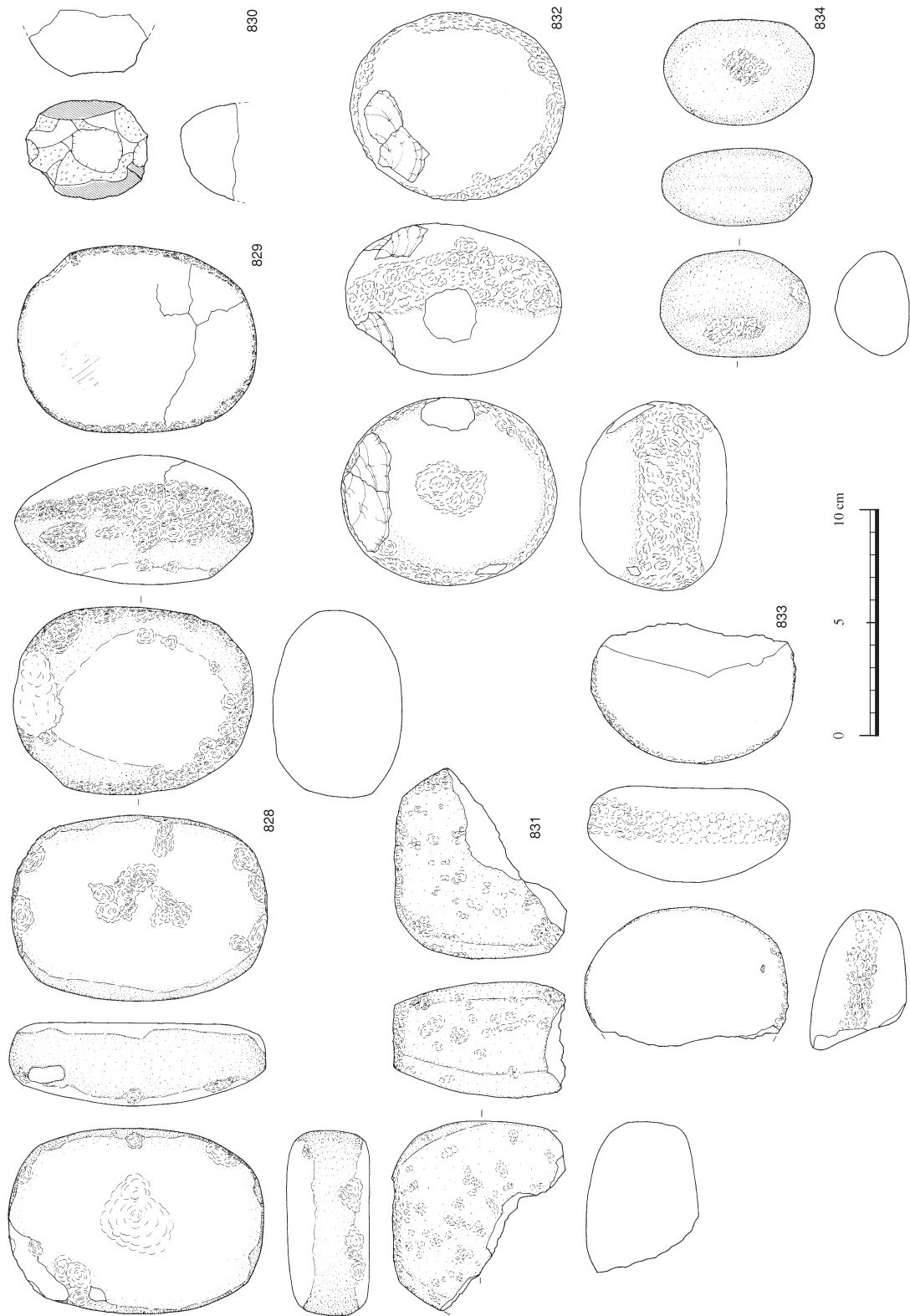
847～853は石皿である。847～850は一つの広い面が大きく窪んでおり、相当長い期間使用されたことが窺われる。また、847・849・850は側面がほぼ直線的に整形されていることから、土坑内出土の石皿と同じような四角に面取りされたものであったと考えられる。石材もほぼ同じと考えられ、紫色を呈する隙間の多い安山岩である。847及び849は上部または側面と考えられ、850は端部が下面に向かって下がっていることから、下部の排出部と推定される。850の擦り面は相当に滑らかとなっていることから、使用頻度が高かったことを窺わせる。849には裏面に、割合に深い小さな円形の窪みが4か所ほど観察されることから、いわゆる「蜂の巣石」と呼ばれるものと考えられる。窪みは、直径1.5～2.0cm、深さは3～5mm程度で、ほぼ円形を呈している。



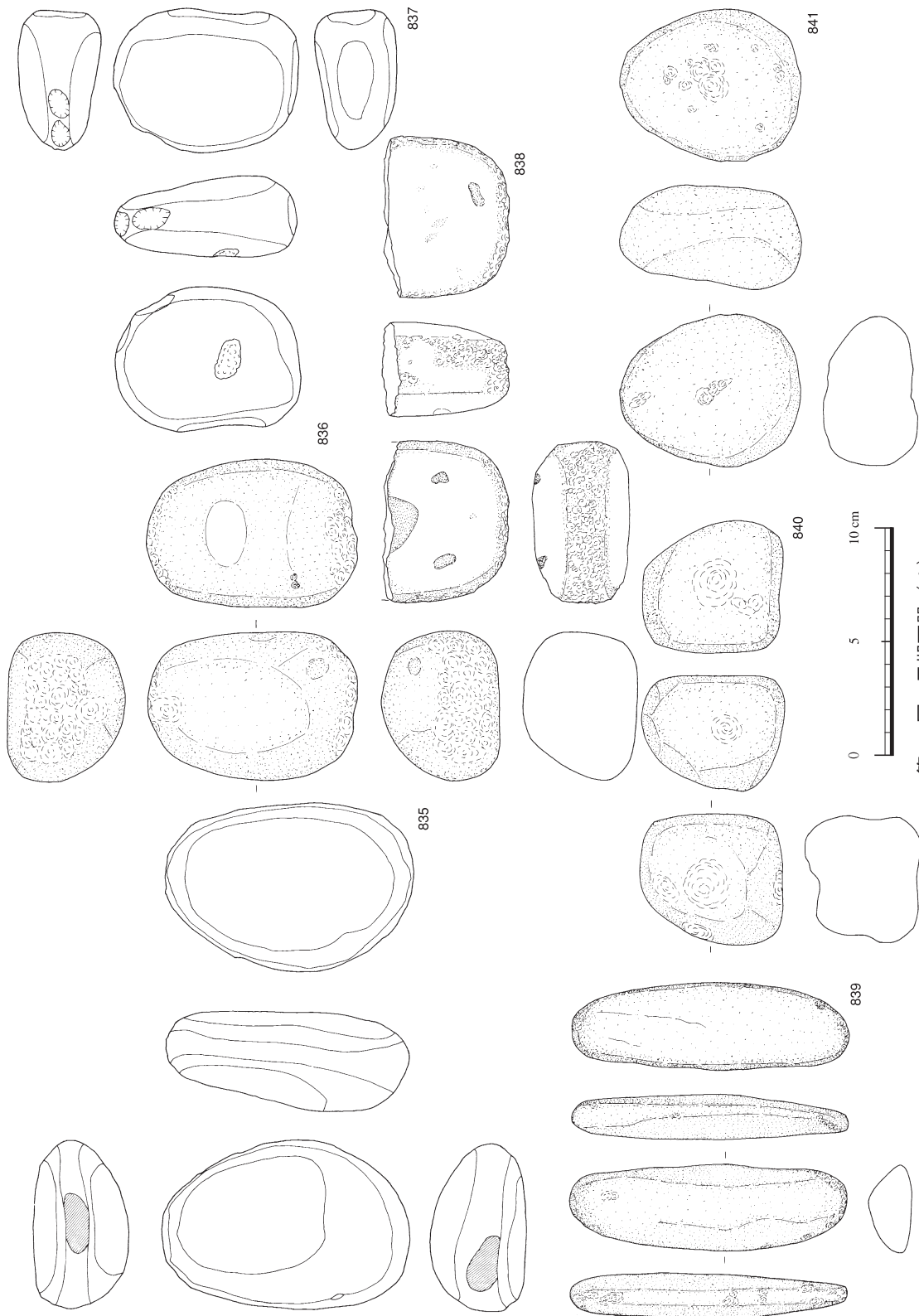
第168图 早期石器（1）



第169图 早期石器 (2)



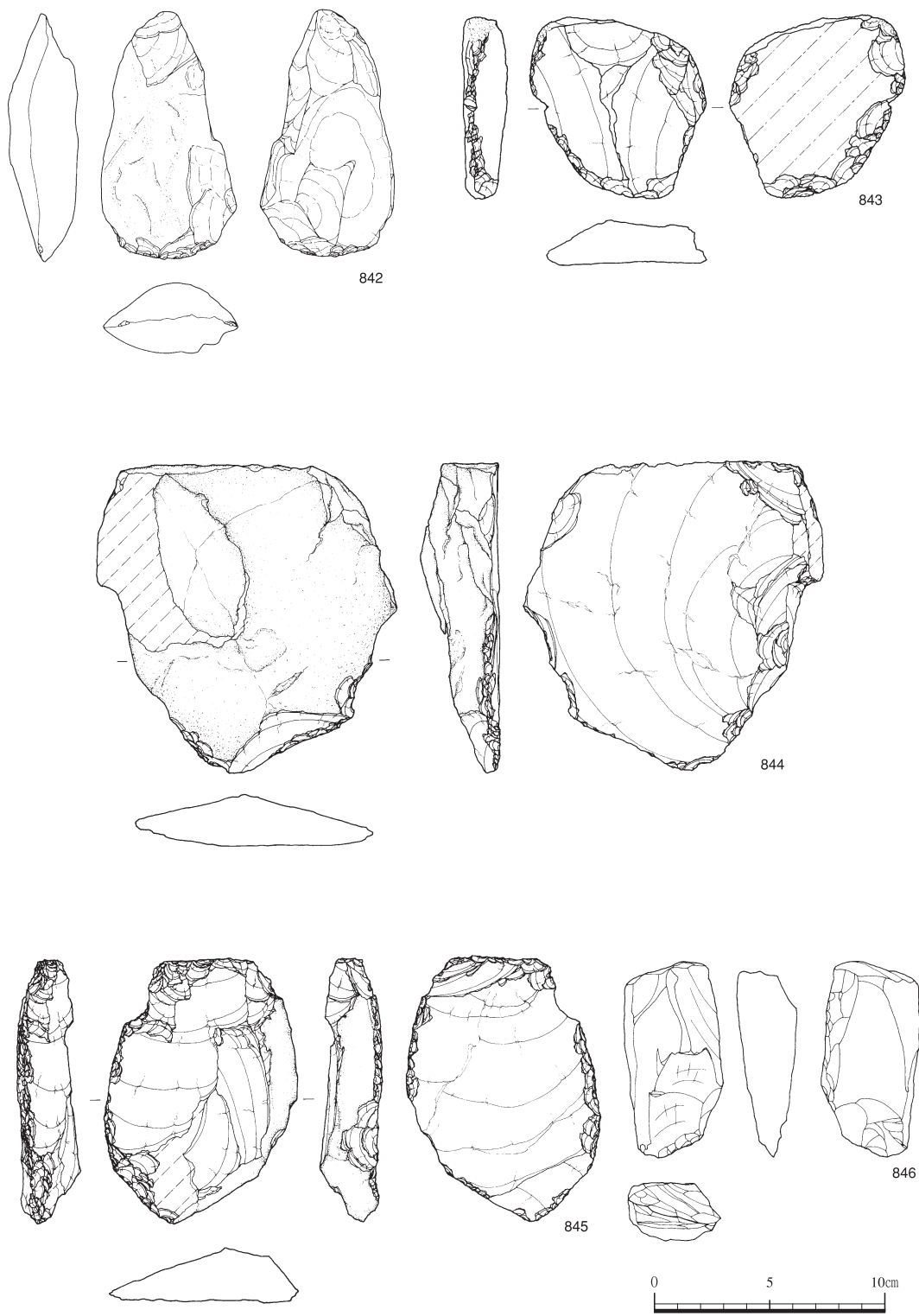
第170图 早期石器 (3)



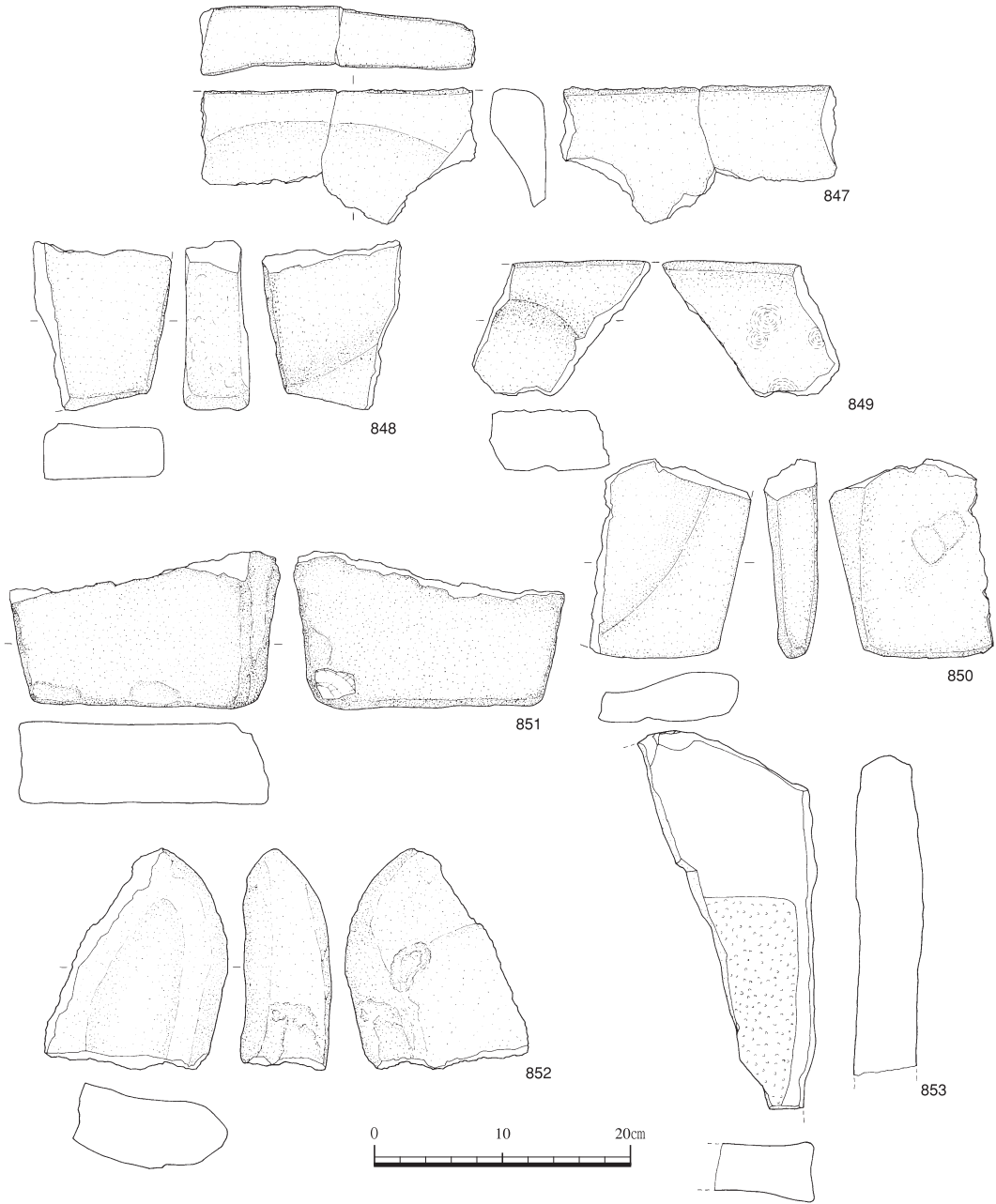
第171图 早期石器 (4)

851 は平面的であることから、短期間の使用か、面全体を広く使った前後の往復を主とした使用が推定される。使用面は相当に滑らかである。847 などと異なり、平坦な自然の角礫をそのまま使用しており、側面などを直線的に調整するような加工は見られない。852 も大型の自然の円礫を用いている。使用頻度は高く、光沢の見られるか所も見られる。848 も大型の自然礫を材料に用いているが、こちらは角礫を材料にしているようであり、使用面は細かな凹凸が随所に残っており、それほど使用頻度は高くないように感じられる。853 には広い一つの面に矩形の著しい敲打が行われており、周囲よりも4mmほど一様に下げられていることから石皿の製作の途中のものと考えられる。板状の自然の角礫を素材とし、側面は荒割りが行われているが最終的な調整は行われてはいない。847～852 が安山岩を素材としているのに対して、これは砂岩を材料としていることが大きな差異である。

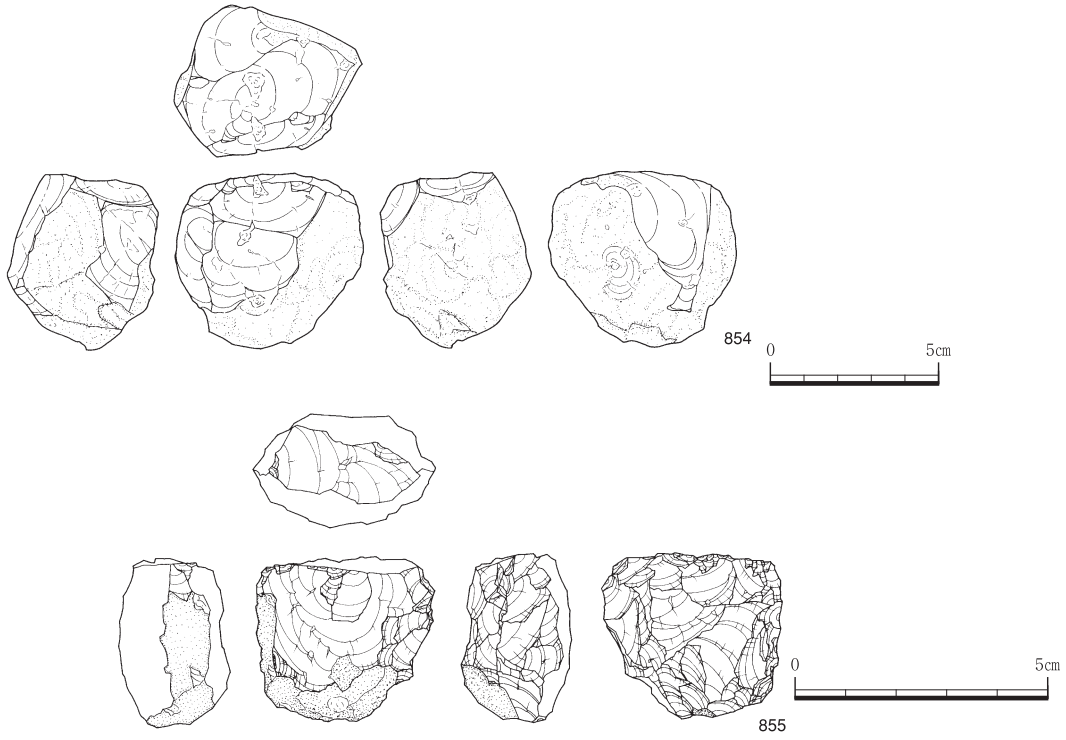
854 と 855 はいずれも黒曜石製の石核である。854 は全体的に風化が著しい。自然面を多く残しており、剥離面は割合に大きく、幅・長さ共に大きい。気泡と白色及び茶色の粒が多く見られ、筋状となった縞模様も観察される。いずれの面も風化して漆黒色を呈することから、上牛鼻産の黒曜石と考えられる。855 は剥離面に光沢があり、854 に比べて幅・長さ共に小さい、小振りの剥離である。側面から下面に若干自然面が残る。白色の粒が見られる。全体的に光沢はあるものの、漆黒色をしていることから、854 と同じく、原産地は上牛鼻と考えられる。



第172図 早期石器 (5)



第173図 早期石器（6）



第174図 早期石器 (7)